

東京大学埋蔵文化財調査室報告書 8

東京大学三鷹構内の遺跡

長 嶋 遺 跡

東京大学三鷹国際交流会館建設に伴う発掘調査報告書

2008

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室報告書 8

東京大学三鷹構内の遺跡

長 嶋 遺 跡

東京大学三鷹国際交流会館建設に伴う発掘調査報告書

2008

東京大学埋蔵文化財調査室



A区出土石器



C区出土石器



F区出土石器



F区全景

例 言

1. 本書は、東京大学三鷹国際交流会館の新営に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、旧石器時代に関する発掘調査報告書である。
2. 本地点の略称は「三鷹」とし、出土遺物の注記には「M○」を当てている（○は調査回数）。
3. 本地点は、東京都三鷹市新川6丁目2番20号に所在している。
4. 本地点は『東京都遺跡地図』における「三鷹市No.24 長嶋遺跡」内に位置している。
5. 本地点の調査面積は7,330㎡である。
6. 調査期間は下記の通りである。
 - 1次：1992年6月29日～9月19日（2,100㎡）
 - 2次：1993年5月28日～11月8日（3,280㎡）
 - 3次：1994年5月13日～8月17日（1,950㎡）
7. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査担当者は堀内秀樹・成瀬晃司である。
8. 本書の編集は追川吉生（東京大学埋蔵文化財調査室）を中心に、執筆者の協議の上行った。
9. 本書の執筆分担は以下の通りである。
 - ・第I章：堀内・追川
 - ・第II～V章：阿部 敬氏（静岡県埋蔵文化財調査研究所）
 - ・第VI章：望月明彦氏（沼津工業高等専門学校）
 - ：パリノ・サーヴェイ株式会社
 - ：阿部 敬氏（前掲）
 - ：追川
 - * 黒曜石の分析は望月明彦氏（前掲）お願いし、玉稿を頂戴した。
 - * 土壌の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
10. 調査時の写真は主に堀内秀樹・成瀬晃司が、遺物写真は青山正昭が撮影した。
11. 遺物の実測・浄書は主に（株）盤古堂が行い、小林照子がデジタル化を行った。
12. 図版の作成とデジタル化は小林照子が行った。
13. 本書に添付したCD-ROMには、出土遺物一覧表（xls形式）、遺物写真（jpg形式）、電子報告書（pdf形式）を収録している。
14. グリッドは世界測地系を基準にしている。
15. 発掘調査に伴う図面・写真・出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）および同工学系研究科附属柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）内にて、保管・運用している。
16. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して謝意を表す。

（敬称略）

安斎 正人、今村 啓爾、佐藤 浩之、国武 貞克、小池 聡、高麗 正、下原 裕司、沼上 省一、野口 淳、加藤建設(株)、(株)古環境研究所、五洋建設(株)、パリノ・サーヴェイ(株)、(株)盤古堂、三鷹市教育委員会、本学施設・資産系、総合文化研究科教養学部、人文社会系研究科文学部考古学研究室

発掘調査・整理作業参加者

青山 正昭、池田 奈津代、遠藤 香、大貫 浩子、香取 祐一、川原 良子、小林 照子、坂野 貞子、野村 遊、宮本 直子、山田 哲、(株)加藤建設

凡 例

1. 遺物の実測図は原則として1/3で掲載している。その他の尺度のものは、各図版にスケールを表示している。
2. グリッドは調査区北東隅を基準とし（A1）、そこから東へアルファベットを、南へアラビア数字を8m間隔で付した。
3. 石器分類について

これまでの石器分類では後期旧石器時代石器群の実態を表すのに不相当との考えが広がりを見せている。その分類の問題は「台形様石器」の抽出（佐藤1988）にも象徴されたように、以前から指摘されてきたことであったが、いま再検討のまとなりつつあるのは石刃製のナイフ形石器群である。その経緯についてはここで触れえないが、ともかく本報告書の記載にあたってそうした問題意識を共有し、僅かなりとも整合性を持たせうる分類の提示が必要と思われた。ここでは本遺跡にかかわりの深い石器群に関してのみ提示する。本分類は概念的に佐藤宏之による説明をもとにしているが（佐藤2004）、その指摘にもあるように、一つの分類ですべての石器群を適切に分類することは不可能であるから、地域的な実情に合わせて創出あるいは適宜改変することもまた必要である。

こうした点を踏まえ本報告書Ⅱ～Ⅴ章および研究編3では、下記のように石器群を捉えている。

■非調整段階

- 原石 調整石器群に利用される石材のうち、未加工かつ使用痕跡がみられないのもの。
磨石 原石に研磨痕のついているもの。
敲石 原石に敲打痕のついているもの。
石皿 原石に研磨痕がついたもののうち、下に置いて使うと思われるもの。
台石 原石に敲打痕がついたもののうち、下に置いて使うと思われるもの。
礫 上記の原石・磨石・敲石・台石のいずれにも該当しないもの。

■1次調整段階

石核石器

- 石 核 石刃や剥片などを剥離したもの。
礫 器 石核との区別に問題を残すが、片面打製の片刃礫器と両面打製の両刃礫器に細分できる。
楔形石器 両極剥離痕の残るもの。

剥片石器

- 石 刃 原則として幅に対する長さが2倍以上ある剥片。
細 石 刃 幅に対する長さが2倍以上ある剥片（＝石刃）のうち、幅が10mm以下のもの。石刃との区別は相対的なものである。ここでは、恣意的な分類を避けるため、押圧剥離によって組織的に生産される細石刃は区別しない（できない）。
剥 片 石刃・細石刃以外の剥片のうち、最大長が10mm以上のもの。一般的剥片ともいう。
細 片 石刃・細石刃以外の剥片のうち、最大長が10mm未満のもの。ここでは定義の要件はサイズだけにして、碎片との区別は行わない。
削 片 彫器、細石刃核等の調整によって剥出されと思われる剥片。

■2次調整段階

- 削 器 刃部の位置によって大きく2種に分類する。
端削器 素材剥片の末端に刃部のあるもの。指示する形態はほぼ搔器に等しい。
側削器 素材剥片の側縁に刃部のあるもの。

尖 頭 器 尖頭状を呈し内湾しない刃部が二次加工部位で構成されるもの。加工面数によって大きく2種に細別分類され、場合によっては、その部位（端部、周縁など）によってさらに細分される。

片面加工尖頭器

両面加工尖頭器

有樋尖頭器は特殊な二次加工形態に特徴付けられ、分類階層としては下位におかれるだろう。角錐状石器の一部は尖頭器（断面三角形尖頭器とよばれることがある）だが、ここでは必要ない。

刃 器 未加工の鋭い縁辺を刃部とするもの。

台形様石器

一般的剥片を素材として、1もしくは2縁辺に二次加工を施して台形状に整形し、器軸に対して直交にちかい未加工の縁辺を刃部とするもの。

切出形石器

一般的剥片を素材として、2縁辺に二次加工を施して、器軸に対して斜交する未加工の縁辺を刃部とするように整形するもの。とくに基部加工が内湾するものを典型とする。

尖頭形石器

石刃を素材として、主として腹面から二次加工を施し、1もしくは2つの未加工の刃部を有するもの。素材によって2つ、さらに二次加工部位によって2つ、計4つに細分可能である。

背部加工尖頭形石刃/剥片石器

背部加工によって尖頭形に整形するもの。石刃製と一般的剥片製（本文ではしばしば剥片製と略す）の別があるが、明確に区別できないこともまあり、その場合は素材形態を付さない。

基部加工尖頭形石刃/剥片石器

未加工ないし僅かに二次加工する尖頭部があり、かつ基部加工を施すもの。これも石刃製と剥片製の別がある。

背部加工石器

上記のいずれかの石器と同種の二次加工が観察されるものの、素材形態と二次加工部位、全体形状が定型的でないもの。

長 嶋 遺 跡
東京大学三鷹国際交流会館建設に伴う発掘調査報告書

例 言
凡 例
目 次

報 告 編

第I章 調査の経過と概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の方法	3
第4節 遺跡の立地と環境	3
第5節 調査区と層序	4
第II章 A区の石器群	10
第1節 概 要	10
第2節 第I文化層	16
(1) 石器群の分布と石材	16
(2) 出土石器	43
第3節 第II文化層	58
(1) 石器群の分布と石材	58
(2) 出土石器	67
第III章 C区の石器群	70
(1) 石器群の分布と石材	70
(2) 出土石器	70
第IV章 D区の石器群	80
(1) 石器群の分布と石材	80
(2) 出土石器	80
第V章 F区の石器群	88
(1) 石器群の石材	88
(2) 石器群の分布	88
(3) 出土石器	161

研 究 編

1 長嶋遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	179
2 長嶋遺跡におけるローム層層序	188
3 長嶋遺跡の旧石器時代石器群	195
4 長嶋遺跡三鷹国際交流会館地点出土の石器について—おわりにかえて—	205

参 考 文 献	209
---------	-----

第1部 報告編

第 I 章 調査の経過と概要

第 1 節 調査に至る経緯

平成 3（1991）年度に東京大学教養学部から同埋蔵文化財調査室に三鷹学寮および井の頭学寮の改築に伴い、埋蔵文化財の調査に関する照会があった。このうち三鷹学寮は北東側の一部が「三鷹市 23 長久保遺跡」、東側の一部が「三鷹市 24 三鷹高校校庭遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されており（1991年現在）、三鷹学寮についてもその全域に旧石器時代、縄文時代、近世の埋蔵文化財の存在が予想された。これを踏まえ、東京大学施設部、同教養学部、同埋蔵文化財調査室、三鷹市教育委員会で協議を行い、井の頭学寮を含めて、埋蔵文化財調査室で試掘調査を行うことで合意した。

両学寮の試掘調査は平成 3 年 9 月 15 日～30 日にかけて行い、同室員成瀬晃司、堀内秀樹が担当した。三鷹学寮の試掘調査は学寮のほぼ全域を既存の建物を避けて 10 箇所の特掘合計 700m²を設定し、縄文時代以降の遺構と旧石器時代の遺物の有無の確認を行った。

試掘調査では、学寮の中央部、東部を中心にナイフ形石器、黒曜石の剥片など旧石器時代の遺物が、ほぼ全域から江戸時代、近代の遺構、遺物が確認された。この結果を踏まえ、建築予定地における埋蔵文化財発掘調査の必要性が、三鷹市教育委員会から指導された。

東京大学施設部および同教養学部の計画では、駒場学寮の老朽化と増加する外国人留学生の受け入れに伴い、三鷹学寮を国際交流会館として大規模な改変・整備を行うものであり、当該地区全域に新規の学寮、共用棟などを含む 9 棟と外周道路などを平成 4 年度から四箇年かけて建築するというものであった。東京大学では三鷹市教育委員会と協議を行い、この新営に伴う発掘調査は、埋蔵文化財調査室の総括的指導で行われることで合意した。

第 2 節 調査の経過

(1) 平成 4（1992）年度

初年度である平成 4 年度の現地調査は、学寮北側 A 棟（調査では「A 区」と命名）と B 棟（同「B 区」と命名）建築予定地 2,100m²を対象に行い、成瀬晃司、堀内秀樹が担当することになった（第 1 図）。6 月 29 日より A 区の重機による表土掘削作業から開始され、B 区を含めて 7 月 10 日に終了した。表土掘削と平行して近世～近代の遺構の調査が行われた。当該期の遺構は道とそれを区画する溝状遺構など十数基が確認され、7 月 22 日に終了した。旧石器時代の調査は 7 月 11 日から調査区の設定開始、20 日から本格的に開始した。旧石器時代の調査は、調査区全域にグリッドの北東側 4 × 4 m の試掘坑を設定し、武蔵野台地基本層序 IV 層まで行ない、遺物の出土状況に応じて調査範囲を拡張した。遺物の出土は、J7、J8、K7 グリッド付近に集中し、石材や集中度から大きく 3 基の石器集中が抽出できた。旧石器時代の調査は好天にも恵まれ、順調に進行し、9 月 19 日に全ての調査が終了した。

(2) 平成5（1993）年度

二年目は初年度の南側のC棟（調査では「C区」と命名）、D棟（同「D区」と命名）、共用棟（同「共用棟地区」と命名）建築予定地、約3,280m²を対象に行った（第1図）。調査は堀内秀樹が担当した。調査は、樹木の伐採やライフラインの切り回しなどの都合で、D区北側→C区→共用棟地区→D区北側の順で行うことになった。

C区は5月28日より、D区は6月16日から重機による表土掘削を開始した。表土掘削に平行して近世～近代の調査が行われた。該期の遺構は、10基程度の地境と推定される溝状遺構や井戸などが確認され、その調査は7月16日に終了した。旧石器時代の調査はD区北側では6月7日、C区では7月14日から開始した。調査方法は、初年度と同様にグリッドの北東側4×4mの試掘坑を設定し、武蔵野台地基本層序IV層まで行ない、遺物の出土状況に応じて調査範囲を拡張した。C、D区の調査ではO10区付近で石器、剥片の出土が集中した。この間、降雨が続き、調査は著しく遅滞したが、8月24日全体写真の撮影を行い、C、D区北側の調査は終了した。D区南側の調査は、表土掘削は10月5日より開始、平行してローム層上面にて遺構確認と10月13日より旧石器時代の調査を行うが遺構、遺物とも出土が認められず、11月5日に終了した。

共用棟地区は当初計画には入っていなかったため、試掘調査から行った。試掘調査は6月28日より開始され、建築予定地に東西に2本、2m幅で行った。このうち南側のトレンチより縄文時代の集石が確認された。共用棟地区は、C、D区の調査と平行して8月10日より重機による表土掘削を開始し、8月13日に終了、次いで、近世～近代の調査に入った。該期の遺構はA区から延びる溝状遺構が確認された。この他、縄文期の集石遺構3基、陥穴1基が確認された。一部、旧石器時代の調査と平行して行った関係で、最終的には近世～近代、縄文時代の調査は9月27日に終了した。旧石器時代の調査は、9月2日より開始、J12、J13グリッド付近を中心に散漫ではあるが、ナイフ形石器などが出土した。共用棟地区の調査は、10月22日に全て終了した。

(3) 平成6（1994）年度

三年目はC棟の南のE棟（調査では「E区」と命名）、D棟の南のF棟（同「F区」と命名）、防火用水（同「防火用水地区」と命名）建設予定地1,950m²を対象とした（第1図）。調査は堀内秀樹、鮫島和大（現、静岡大学篠原和大）が担当した。調査は5月13日F区の表土掘削から開始、5月19日終了した。近世～近代、縄文時代の調査がこれと平行して行われたが、近世～近代の遺構は、溝状遺構2基、墓2基、縄文時代の炉穴1基、陥穴2基が確認され、6月27日に終了した。旧石器時代の調査は、これをさかのぼる6月13日より開始された。こうした中、東京大学施設部、同教養学部から、建築工期から埋蔵文化財調査の調査期間短縮に関する申し入れがあり、本来の10月末までの調査期間を8月中旬にすることが協議、合意された。これを踏まえ、急遽E区は室員鮫島和大が担当することになり、6月23日より同区の表土掘削を開始、7月5日に終了した。E区は予想を超えて、南側に近世から近代の井戸、地下室、掘立柱建物跡などの遺構が良好な状態で遺存していることが判明した。また、北側には多くの溝状遺構が切り合って確認されたが、調査は7月19日に全体写真を撮影し終了した。また、7月22日よりE区においても旧石器時代の調査が開始された。旧石器時代の遺物はE区ではS15区付近IV層にチャートの集中区が、F区では調査区の南西側においてIV層を中心にやや散漫に礫群が出土した。旧石器時代の調査は、酷暑の中ではあったが順調に進行し、8月13日全体写真の撮影を終え、終了した。

防火用水地区は、7月26日から位置出し、次いで表土掘削を開始した。調査では近世～近代にかけての溝状遺構が調査され、次いで8月4日から旧石器時代の調査を行うが遺構、遺物とも出土が認められず、8月12日に終了した。

・その後の経過

当初、学寮整備は四箇年で計画されており、三年目である平成6年度までは予定通り進行した。発掘調査もこれに伴って行われたが、四年目以降は現在まで毎年計画はあるものの予算措置がなく推移した。こうした状況を踏まえ、調査の主眼である旧石器時代の調査報告を先行して行うこととした。

第3節 調査の方法

建築する建物およびそれに付随する施設の建築によって破壊される可能性のある範囲すべてを考古学的調査の対象とした。調査はグリッド法を用いて記録を行なった。グリッドは学寮内全域に8×8mで設定し、その北東隅を基準とした(第2図)。グリッド名は東から西へアルファベット、北から南へ数字を若い順に付けた。

第4節 遺跡の立地と環境

本遺跡は武蔵野段丘面の中央南端に位置している。武蔵野段丘面は青梅を扇頂とする扇状地である武蔵野台地であって、古多摩川によって形成された、いくつかの段丘面のうちで最も広い面積を占める。

本遺跡の南側およそ3.5kmあたりからひろがる立川段丘面との境には、いわゆる「ハケ」と呼ばれる国分寺崖線があり、ここからの湧水が野川をなす。野川流域には野川遺跡をはじめ、野水遺跡、下原・富士見町遺跡など旧石器時代～縄文時代を中心に多くの遺跡が立地している。

本遺跡が位置する武蔵野段丘面にも、三鷹市に神田川の源流となる井の頭池、小平市には石神井川の源流となる湧水池、また国分寺市には前述のように野川の源流がある。本遺跡はそのうち、小金井市内に端を発する仙川の流域にある。

小金井市貫井北町に源流がある仙川は、武蔵野市桜堤で流路を南側に大きく曲げる。その後、ちょうど本遺跡の付近で蛇行しながら南東方向へと向きを転じ、世田谷区蒲田で野川と合流する。本遺跡はこの、現在の仙川の西側およそ500mの地点に立地する(三鷹市新川6丁目22番20号)。

第3図をみてもわかるとおり、本遺跡の周辺は三鷹市内でも比較的遺跡の多く認められる一帯である。北側に隣接した長久保遺跡は細石刃の出土した遺跡である。一方、丸池遺跡、島屋敷遺跡では立川ロームX層から石器が出土しており、島屋敷遺跡ではⅩ層から局部磨製石斧の出土も認められた。こうした調査事例をみても、仙川流域が旧石器時代の広い時期にわたって遺跡が存在する地域であることがわかる。

そうした傾向は縄文時代においても同様で、たとえば仙川左岸に立地する北野遺跡は、縄文時代中期を中心とした住居址が多数検出された集落である。その対岸の三鷹五中遺跡でも同時期の集落が確認されている。本遺跡でも縄文時代の遺構と遺物が出土しており、旧石器時代～縄文時代の遺跡が集中している立地環境の中で、遺跡の性格を捉えていくことが大きな課題となろう。

第5節 調査区と層序

(1) 調 査 区

調査は大学用地内の施設建築地を対象に実施した。従って調査区の形も建築予定施設の形状に応じたものになっている（第1図）。これを図に示したようにA～F区の6つのエリアとした。そのうち、旧石器時代の遺物が出土したのがA区、B区、D区、F区である（第2図）。

本報告書ではこの各区についての調査成果を報告する。

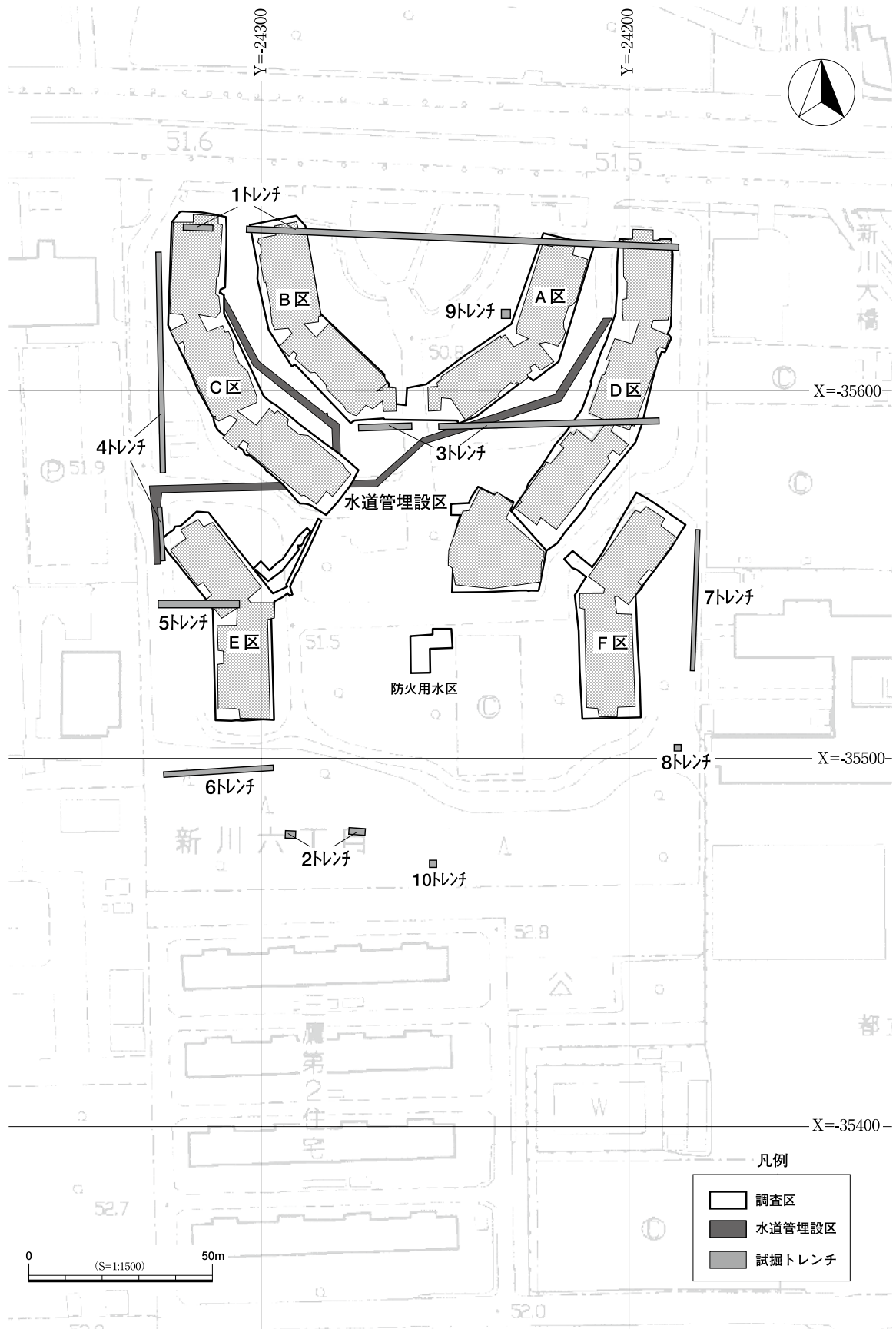
(2) 層 序

調査区の形状が不整形なため、調査区全体を通した土層断面図を作成することはできなかった。そのためここでは調査区の中で、ある程度の深度まで掘削した部分の土層断面を観察した所見を報告する。

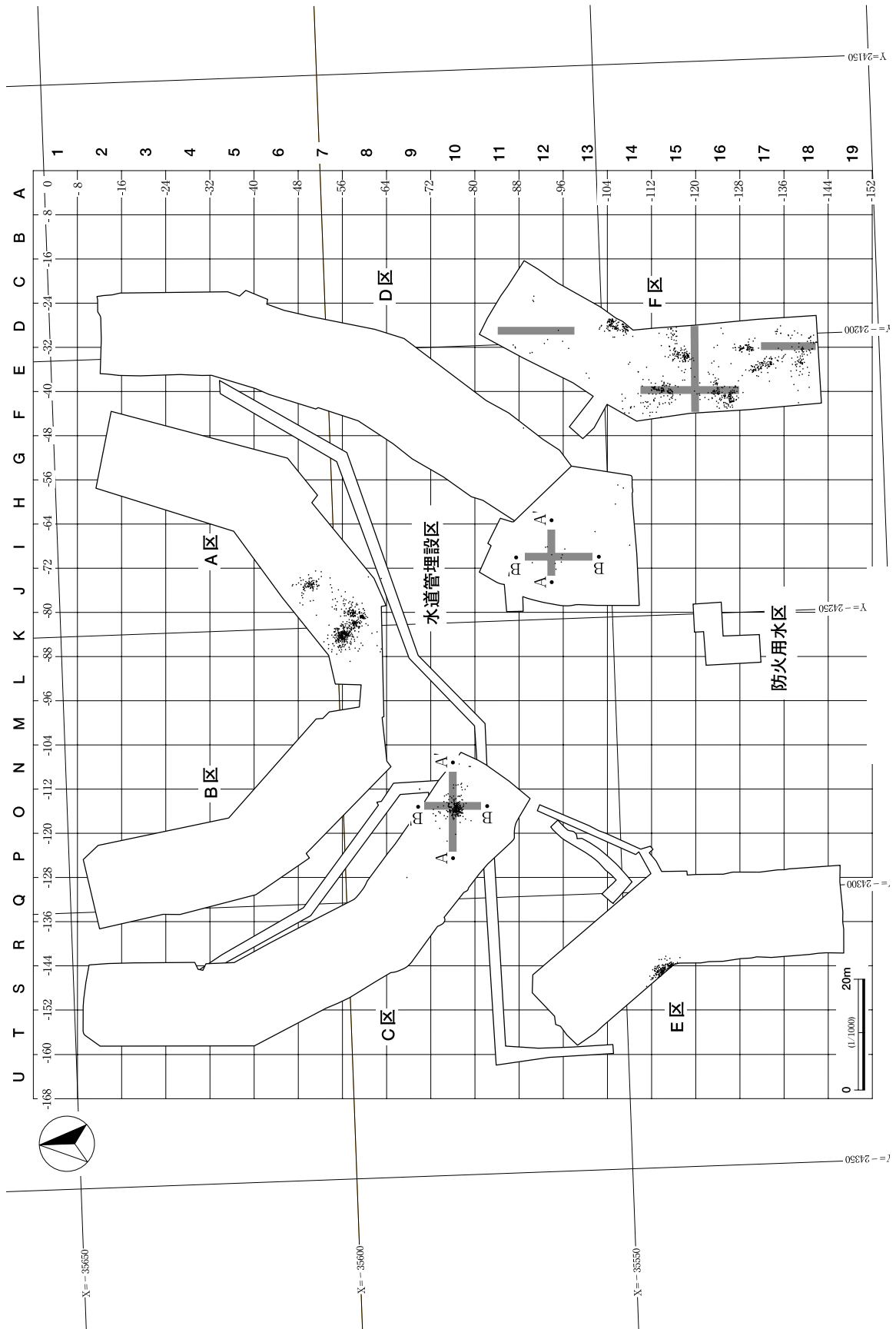
第4節でも述べたとおり本調査地は仙川の右岸に位置している。原地形は流路に向かって傾斜しており、これが第1図で示したような調査区を設定する本調査地点では、各調査区毎に堆積状況が異なるという結果をもたらしている（第4図）。

そうした中、F区では比較的まとまった範囲の土層断面を観察することができた（第5図）。これは考察編・長嶋遺跡におけるローム層層序の図1と対応するものである。

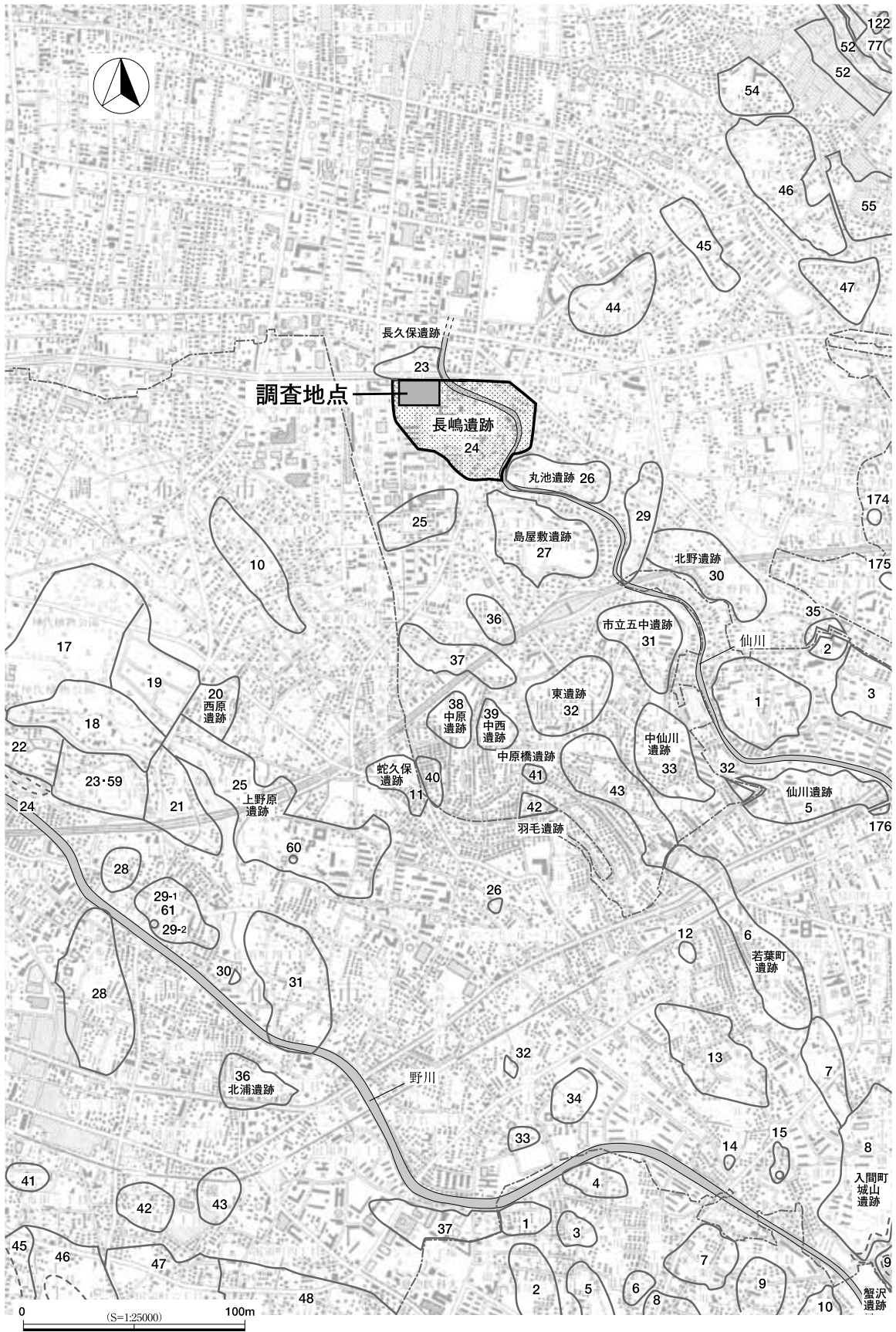
当該論考で指摘されているとおり、第5図にある観察所見とローム層の重鉱物組成と火山ガラス比の分析結果との間には齟齬が存在する。おそらくこれは、傾斜地に位置するという本遺跡の立地状況のため、通常の立川ローム層の堆積とは異なっていたことが、土層観察時に影響を与えたものと思われる。



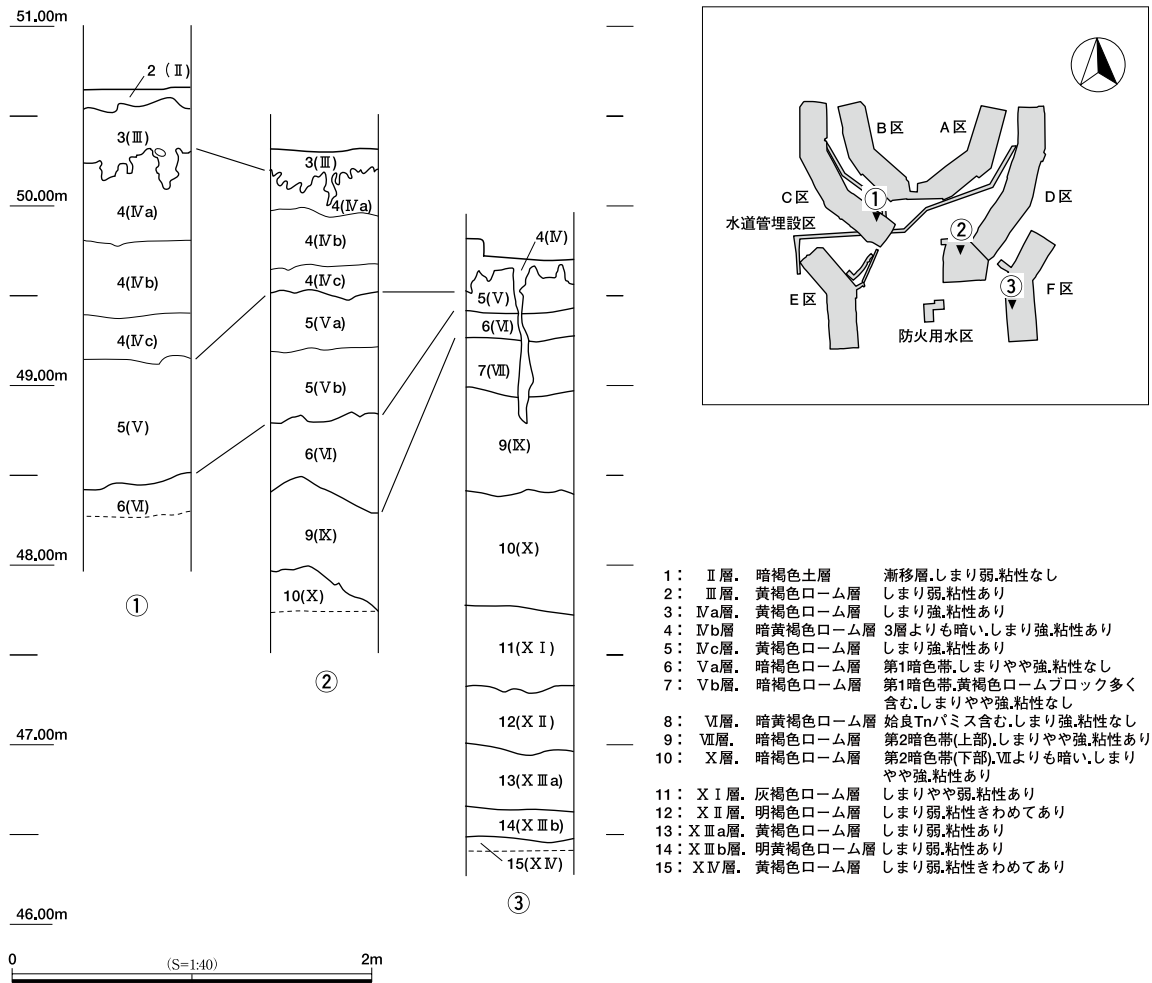
第1図 調査区の位置



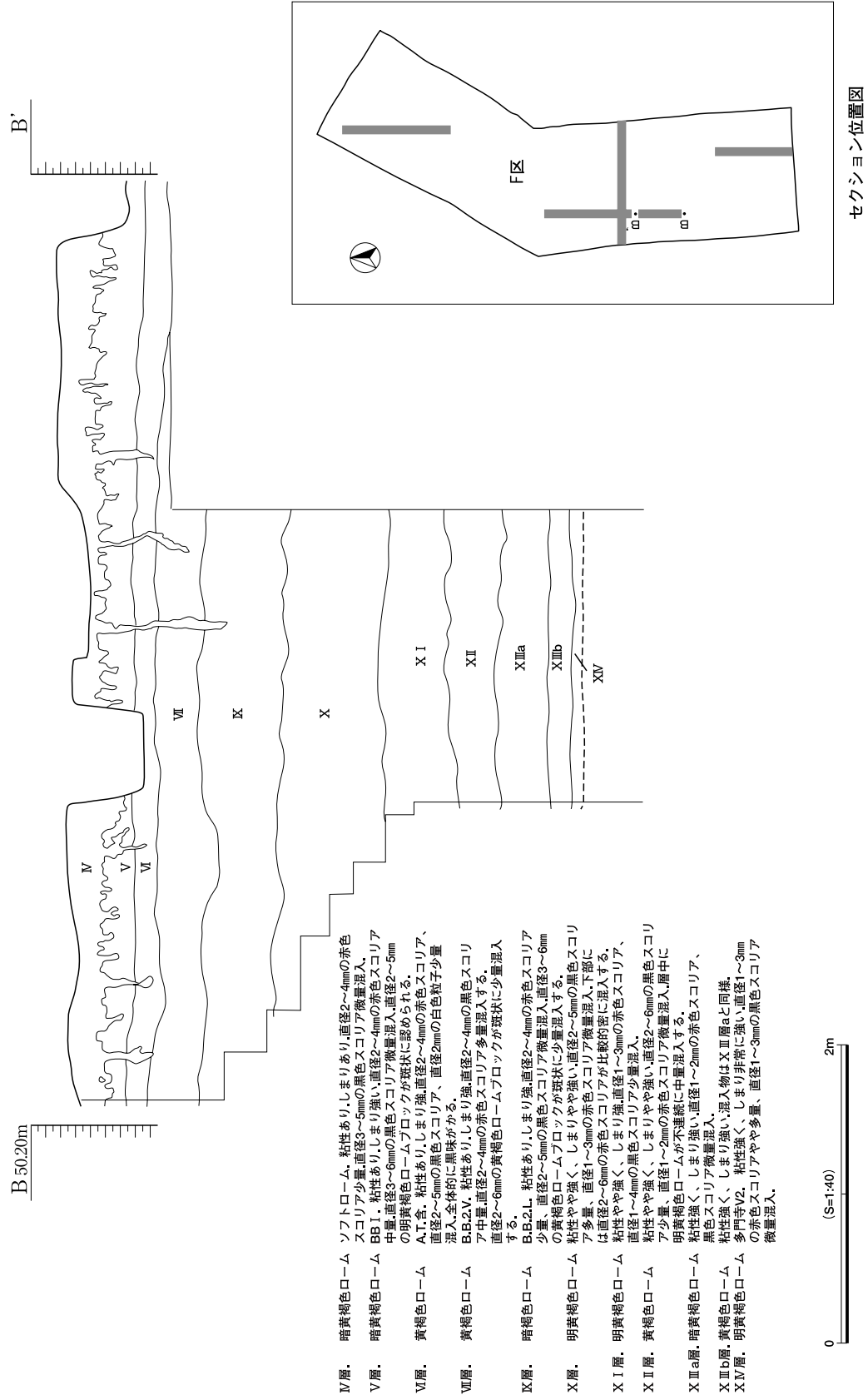
第2図 グリッド配置図



第3図 周辺の遺跡



第4図 土層模式図



第5図 F区 土層断面図

第Ⅱ章 A区の石器群

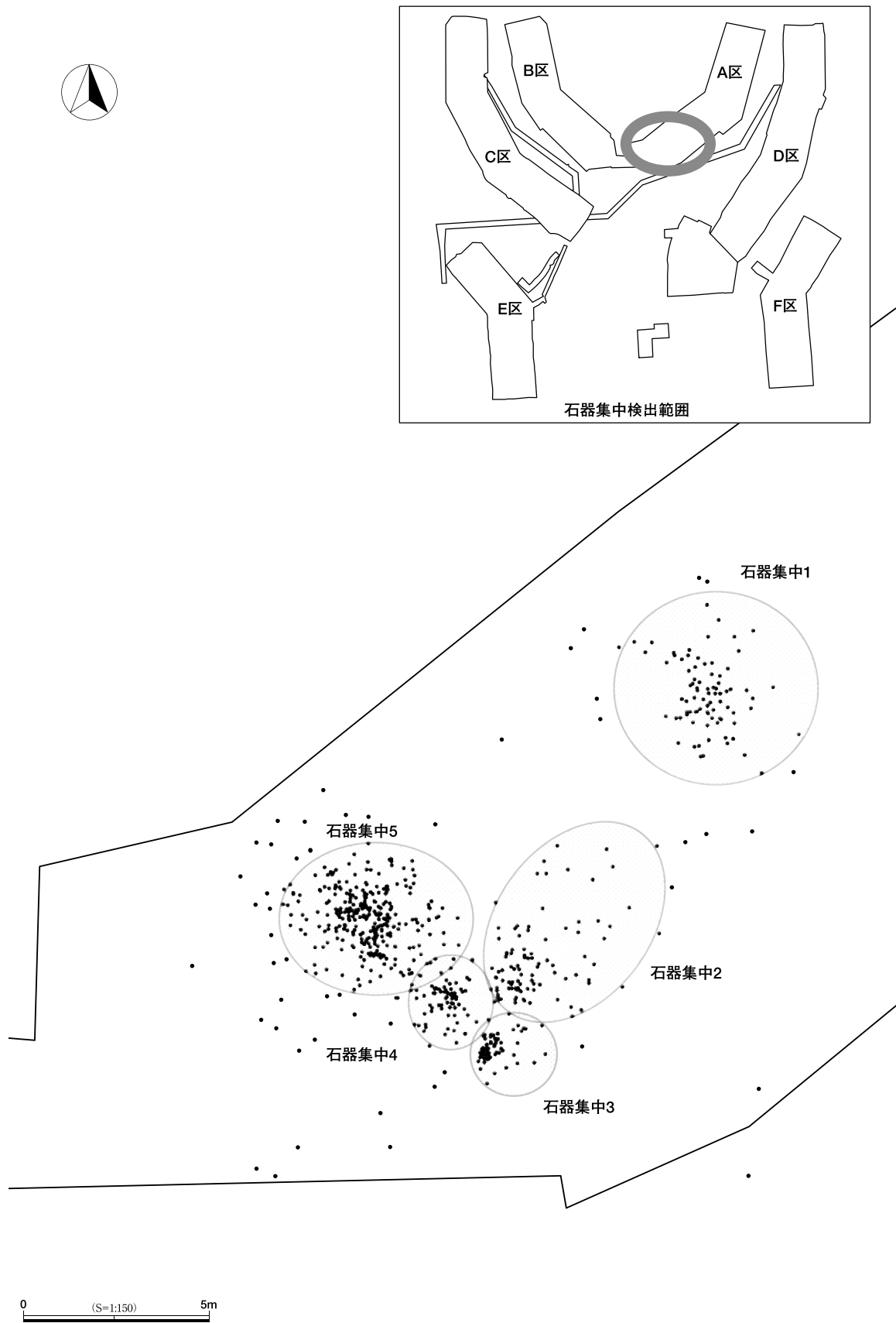
第1節 概 要

A区は全調査区域のうち最も北部に位置する。土層断面図の記録がなく、石器群の検出層準ははっきりしない。調査日誌の記録や調査者の証言によると、表土からⅤ層下部までが掘り下げられ、Ⅲ層からⅣ層下部を中心にして石器群が検出されたらしい。

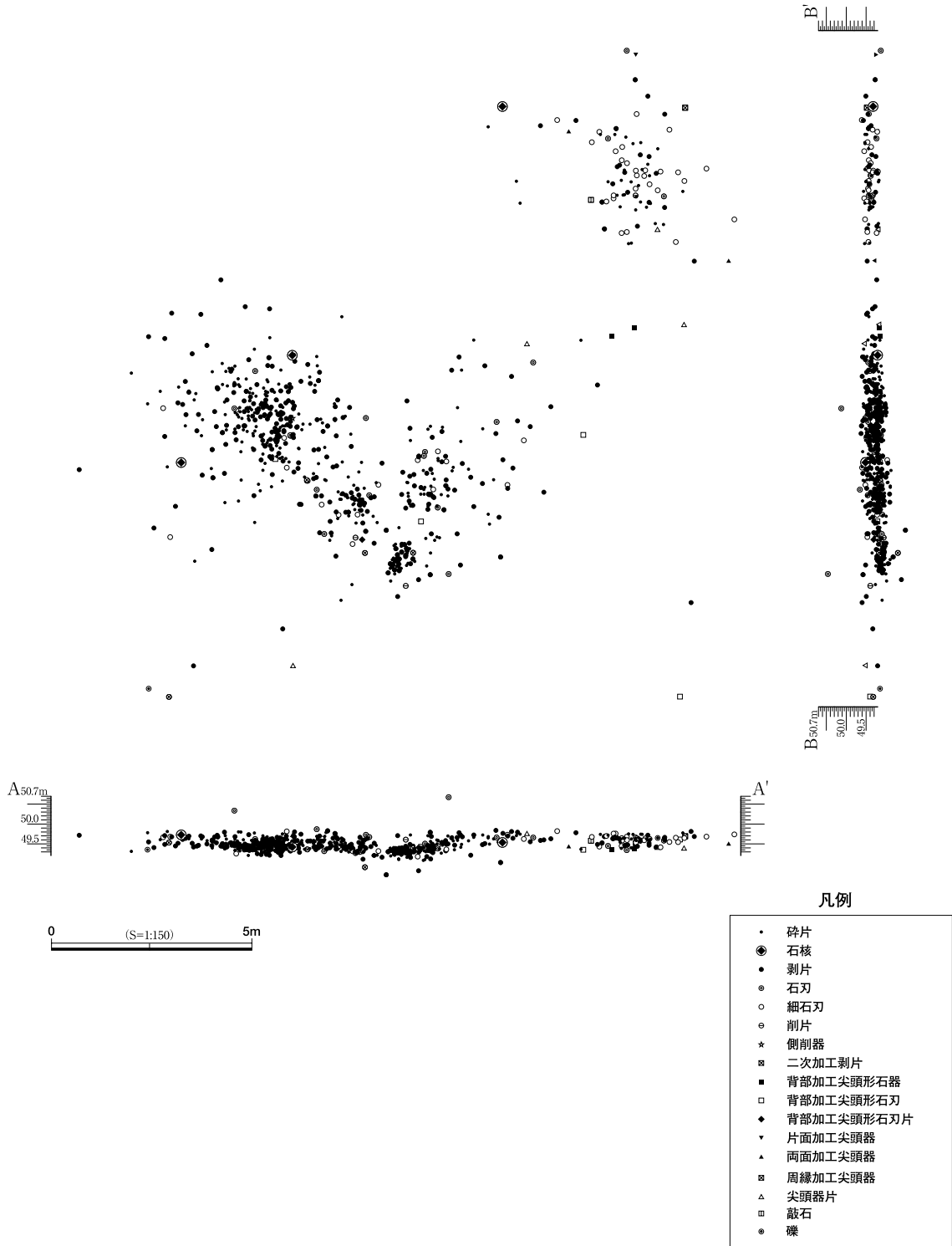
文化層は、地形の傾斜方向を加味しつつ石器の集中密度および型式と石材（母岩）から検討し、結果として2枚を識別した。

より下位にある第Ⅰ文化層は、石器集中2から5の4ヶ所の石器集中を中心に構成される（第6図）。諏訪星ヶ台産黒曜石製の石刃石器群と、頁岩製が主体の剥片石器群、ほかに箱根畑宿産黒曜石やチャート、ホルンフェルスの剥片・石核類が伴う。尖頭形石器を含む石刃関連石器群の技術形態と石材から「砂川期」の所産とみられる。

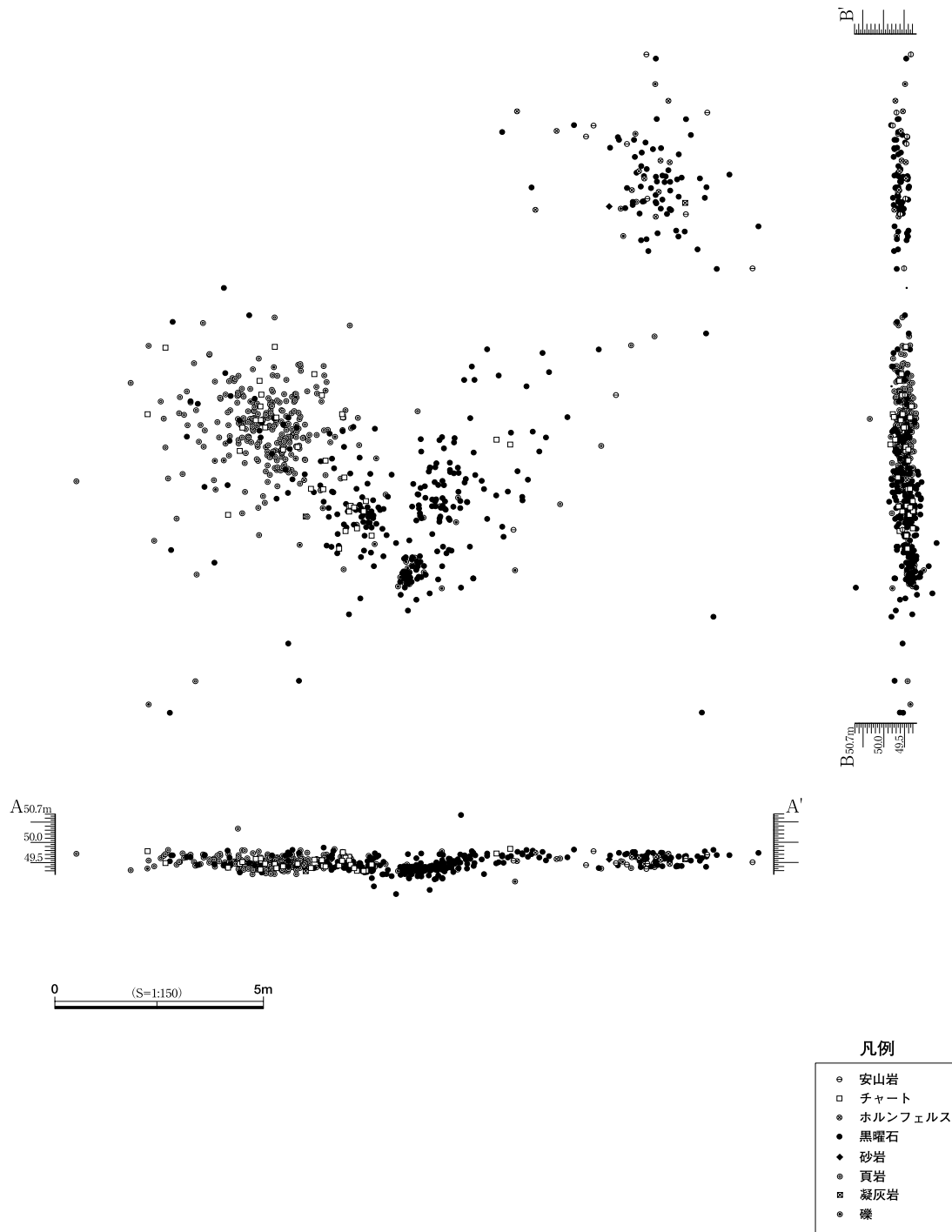
上位の第Ⅱ文化層は石器集中1を中心に構成される、諏訪星ヶ台産黒曜石製の細石刃石器群（細石刃核は組成しない）と、安山岩製および黒曜石製尖頭器石器群を主体とする（第6図）。ほかに安山岩製石刃および剥片、ホルンフェルス製剥片も組成する。細石刃石器群と尖頭器石器群との間に有意な層位差は確認されなかった。



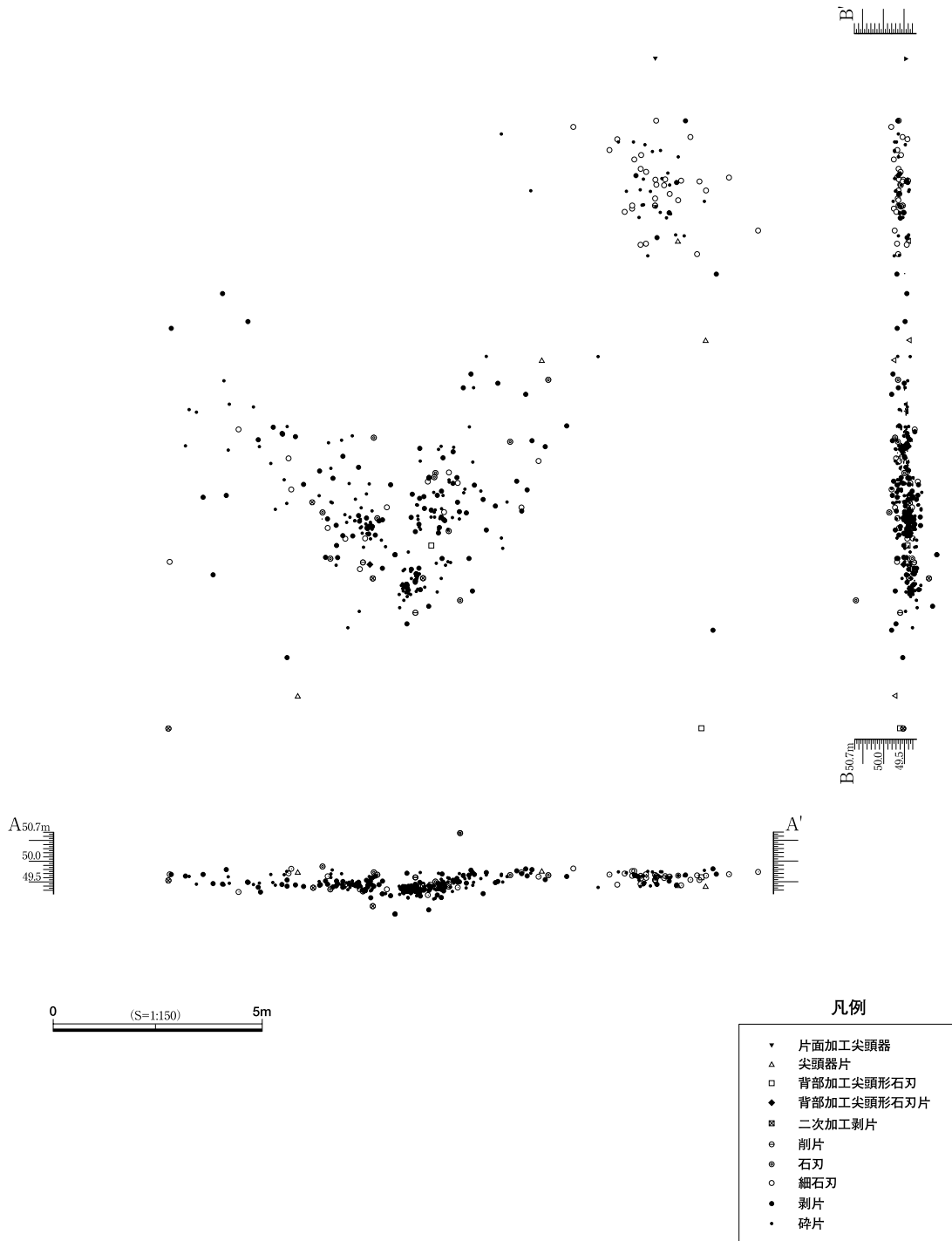
第6図 A区 石器集中分布



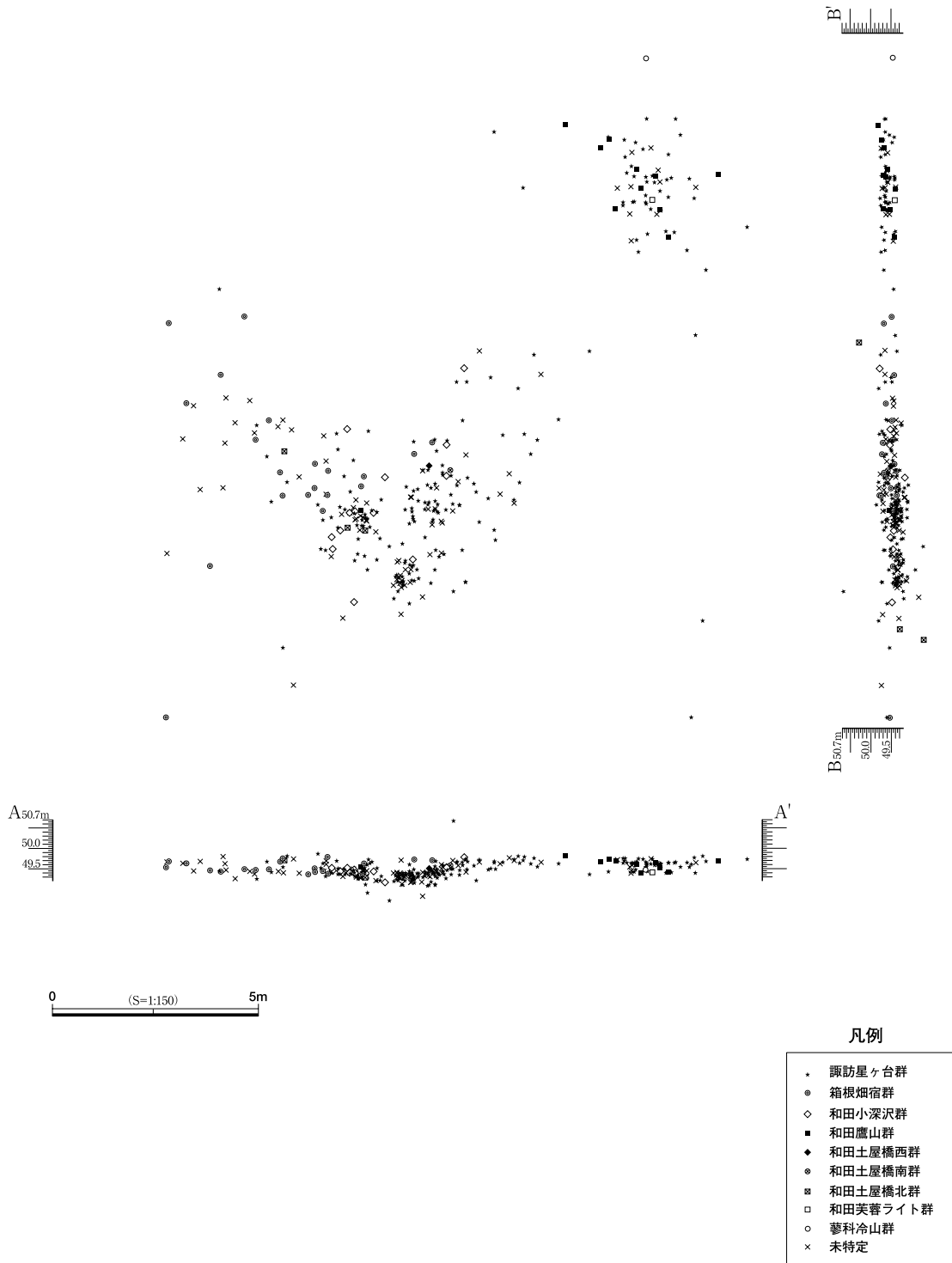
第7圖 A区 器種別分布



第8図 A区 石材別分布



第9図 A区 黒曜石 器種別分布



第10図 A区 黒曜石 産地別分布

第2節 第I文化層

(1) 石器群の分布と石材

調査区南部で少なくとも4ヶ所の石器集中が確認された(第6図:石器集中2-5)。総点数は573点である。諏訪星ヶ台産を中心とする信州系黒曜石製石刃石器群、頁岩・チャート・箱根畑宿産黒曜石の剥片石器群が主体である(表1-4)。ツールには背部加工石刃/剥片石器類が多く含まれる(8点)。検出層準は武蔵野台地の基本層序でいうところのIV層のどこかである。ただし、石器集中間には若干のレベル差がみられるようなので、相互に時間差があるかもしれない。

黒曜石(255点)には信州系と箱根系を主体とする7群の産地が推定された(表1)。これらの母岩分類は行っていない。信州系は主として石刃生産に関連し、3ヶ所の石器集中を形成する。箱根系は一般的剥片生産に関連し、やや散漫であるが信州系とずれ、頁岩と重なるように分布する。なお、細石刃15点が含まれているが、これらはサイズの定義(長さが幅の2倍以上で、幅が10mm以下のもの)によって分類されたものである。個別に観察すると、押圧剥離によって組織的に生産されるものではなく、石刃類と同じ母岩の消費に伴い副次的に生産されているようである。

頁岩(251点)には6母岩を識別した(表2)。信州系黒曜石の北西部で1ヶ所の集中を形成する。分類母岩のうちsh1とsh4が原石に近い状態で搬入された母岩で、頁岩の大部分を占める。ほかは消費の進んだ石核の搬入-消費しか認められない。どの母岩においても主として一般的剥片生産に関連するが、一部が石刃生産にも関連した可能性がある。

チャート(36点)では9母岩を識別した(表3)。Ch3(石刃)以外は全て剥片生産に関連するが、それぞれ極めて限定的な消費を特徴としている。頁岩及び箱根畑宿産黒曜石に重複分布する。

凝灰岩は1母岩(2点)のみで、これも限定的な消費といえる。

以上の石材-母岩分類、石器型式、平面分布上の特徴からみると、信州系黒曜石製石刃石器群と頁岩・チャート・箱根系黒曜石製剥片石器群の石器生産・石材消費過程は対照的といえる。

	諏訪星ヶ台	蓼科冷山	和田鷹山	和田芙蓉ライト	和田小深沢	和田土屋橋北	和田土屋橋南	和田土屋橋西	箱根畑宿	推定不可	測定不可	未測定	計
背部加工尖頭形石刃石器	2												2
背部加工尖頭形石器片	1												1
尖頭器片	1								1				2
二次加工剥片	3								2				5
削片	2												2
石刃	7			1				1				1	10
細石刃	10			1		1			1			1	14
剥片	55	2		8		1		1	6		2	1	85
碎片	62			5		1			12	13	39	2	134
計	143	2	2	15	3	1	1	1	20	24	41	5	255

表1 A区第I文化層 黒曜石製石器石材組成 (推定原産地別)

	sh1	sh3	sh4	sh5	sh6	sh7	その他	計
背部加工尖頭形石刃石器	2							2
背部加工尖頭形石器片					2			2
背部加工剥片石器	1							1
側削器			1					1
石刃			1					2
細石刃								1
剥片	91	5	32					128
碎片	58	14	39	1				112
石核		2						2
計	154	21	73	1	2			251

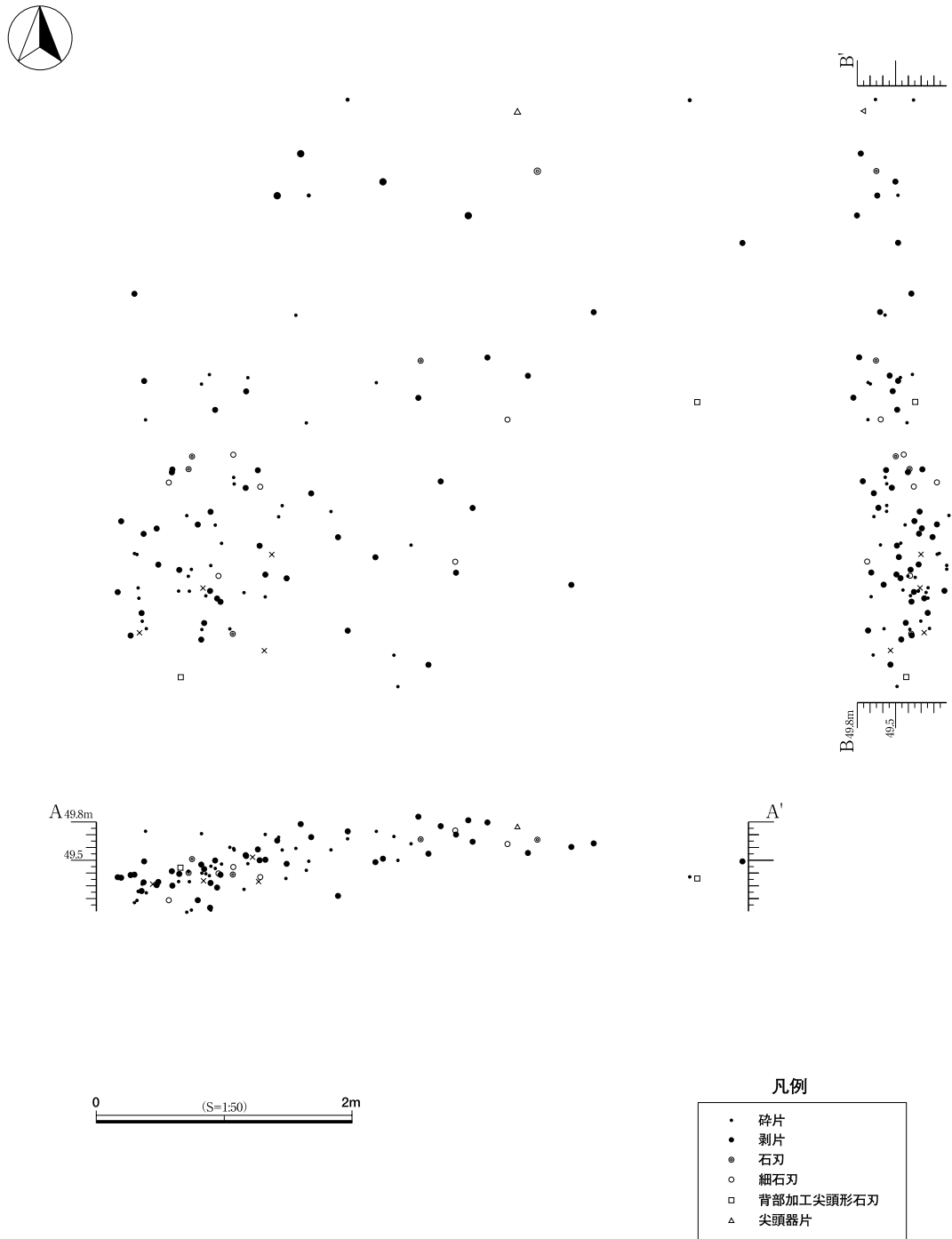
表2 A区第I文化層 頁岩製石器石材組成 (母岩別)

	ch1	ch2	ch3	ch4	ch5	ch6	ch7	ch8	ch9	未分類	計
側削器	1										1
石刃			1								1
剥片	7	3		1	1	1	1				14
碎片	3	10	1	1	1	1		1	1	1	20
計	11	13	2	2	2	2	1	1	1	1	36

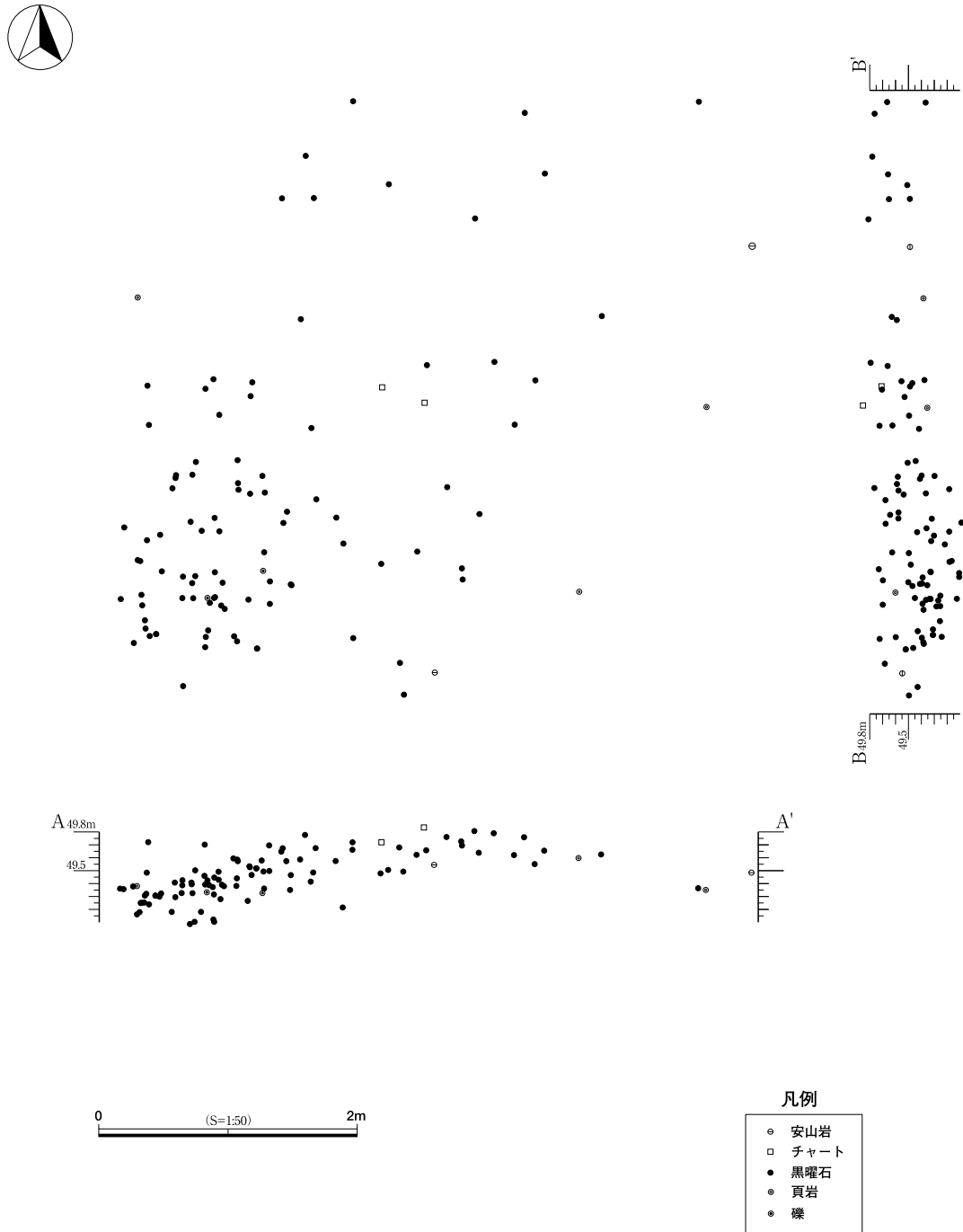
表3 A区第I文化層 チャート製石器石材組成 (母岩別)

	tu2
剥片	2

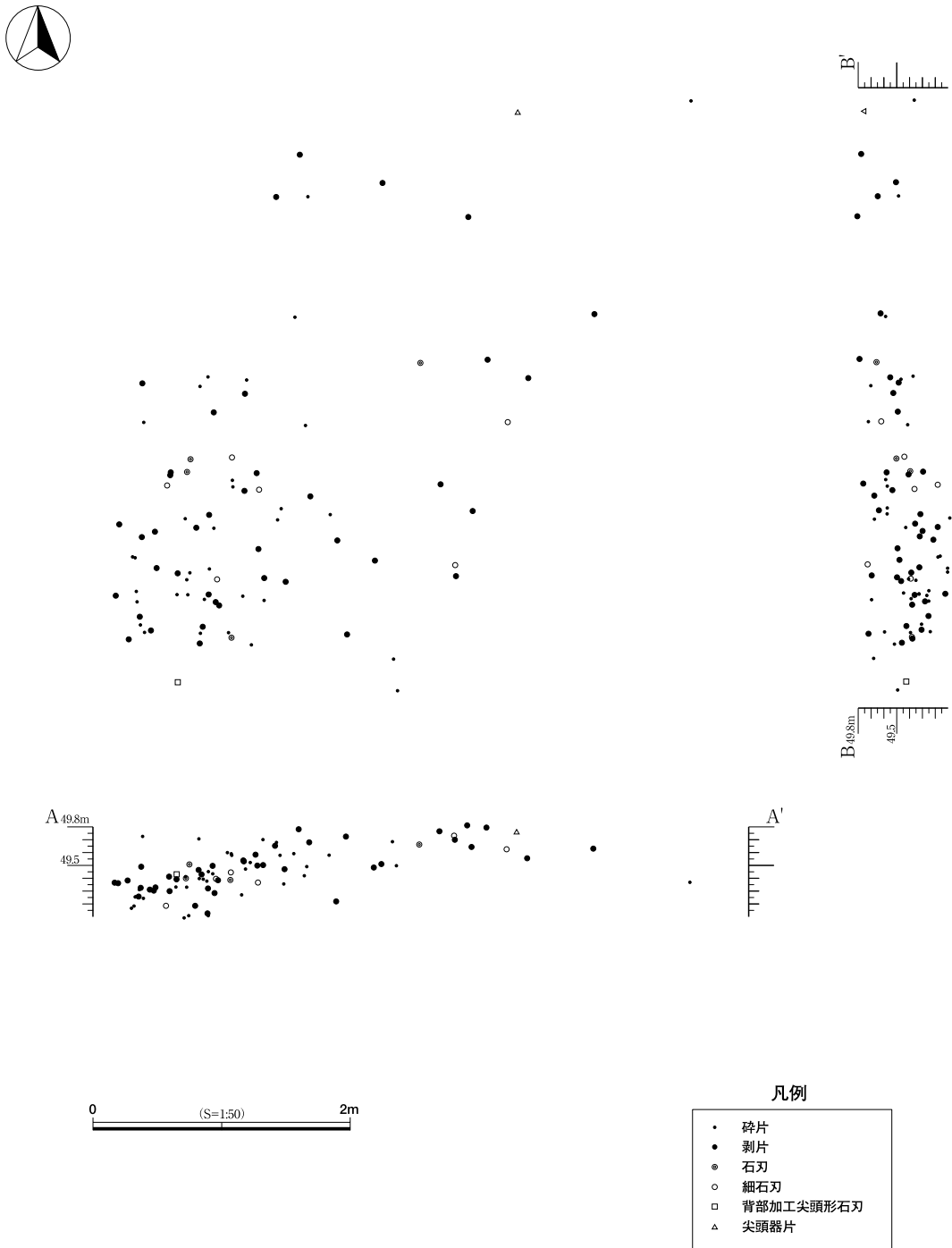
表4 A区第I文化層 凝灰岩製石器石材組成 (母岩別)



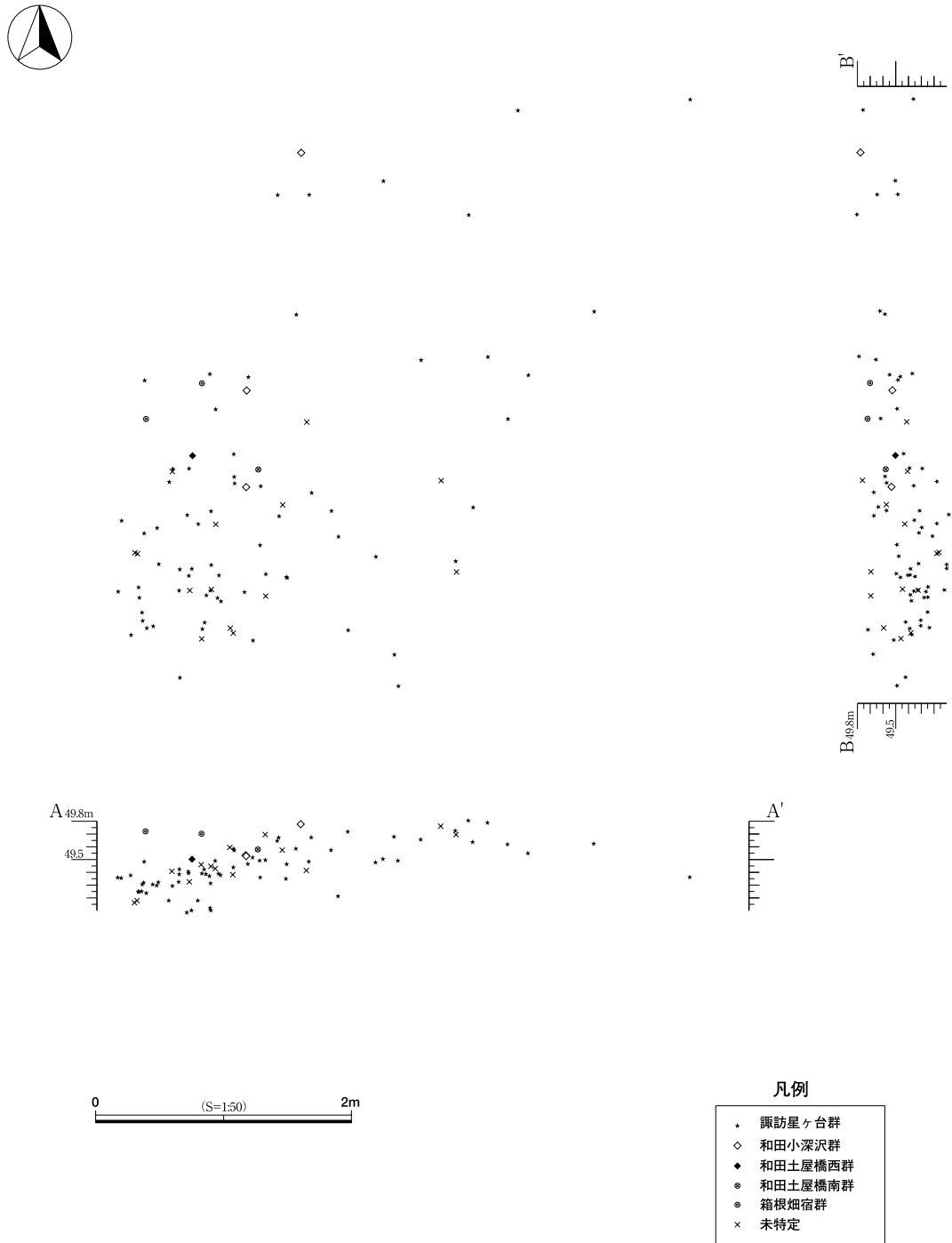
第11図 A区 石器集中2 器種別分布



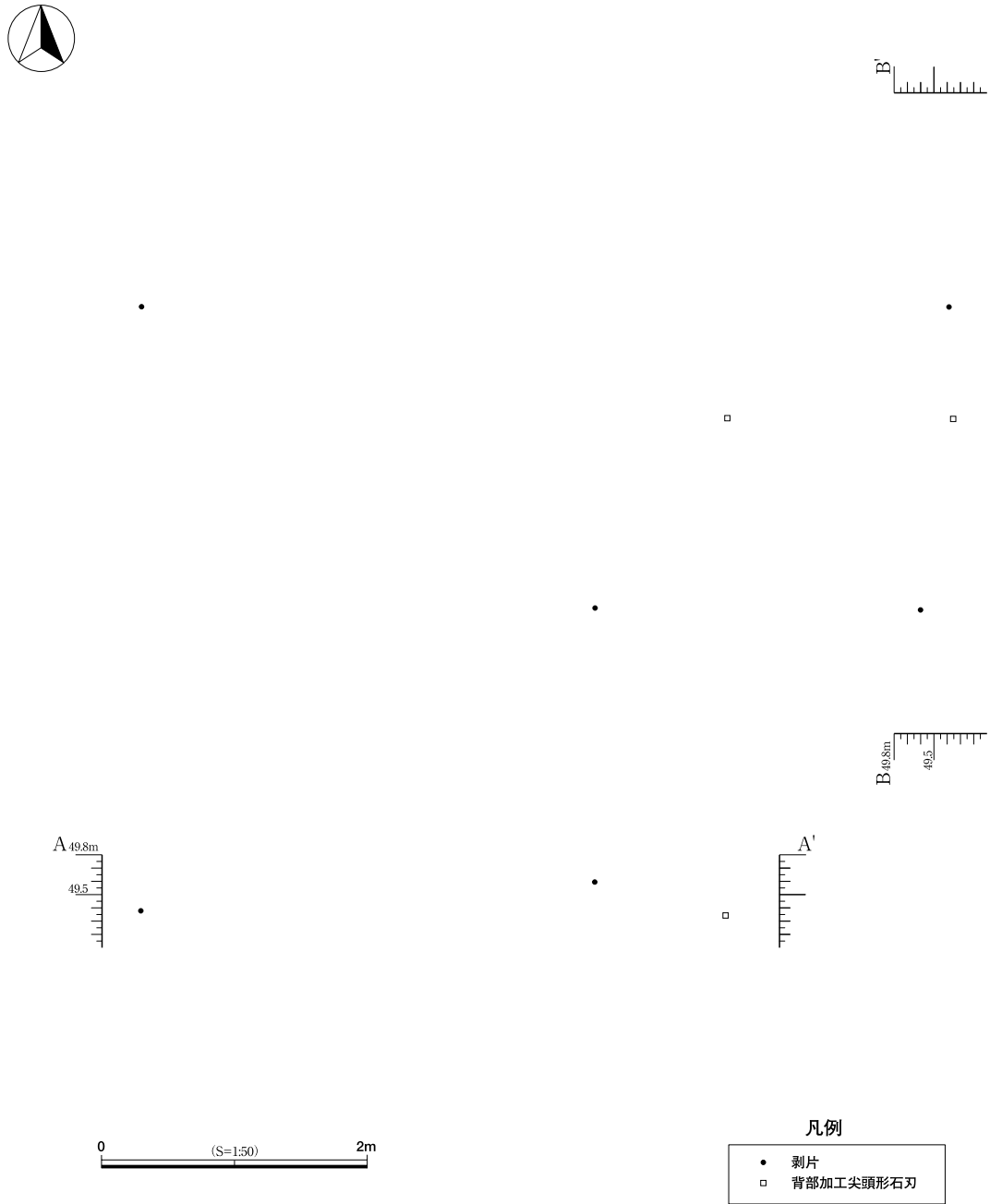
第12図 A区 石器集中2 石材別分布



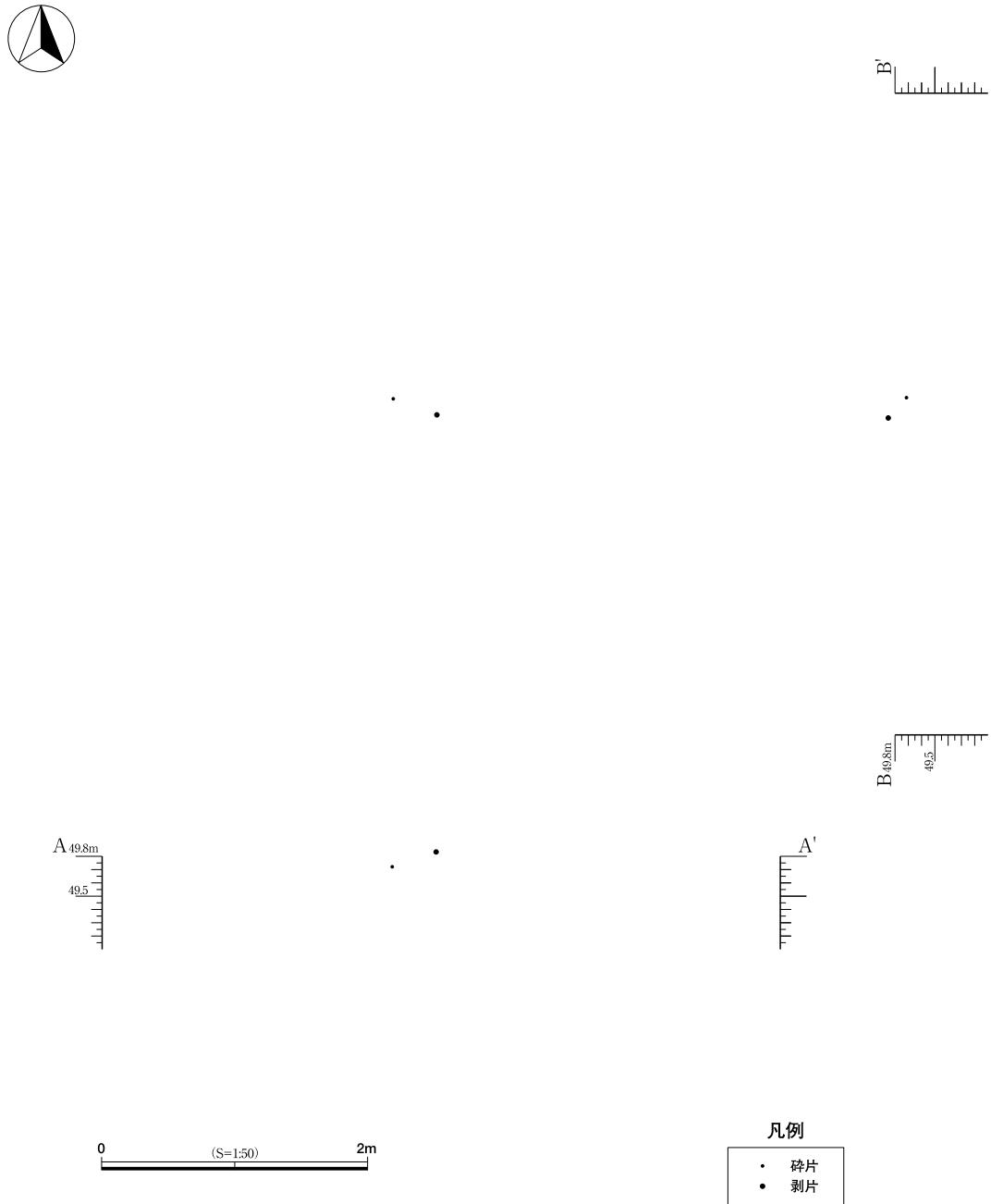
第13図 A区 石器集中2 黒曜石 器種別分布



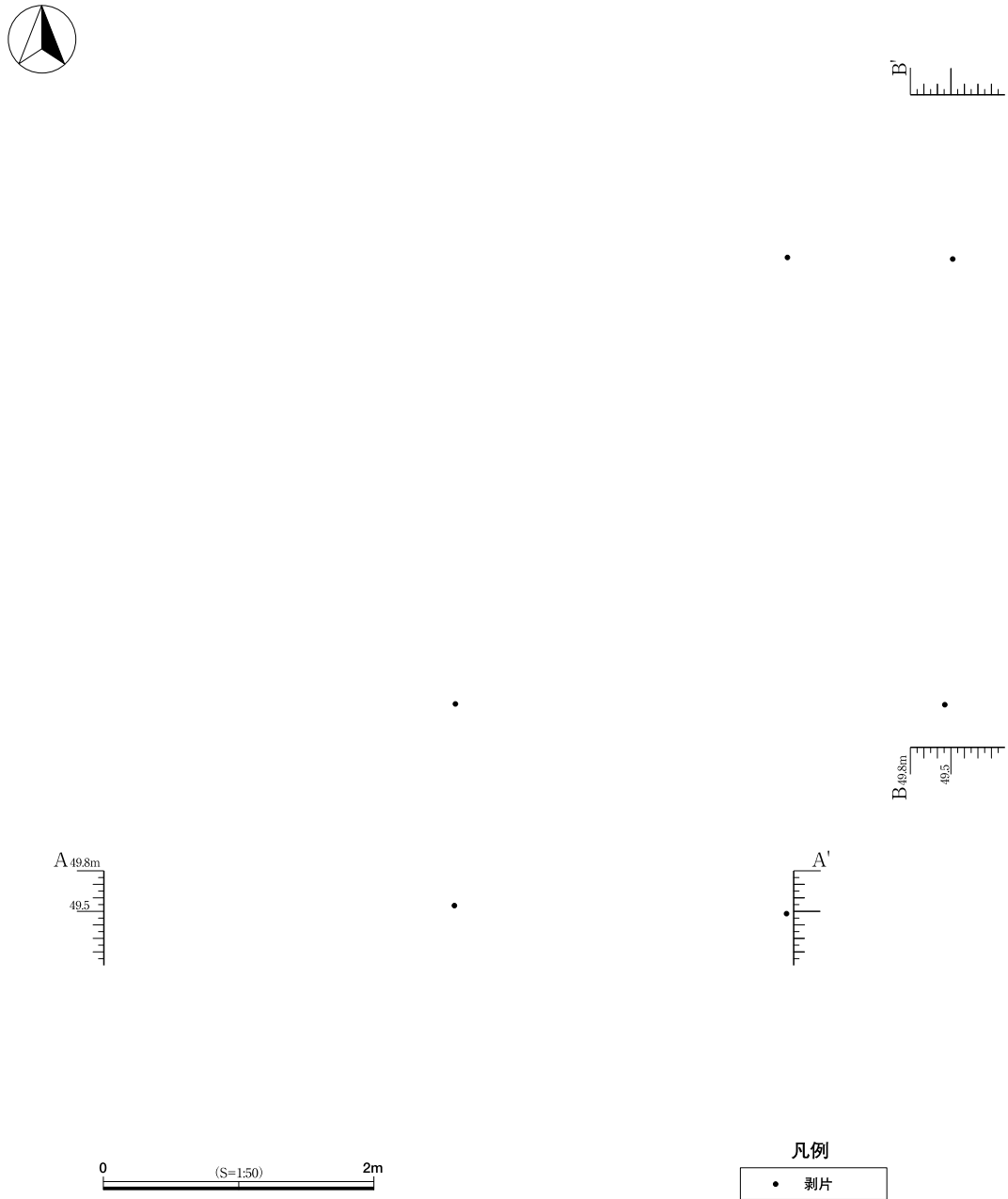
第14図 A区 石器集中2 黒曜石 産地別分布



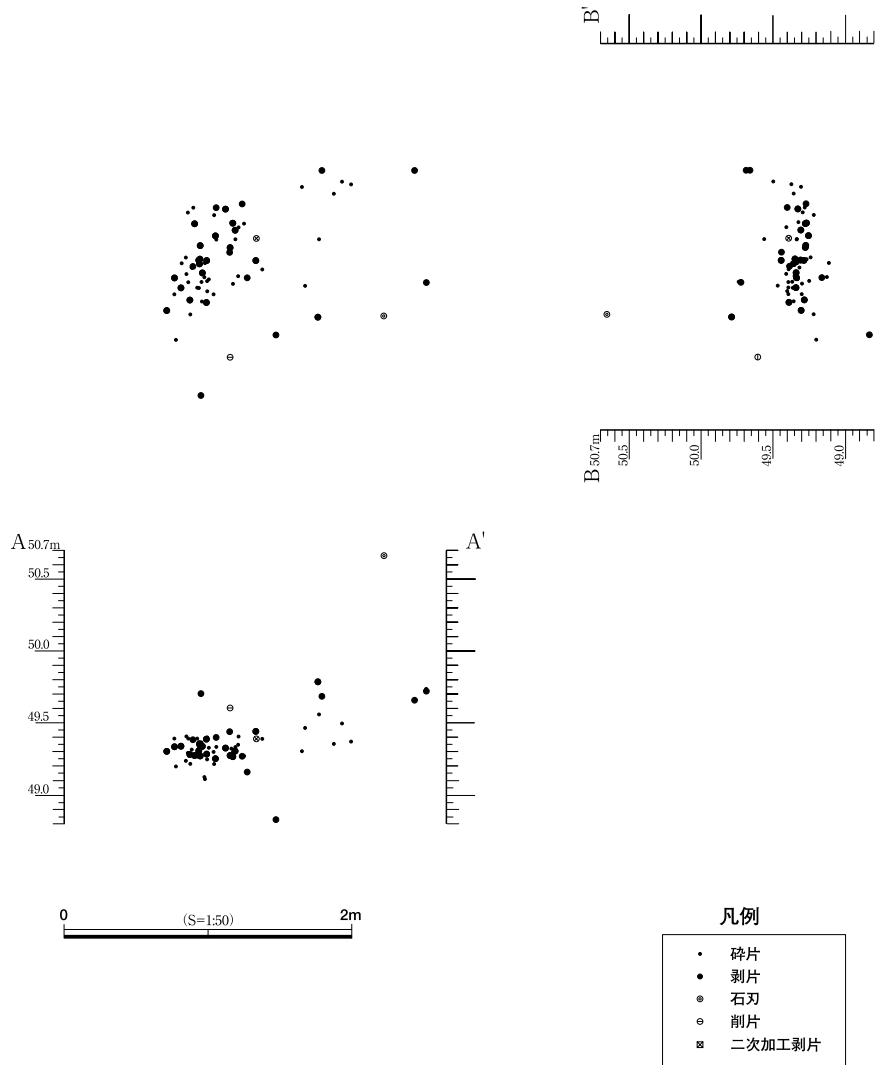
第15圖 A区 石器集中2 頁岩 器種別分布



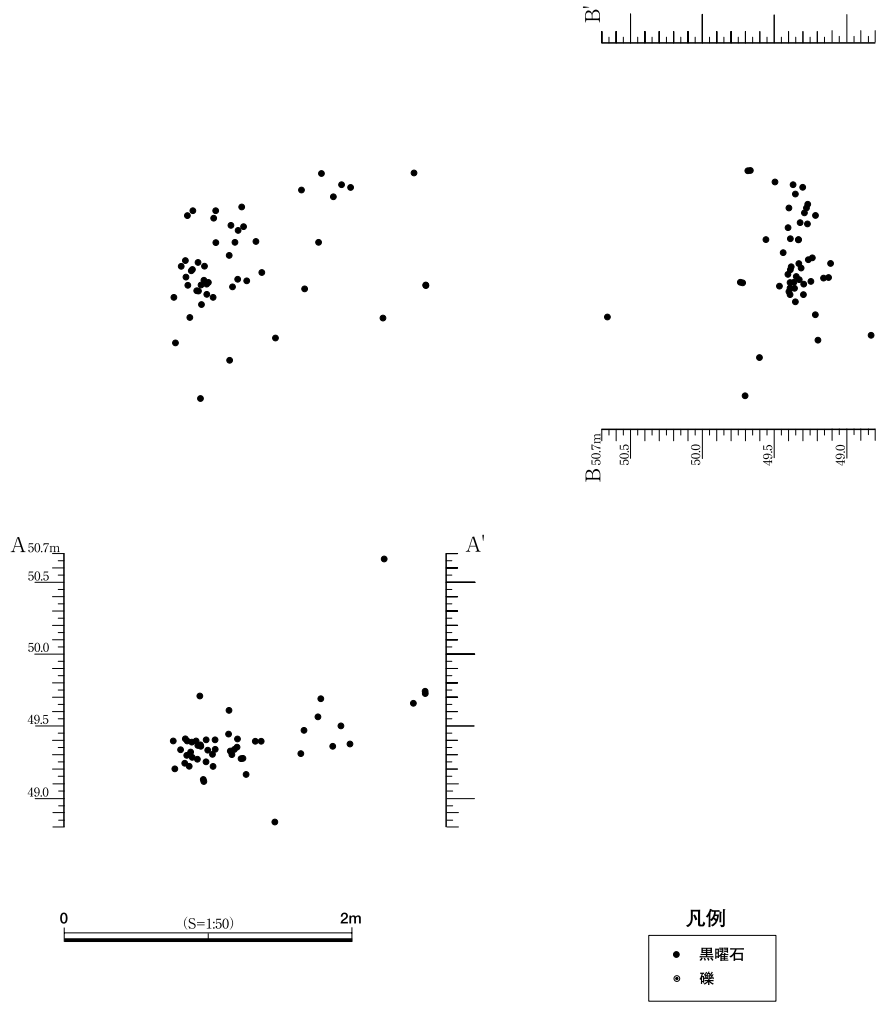
第16図 A区 石器集中2 チャート 器種別分布



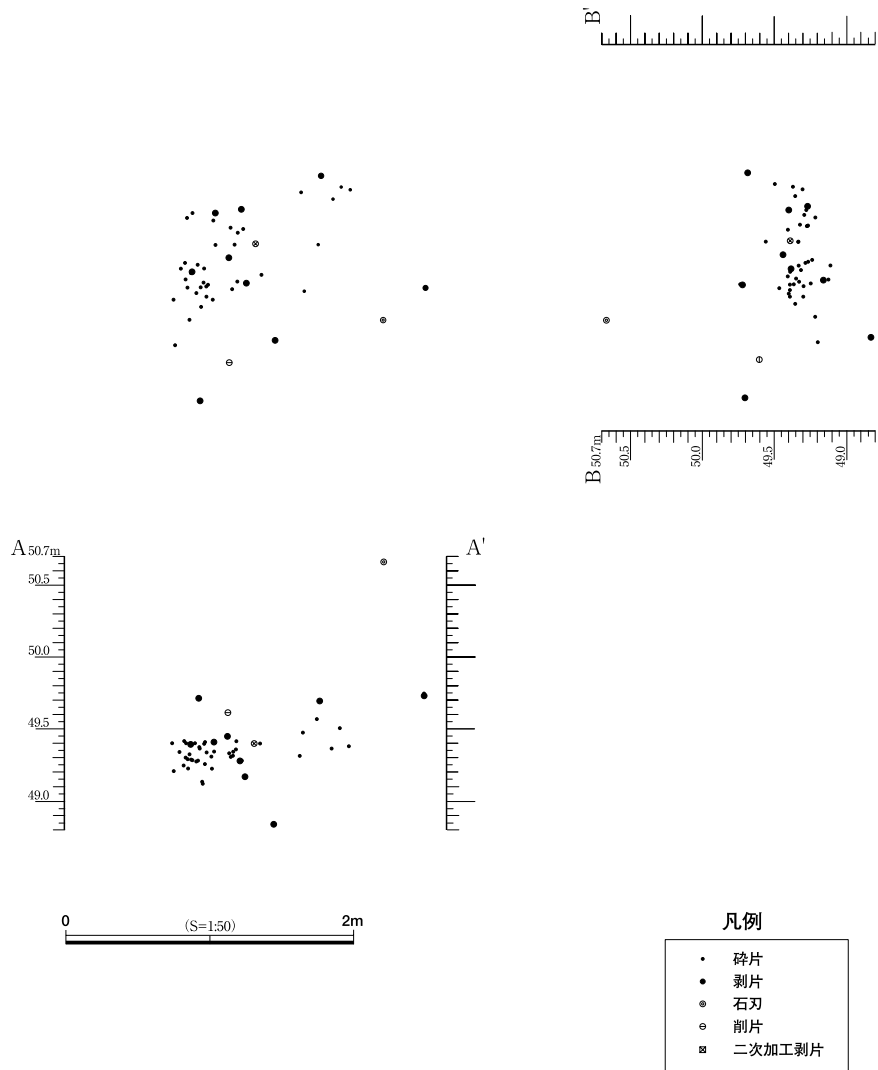
第17圖 A区 石器集中2 安山岩 器種別分布



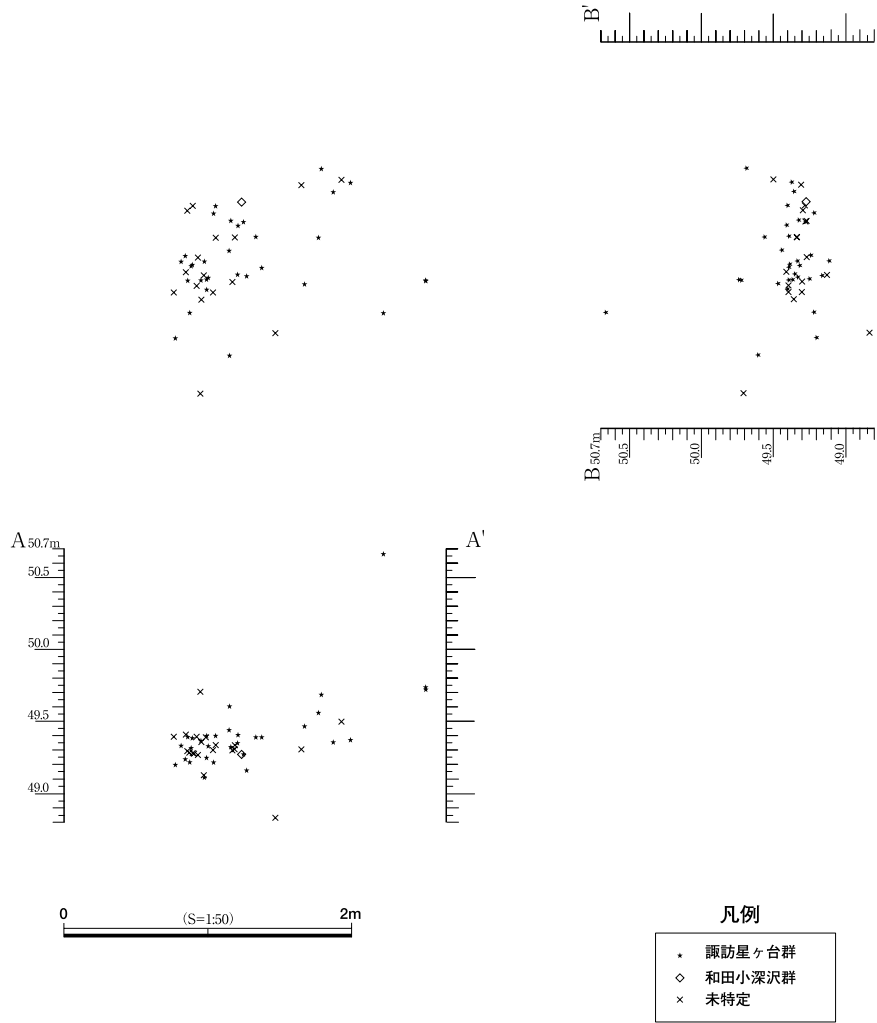
第18図 A区 石器集中3 器種別分布



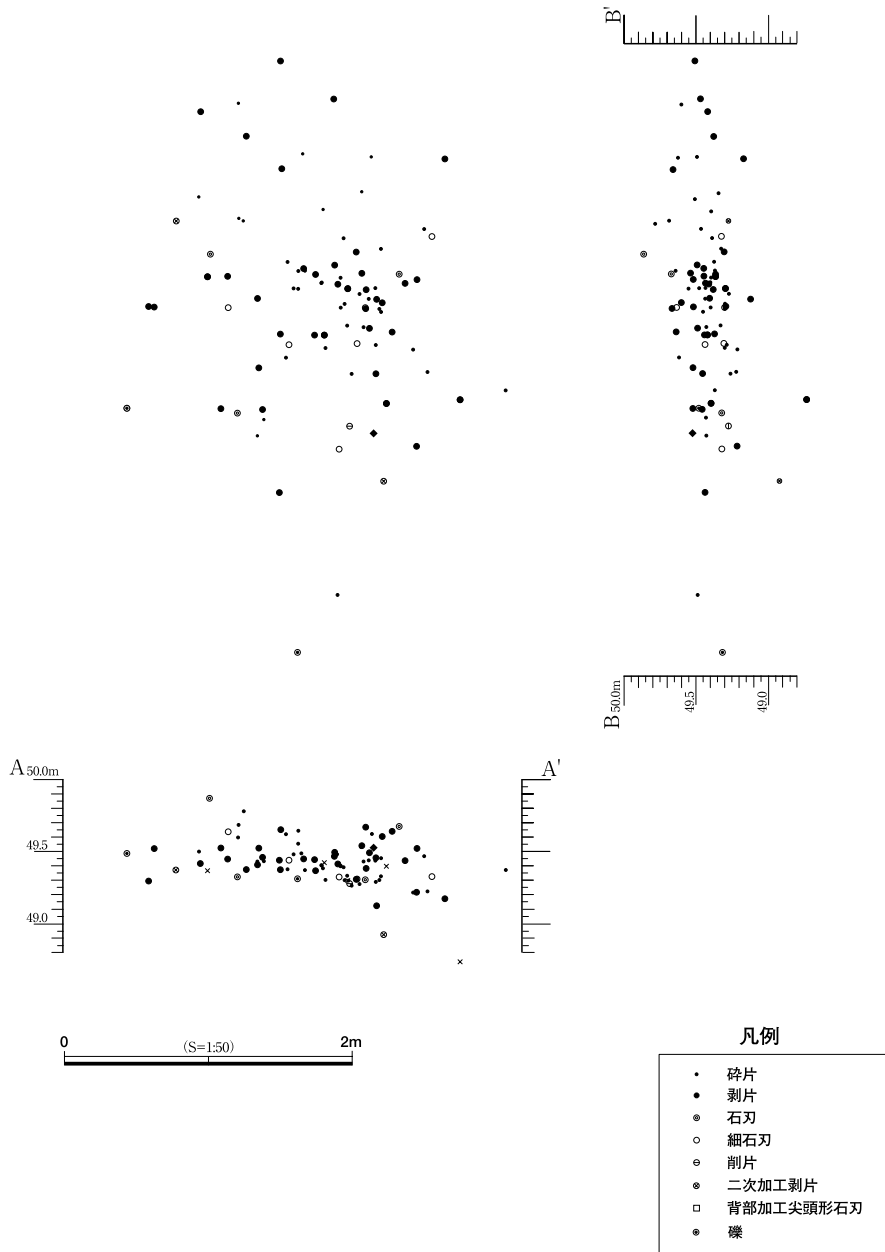
第19図 A区 石器集中3 石材別分布



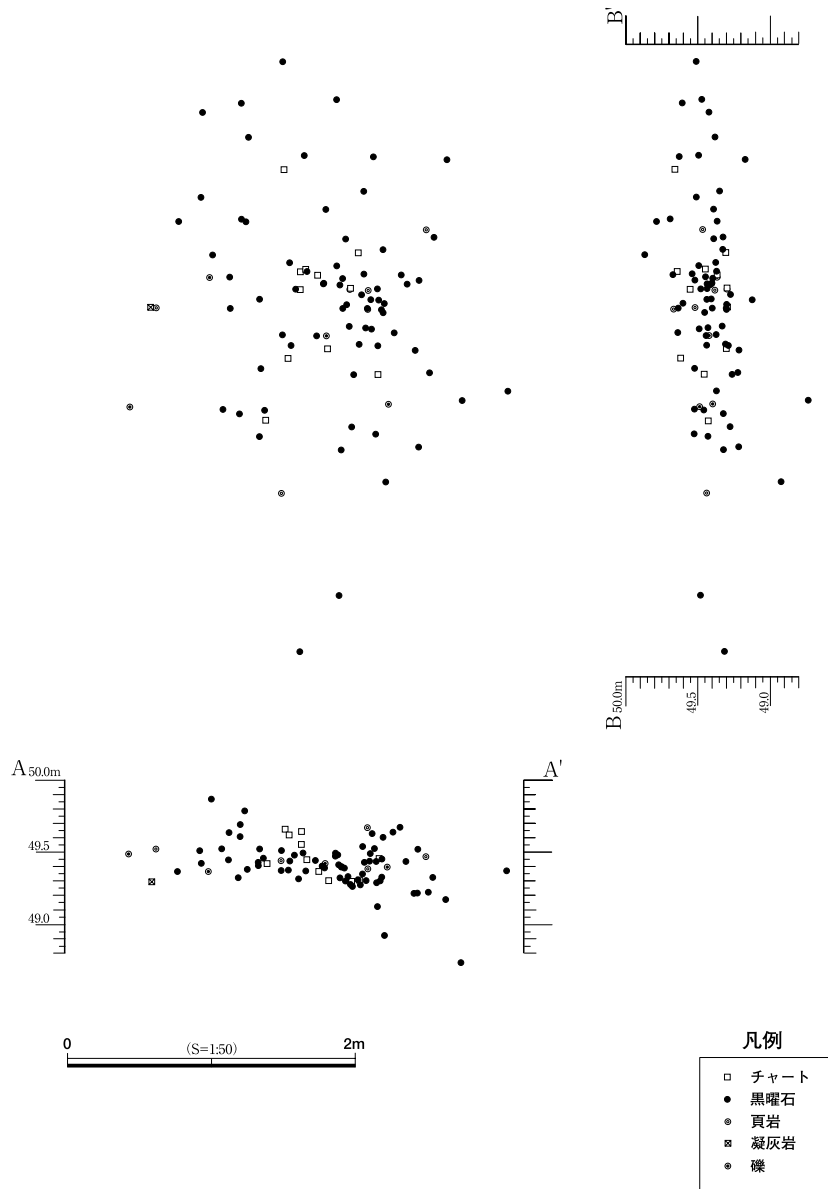
第20図 A区 石器集中3 黒曜石 器種別分布



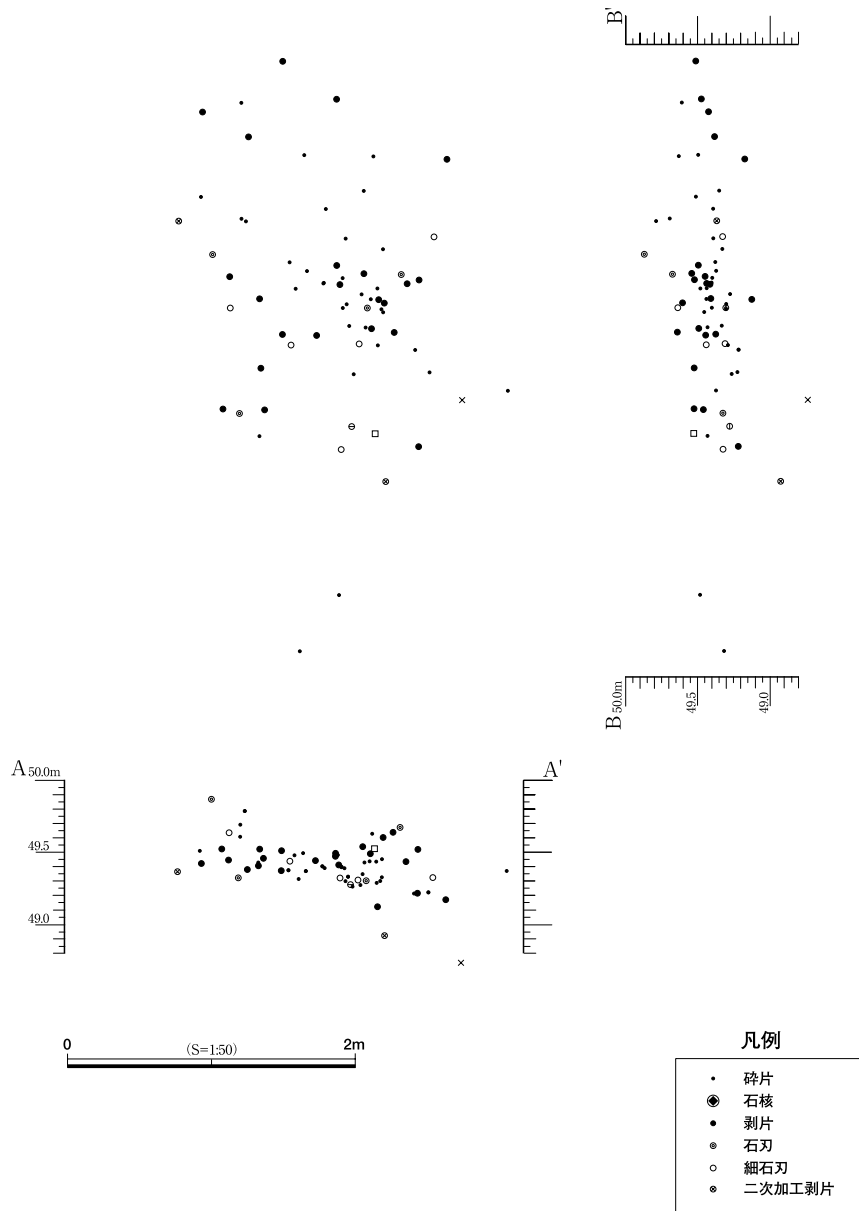
第21図 A区 石器集中3 黒曜石 産地別分布



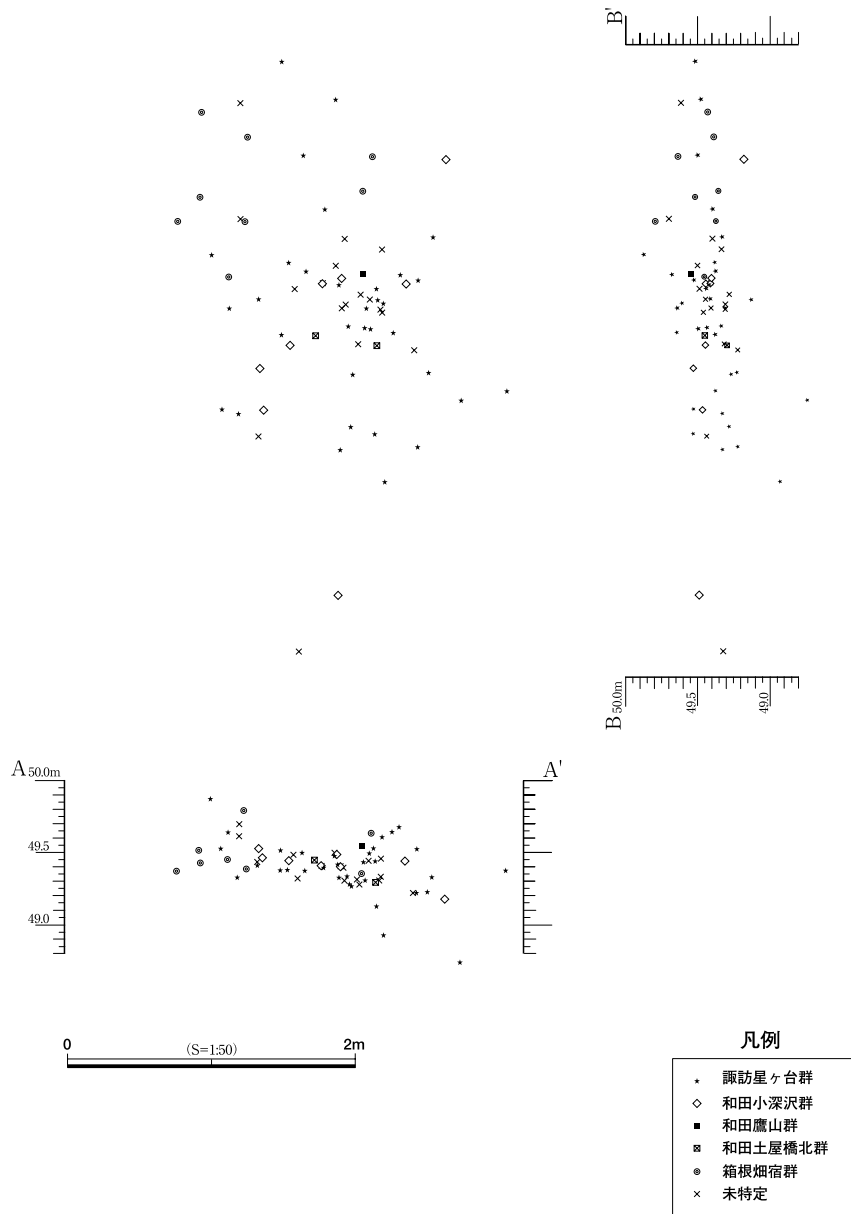
第22図 A区 石器集中4 器種別分布



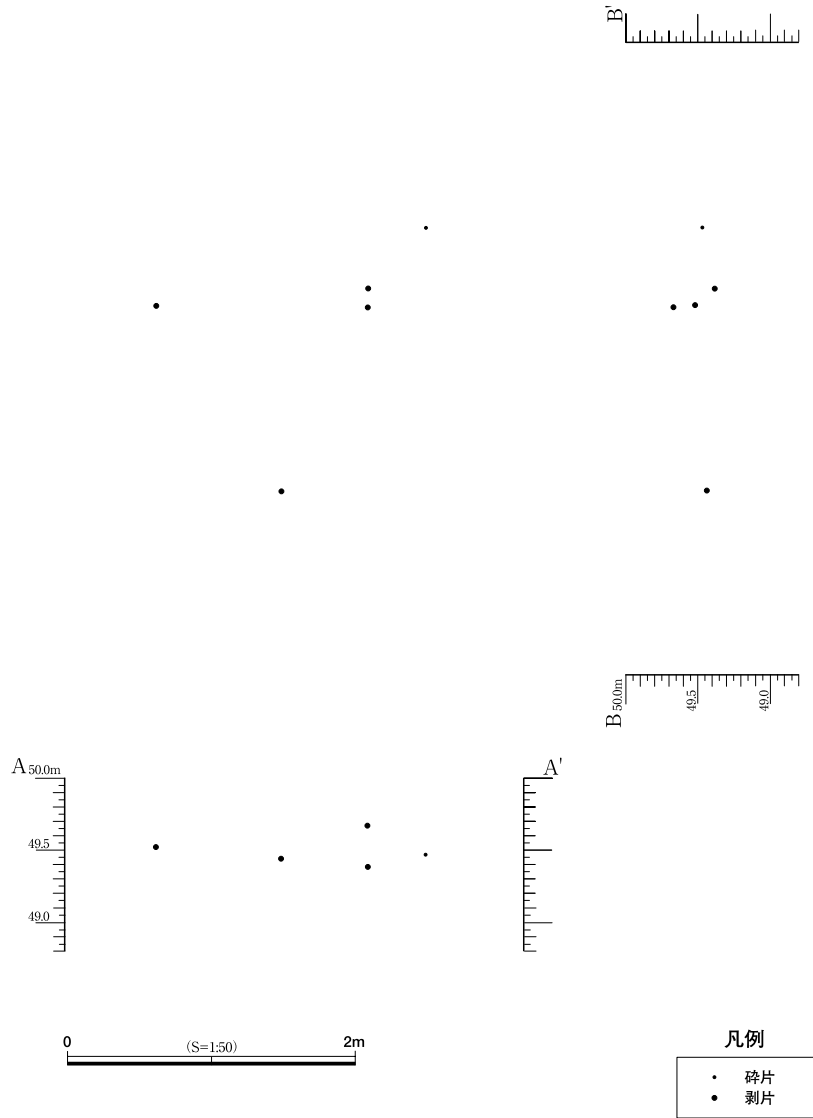
第23図 A区 石器集中4 石材別分布



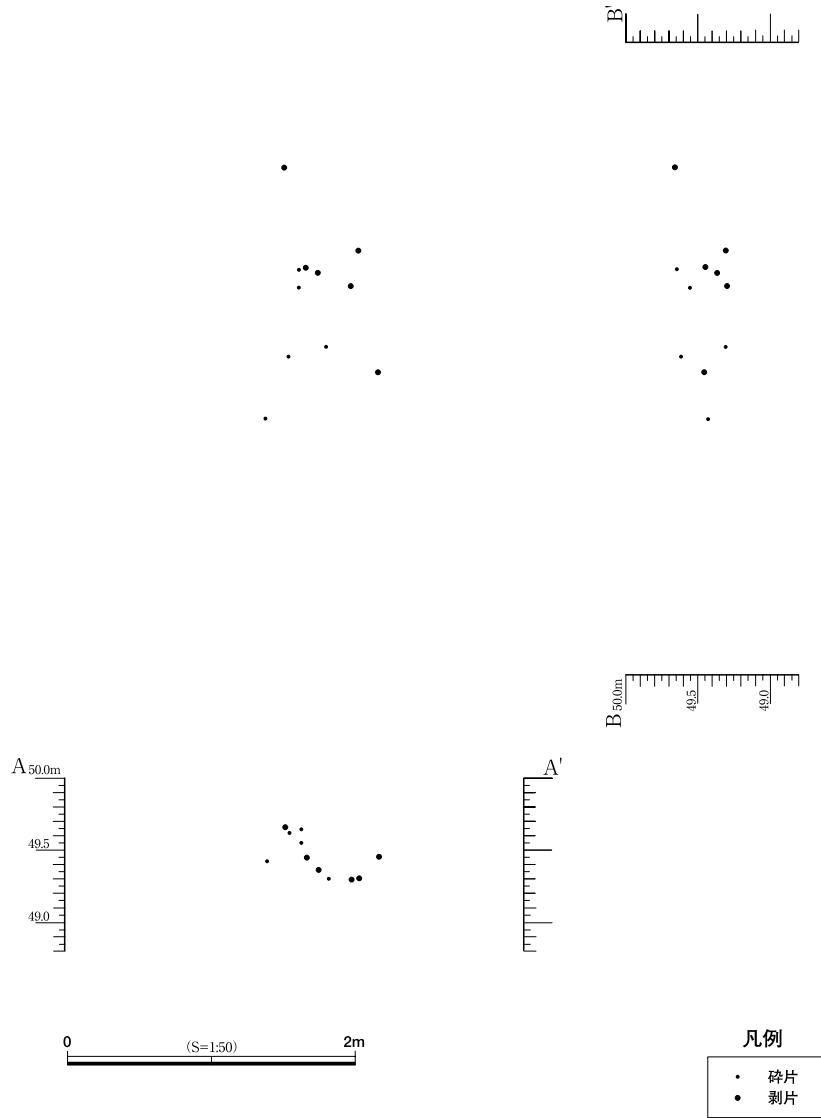
第24図 A区 石器集中4 黒曜石 器種別分布



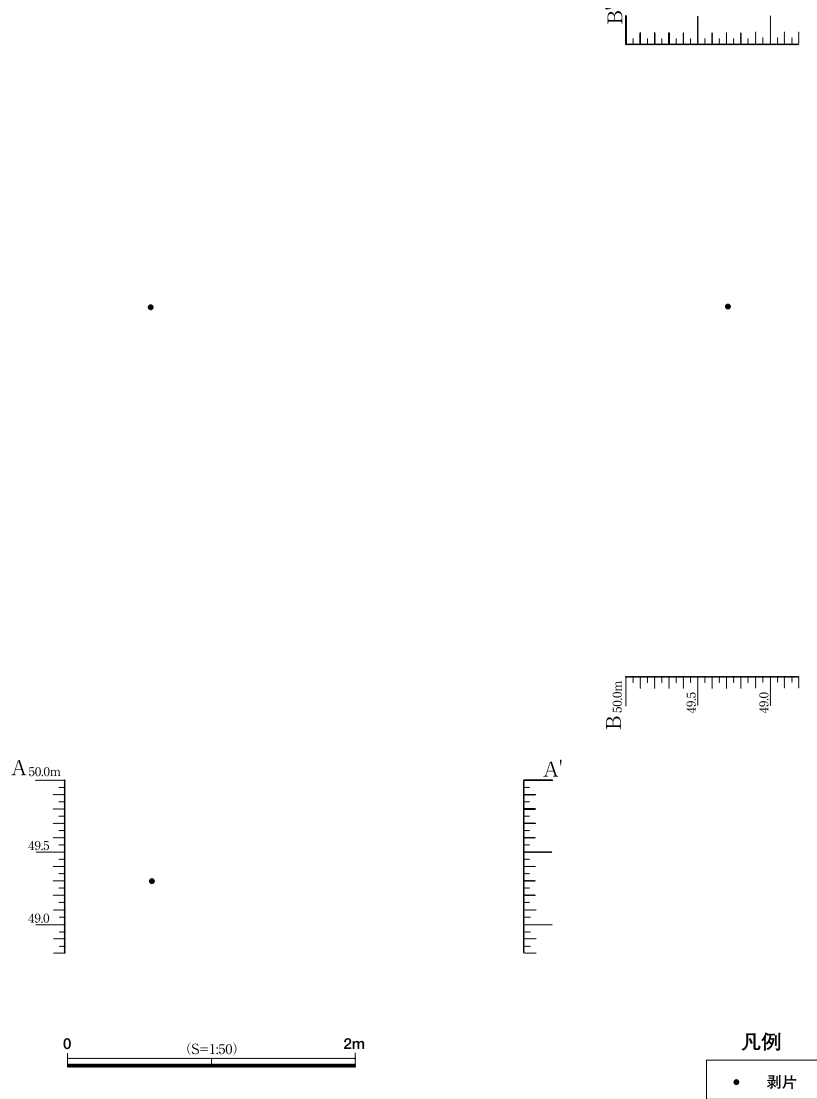
第25図 A区 石器集中4 黒曜石 産地別分布



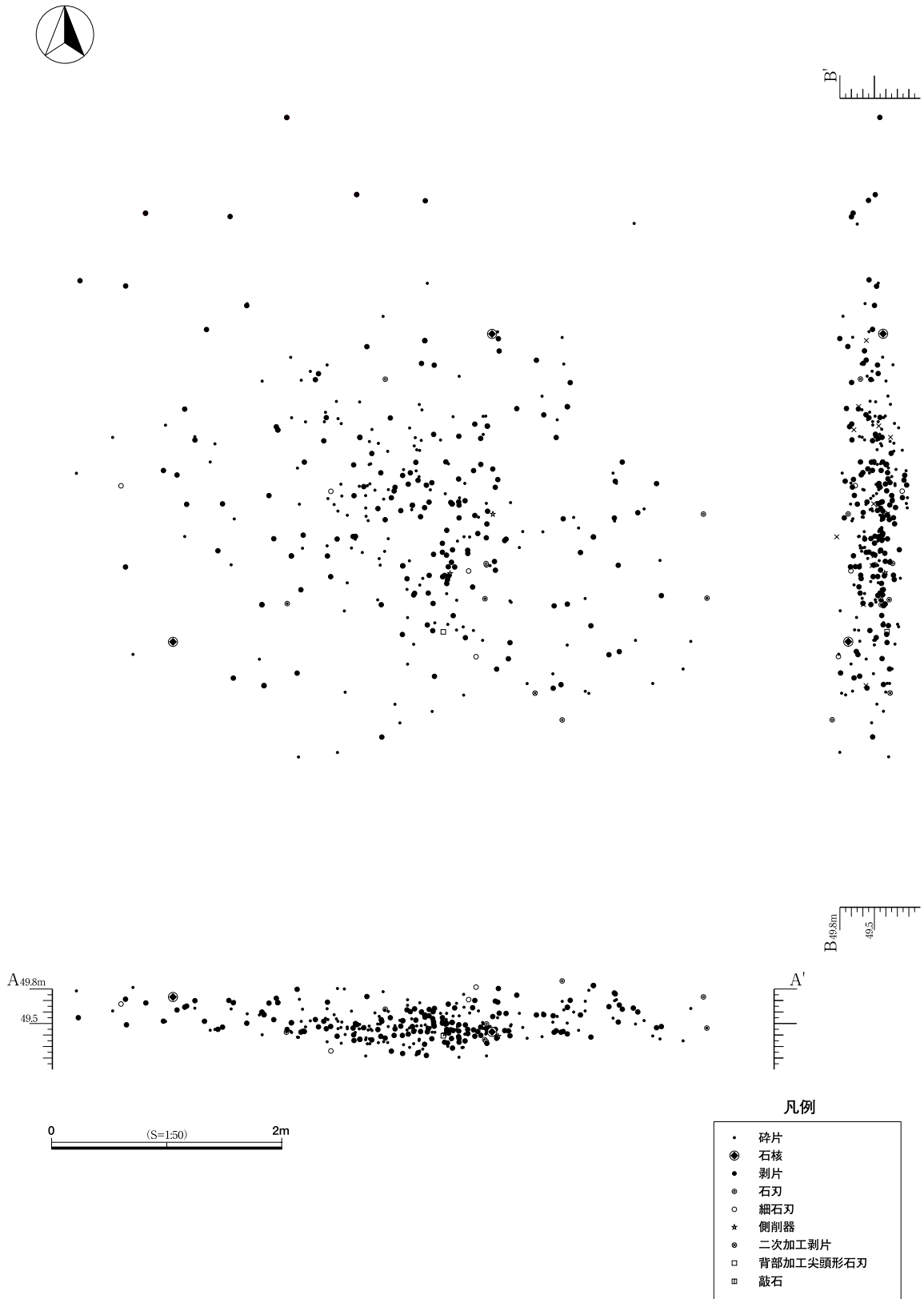
第26図 A区 石器集中4 頁岩 器種別分布



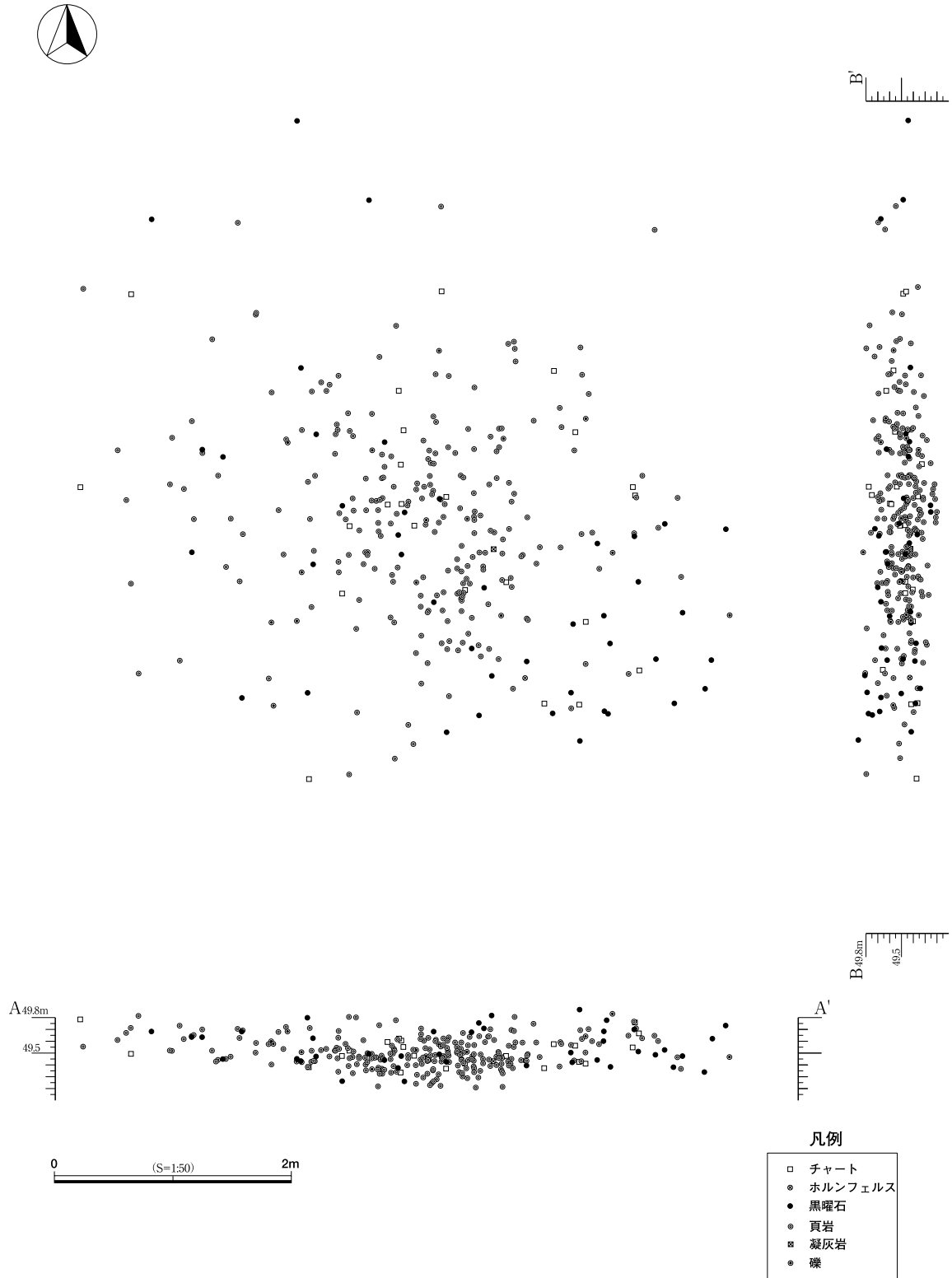
第27図 A区 石器集中4 チャート 器種別分布



第28図 A区 石器集中4 凝灰岩 器種別分布



第29図 A区 石器集中5 器種別分布



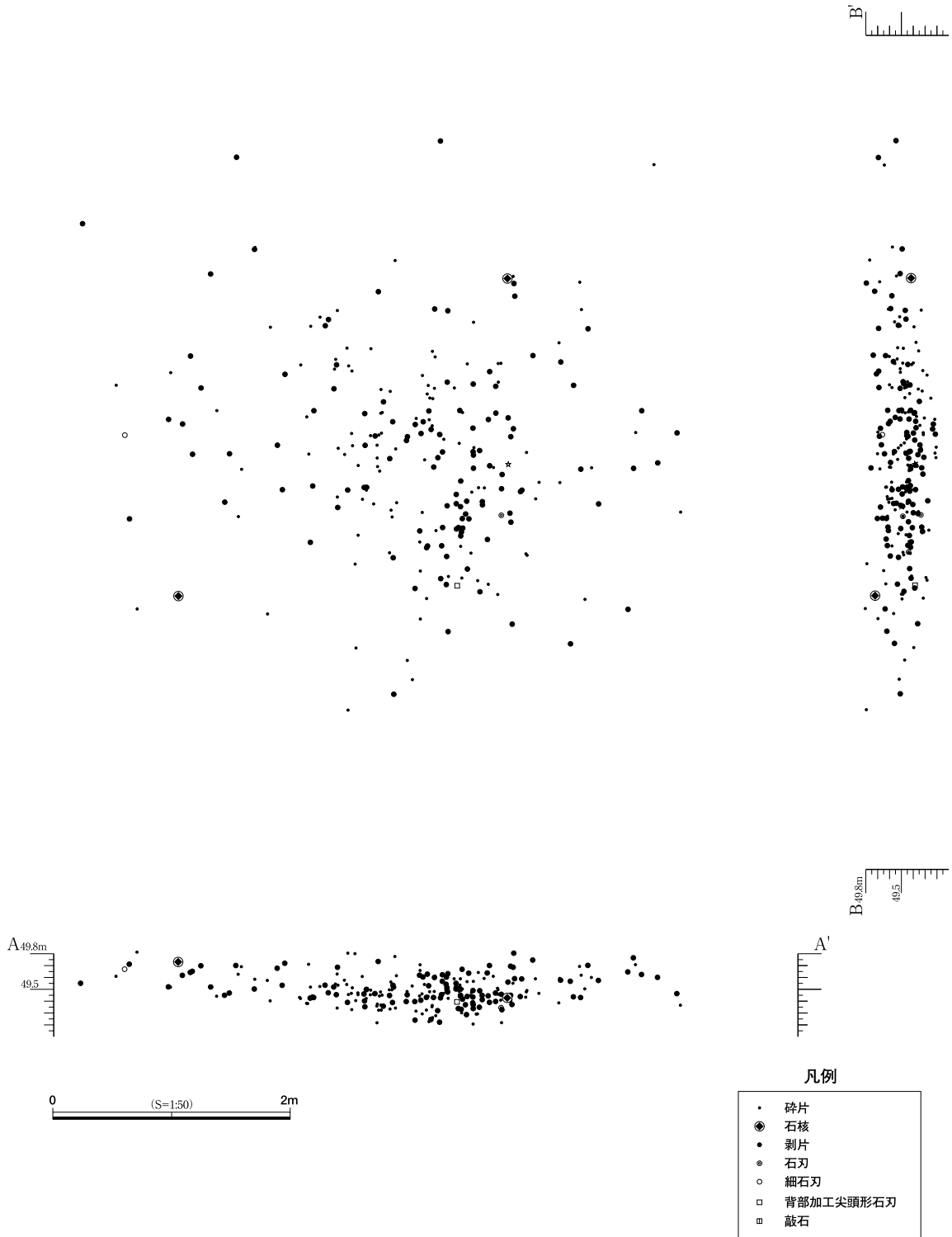
第30図 A区 石器集中5 石材別分布



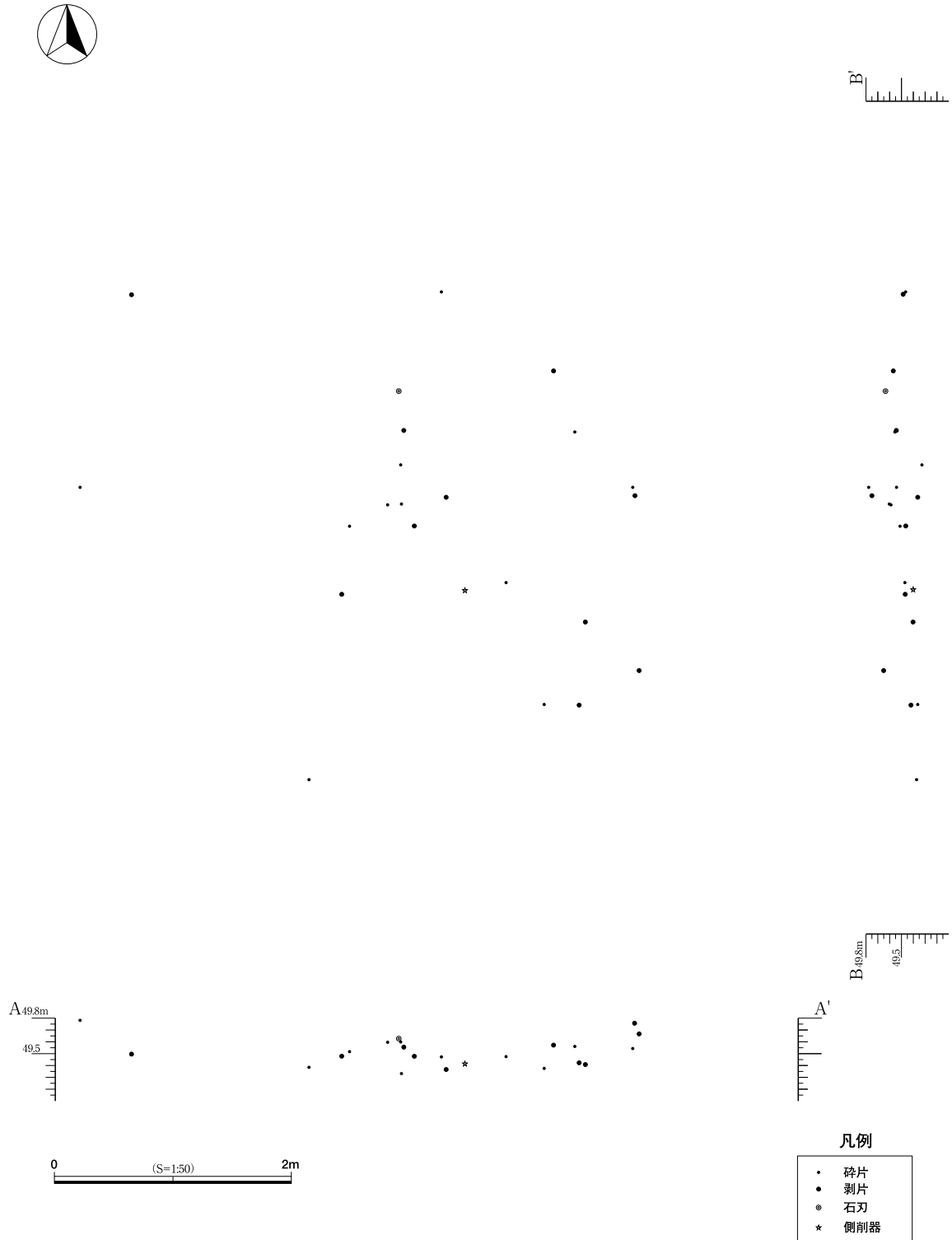
第31図 A区 石器集中5 黒曜石 器種別分布



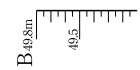
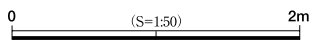
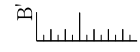
第32図 A区 石器集中5 黒曜石 産地別分布



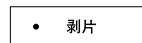
第33圖 A区 石器集中5 頁岩 器種別分布



第34図 A区 石器集中5 チャート 器種別分布



凡例



第35図 A区 石器集中5 凝灰岩 器種別分布

(2) 出土石器

基部/背部加工石器類 (第36図1～3、8～12)

折れたものを含めて8点出土した。

第36図1 (以下、36-1と記述) は諏訪星ヶ台産黒曜石製である。器体の大半が折損しているため、素材や全体形状は不明だが、二次加工技術の特徴から本類に含めた。

36-2は諏訪星ヶ台産黒曜石製である。石刃と推測される素材を縦位に用い、急角度の二次加工で背部を整形する。下半分は折損している。

36-3は諏訪星ヶ台産黒曜石製である。厚手の横打剥片を素材に、これを急角度の二次加工でやや鋸歯状を呈する背部を整形する。下半分は折損している。

36-4は箱根畑宿産黒曜石製である。横打剥片を素材にして、これを横位に用い、末端に急角度の二次加工を施して背部を整形する。切出形石器ないし台形様石器の可能性もあるが、基部が折損しているためわからない。刃部には微細剥離痕が連続的に見られる。

36-5は箱根畑宿産黒曜石製である。横打剥片を素材にして、これを横位に用い、折り取られた(折れた)打面およびその付近に急角度な二次加工を施して背部を整形する。先端が折損しているため全体形状は不明である。

36-8は頁岩製(sh1)の背部加工尖頭形石刃石器である。自然面打面を有する石刃を縦位に用い、左側縁に背部を整形して尖頭部を作出し、右側縁には打面を残して基部を整形する。刃部には微細剥離痕が見られる。

36-9は諏訪星ヶ台産黒曜石製の基部加工尖頭形石刃石器である。石刃を縦位に用い、急角度の二次加工と裏面の平坦な二次加工とで基部を整形し、さらに比較的厚手の尖端部を斜めに切り取って尖頭部を作出している。尖端部と基部の整形は連続していない。

36-10は諏訪星ヶ台産黒曜石製の尖頭形石刃石器である。基部が折損しているため、基部加工タイプなのか背部加工タイプなのかは区別できない。石刃を逆位に用い、急角度の二次加工によって基部と先端部を整形し、尖頭部を作出する。

36-11は頁岩製(sh6)の基部加工尖頭形石刃石器である。石刃を縦位に用い、左側縁の基部と右側縁の端部を整形して、尖頭部を作出する。器体の中ほどで折損する(接合21)。

36-12は頁岩製(sh1)の端部加工石刃石器である。石刃を逆位に用い、右側縁の2/3に急角度な二次加工を施して尖頭部を整形する。

尖頭器 (第36図6、7)

36-6は産地が同定できなかった黒曜石製の尖頭器片であるが、肉眼では箱根畑宿産に類似する。剥片を素材として、打面に急角度の二次加工を施し、末端の裏面全体に平坦剥離を施す。平坦剥離は、しかし、尖頭器特有の鱗状の剥離とはやや異なる。下部は折れている。

36-7は諏訪星ヶ台産黒曜石製である。折れて一側縁のみが残されているが、対する縁辺から施した平坦な二次加工がみられることから、小型の尖頭器と推測される。

削器類 (第36図13～15)

36-13は頁岩製(sh4)の側削器である。非定形の素材剥片は本遺跡で生産されたことが接合資料によって判明した(接合22)。

36-14はチャート製 (ch1) の側削器である。非定形の剥片の左側縁全体に急角度の二次加工を施して刃部を作出する。

36-15は諏訪星ヶ台産黒曜石製の端削器である。厚手の石刃ないし縦長剥片の端部に急角度の二次加工を施し、抉入状の刃部を作出する。

剥片・石核類

第37図および第38図は黒曜石製である (以下、推定産地以下の「黒曜石製」は省略する)。

37-1は諏訪星ヶ台産の細石刃である。第Ⅱ文化層からの混入の可能性もあるが、母岩が異なるのと分布域の違いから、石刃生産過程中に副次的に生産されたものと推測される。

37-2と37-3は諏訪星ヶ台産の削片である。

37-4は諏訪星ヶ台産の石刃である。打面側が折れている。

37-5は諏訪星ヶ台産の石刃である (接合11)。

37-6は諏訪星ヶ台産の石刃である (接合18)。打面に切子状の調整剥離痕が見られる。

37-7は諏訪星ヶ台産の石刃である (接合12)。極めて小さな打面が残されている。

37-8は諏訪星ヶ台産の石刃である (接合21)。打面に切子状の調整剥離痕が見られる。本遺跡で同一母岩の消費は認められない (このような資料を単体母岩とよぶ) である。

37-9は諏訪星ヶ台産の石刃である。

37-10は諏訪星ヶ台産の石刃である。打面は折れて失われている。単体母岩である。

37-11は諏訪星ヶ台産の石刃である。打面は失われている。

37-12は諏訪星ヶ台産の石刃である。打面は剥片剥離時にはじけたのか、残っていない。末端部も折れている。単体母岩である。

37-13は諏訪星ヶ台産の石刃である。微細剥離が両縁辺の全体に認められ使用頻度の著しさをあらわしている。末端が折れている。背面や末端部に自然面がみられる。単体母岩である。

37-14は和田小深沢産の剥片2点の接合資料 (37-15、16・接合19) である。打面に著しい石核調整痕がみられる。

38-1は和田鷹山産の縦長剥片2点の接合資料 (38-2、3・接合17) である。打面に著しい石核調整痕がみられる。

38-6は諏訪星ヶ台産の石刃の接合資料である (38-4、5・接合20)。打面を切子状に調整したうえで下縁もまた細かく調整している。

第39図はA区頁岩製石器群のうち母岩sh1に分類したものである。Sh1は、ほかに36-8 (背部加工尖頭形石刃石器)、36-12 (端部加工石刃石器) が含まれる。ただし、接合資料から石刃生産の痕跡は辿れない。

41-3は剥片と石核の接合状態 (接合1) である。また、43-1、2はその部品である。自然面の大きく残る半割壺円礫を石核とし、交互剥離によって中型の幅広剥片を量産する過程が看取される。

第42図は剥片の接合状態 (接合2) である。また、43-1～7はその部品である。接合1と同一石核の対面にあったものと推測される。やはり交互剥離によって中型の幅広剥片を量産する。

43-9～11は母岩sh3に分類した石器群である。本母岩はいわゆる「白滝頁岩」とされるものである。吝嗇的な小型剥片生産が主体である。

43-9は母岩sh3の石核 (10) と剥片 (11) の接合状態 (接合24) である。小型剥片を生産する過程が看取される。

43-13は剥片 (12) と石核 (14) の接合状態 (接合25) である。表裏面を作業面として小型剥片を量産する過程が看取される。

44-1は微細剥離痕剥片である。背面に大きく自然面の残る剥片の末端に微細剥離痕がみられる。

44-2は剥片である。Sh3には他に碎片類が見られないので、本剥片を生産する過程は他の遺跡にあると推測される。

44-3～5は母岩sh4に分類される石器群である。やや珪質分が多く灰色がかった頁岩である。

44-5は接合状態、3、4はその部品である (接合23)。自然面の大きく残る石核を大ぶりの剥離で消費する過程が読み取れる。

45-1、2は接合資料 (接合22) の部品である。この接合には削器 (36-13) も含まれる。

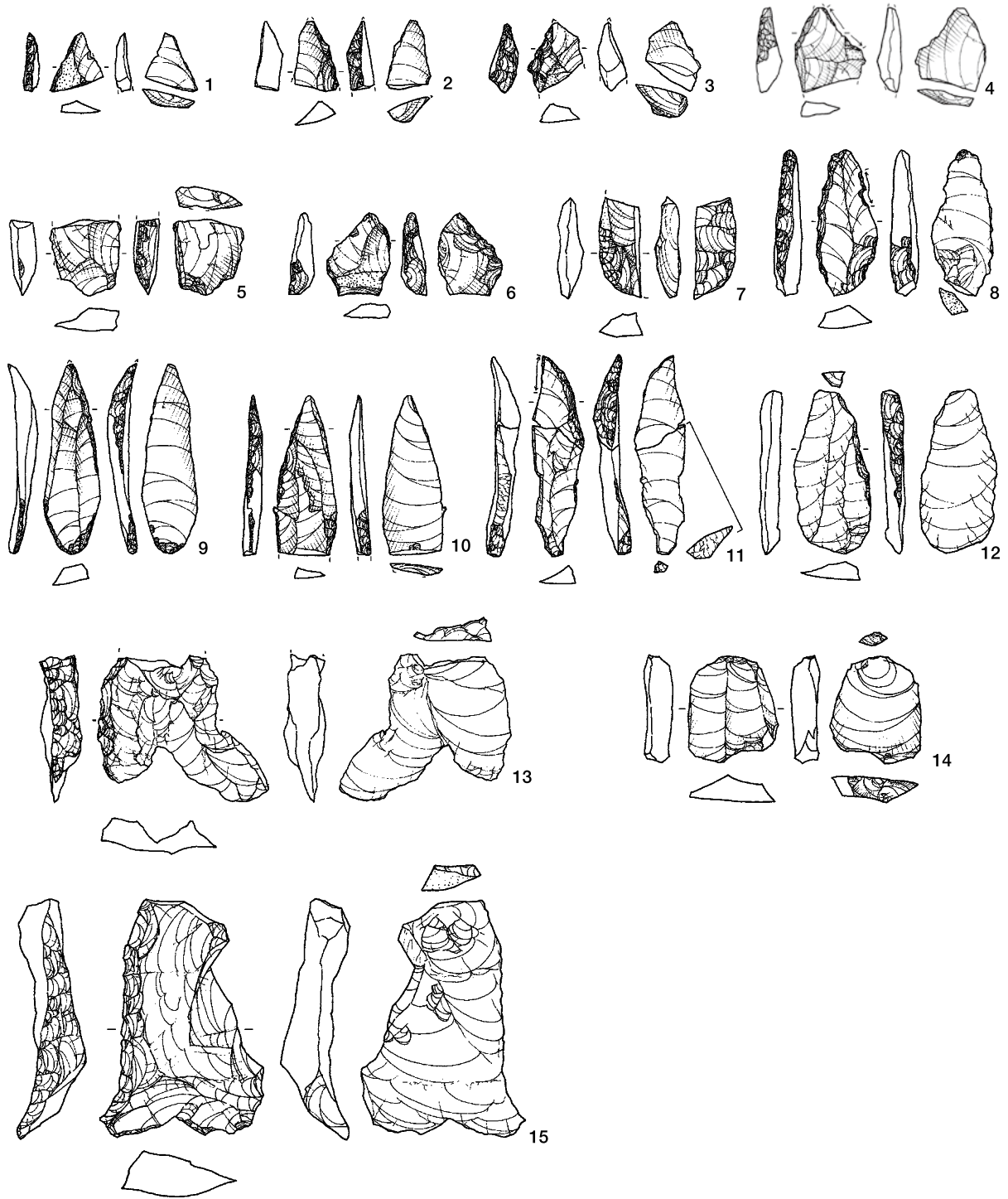
45-3はチャート製 (ch3) の石刃である。単独母岩である。右側縁の背面に微細剥離痕が連続する。左側縁下半の裏面は発掘時の欠損部である。

45-6は凝灰岩製 (tu2) の石刃である。末端側の剥離面構成が不安定で、それに従って全体形状もやや不整形であるが、単独母岩であることと微細剥離痕が顕著であることから、石刃並みに大事にされたものと推測される。

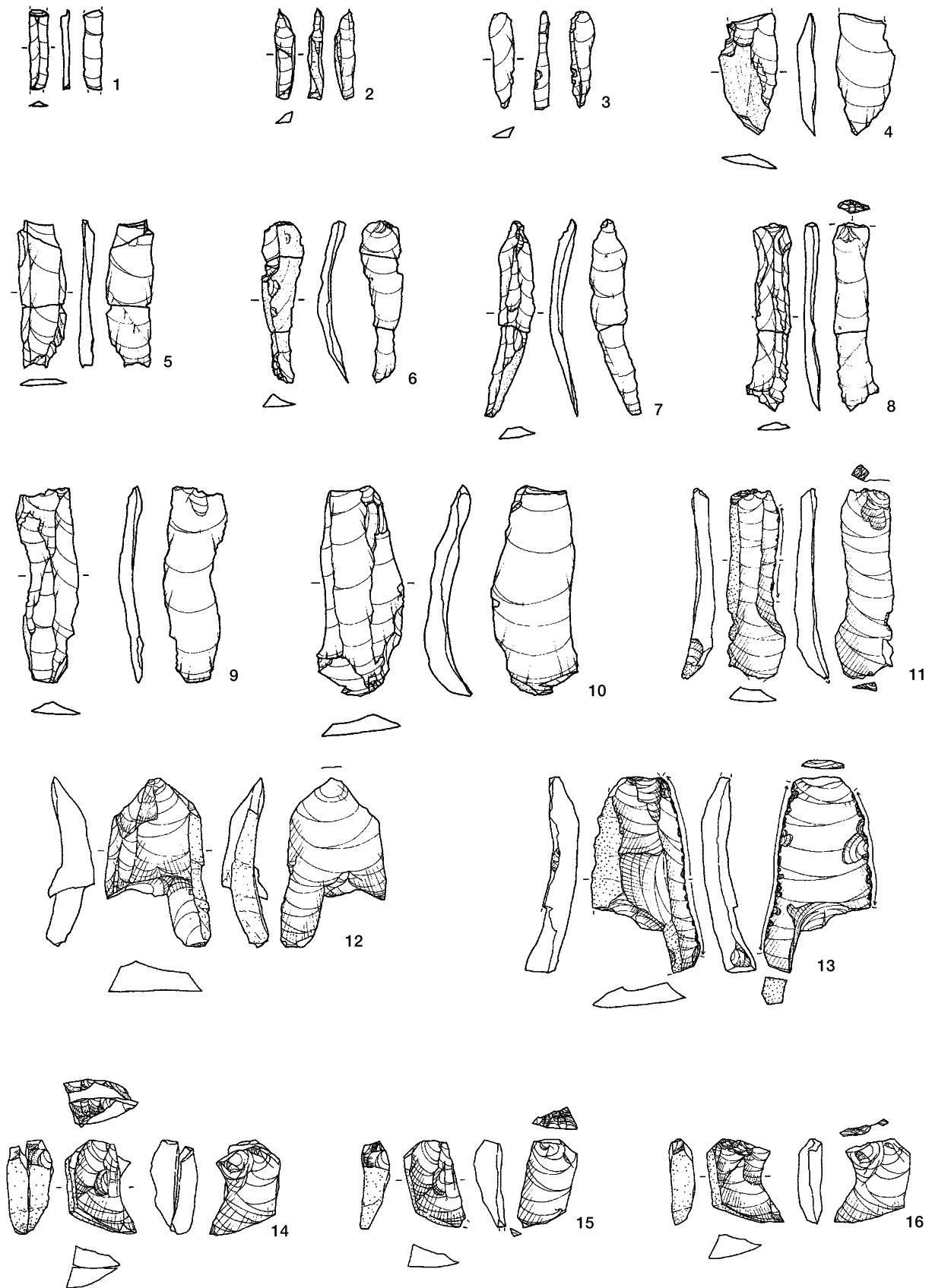
45-5はホルンフェルスの石核である。風化が著しく表面が粉状である。石核の消費過程は石器集中2～5に認められない。ホルンフェルス製剥片は石器集中1 (第Ⅱ文化層) にまとまっているので、そちらとの関連が強いのかもしれない。

その他の資料

第38図7は黒曜石製の切り取り石刃である。出土位置情報を失ったがその質感から本地点の比較的大型の石刃関連資料と同一母岩であると判断される。



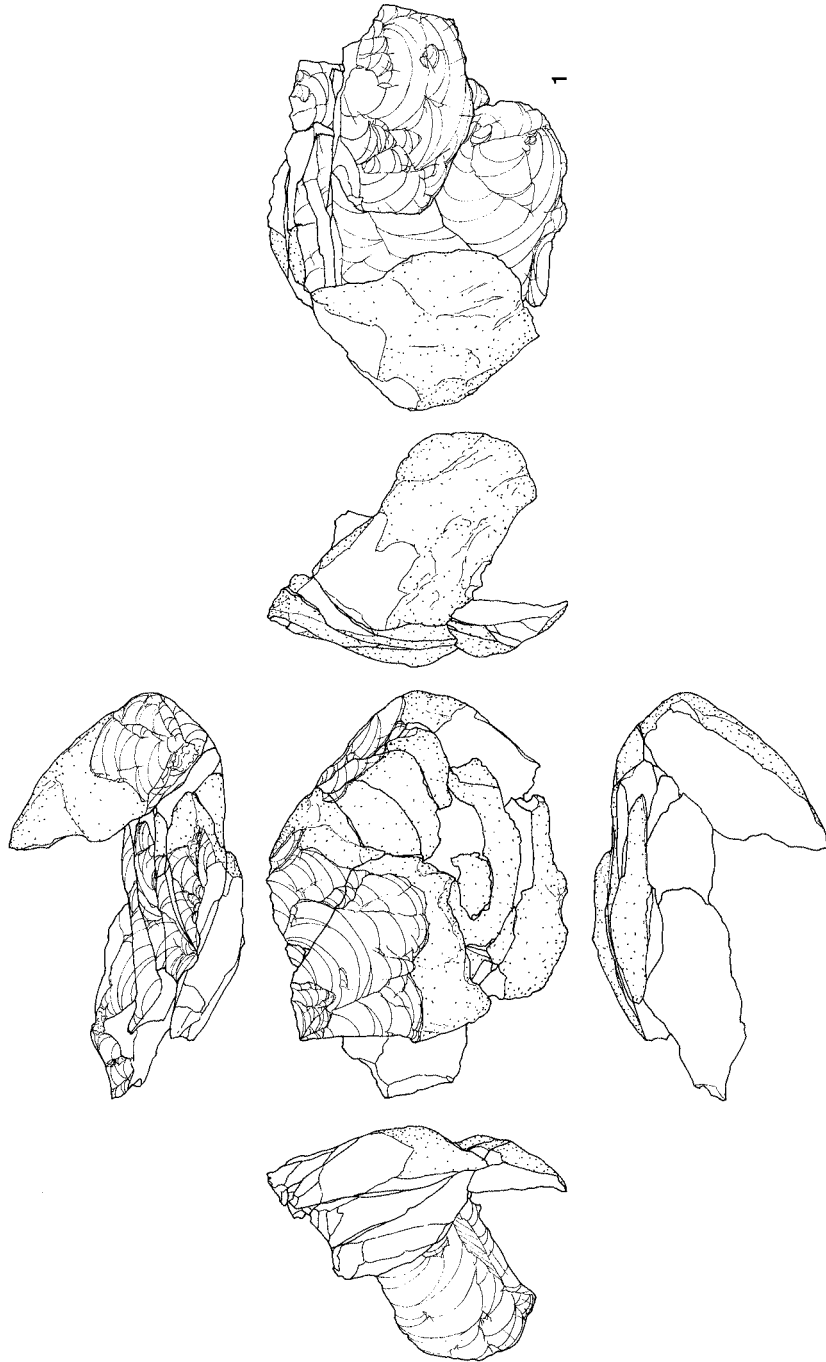
第36図 A区第I文化層の石器群(1) 主要石器群



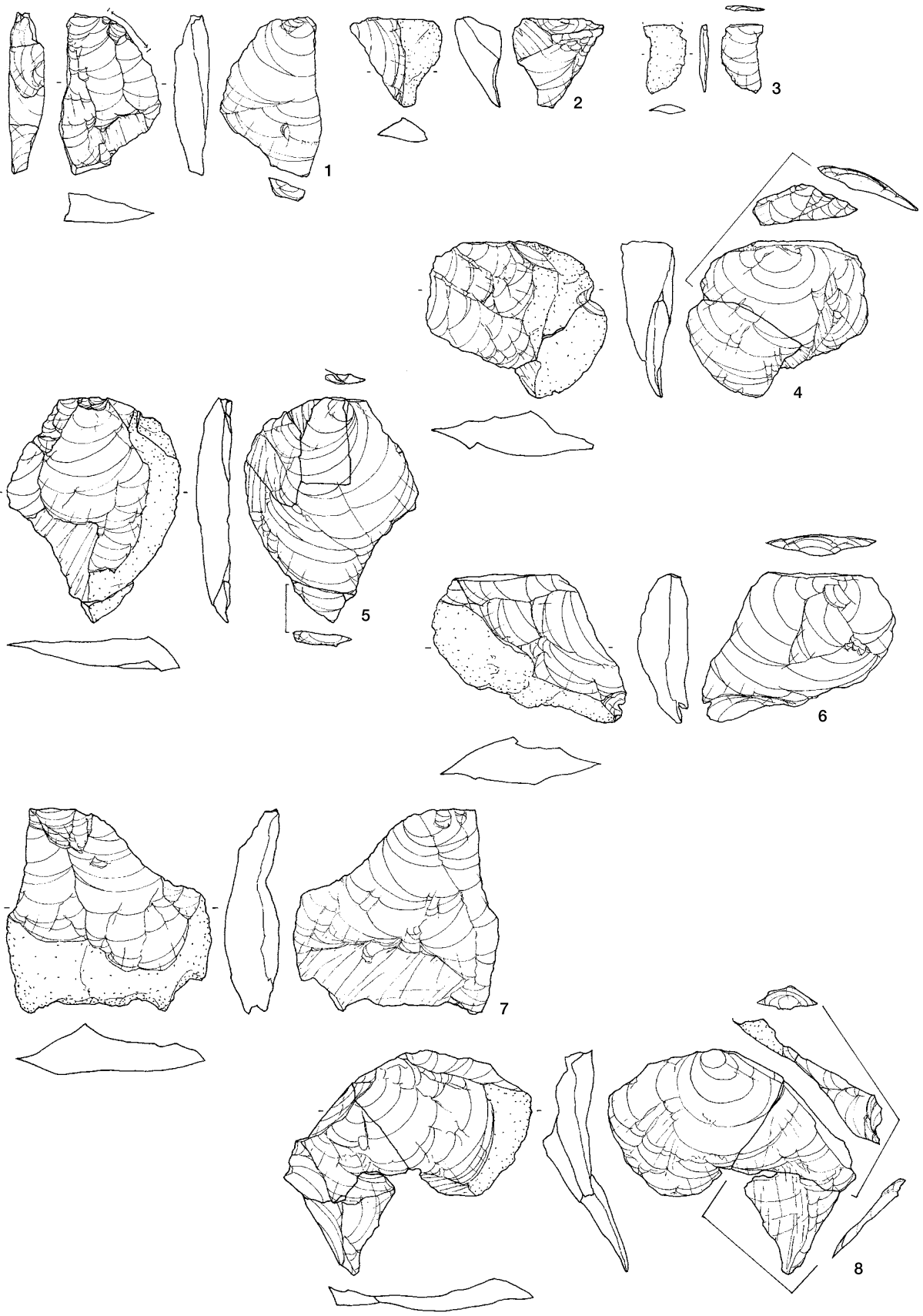
第37図 A区第I文化層の石器群(2) 黒曜石製



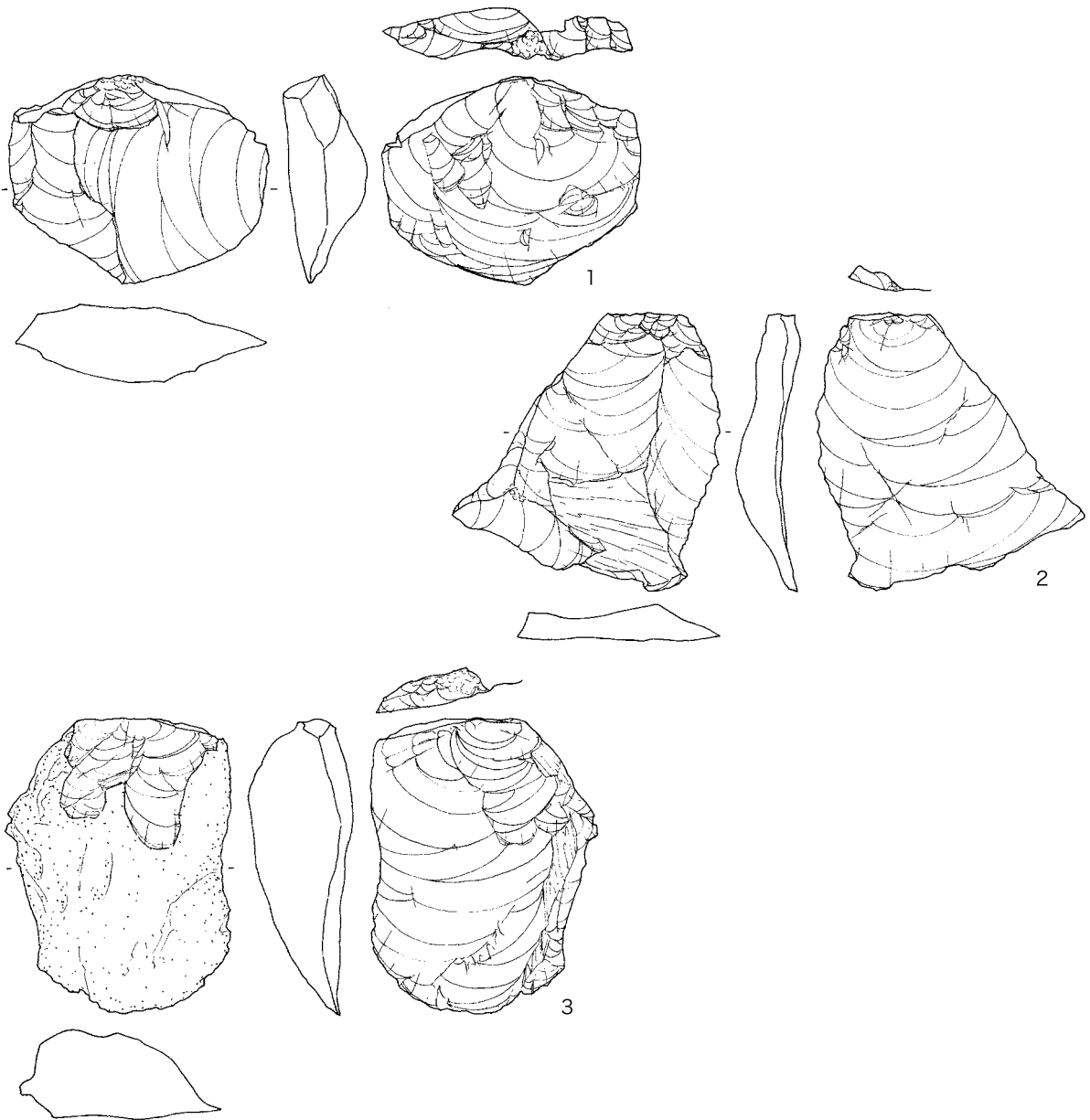
第38図 A区第I文化層の石器群(3) 黒曜石製



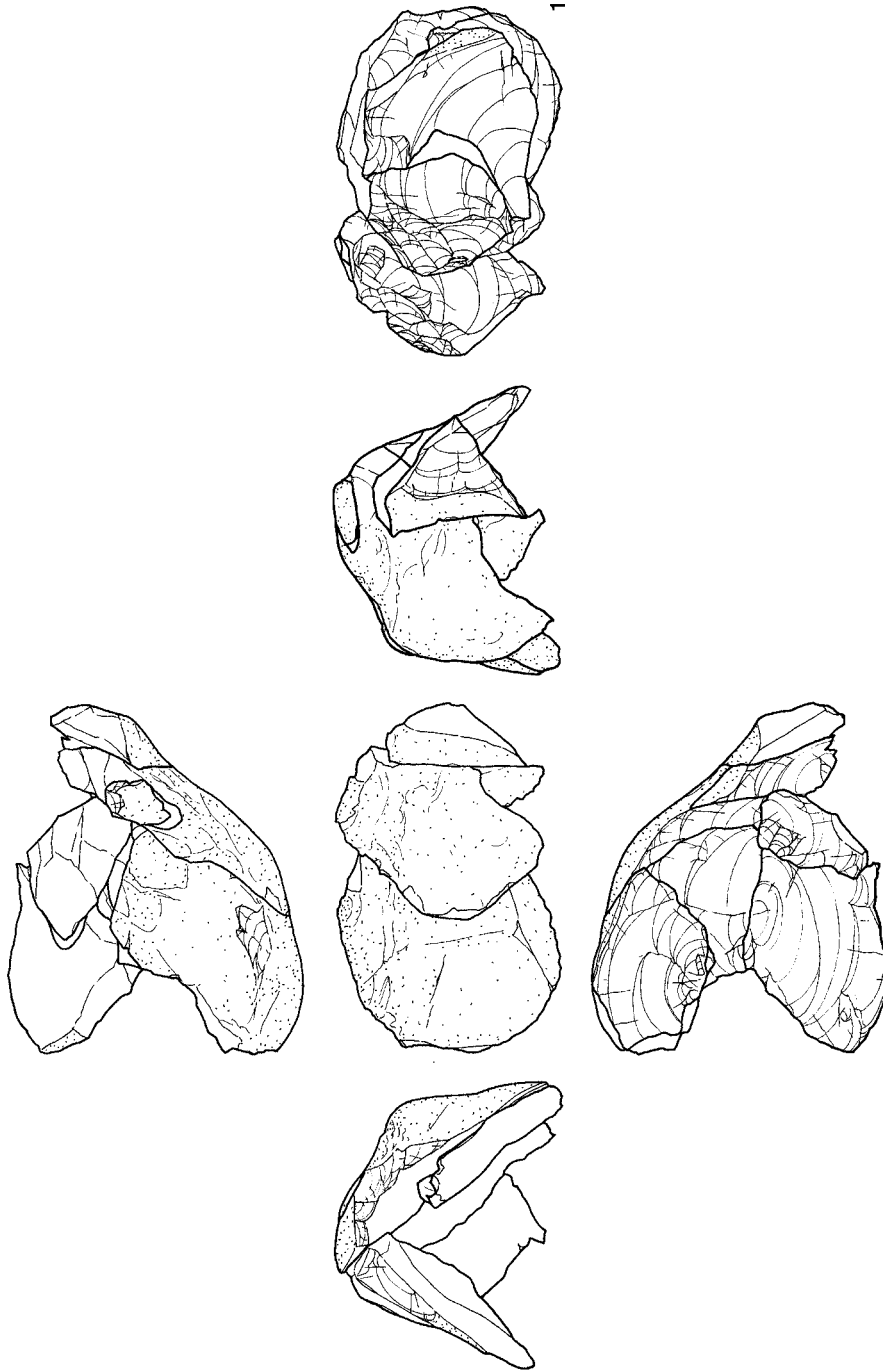
第39図 A区第I文化層の石器群(4) 頁岩製



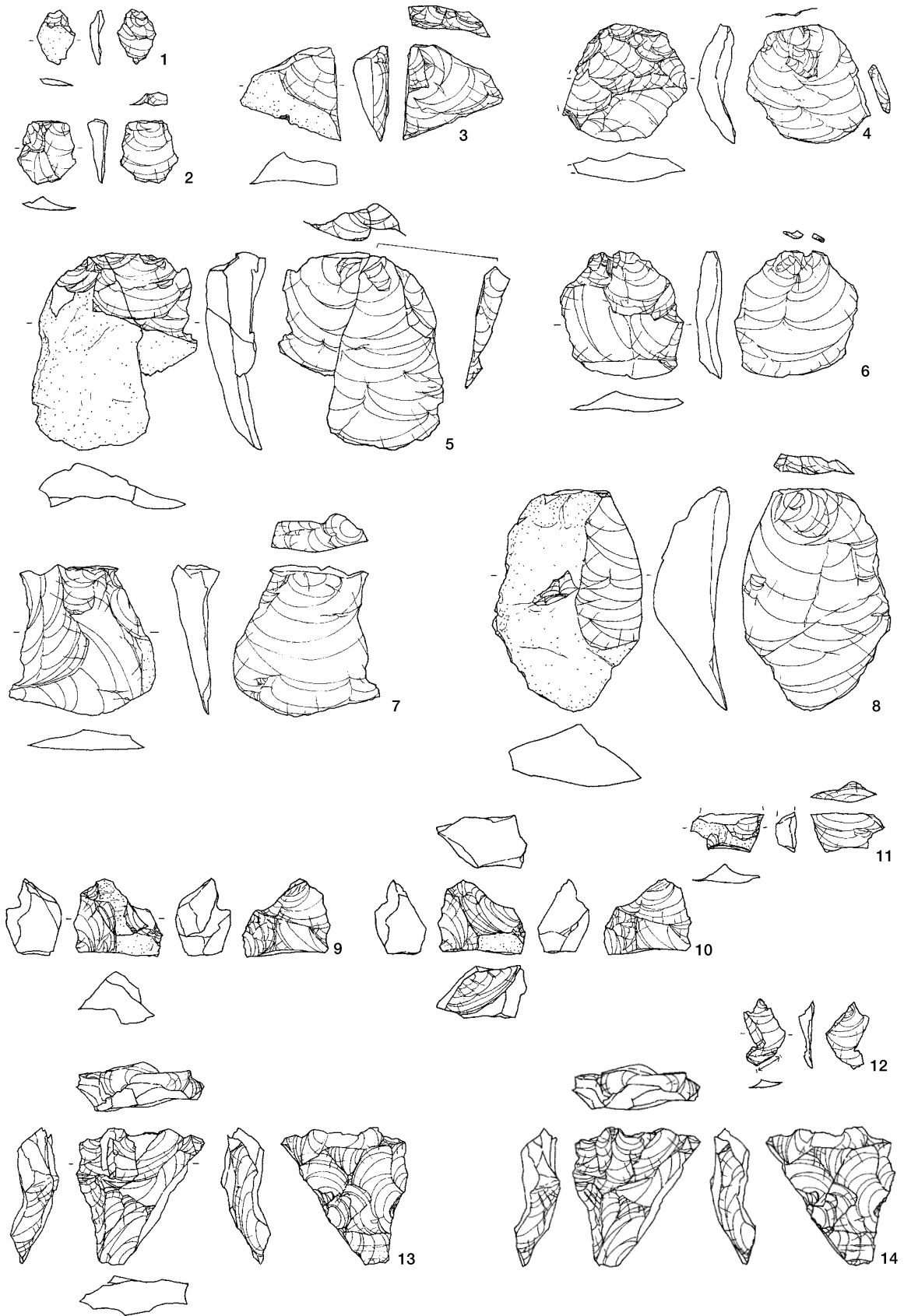
第40図 A区第I文化層の石器群(5) 頁岩製



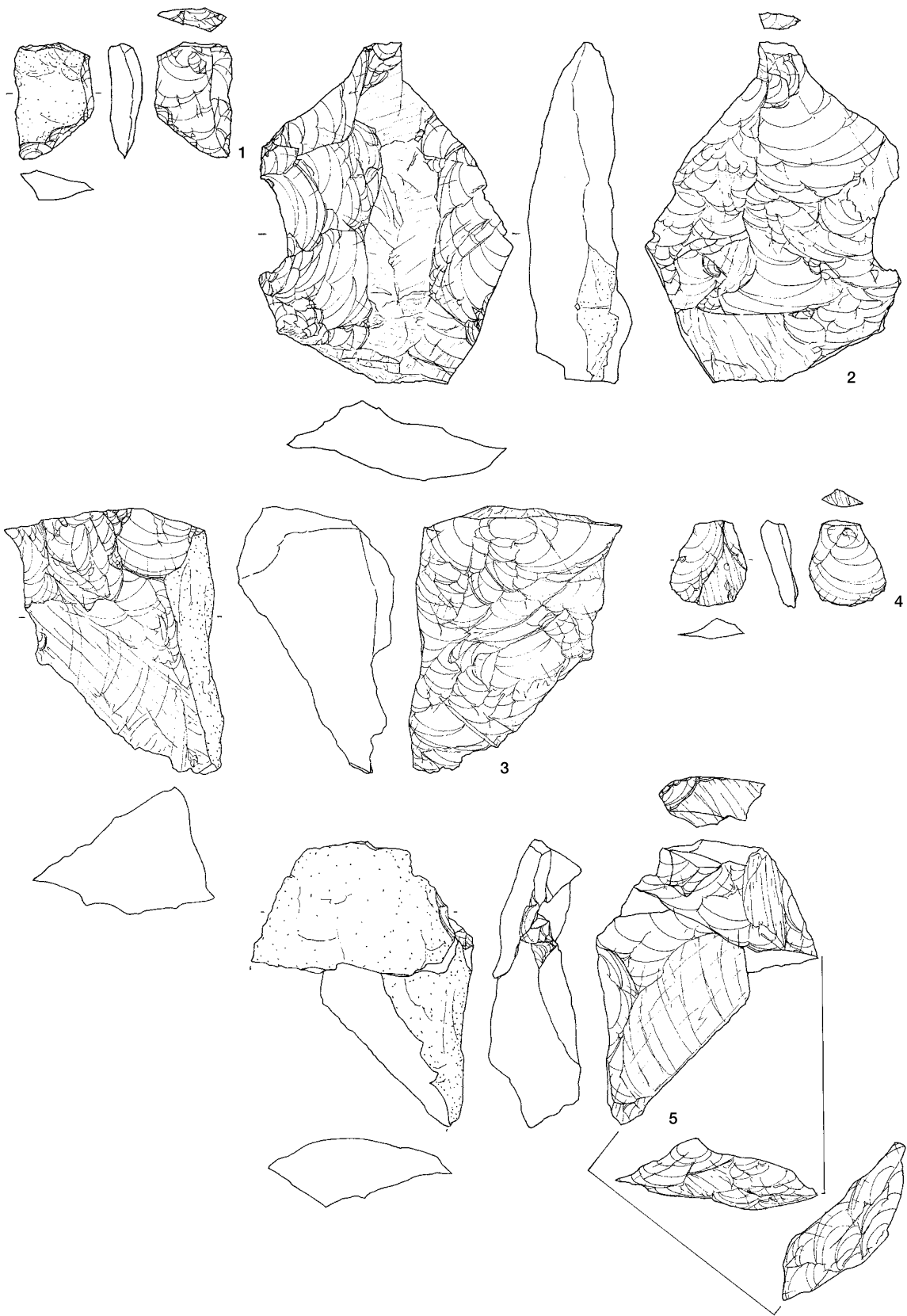
第41図 A区第I文化層の石器群(6) 頁岩製



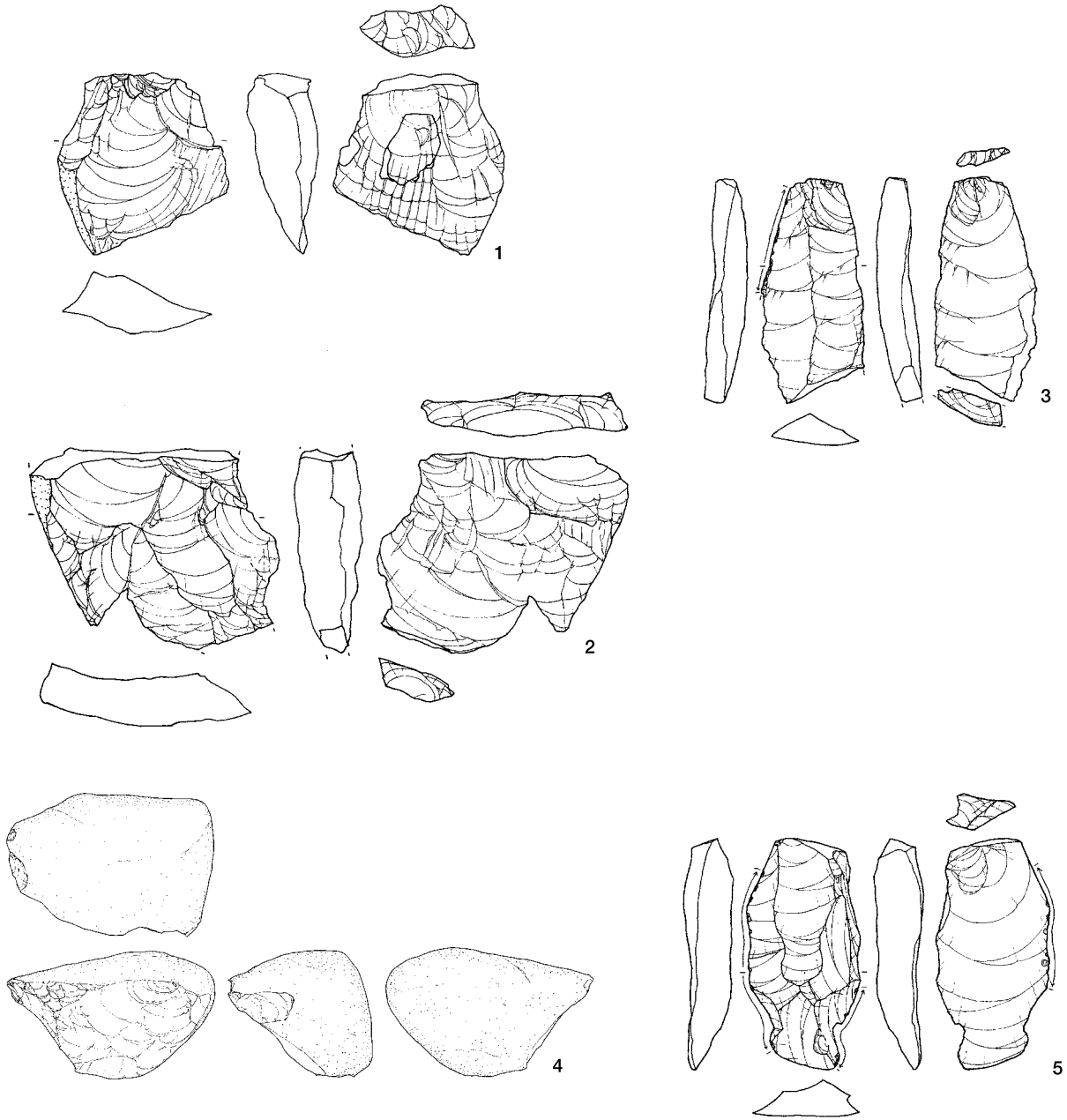
第42図 A区第I文化層の石器群(7) 頁岩製



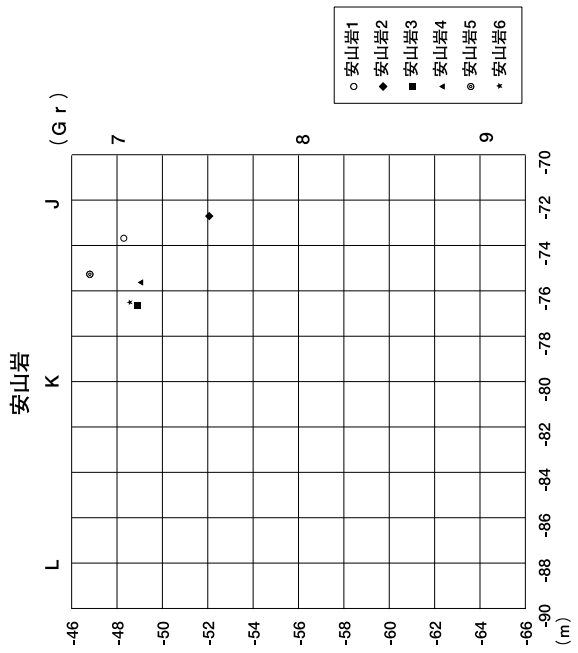
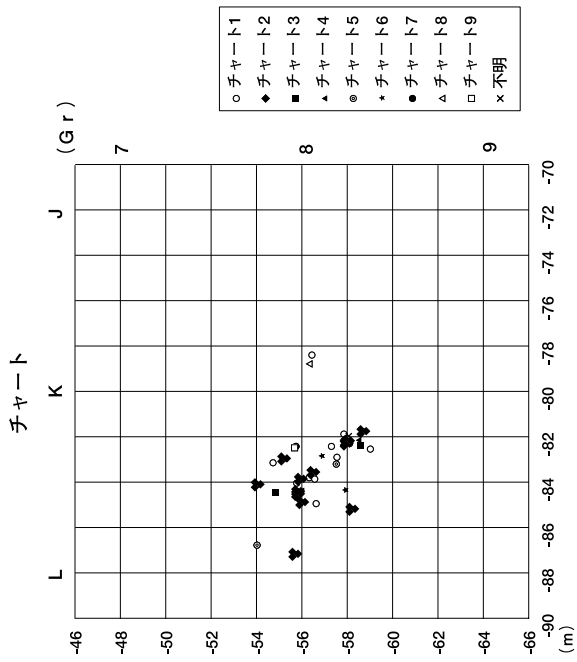
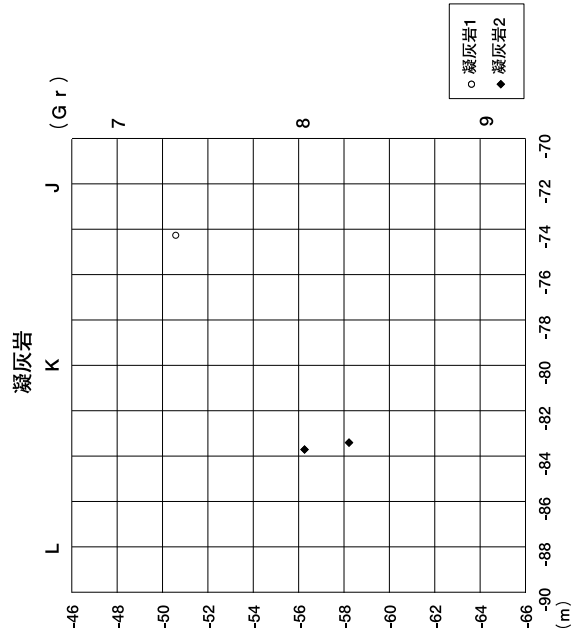
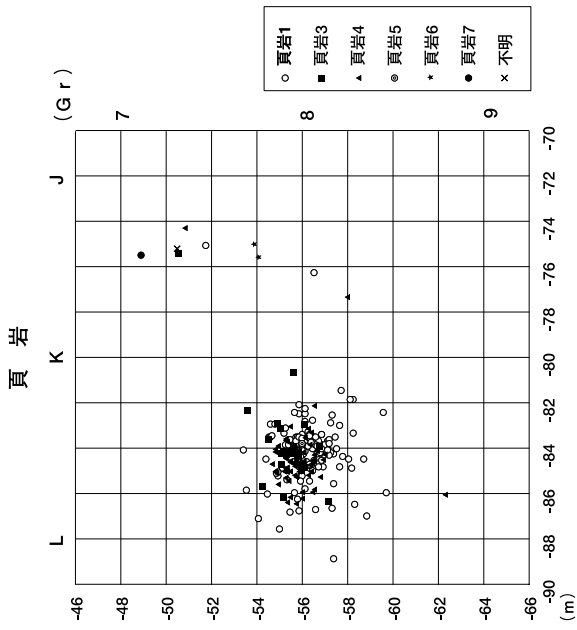
第43図 A区第I文化層の石器群(8) 頁岩製



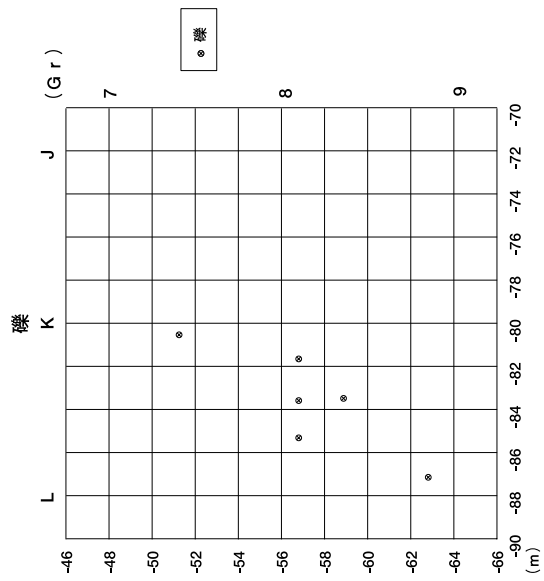
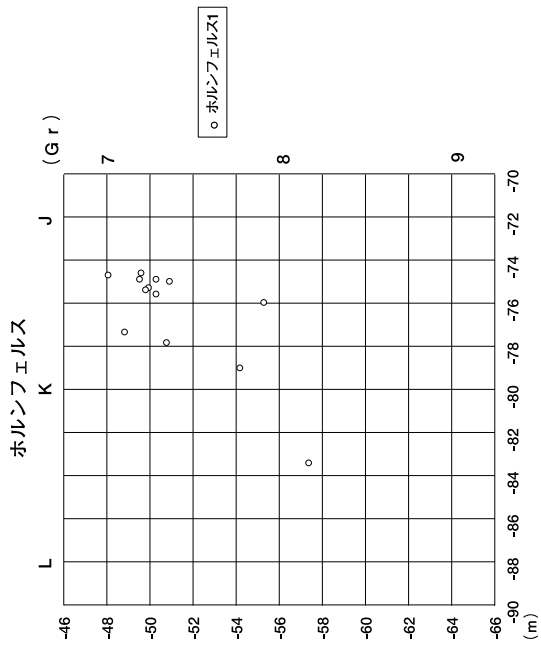
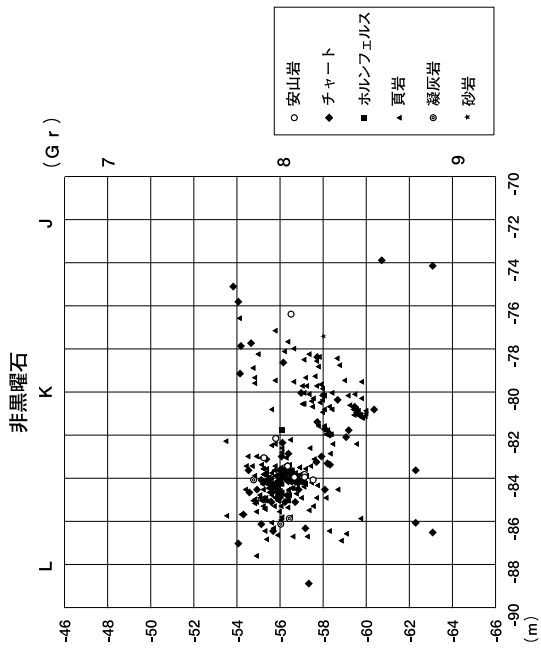
第44図 A区第I文化層の石器群(9) 頁岩製



第45図 A区第I文化層の石器群(10) 頁岩・チャート・凝灰岩・ホルンフェルス製



第46図 A区 第I文化層の石器群 平面分布(1)



第47図 A区 第I文化層の石器群 平面分布図

第3節 第Ⅱ文化層

(1) 石器群の分布と石材

調査区北部で88点の石器が検出された。1ヶ所の石器集中（石器集中1）を構成する（第48～54図）。石器群は、尖頭器（製品5点）と細石刃（28点）を主体として、微細剥離痕剥片、削片、石刃、剥片、碎片、敲石を伴う（表5～8）。

石器集中の検出層準に関する具体的な情報はないが、検出レベルから第Ⅰ文化層よりも上位に包含されることが確認された。尖頭器石器群と細石刃石器群は、前者が安山岩（3点）と蓼科冷山産黒曜石（1点）、和田鷹山産黒曜石（製品1点）で製作するのに対して、後者は諏訪星ヶ台産黒曜石（18点）と和田鷹山/芙蓉ライト産黒曜石（計7点）で製作する。消費石材に明らかな違いがあるものの、和田鷹山産黒曜石を消費する点は共通する。安山岩と凝灰岩の消費は極めて限定的で、尖頭器石器群と同一母岩の剥片類は一切認められず、かわって単独母岩の石刃と剥片を伴う。

	諏訪星ヶ台	蓼科冷山	和田鷹山	和田美蓉ライト	和田小深沢	和田土屋橋北	和田土屋橋南	和田土屋橋西	箱根畑宿	推定不可	測定不可	未測定	計
尖頭器		1											1
尖頭器片			2										2
削片	1												1
細石刃	18		6	1				1		2			28
剥片	4		1								1		6
碎片	17		2							7			26
計	40	1	11	1				1		9	1		64

表 5 A区第II文化層 黒曜石製石器石材組成 (推定原産地別)

	sh1	sh3	sh4	sh5	sh6	sh7	その他	計
微細剥離痕剥片						1		1
剥片			1				1	2
碎片	1	1						2
計	1	1	1			1	1	5

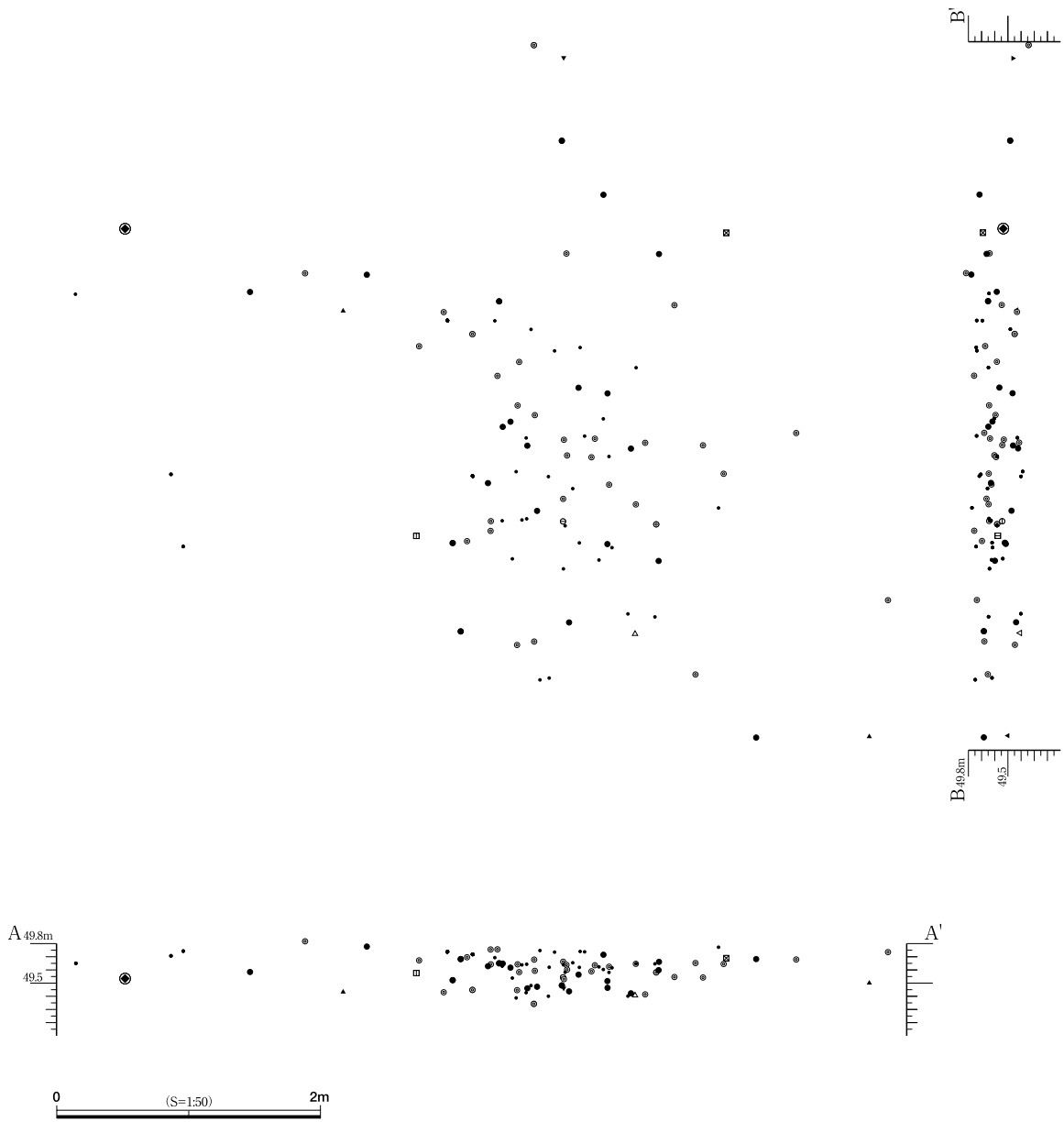
表 6 A区第II文化層 頁岩製石器石材組成 (母岩別)

	an1	an2	an3	an4	an5	an6	計
周縁加工尖頭器	1						1
両面加工尖頭器		1	1				2
石刃				1	1		2
剥片						1	1
計	1	1	1	1	1	1	6

表 7 A区第II文化層 安山岩製石器石材組成 (母岩別)

石刃	1
----	---

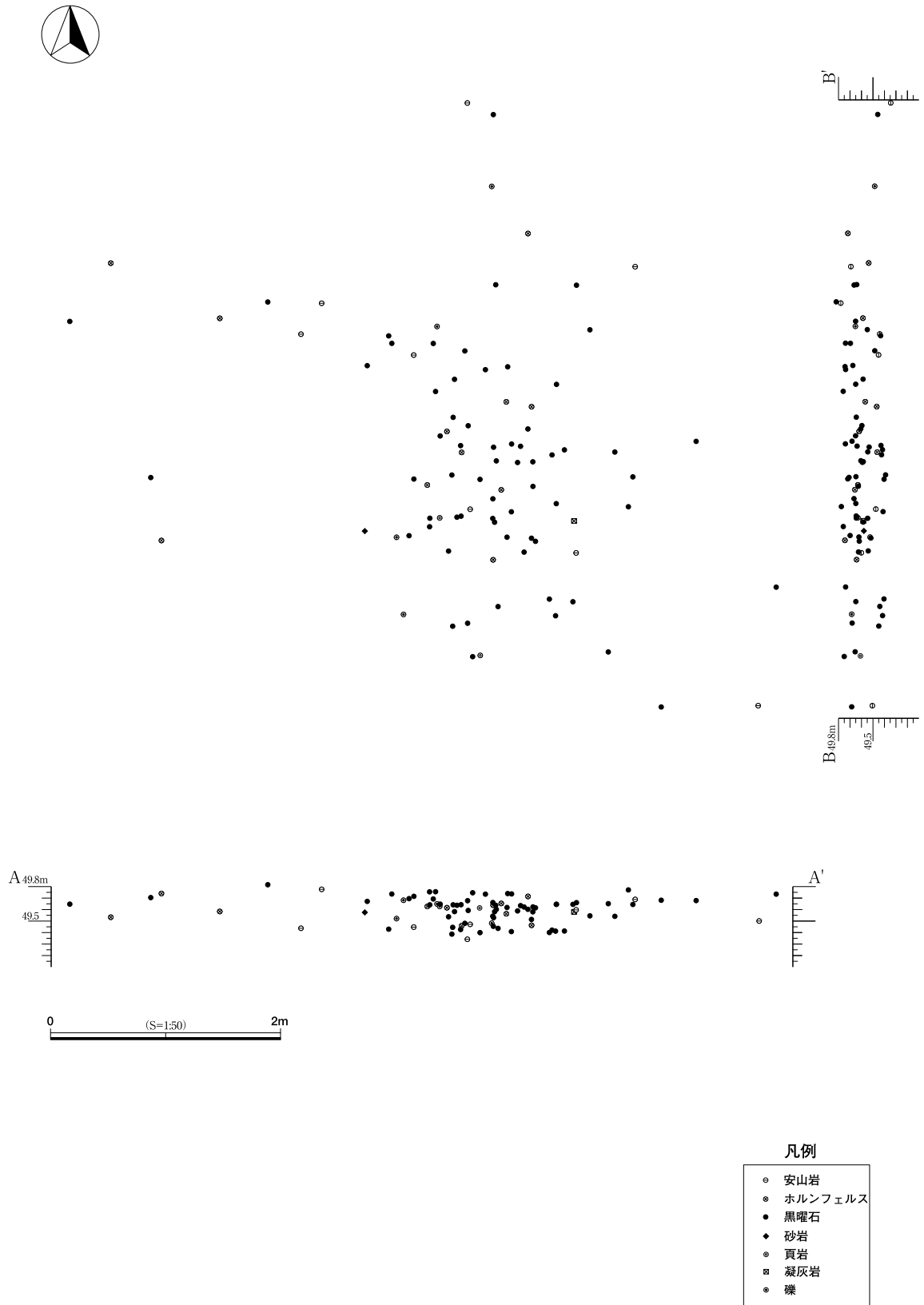
表 8 A区第II文化層 凝灰岩製石器石材組成 (母岩別)



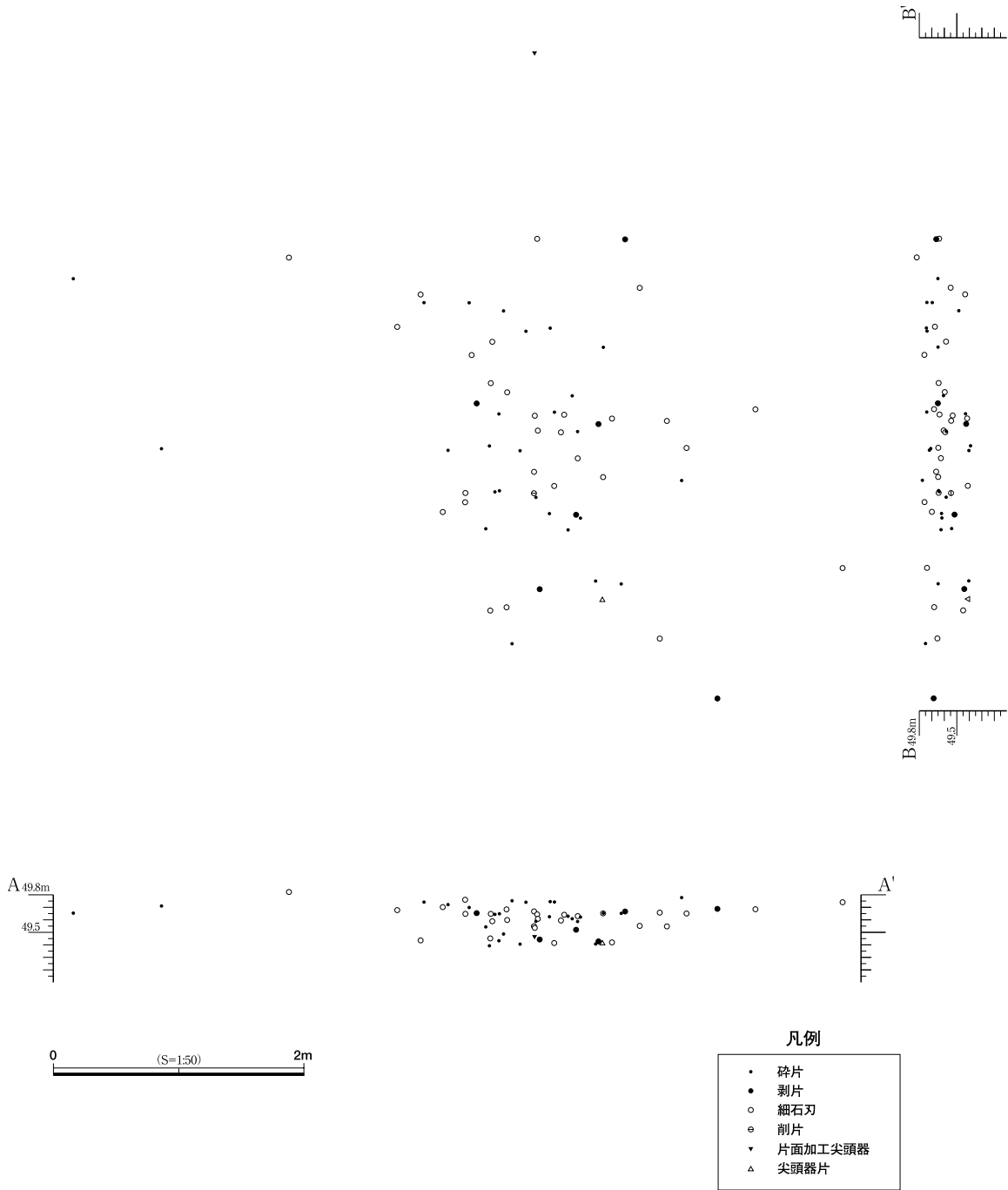
凡例

- 碎片
- 石核
- 剥片
- ◉ 石刃
- 細石刃
- ◌ 削片
- ▼ 片面加工尖頭器
- ▲ 兩面加工尖頭器
- ◻ 周緣加工尖頭器
- △ 尖頭器片
- ▣ 敲石

第48図 A区 石器集中1 器種別分布



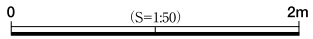
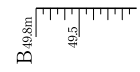
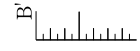
第49図 A区 石器集中1 石材別分布



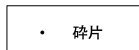
第50図 A区 石器集中1 黒曜石 器種別分布



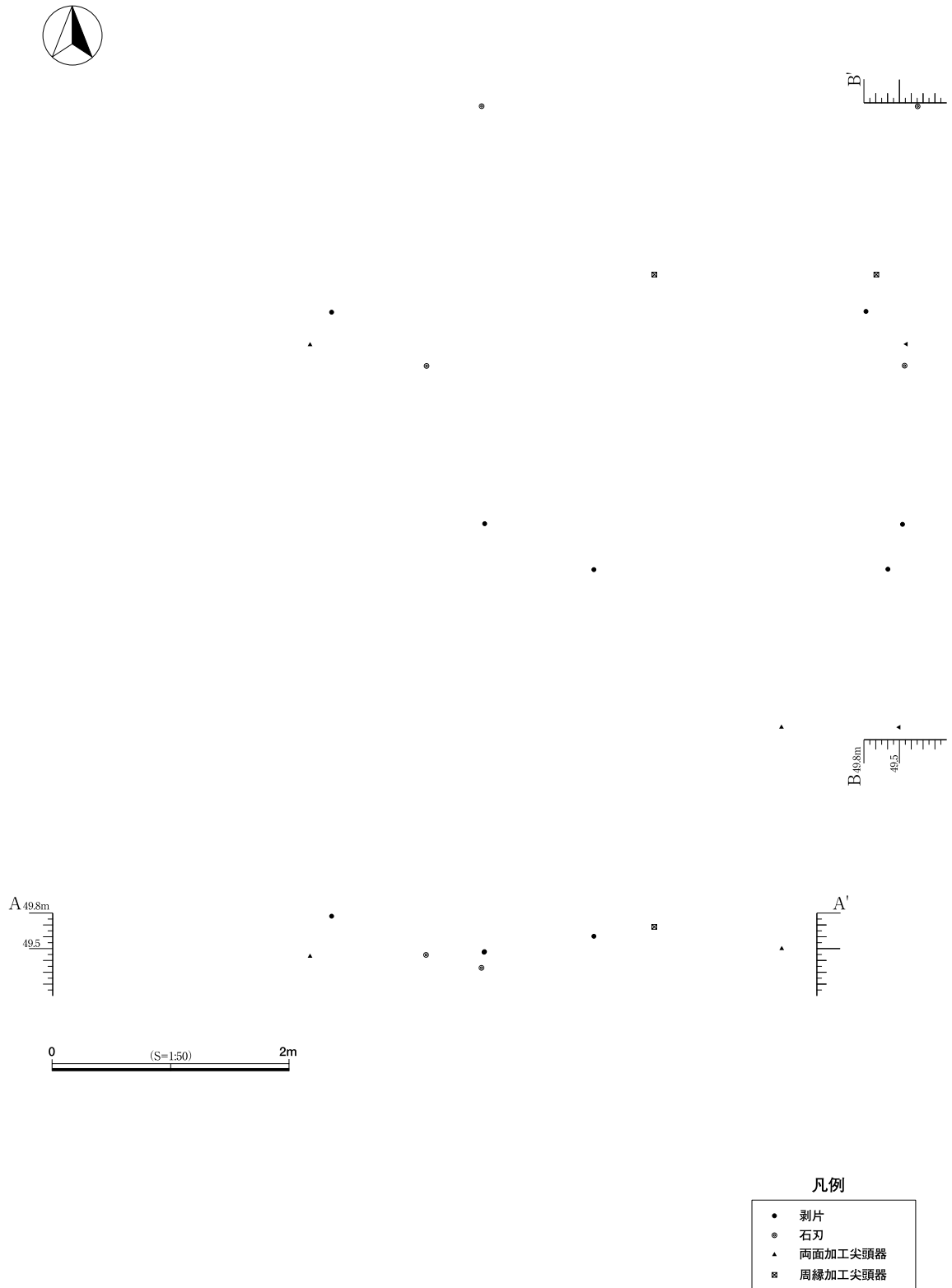
第51図 A区 石器集中1 黒曜石 産地別分布



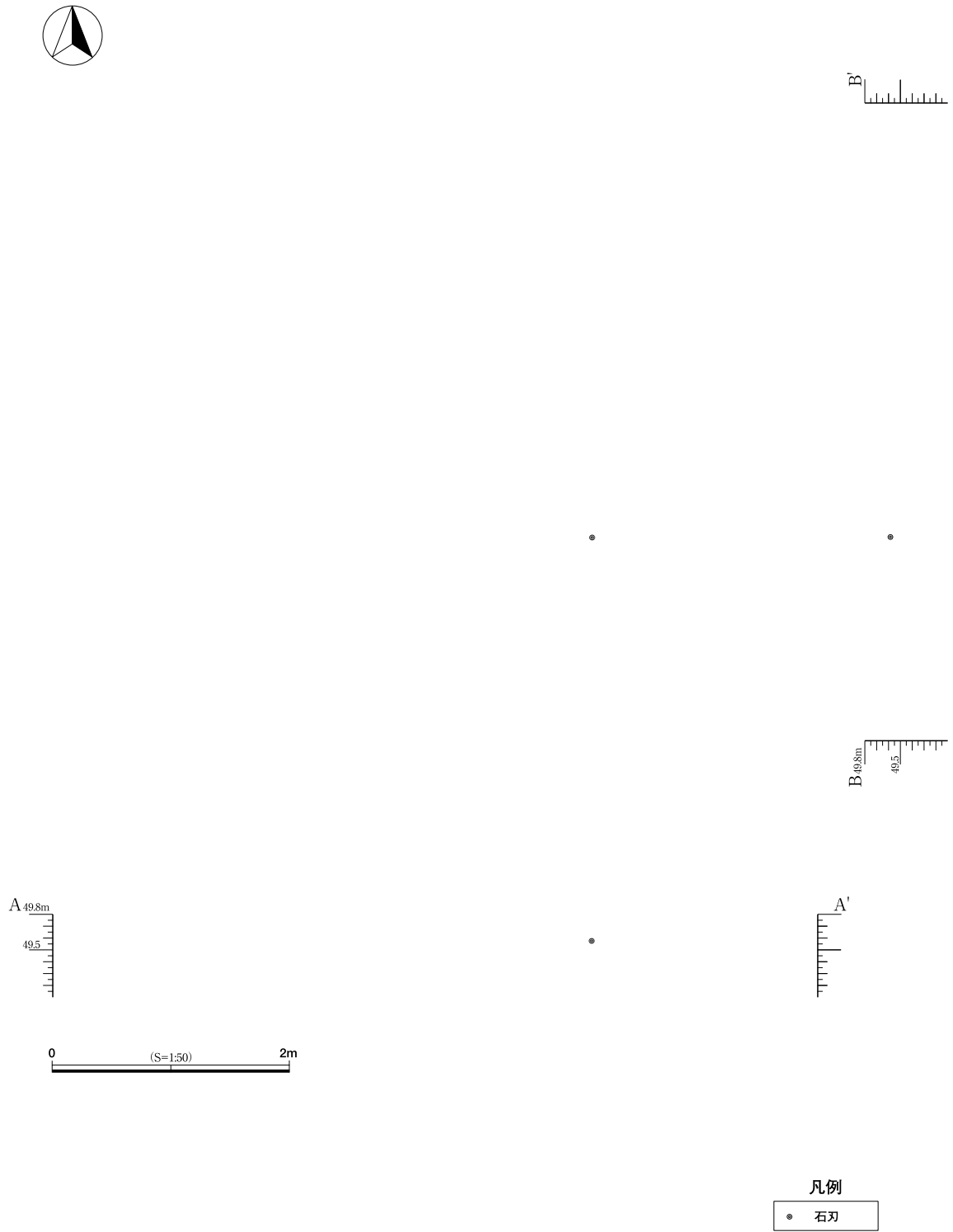
凡例



第52図 A区 石器集中1 頁岩 器種別分布



第53図 A区 石器集中1 安山岩 器種別分布



第54図 A区 石器集中1 凝灰岩 器種別分布

(2) 出土石器

細石刃 (第55図1-5)

28点出土した。石材の内訳は、諏訪星ヶ台産黒曜石18点 (55-1~3)、和田鷹山産黒曜石6点 (4~5)、和田芙蓉ライト産黒曜石1点などである。5点を図示した。1~3のように比較的細身のもの、4と5のように幅のあるものに分けられ、後者に使用痕と思われる微細剥離痕が目立つ。

前者は諏訪星ヶ台産に集中する傾向があるのに対して、後者の母岩には生産痕跡が大変希薄なので、軸柄に嵌め込まれた細石刃の交換サイクルと石材消費のサイクルが使用を介在してよく噛みあっているように見える。

二次加工剥片 (第55図6)

1点検出された。6は珪質分の高い肌色の頁岩製である。同一母岩はほかにない。やや縦に長い剥片を素材にして、両側縁に使用痕と思われる微細剥離痕が付く。先端は微細剥離痕よりもあとに折れている。

石 刃 (第55図7~9)

7は凝灰岩製である。同一方向からの連続剥離によって得られる。尖頭形を呈し、右側縁の裏面に微細剥離痕がみられるが、石材ゆえに使用によるものかどうかは不明瞭である。

8は安山岩製である。背面に大きく自然面を残す。末端に主剥離面と対向する剥離痕がみられるが、打面転移を伴う剥片剥離によるのか、両極剥離によるのかは不明瞭である。

9は安山岩製である。微細剥離痕がみられる。背面剥離痕構成からは石刃とは謂いにくい、同一母岩の資料がほかに見られなかったことから、機能的には同等であった可能性を考慮しておきたい。

尖頭器 (第55図10-13)

尖頭器4点と尖頭器片2点が検出された。尖頭器片2点は接合して尖頭器1点を構成する。製品を単位とすれば、安山岩製3点と黒曜石製2点の、計5点である。すべて母岩が異なる。

10は和田鷹山産黒曜石製である。左側縁を大振りな剥離で急角度に、右側縁を類魚鱗状剥離で平坦に整形する。

11は蓼科冷山産黒曜石製である。同一母岩はほかに検出されなかった。小型で薄手の剥片を素材に周縁の表裏を平坦剥離で整形する。

12は安山岩製である。縦長剥片を素材に背面の全周縁と基部に類魚鱗状剥離を施して整形する。二次加工はとりわけ基部に著しいが、素材剥片の打面が僅かに残されている。尖端部の二次加工が僅かなことからみても、素材形状の変形は軽微と推測される。

13は安山岩製である。器体全体を類魚鱗状剥離で整形する。最大幅が中央よりも先端側にあることから、尖端部に再加工が行われた可能性が示唆される。

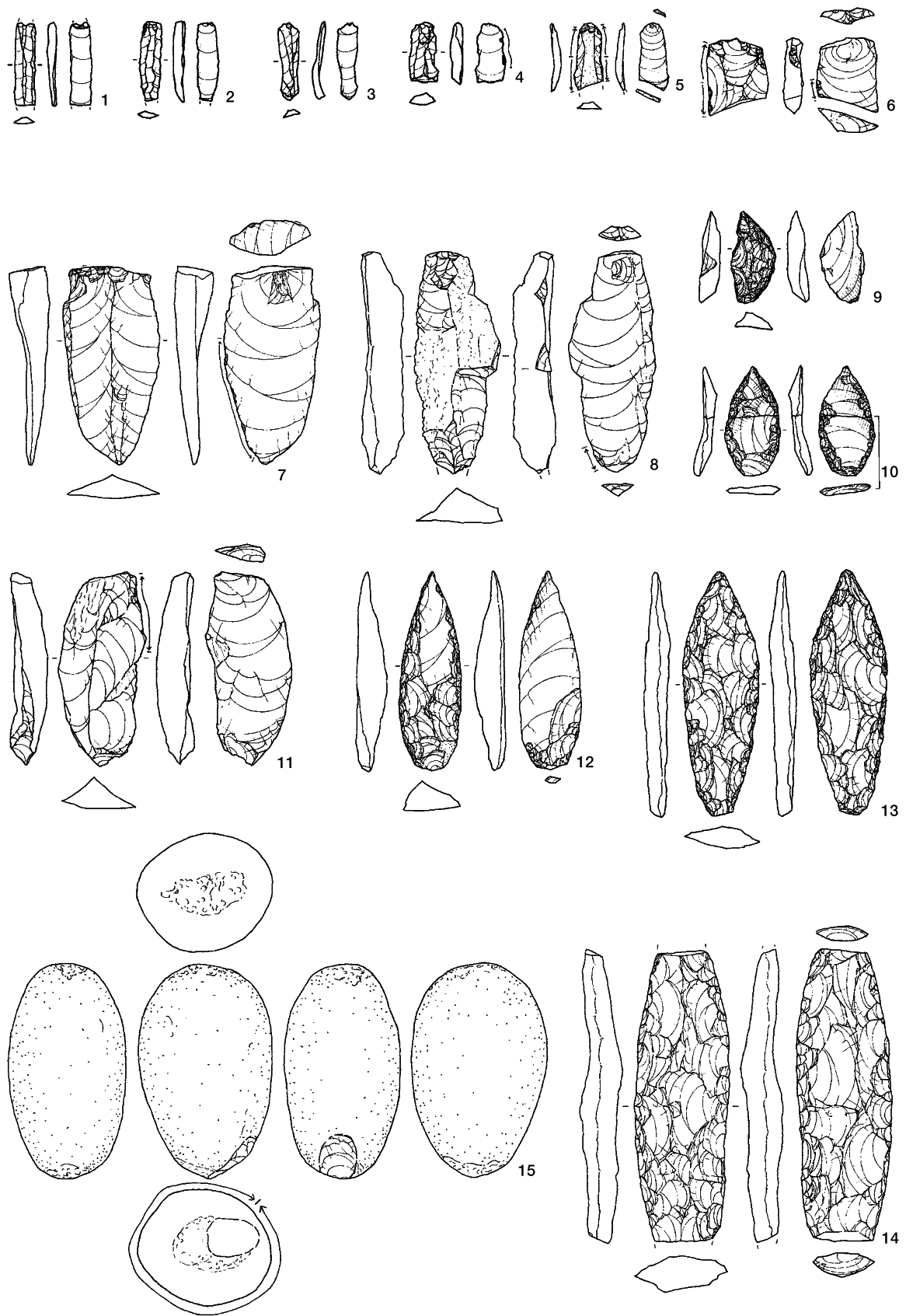
14は安山岩製である。本文化層では最も大型の尖頭器である。両面を類魚鱗状剥離で整形する。打面と基部をそれぞれ折損する。

敲 石 (第55図14)

1点検出された。14は砂岩製である。長軸の両端部に敲打痕が観察される。

接合資料

接合資料が得られたが、いずれも図示していない。尖頭器、細石刃、剥片が、それぞれ折れ面で接合したものである。



第55図 A区第II文化層の石器群

第三章 C区の石器群

(1) 石器群の分布と石材

IV層中部を中心に266点の石器群が検出された。1ヶ所の石器集中を形成している(第56～62図)。主要な石器群としては、箱根畑宿産黒曜石製の小型尖頭器(2点)および角錐状石器(1点)が組成する。箱根畑宿産黒曜石は3母岩程度に識別可能であるが、層位的上下関係の識別できない1ヶ所の石器集中を形成していることから、同時期に消費されたものと推定される。小型尖頭器と角錐状石器は共伴する可能性が高く、このことは両石器群の石材消費戦略の特質を知る上で大変示唆的である。

構成石材は箱根畑宿産黒曜石が207点で大半を占め、これに箱根黒岩橋産黒曜石(1点)、産地推定/測定不可・未測定黒曜石53点、チャート2点、安山岩2点、凝灰岩1点が続く(表9・10)。

なお、安山岩のうち1点は有舌尖頭器であるが、II層出土で時期も異なる。

(2) 出土石器

63-1は箱根畑宿産黒曜石製(母岩2b)の背部加工石器である。

63-2は箱根畑宿産黒曜石製(母岩1)の角錐状石器片である。下半分が折損しているため全体形状は不明だが、器体の厚さと急角度の二次加工を評価して、角錐状石器に分類した。

63-3は箱根畑宿産黒曜石製(その他の母岩)の片面加工尖頭器である。

63-4は箱根畑宿産黒曜石製(母岩2)の片面加工尖頭器である。

63-5は箱根畑宿産黒曜石製(母岩1)の二次加工剥片である。打面部は折れて、末端部に二次的な剥離痕が認められ、結果的に台形様を呈する。

63-6は箱根畑宿産黒曜石製(母岩1)の剥片である。最も点数の多い母岩1のうち、比較的大型の剥片類を図化した。石刃生産に関連のありそうなものは、積極的に評価しても1点(M II 184)が挙げられるのみで、これ以外には全くみられなかった。ある程度消費が進んだ石核で専ら横打剥片生産を行ったことになる。

母岩1の剥片類は角錐状石器63-2、尖頭器63-3、二次加工剥片63-5、未加工の刃器類63-9の素材になる。また、二次加工石器の調整剥片と推測される石器63-12はこの場所で二次加工を行ったことを示す。63-14はシレ氏剥片の接合資料(接合38)である。

63-15は凝灰岩製の剥片である。左側縁の裏面に微細剥離痕が連続的に見られる。単体母岩である。

63-16はチャート製の剥片である。単体母岩である。

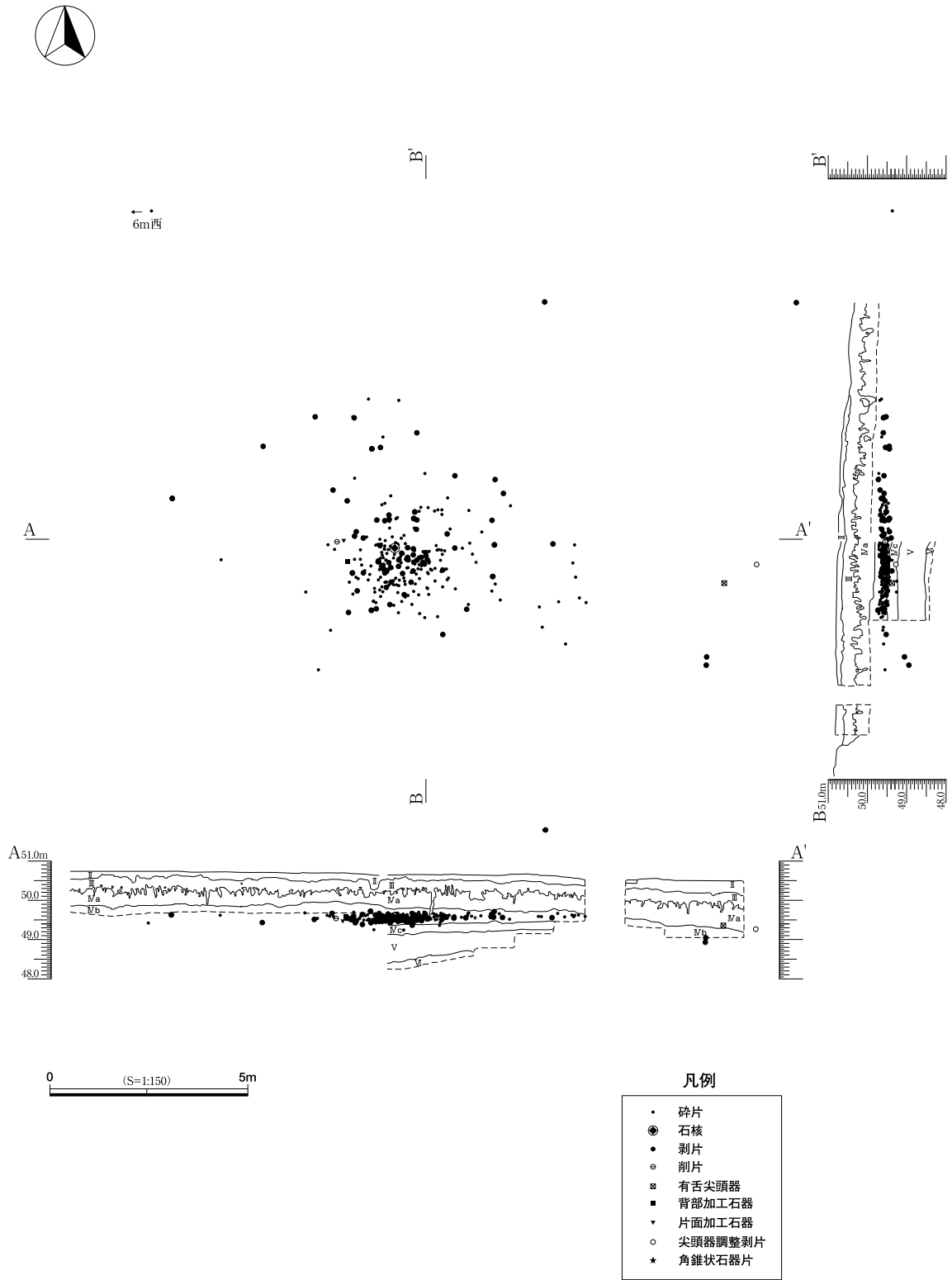
63-17は安山岩製の有舌尖頭器である。II層出土であり、以上の石器群とは無関係である。

	黒曜石	チャート	安山岩	凝灰岩	合計
有舌尖頭器			1		1
周縁加工尖頭器	1				1
片面加工尖頭器	1				1
背部加工石器	1				1
角錐状石器片	1				1
二次加工石器片	2				2
削片	1				1
剥片	64	2		1	67
碎片	189		1		190
石核	1				1
計	261	2	2	1	266

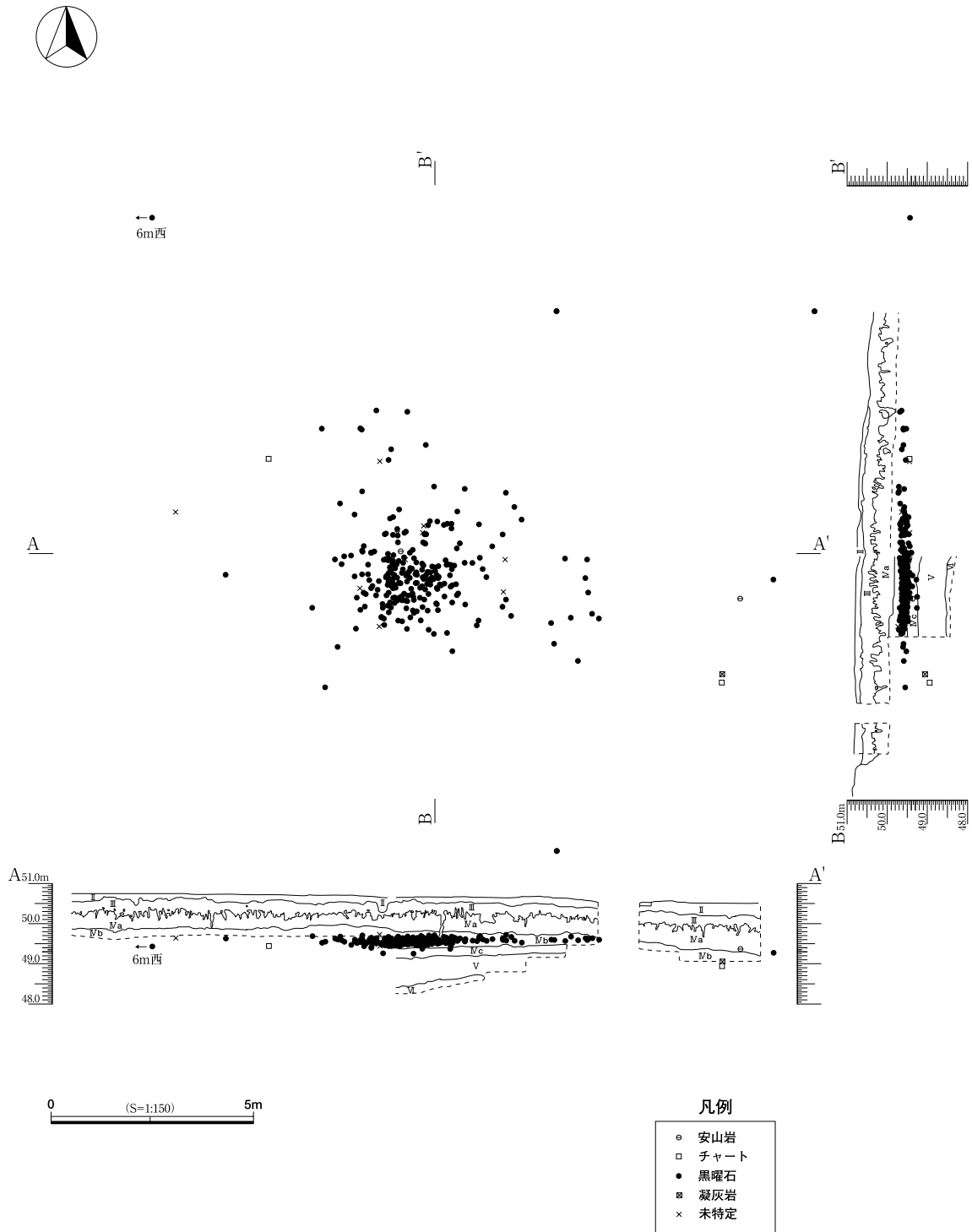
表9 C区石器石材組成

	箱根畑宿	箱根 黒岩橋	推定不可	測定不可	未測定	計
周縁加工尖頭器	1					1
片面加工尖頭器	1					1
背部加工石器	1					1
角錐状石器片	1					1
二次加工石器片	2					2
削片	1					1
碎片	137	1	3	48		189
剥片	62				2	64
石核	1					1
計	207	1	3	48	2	261

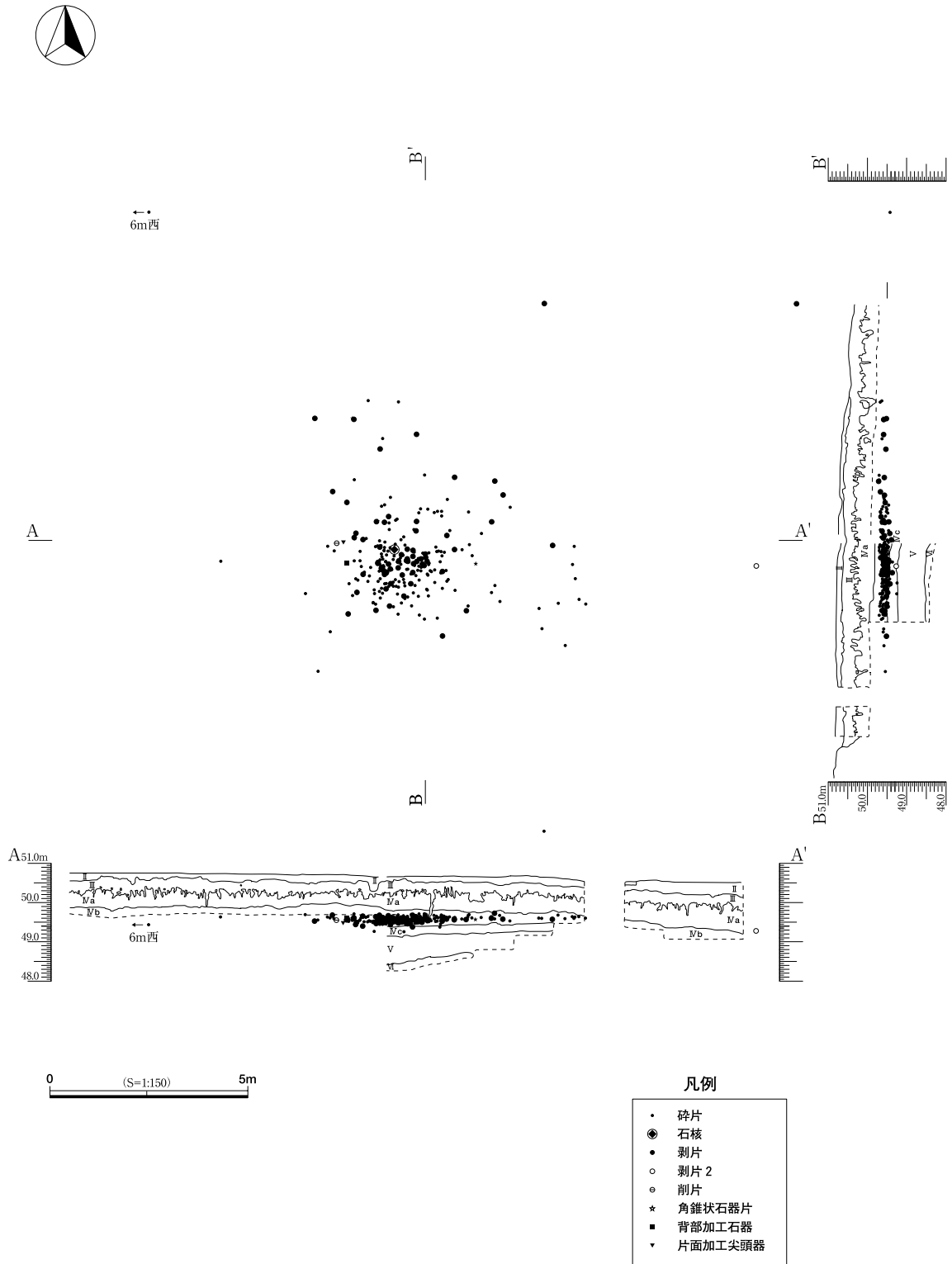
表10 C区黒曜石製石器石材組成 (産地別)



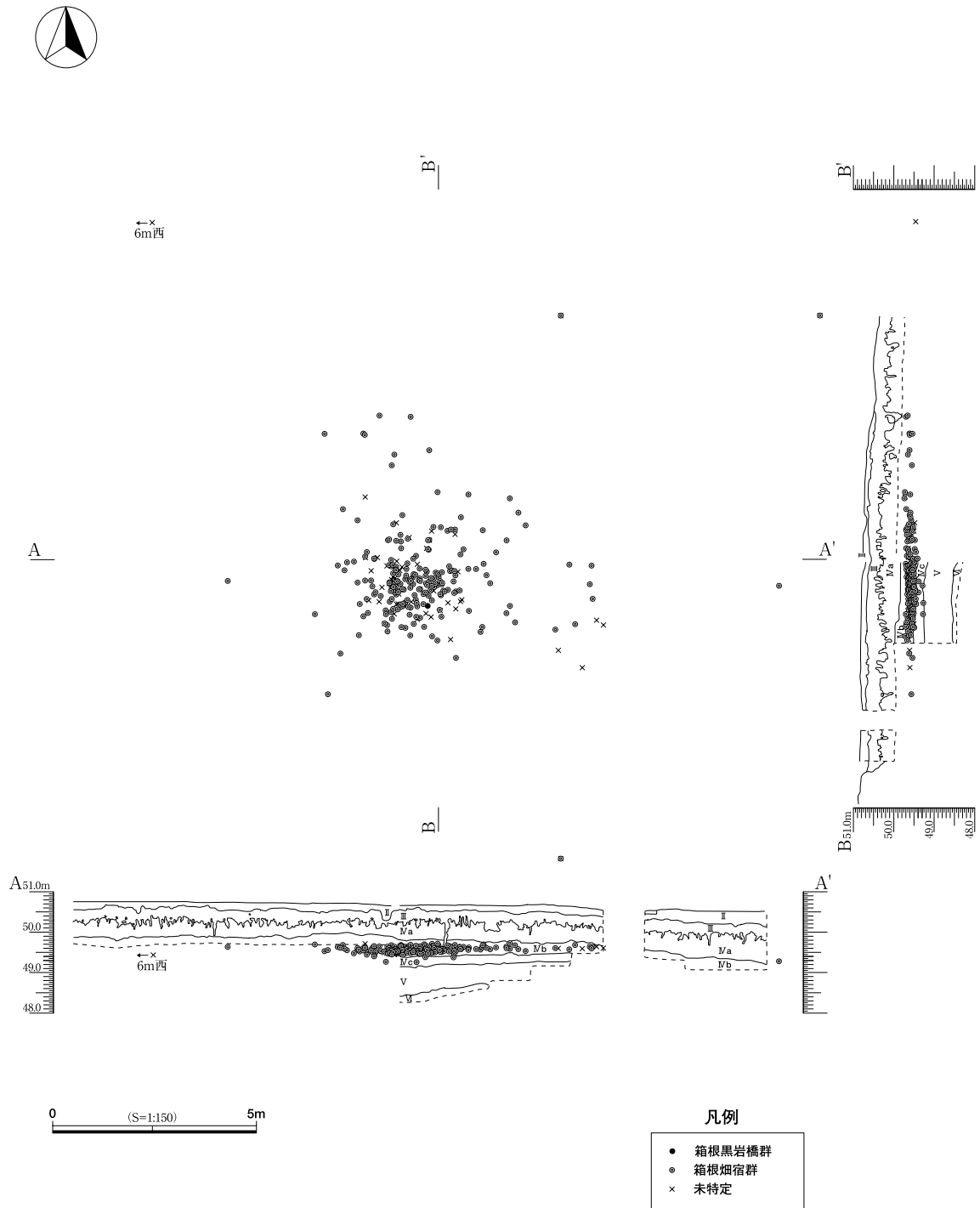
第56圖 C区 器種別分布



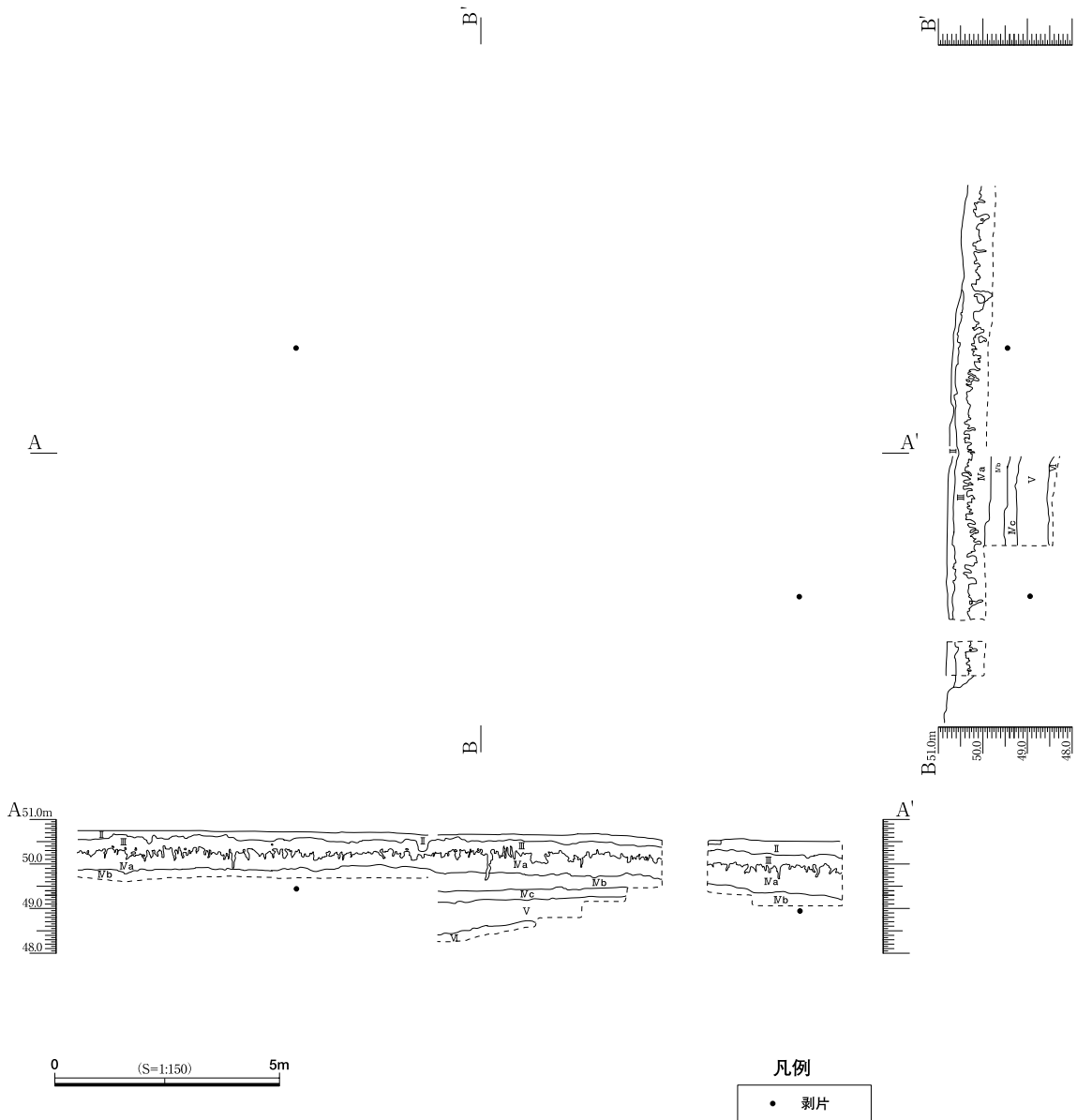
第57図 C区 石材別分布



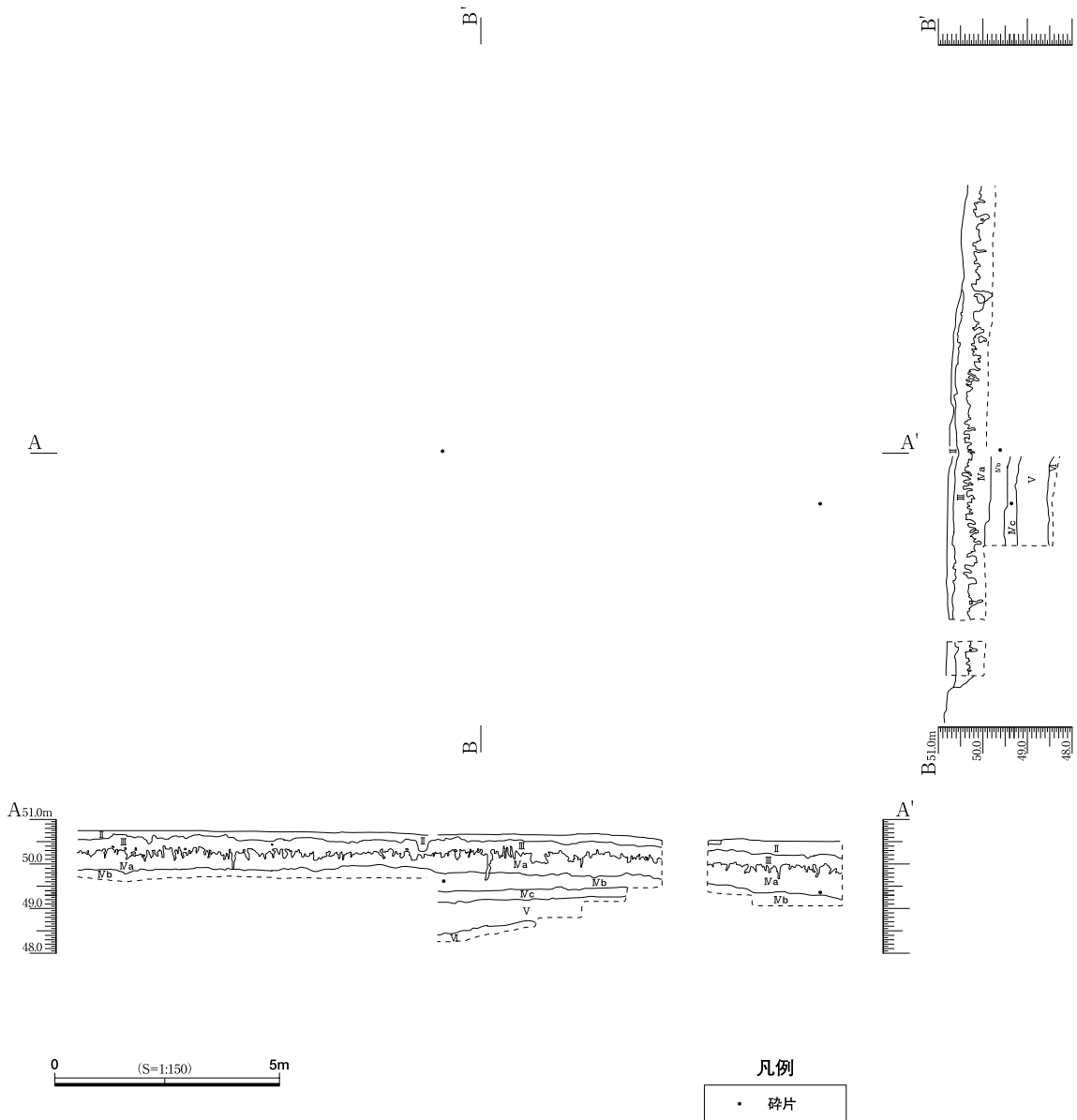
第58圖 C区 黑曜石 器種別分布



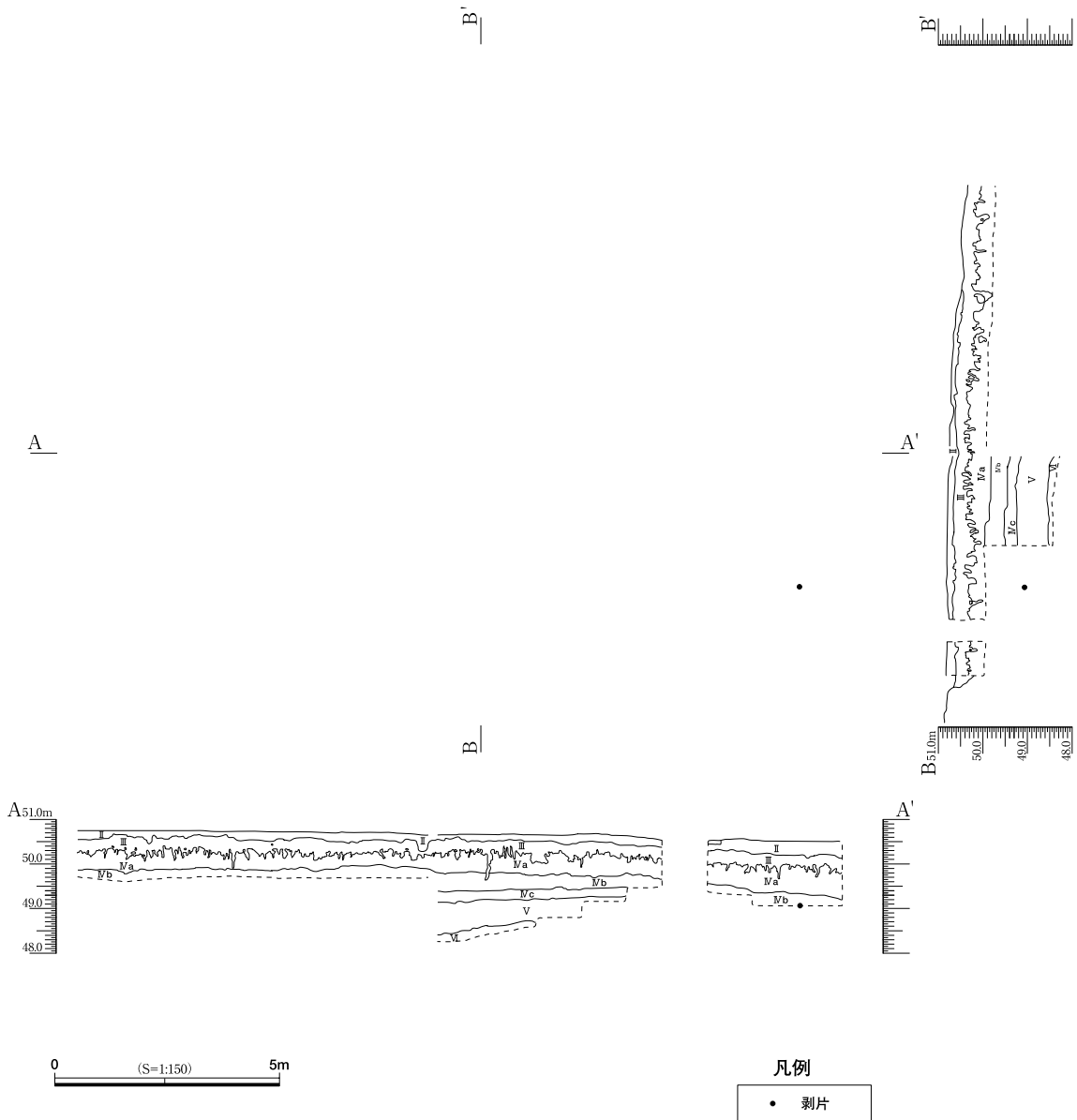
第59図 C区 黒曜石 産地別



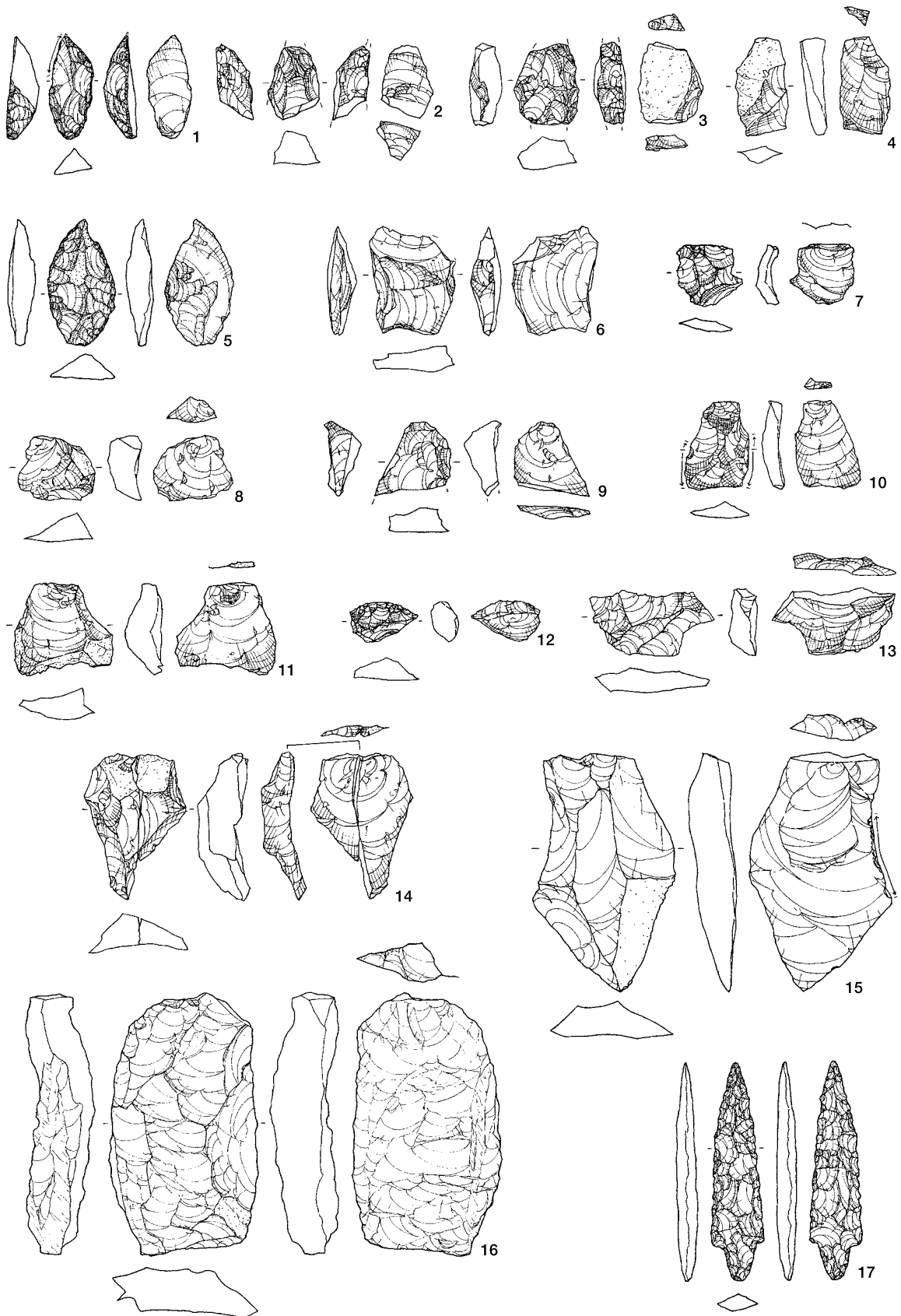
第60図 C区 チャート 器種別分布



第61図 C区 安山岩 器種別分布



第62図 C区 凝灰岩 器種別分布



第63図 C区の石器群

第IV章 D区の石器群

(1) 石器群の分布と石材

V層上部で17点（所在が確認できなくなったもの3点を含む）の石器が検出された（第65～70図）。器種構成の内訳は、背部加工石器類2点、石刃2点、細石刃1点、剥片4点、碎片3点、石核（石刃石核）1点である（表11）。各器種ともに凝灰岩のものがみられるが、同一母岩ではない。

(2) 出土石器

64-1は蓼科冷山産黒曜石製の細石刃である。自然面打面で、やや分厚いので、後期旧石器時代末葉に組織的に生産される細石刃とはやや異質である。

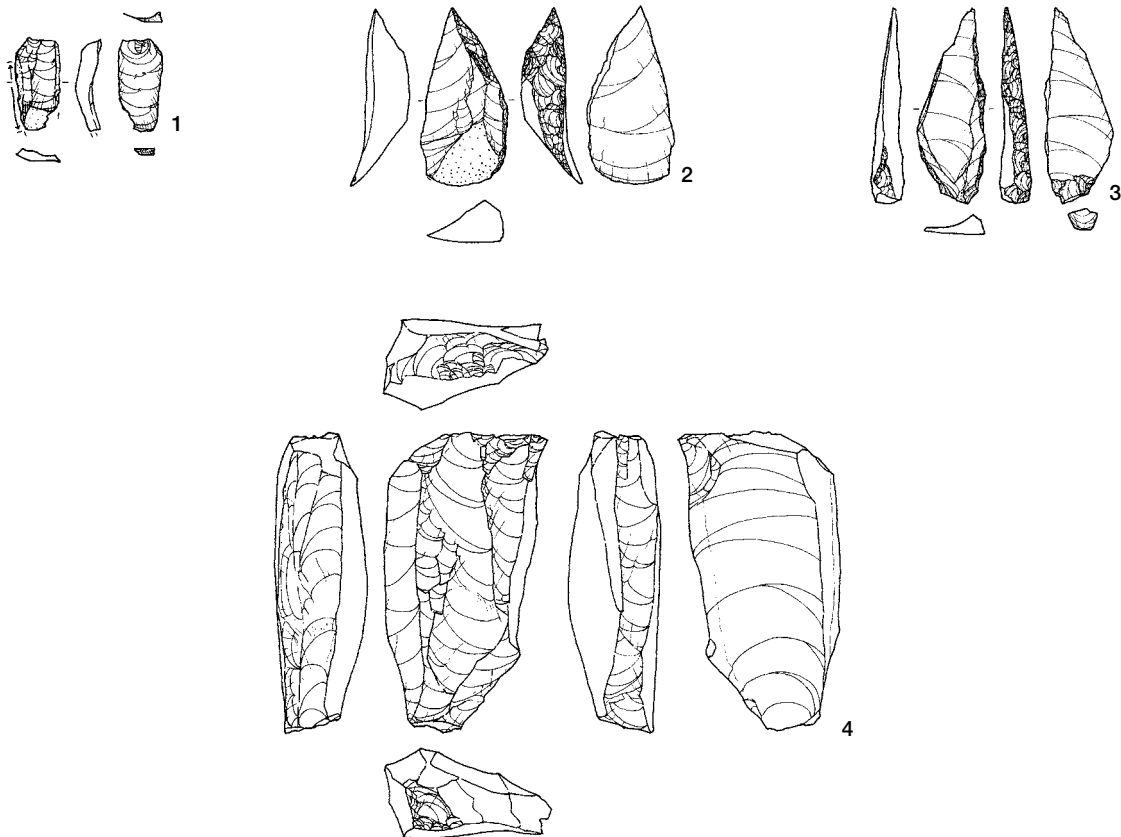
64-2は凝灰岩製の背部加工石器である。石刃ないし縦長剥片を逆位に用い、急角度の二次加工によって打面部を斜めに切り取り、先端部を作出する。

64-3は凝灰岩製の背部加工尖頭形石刃石器である。石刃を縦に用い、急角度の二次加工によって右側縁に背部を整形して先端部を作出し、左側縁の打面付近に基部を整形する。基部裏面には平坦剥離を施す。

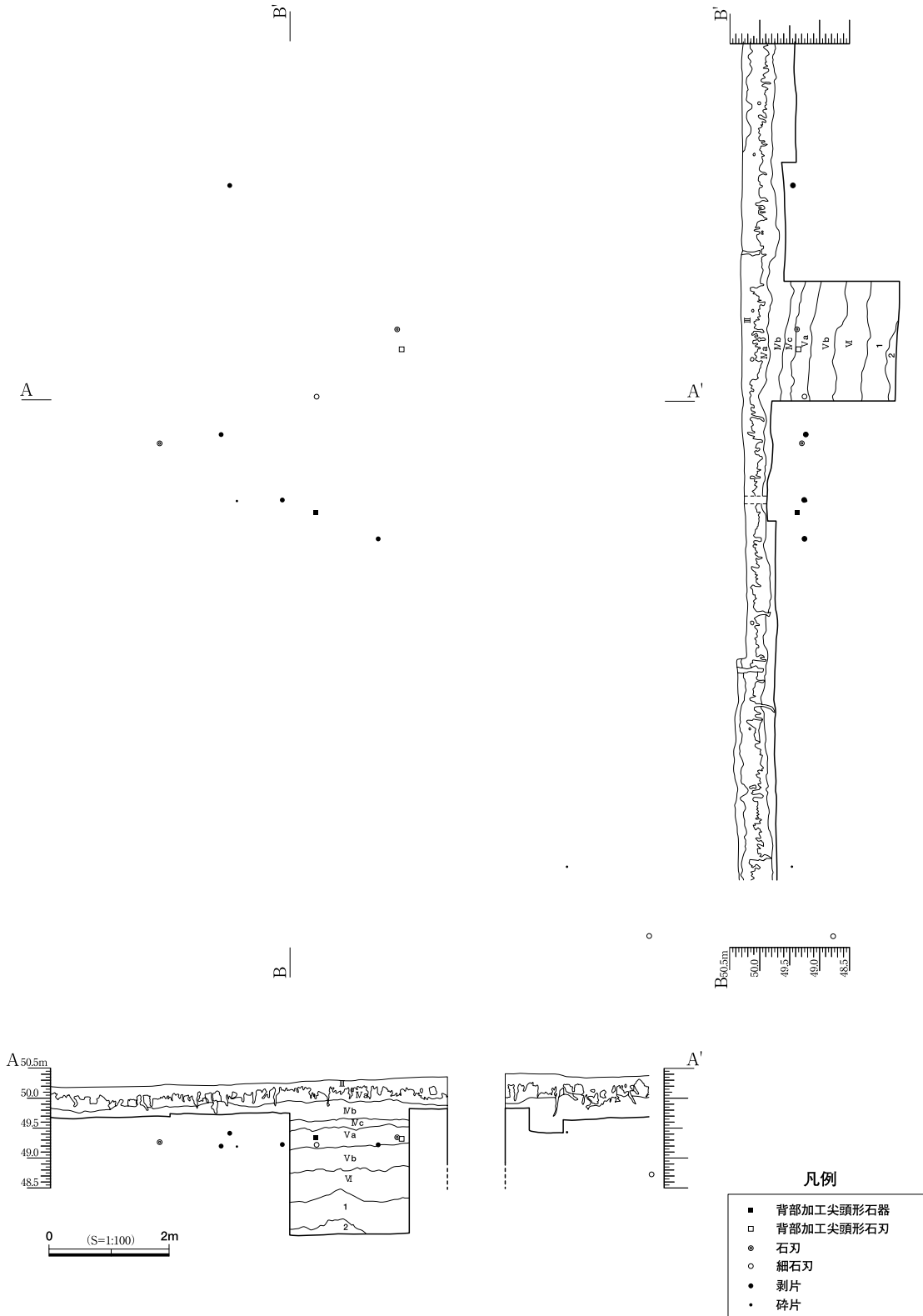
64-4は凝灰岩製の石刃石核である。打面調整痕が見られる。D区にはこの石核の消費痕跡が見当たらない。

	蓼科冷山産黒曜石	推定不可黒曜石	凝灰岩	ホルンフェルス	珪質頁岩	その他	合計
背部加工尖頭形石刃石器			1				1
背部加工石器			1				1
石刃			1	1			2
細石刃	1		1				2
剥片			1	2	1		4
碎片		2	1				3
石核			1				1
所在不明遺物						3	3
計	1	2	7	3	1	3	17

表11 D区石器石材組成



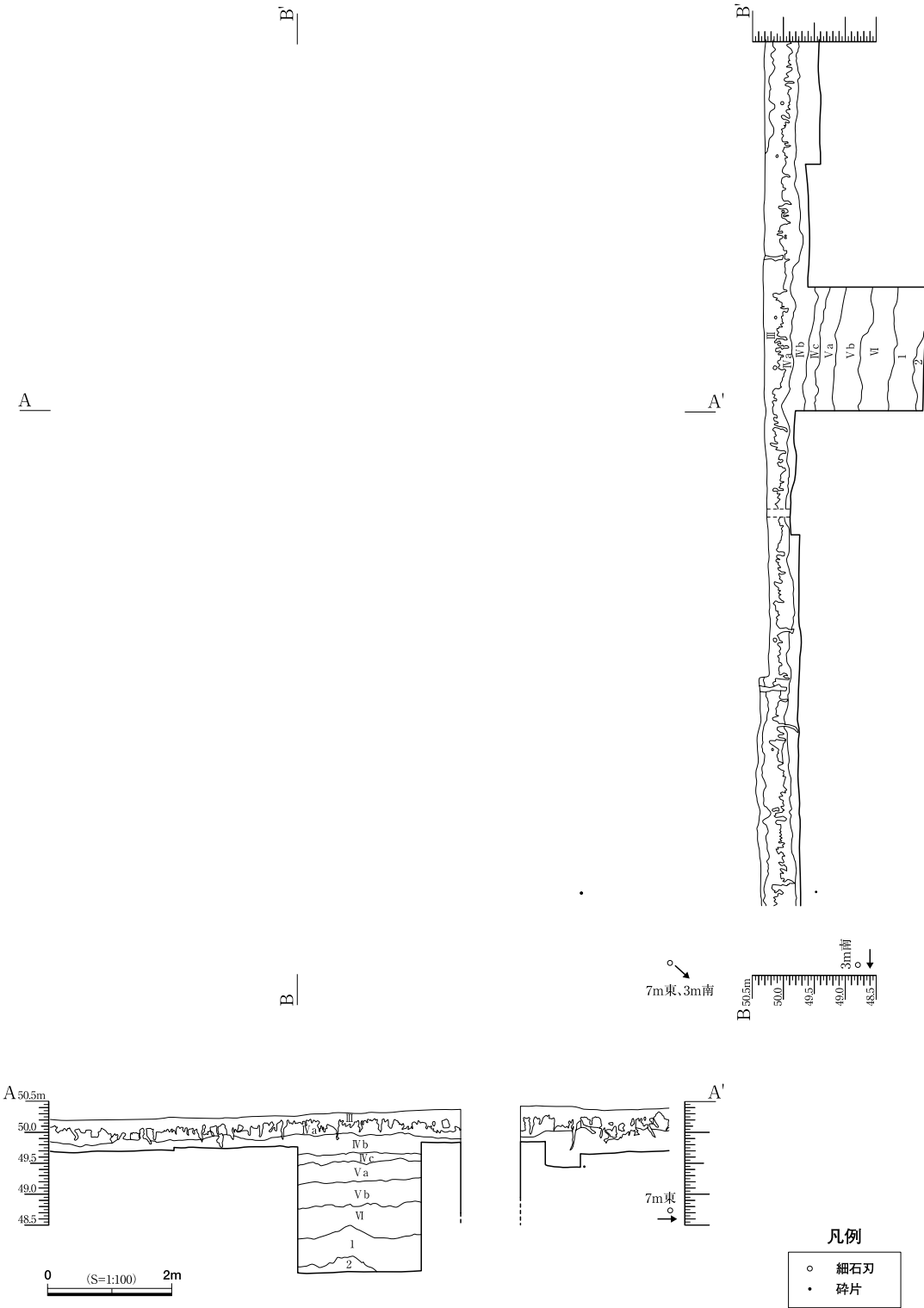
第64図 D区の石器群



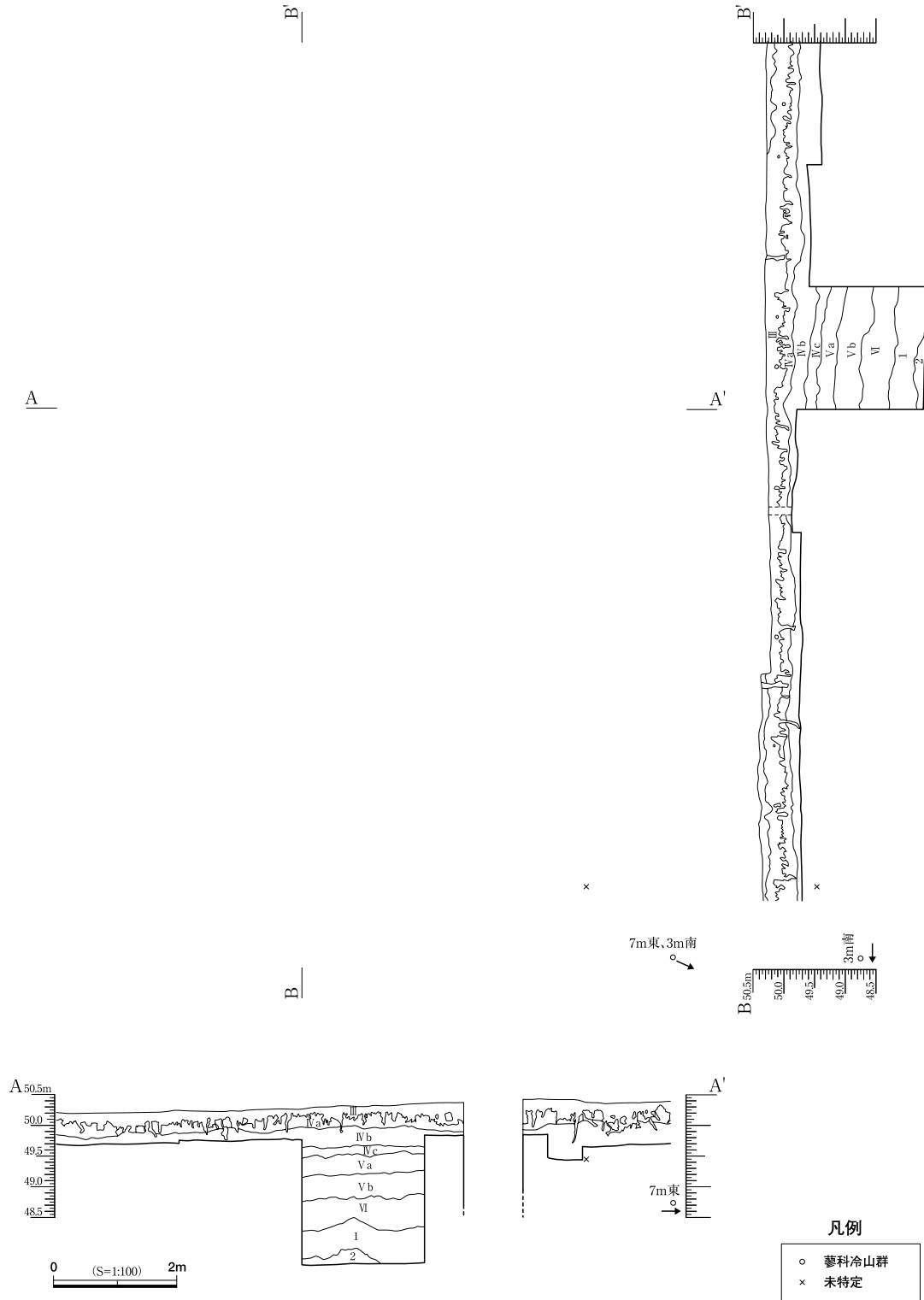
第65圖 D区 器種別分布



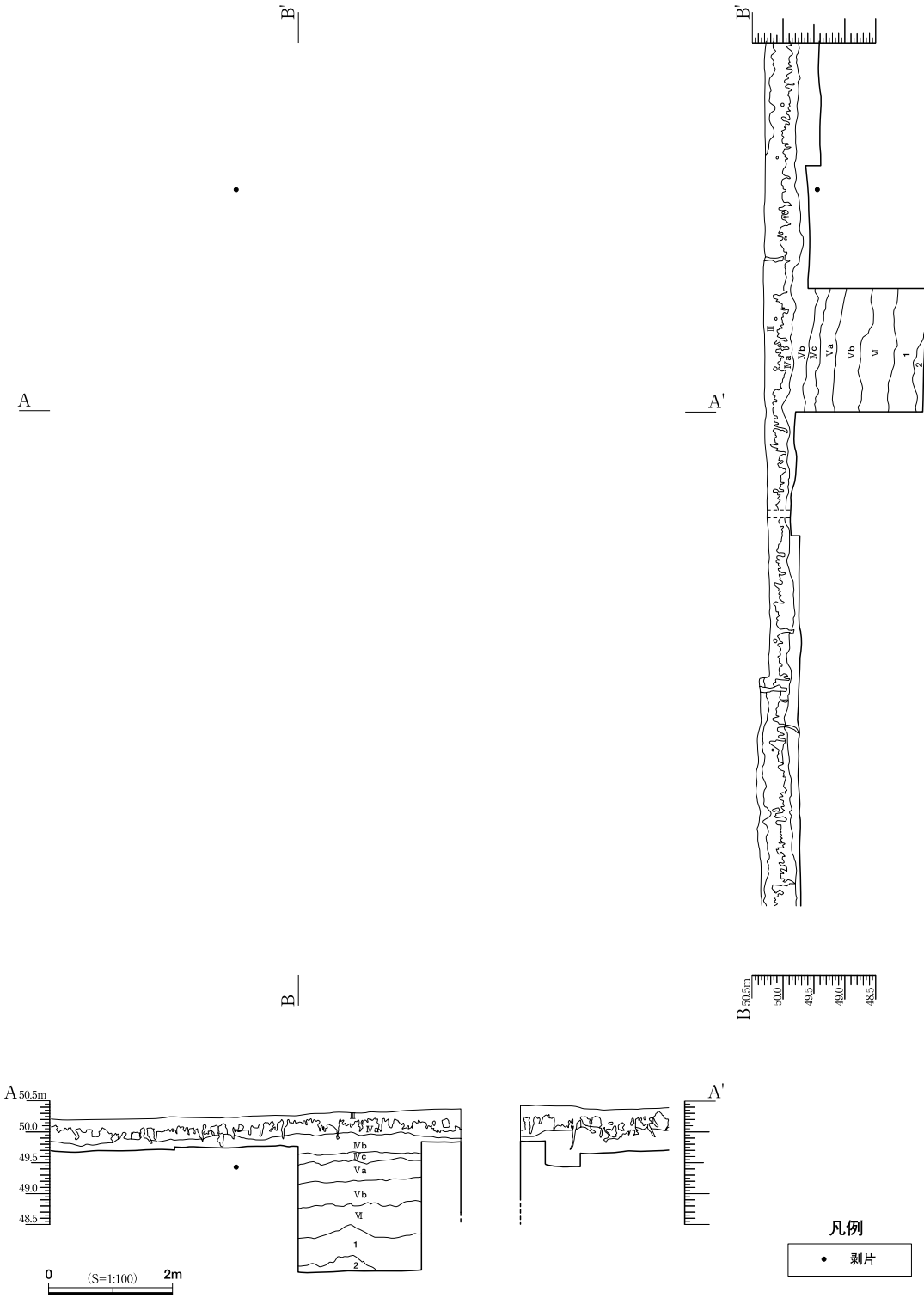
第66図 D区 石材別分布



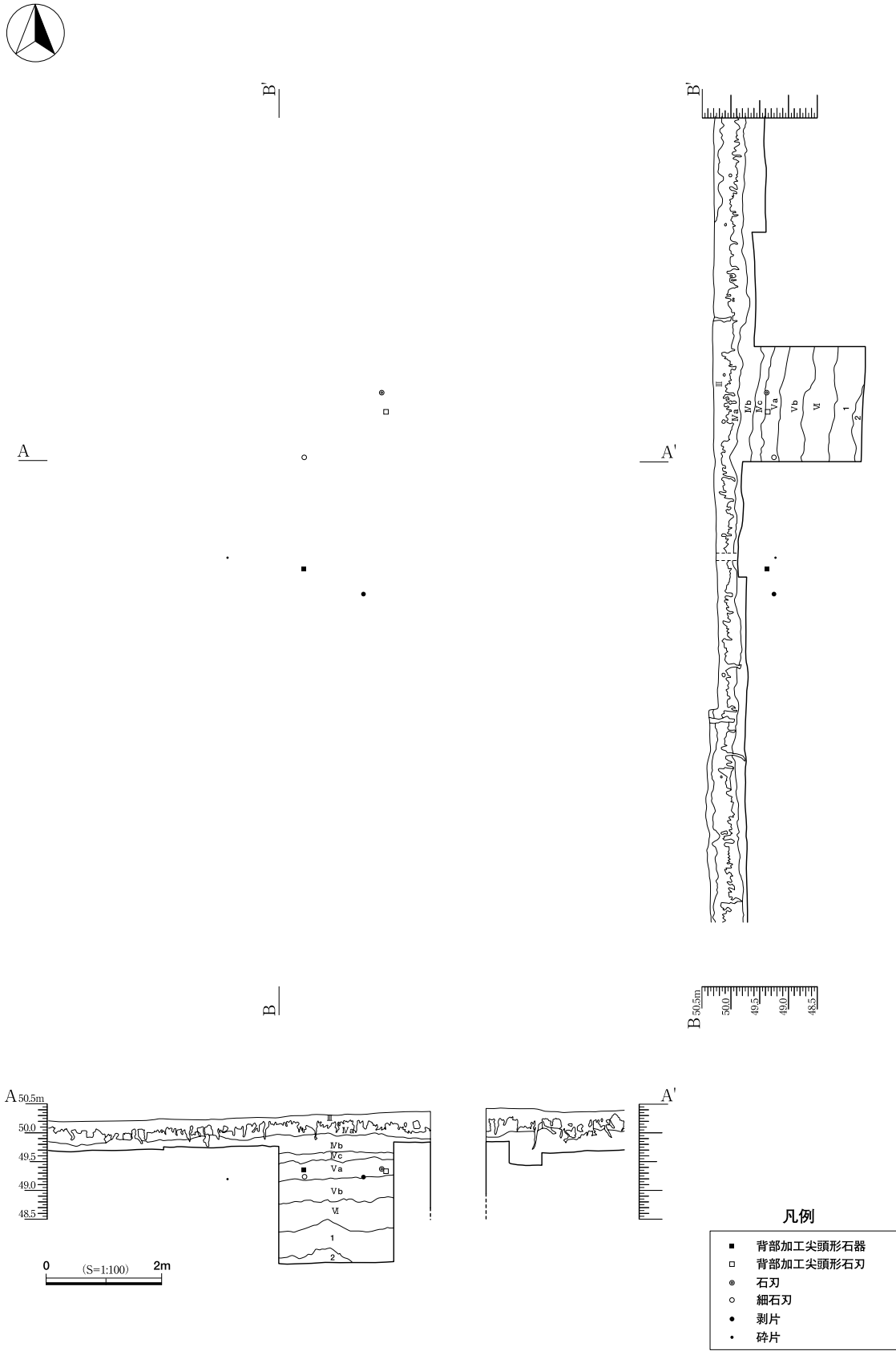
第67圖 D区 黑曜石 器種別分布



第68図 D区 黒曜石 産地別分布



第69図 D区 チャート 器種別分布



第70図 D区 凝灰岩 器種別分布

第V章 F区の石器群

(1) 石器群の石材

F区は長嶋遺跡の東南部に位置する南北に細長い調査区域である。調査と整理の結果、8ヶ所の石器集中と8基の礫群が識別された(第71図)。

石器群は225点で、IV層上部からIII層下部を中心に包含され、尖頭器石器群と角錐状石器およびその他の横打剥片製背部加工石器群、削器類などを組成する(表12~19)。礫群も概ね同層準に集中する傾向がみられ、時期も相応のものと推測される。ただし、調査区内の土層堆積状況は、IV層の発達が発達が貧弱なところが見られたため、良好とはいいがたい。石器群の時期設定に影響しているかもしれない。

消費石材は多様である(第73図)。点数の多いほうから順に、チャート(10個体69点)、頁岩(最低5個体67点)、黒曜石(8群23点)、安山岩(5個体20点)、凝灰岩(最低5個体20点)で、ほかに流紋岩(3個体)、凝灰岩(最低5個体5点)、玉髓(5個体5点)、砂岩(6個体6点)などがみられる。黒曜石は蛍光X線分析による産地分類の結果、蓼科冷山群や和田周辺の諸群といった信州系を中心に、箱根畑宿群、神津島恩馳島群が同定された。

石器群の諸系列と石材との対応関係は次のようである(第72・73図)。まず石刃生産との関連が明らかなのは頁岩個体のsh2である。端部加工石刃が小型石刃生産過程を示す接合資料に含まれ、遺跡での生産-廃棄が復元可能である。また、チャート個体(ch8)製石刃と凝灰岩個体(tuその他)製石刃も関連する。横打剥片生産と関連するのは以上のほかほぼ全てである。両面体生産に関連するのはわずかで、いずれも単独個体の尖頭器である。安山岩製、チャート製、頁岩製がそれぞれ1点ずつ組成する。

(2) 石器群の分布

礫以外の石器全点を平面的に集中しているとみなしうる場所を8ヶ所識別した(第71図)。これを石材別にあらわしたのが第73、77、85、92、96、104、112、116、123図である。

砂岩、頁岩、チャート、玉髓、凝灰岩、安山岩、黒曜石、流紋岩、その他に分けた。殆どの石器集中が複数の石材から構成されている実態を読み取ることが出来よう。ほぼ敲石だけで組成される砂岩は1ヶ所の集中を形成するが、これは意図的に集積された可能性もある。

安山岩、流紋岩、玉髓、凝灰岩は調査区の南部に偏って分布する傾向がある。他方、黒曜石、チャート、頁岩は、南部だけでなく北部にもよく分布する。しかし、黒曜石とチャートが調査区中央部でもよく重複するのに対して、頁岩はsh2とsh4とで分布域が大きく異なる。

石器集中1(第76~83図、表12)

32点で構成される。第1石材は頁岩のsh4で、約半数の15点である。製品はsh4には含まれず、玉髓製の端削器(単独個体)と頁岩製・凝灰岩製の二次加工剥片がそれぞれ1点ずつである。Sh4には縦長剥片が含まれ、凝灰岩には小型の稜付石刃が1点(単独個体)含まれているので、限定的な石刃生産が行われたに違いない。蓼科冷山産黒曜石は1個体であるが、こちらも小型縦長剥片生産に関連

している。

石器集中 2 (第84～90図、表13)

17点で構成される。第1石材はチャートのch1で、7点ある。このほかチャートの別個体や頁岩、流紋岩、凝灰岩、和田鷹山産黒曜石をそれぞれ少数含む。Ch1は自然面の付着率が高く、原石ないしそれに近い状態での搬入が推定される。基部を弧状に整形して半円形を呈する台形様石器1点はこれと同一個体である。チャートの製品にはまた両面加工尖頭器(ch10:単独個体)がみられるが、これは単独個体なので、製品状態での搬入-廃棄が推定される。

石器集中 3 (第91～95図、表14)

9点で構成される。9点はいずれも1点ずつの組成なので、独立的な石器集中形成機会があったかどうかは疑問である。玉髓製の二次加工剥片が含まれているが、折損品であるため明確な器種は不明である。

石器集中 4 (第96～102図、表15)

34点で構成される。本調査区では比較的多くの点数で構成されているが、表にあるように、大変多くの個体が見られ、石器集中4と同じく独立した形成機会があったかどうかは疑問である。器種構成においても、安山岩(an2:単独個体)製両面加工尖頭器、二次加工剥片、流紋岩製・和田黒岩橋北産黒曜石製背部加工石器、凝灰岩製端部加工石刃、チャート製端削器などと多彩な内容を示すが、集中を構成する剥片・碎片とは個体が異なり、生産痕跡は皆無である。

石器集中 5 (第103～110図、表16)

32点で構成される。第1石材はチャート(ch1:14点)で、安山岩(an1)8点が続く。製品は流紋岩製端削器(rh3)がみられるが、こちらは剥片1点を伴うだけである。

石器集中 6 (第111～114図、表17)

12点で構成される。第1石材は砂岩(6点)である。6点の内容は専ら礫石器類であり、台石1点と敲石5点である。集中的な加工作業が想定されそうであるが、剥片類の組成は僅か6点と乏しい。礫石器類は将来を期して石器製作用に準備された加工具のキャッシュカ、植物質資源の加工作業の場を示すものと考えおく。

石器集中 7 (第115～121図、表18)

78点で構成される。第1石材は頁岩(sh2)で40点、第2石材はチャート(ch1)で29点である。ほかに蓼科冷山産黒曜石と安山岩(an1)の限定的な消費がみられる。頁岩sh2の接合資料によって、端部加工石刃の素材を提供する小型石刃生産が行われたことがわかる。

石器集中 8 (第122～126図、表19)

8点で構成される。点数は少ないが、ホルンフェルスと諏訪星ヶ台産・和田小深沢産黒曜石の限定消費がみられる。頁岩製両面加工尖頭器が単独個体で搬入されているほか、箱根畑宿産黒曜石製角錐状石器も単独で観察される。両者が伴うのかどうか、検出層位を検討したが、わからなかった。

	ag1	ag3	ag4	ch1	ch5	sh2	sh4	sh	tu	an1	an4	an5	未特定	計
				その他	tu	その他	tu1	その他	tu	その他	tu	その他	tu	その他
端削器	1													1
二次加工剥片						1			1					2
稜付石刃									1					1
剥片	1	1	1	1	1	1	1	10	1	1	2	1	1	21
破片						5								5
石核												1		1
敲石													1	1
計	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	2	1	2	32

表12 F区石器集中1の石器石材組成

ch1	ch2	ch10	sh5	tu	rh1	和	未	計
				その他		田	特定	
		1				鷹 <td></td> <td>1</td>		1
両面加工尖頭器						山		1
台形様石器	1							1
剥片	6	1	1	1	3			12
破片					1			1
石核	1							1
敲石							1	1
計	7	2	1	1	3	1	1	17

表13 F区石器集中2の石器石材組成

ag2	ag3	ch1	ch3	tu5	tu	an5	rh3	未	計
				その他				特定	
二次加工剥片	1		1						2
剥片		1		1		1		1	4
破片					1				1
石核		1				1			2
計	1	1	1	1	1	1	1	1	9

表14 F区石器集中3の石器石材組成

ch1	ch4	ch7	ch8	ch9	sh2	sh	tu	an1	an2	an3	rh2	rh3	和	未	計
					その他	tu	その他	田	鷹	山	西	宿	今	馳	島
															1
両面加工尖頭器															2
背面加工石器															1
端部加工石刃															1
端削器				1											2
二次加工剥片			1					1							3
石刃					1	2	3								22
剥片	4	1	1	1	1	2	3	1	1	1	1	1	1	1	2
石核															34
計	4	1	1	1	1	2	3	3	1	1	1	1	1	1	34

表15 F区石器集中4の石器石材組成

	ch1	ch6	sh2	sh その他	測定不可	tu1	tu4	an1	rh2	rh3	蓼科冷山	計
側削器												1
剥片	12		1			1	1	8		1	1	25
碎片	1			1								2
石核	1	1	1	1					1			4
計	14	1	1	1	1	1	1	8	1	2	1	32

表16 F区石器集中5の石器石材組成

	sa	sh2	sh その他	an1	蓼科冷山	未特定	計
剥片	1	1	1	1			4
石核		1					1
台石	1						1
蔽石	5				1		6
計	6	1	2	1	1	1	12

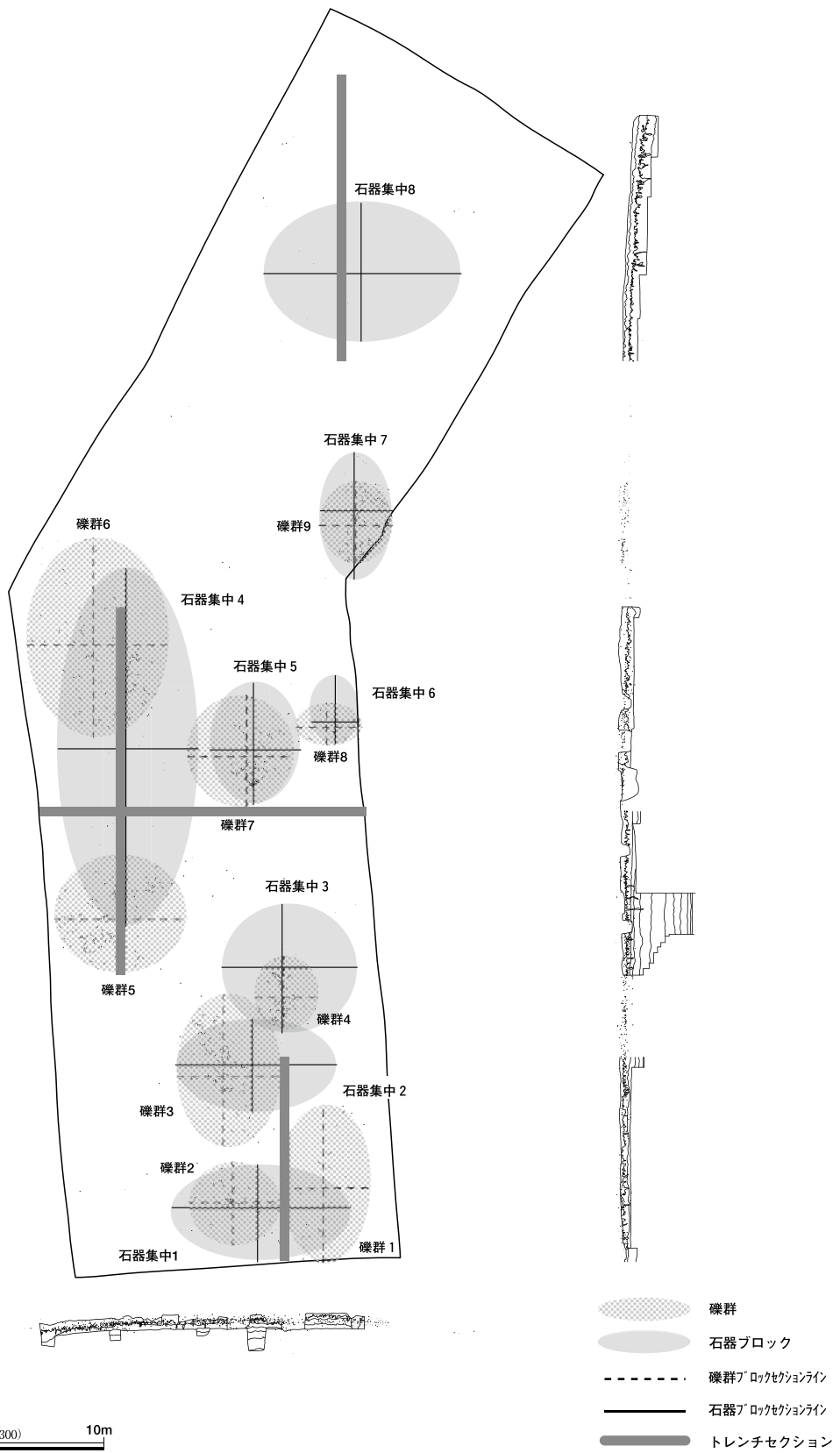
表17 F区石器集中6の石器石材組成

	ch1	sh2	an1	蓼科冷山	未分析	計
端部加工石刃	1					1
削片	1					1
石刃	2					2
剥片	21	24	3			51
碎片	6	7	1			14
石核	2	5	1		1	9
計	29	40	3	5	1	78

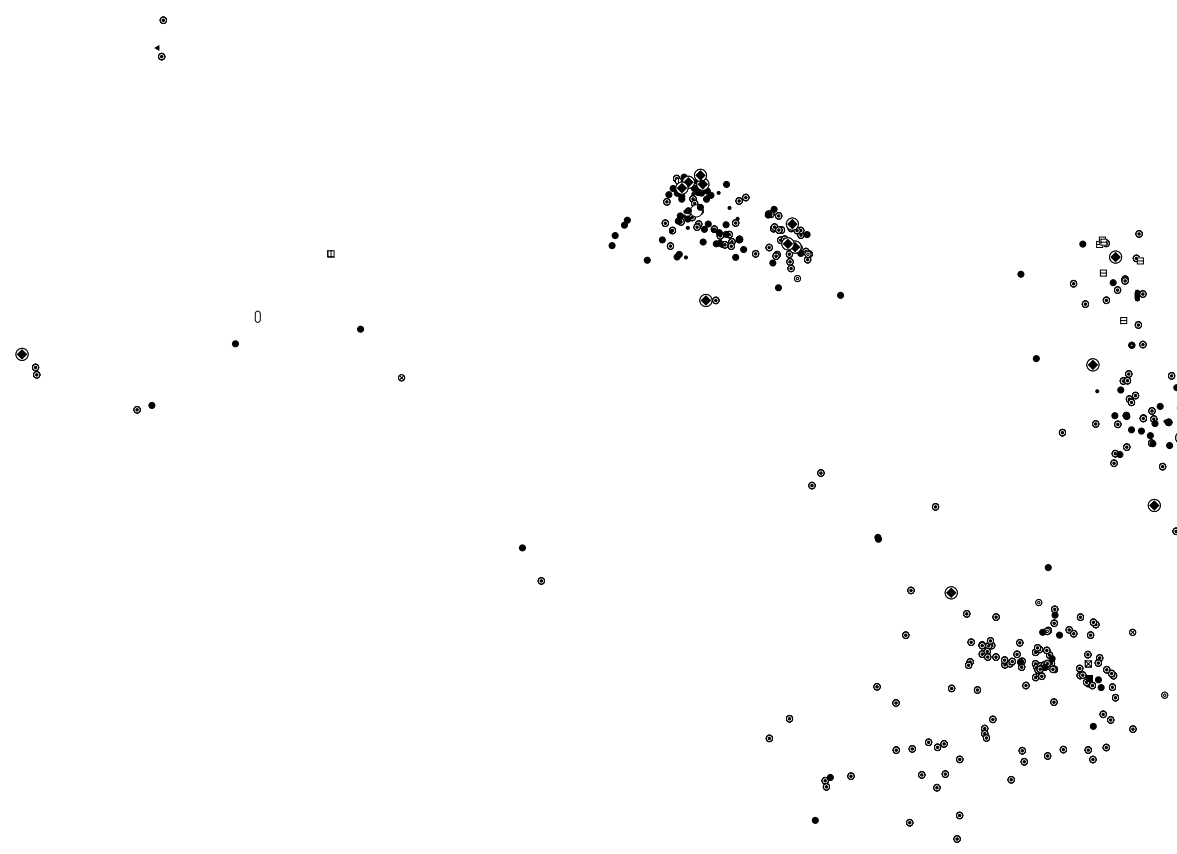
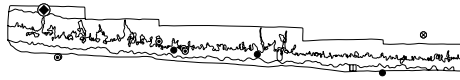
表18 F区石器集中7の石器石材組成

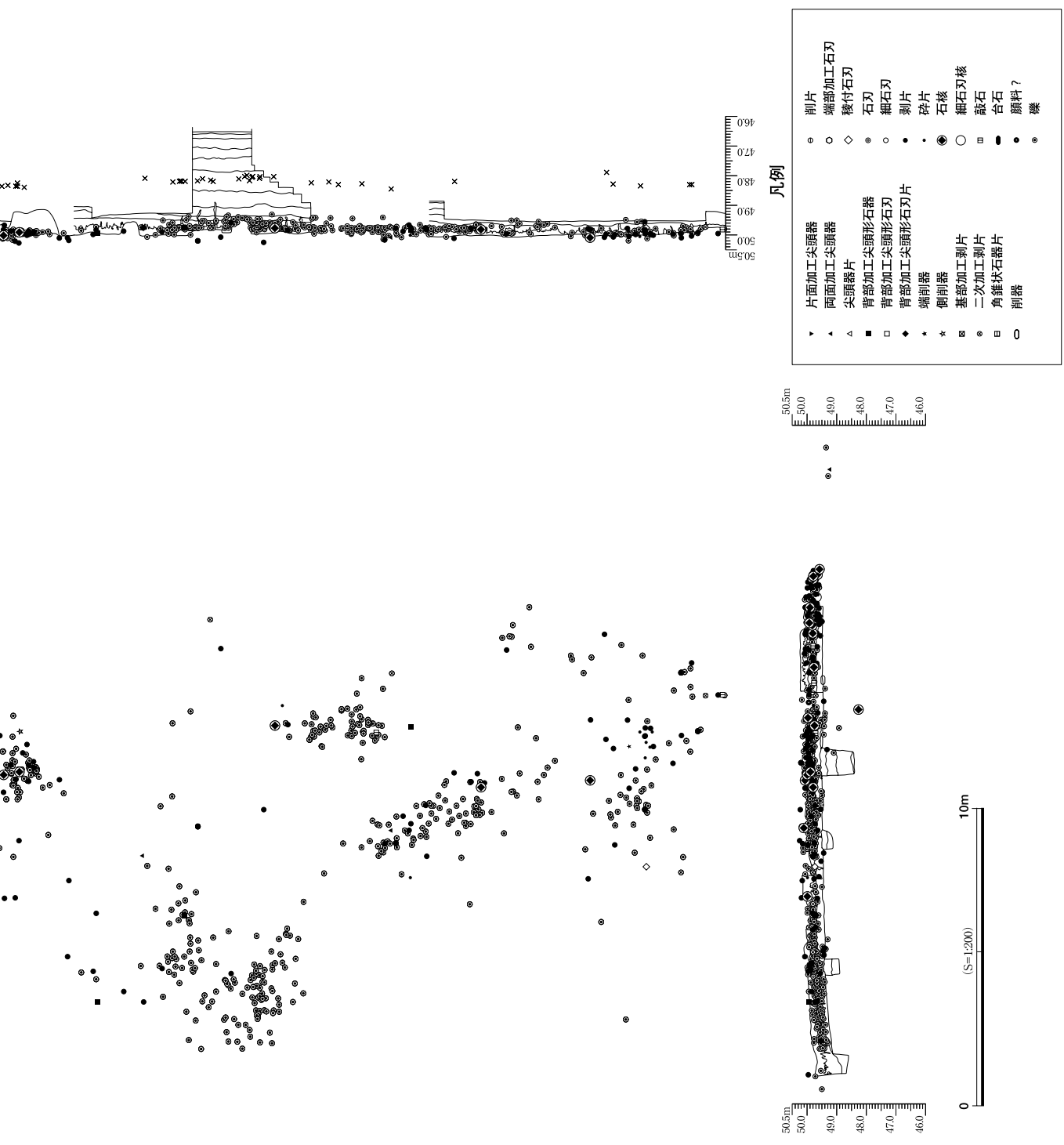
	ch1	sh その他	ホルンフェルス	諏訪星ヶ台	和田深沢	箱根畑宿	計
両面加工尖頭器		1					1
角錐状石器						1	1
側削器				1			1
二次加工剥片				1			1
剥片			2		1		3
石核	1						1
計	1	1	2	2	1	1	8

表19 F区石器集中8の石器石材組成

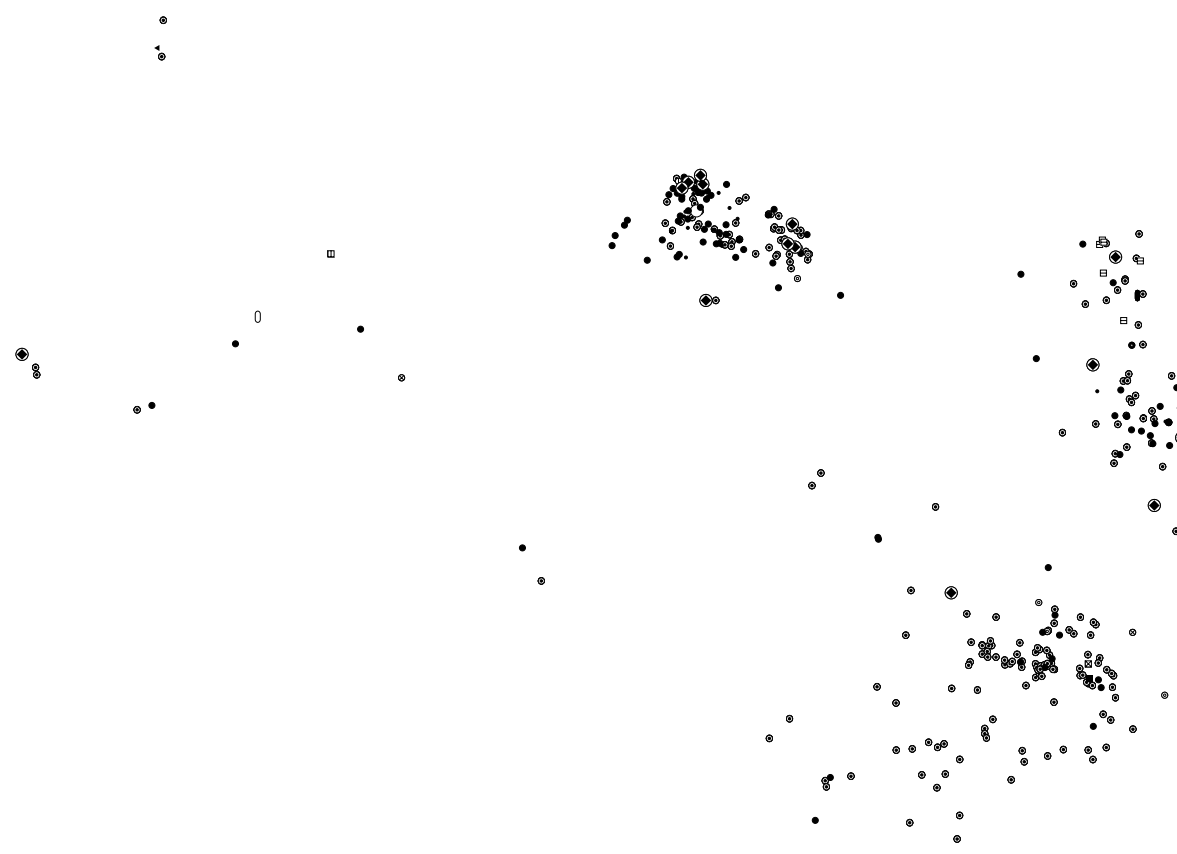
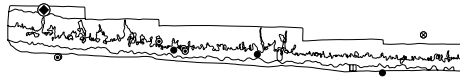


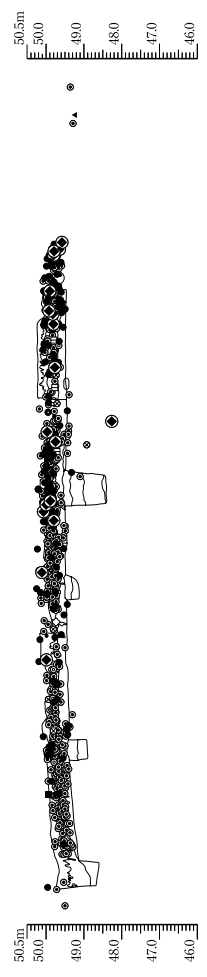
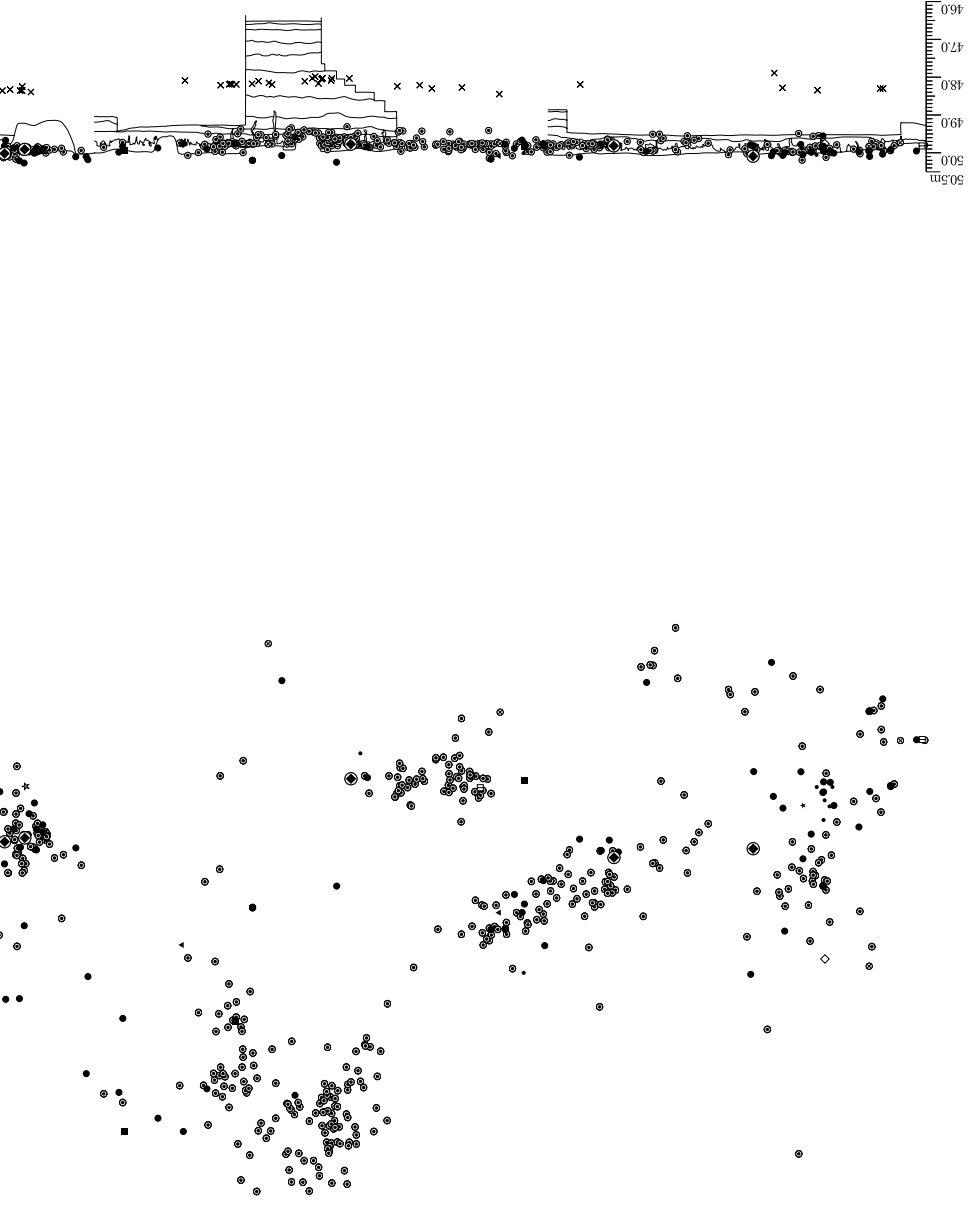
第71図 F区石器集中・礫群分布





第72圖 F区 器種別分布



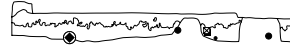
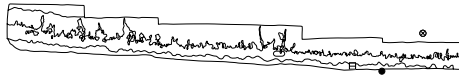


0 10m
(S=1:200)

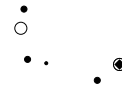
凡例

▶	片面加工尖頭器	○	削片
▲	側面加工尖頭器	◊	端部加工石刃
■	尖頭器片	◇	稜形石刃
□	背部加工尖頭形石器	○	石刃
◆	背部加工尖頭形石刃	●	細石刃
*	背部加工尖頭形石刃片	●	剥片
×	端部器	●	碎片
⊠	側部器	●	石核
⊙	基部加工剥片	○	細石刃核
◊	二次加工剥片	◻	敲石
◻	角錐狀石器片	●	台石
○	削器	●	顏料?
		●	礫

第73圖 F区 石材別分布



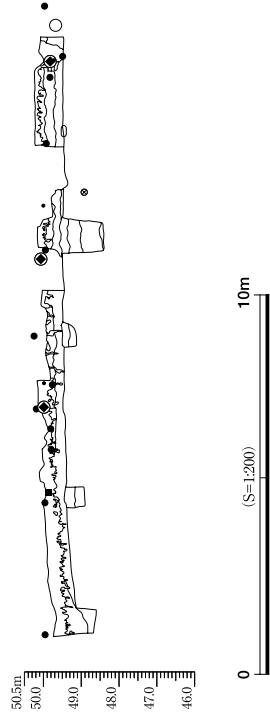
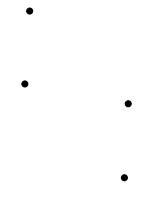
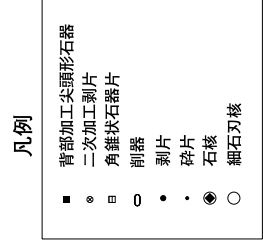
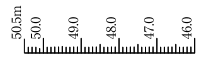
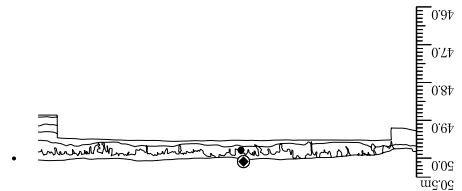
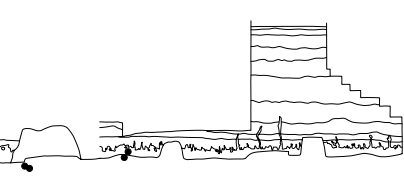
0



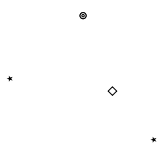
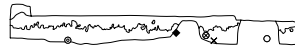
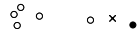
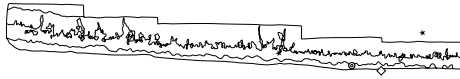
.

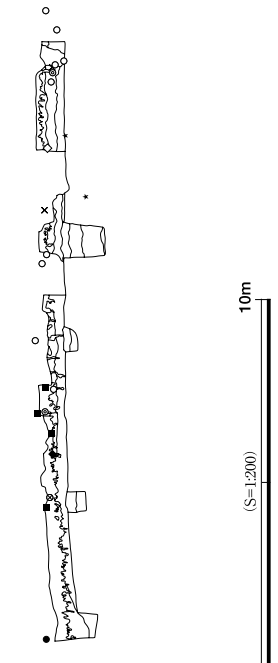
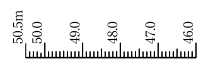
■

.



第74圖 F区 黑曜石 器種別分布

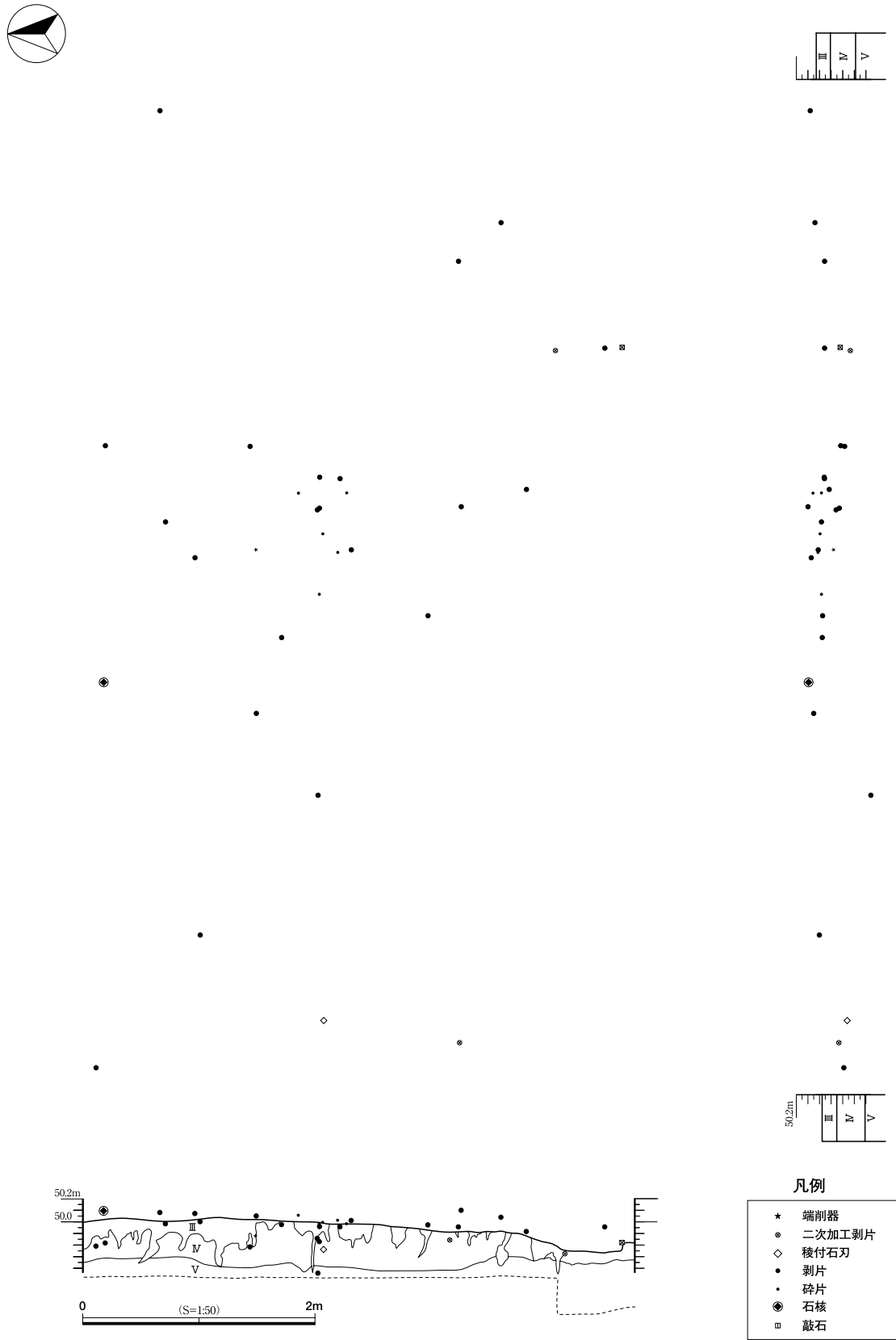




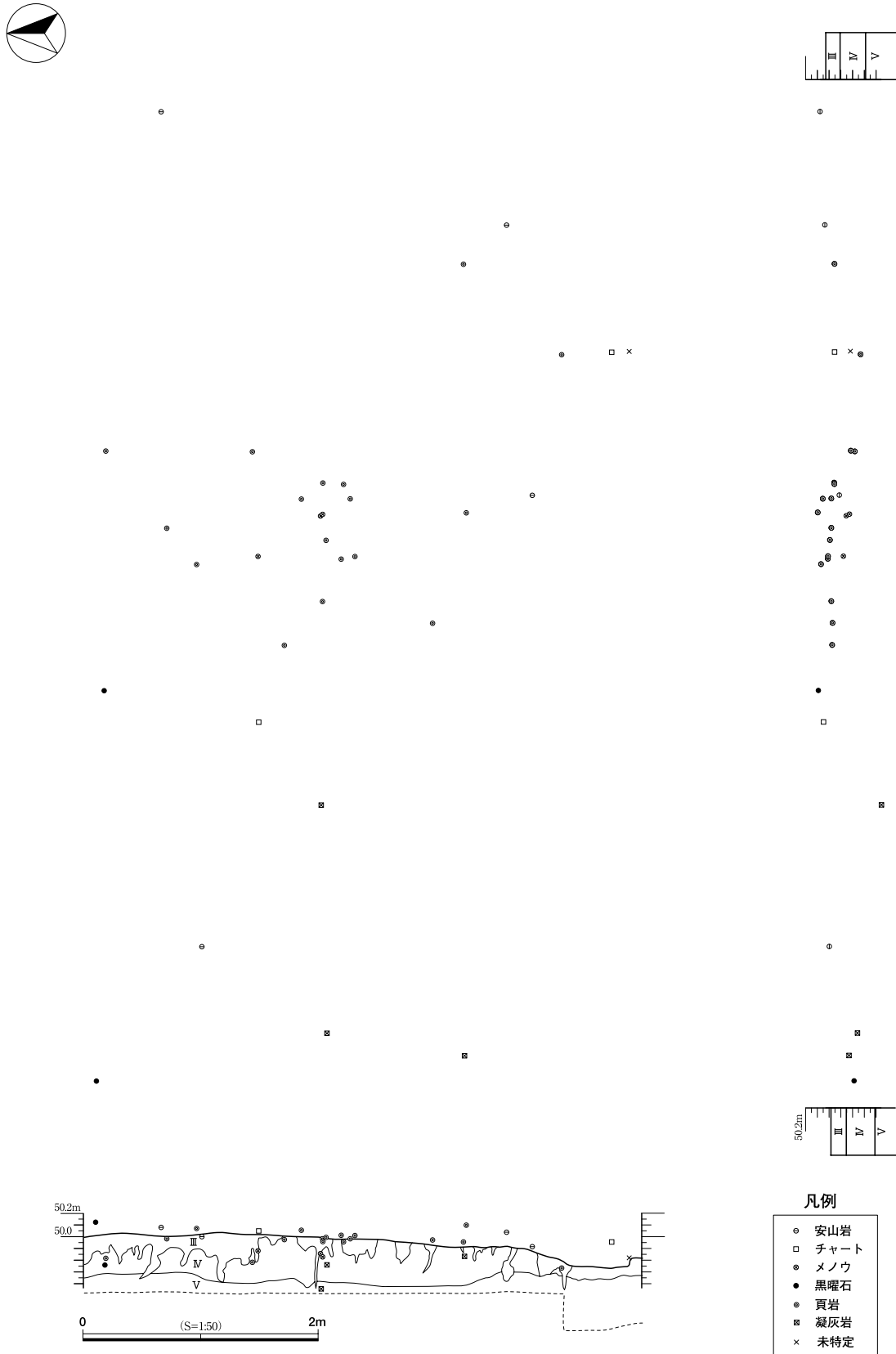
凡例

- 神津島恩地島郡
- * 鎌訪屋ヶ台群
- ◇ 和田小深沢群
- 和田鷹山群
- ◆ 和田土屋橋西群
- ◎ 和田土屋橋南群
- ⊠ 和田土屋橋北群
- 和田芙蓉ツイト群
- 蓼科冷山群
- ⊙ 箱根洞窟群
- × 推定不可

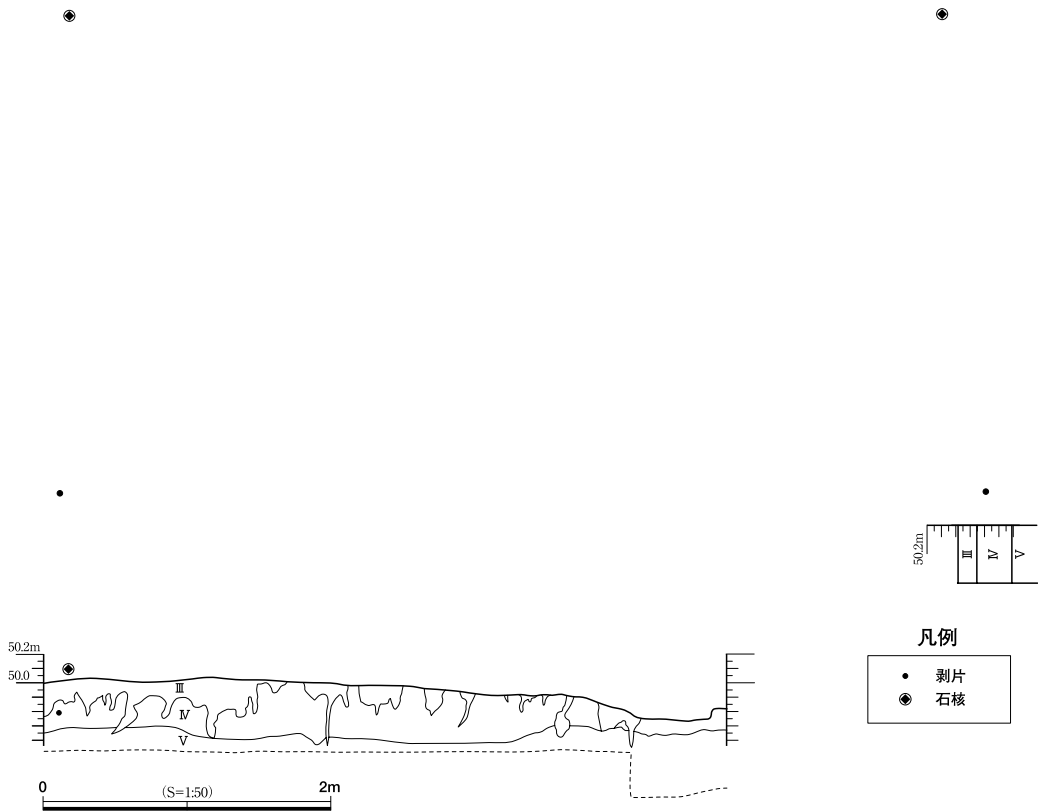
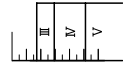
第75図 F区 黒曜石 産地別分布



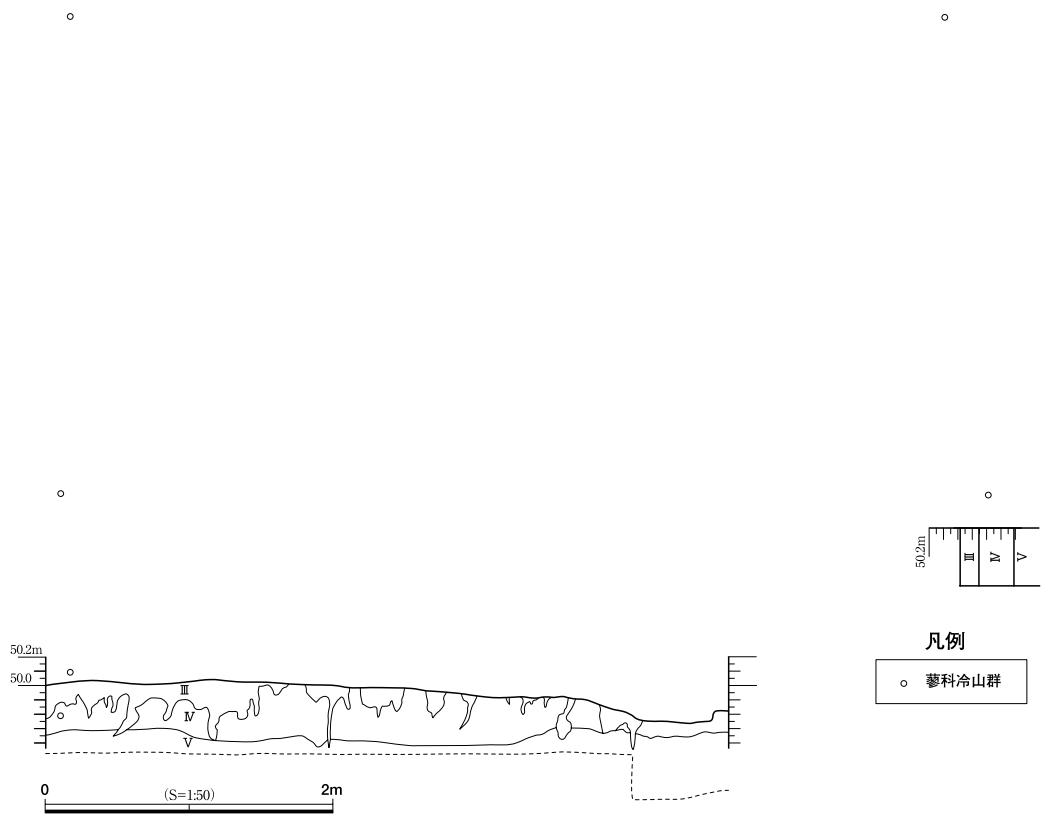
第76図 F区 石器集中1 器種別分布



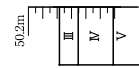
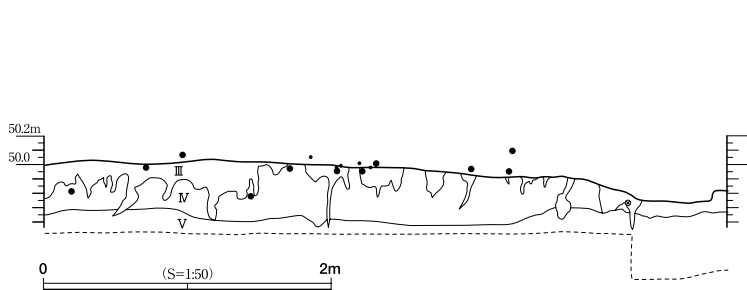
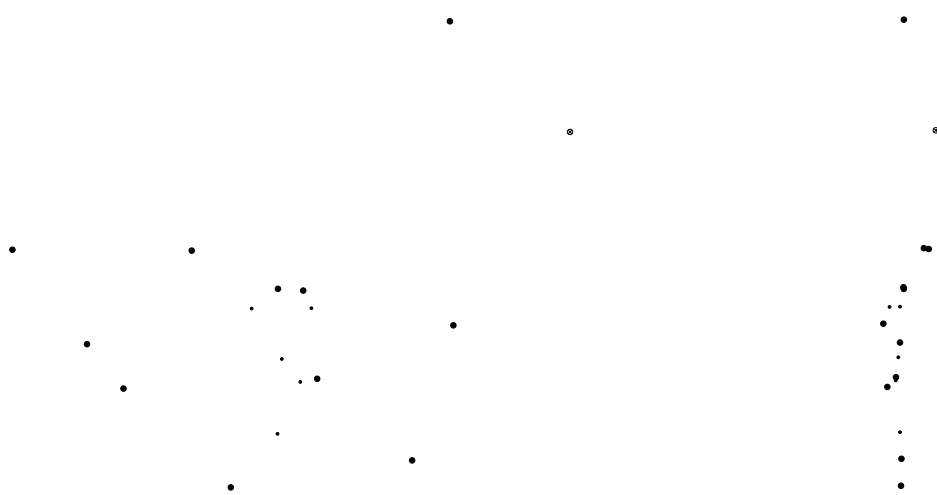
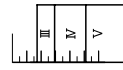
第77図 F区 石器集中1 石材別分布



第78図 F区 石器集中1 黒曜石 器種別分布



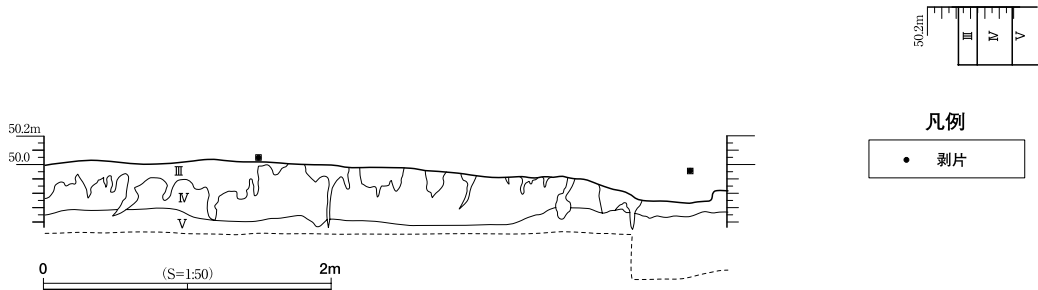
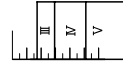
第79図 F区 石器集中1 黒曜石 産地別分布



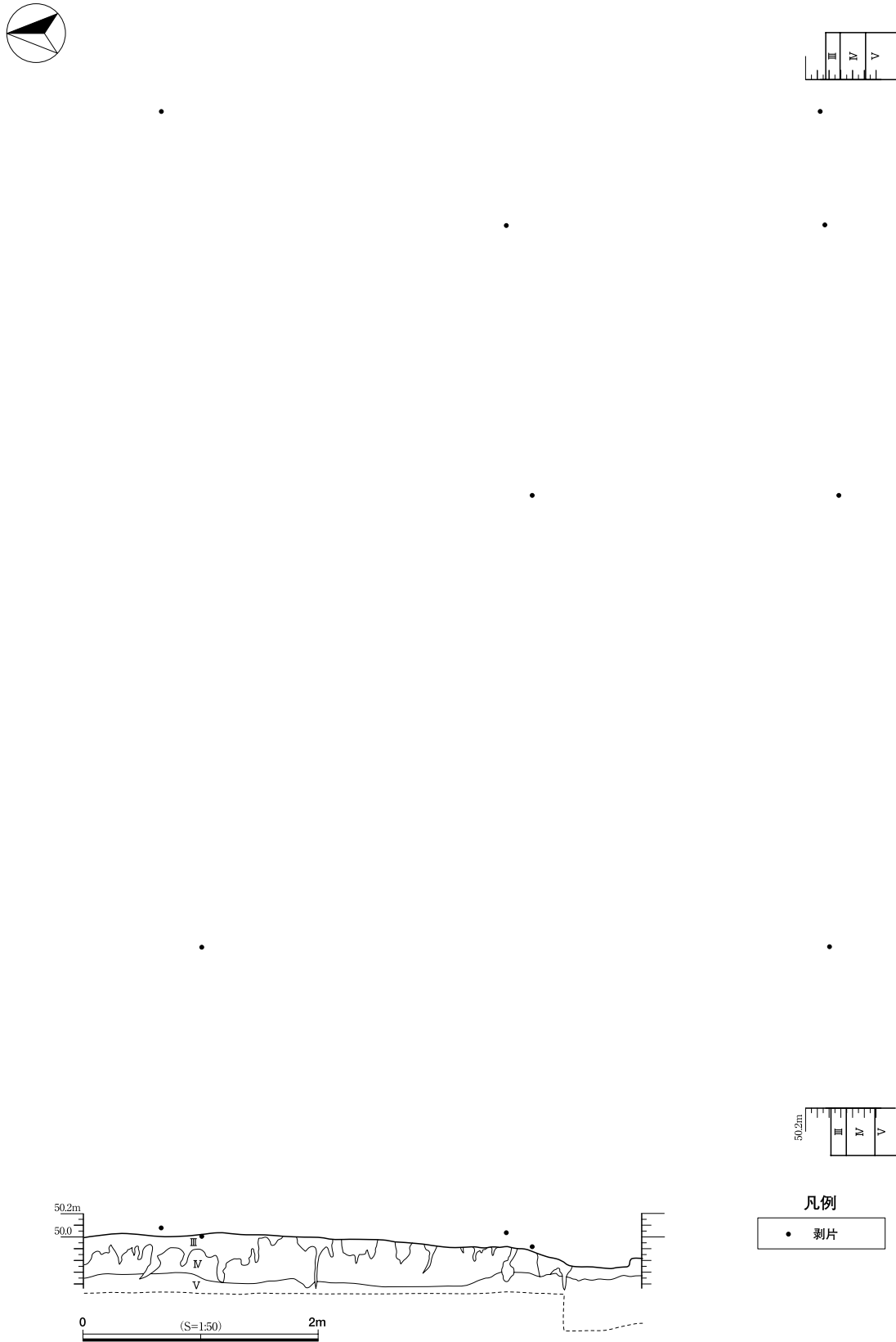
凡例

- 二次加工剥片
- 剥片
- 碎片

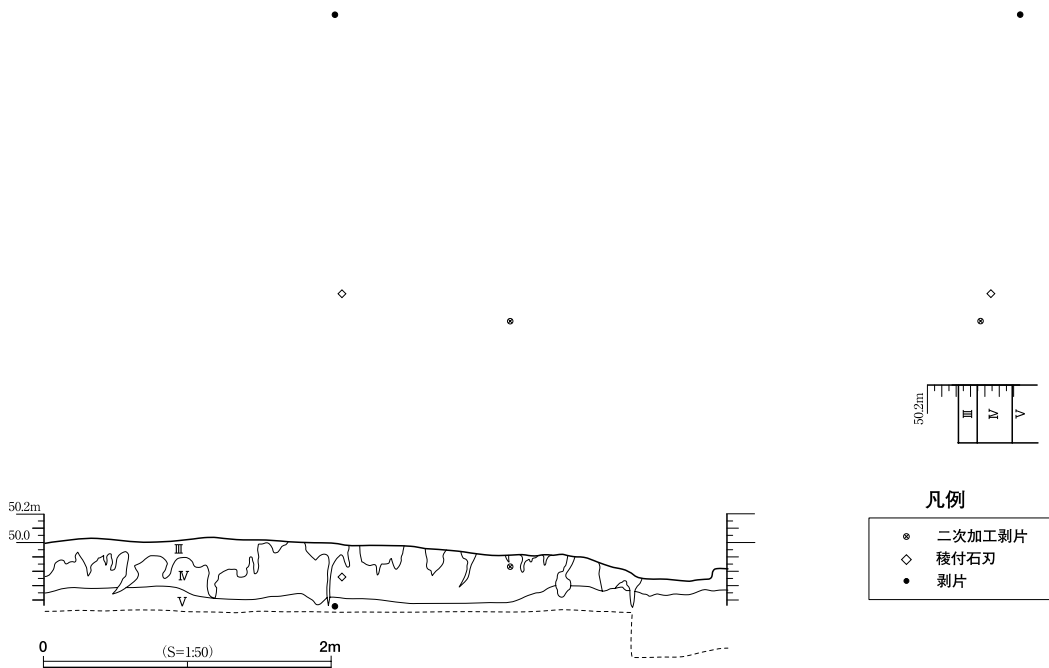
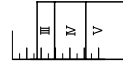
第80図 F区 石器集中1 頁岩 器種別分布



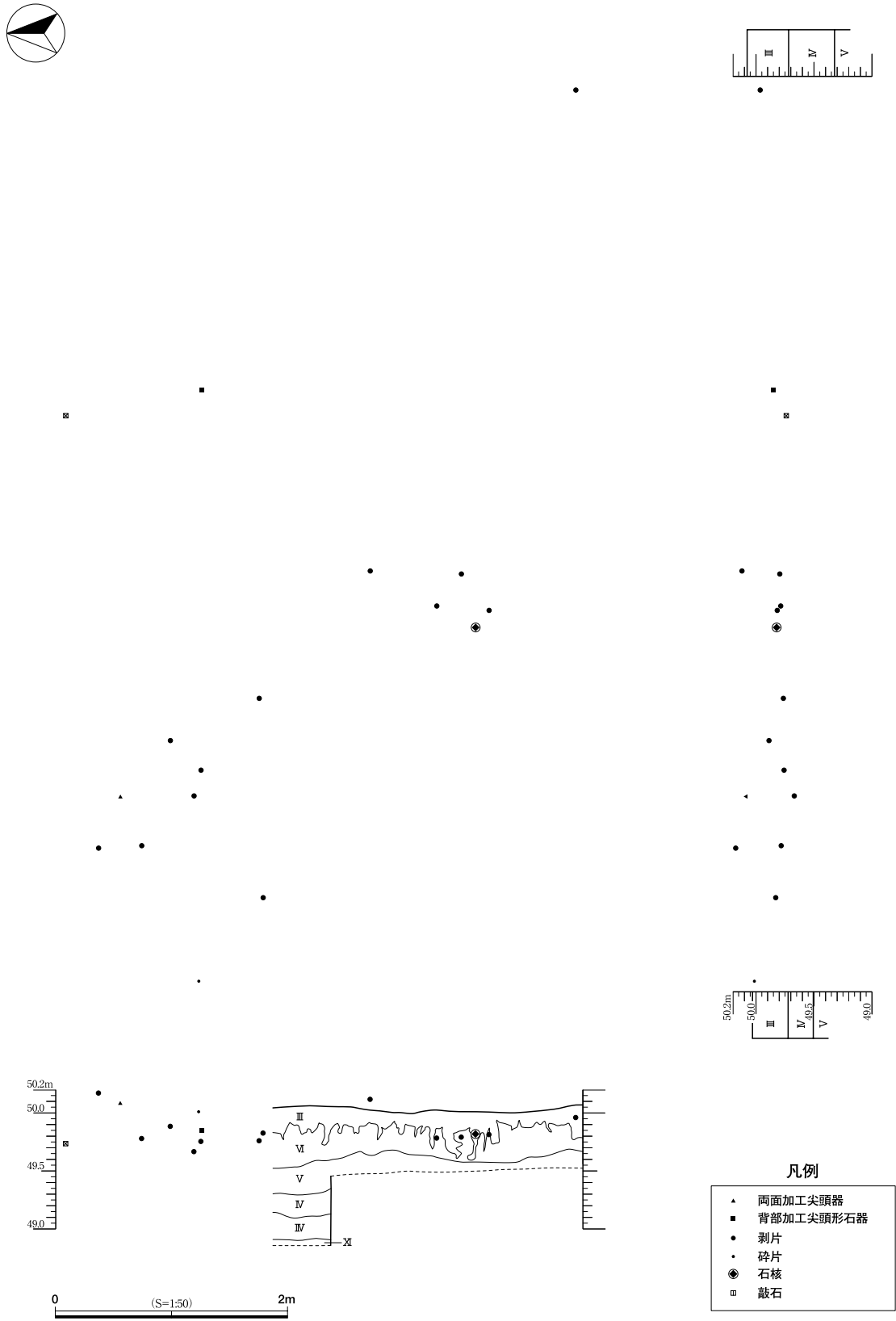
第81図 F区 石器集中1 チャート 器種別分布



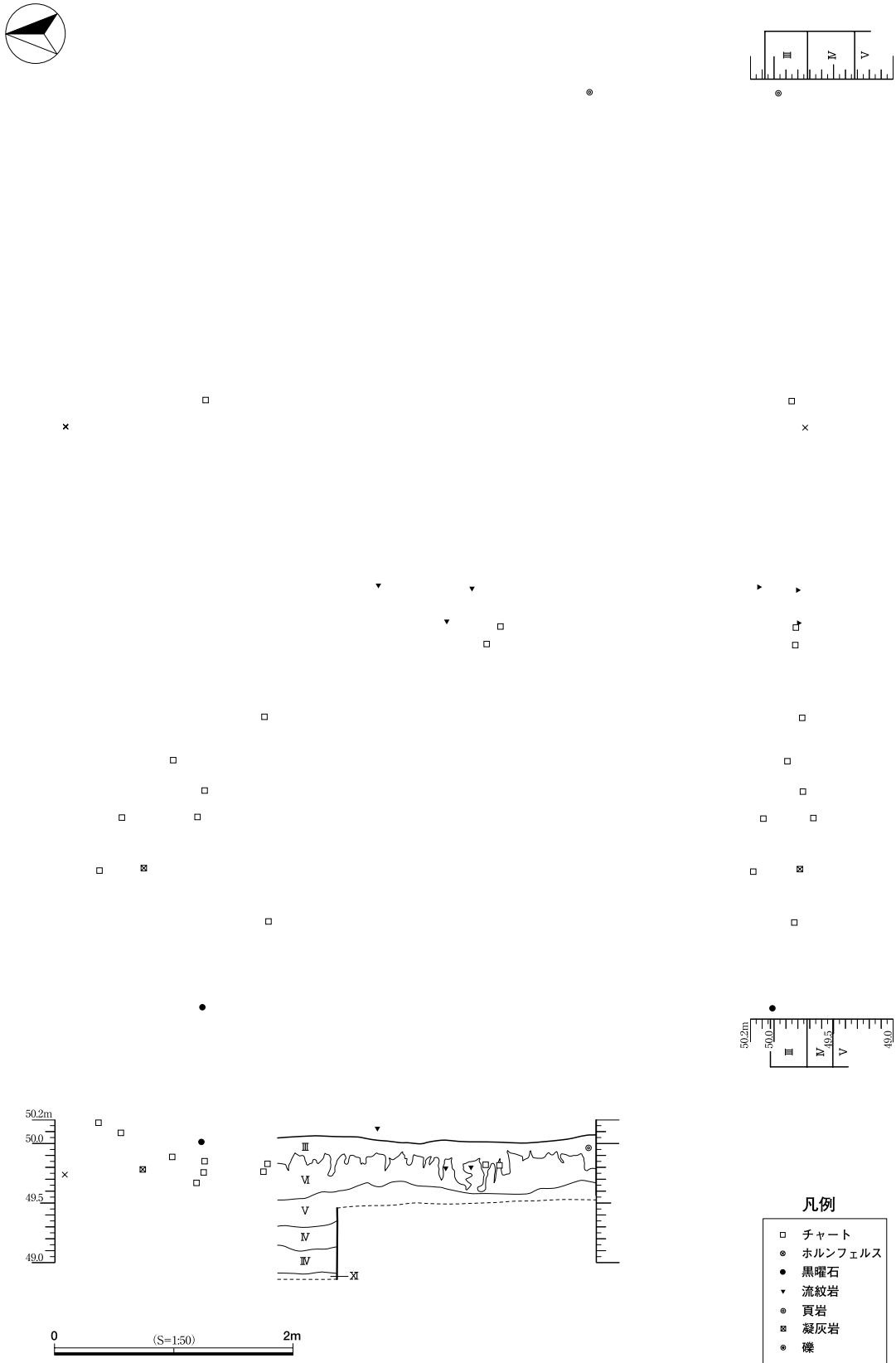
第82図 F区 石器集中1 安山岩 器種別分布



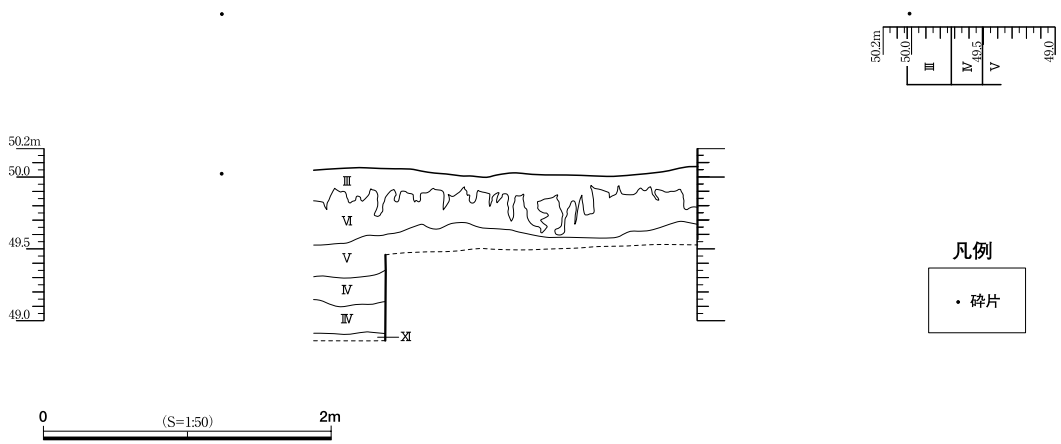
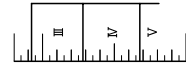
第83図 F区 石器集中1 凝灰岩 器種別分布



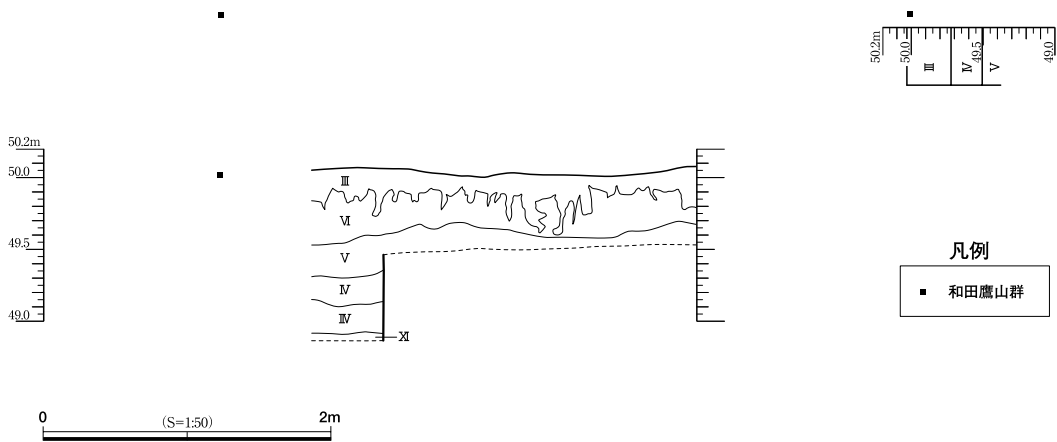
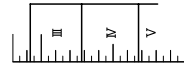
第84図 F区 石器集中2 器種別分布



第85図 F区 石器集中2 石材別分布



第86図 F区 石器集中2 黒曜石 器種別分布

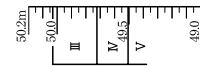
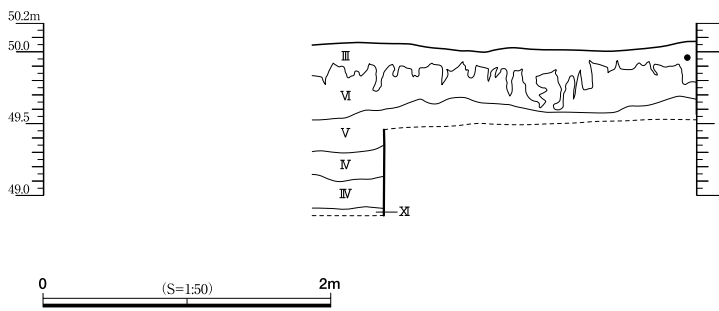


第87図 F区 石器集中2 黒曜石 産地別分布



•

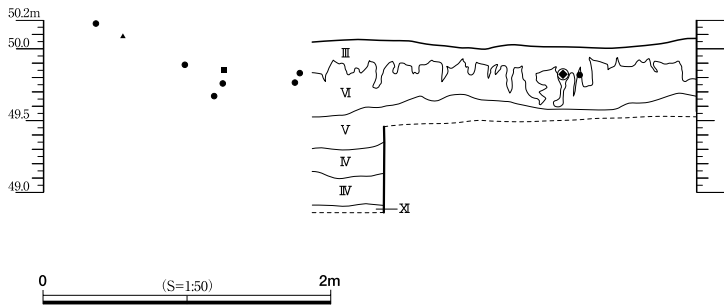
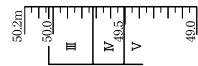
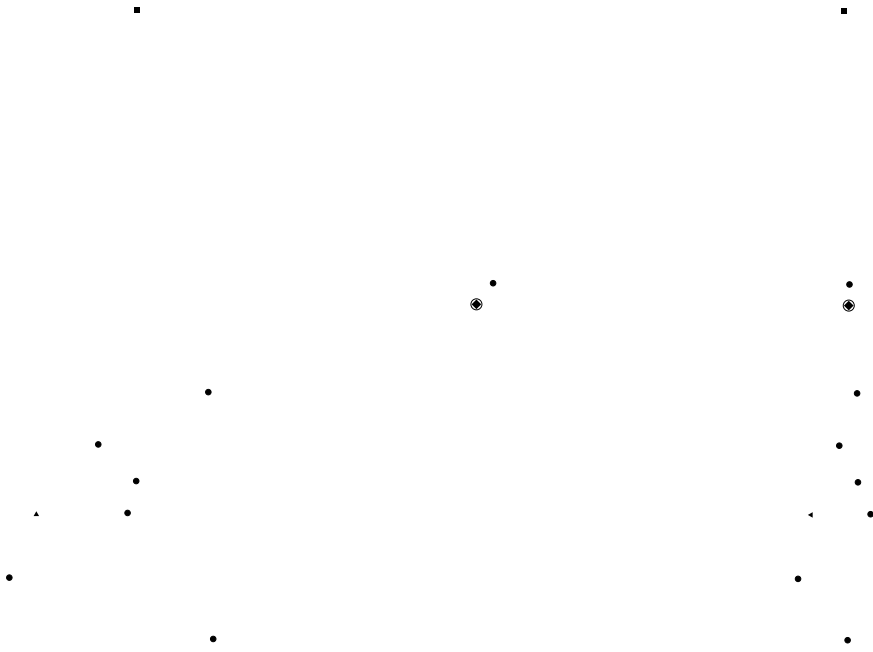
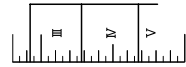
•



凡例

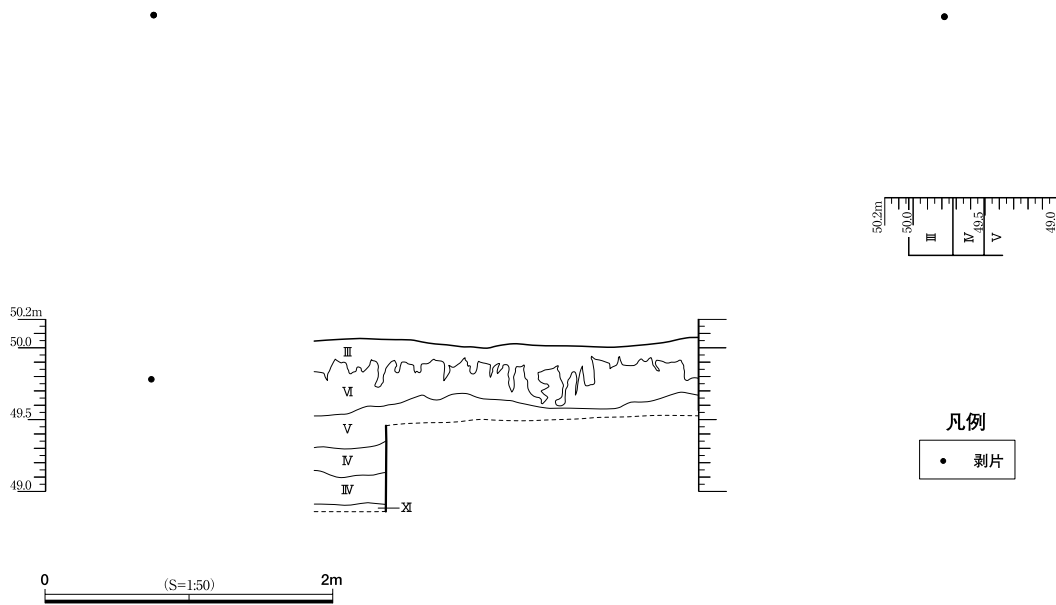
• 剥片

第88図 F区 石器集中2 頁岩 器種別分布

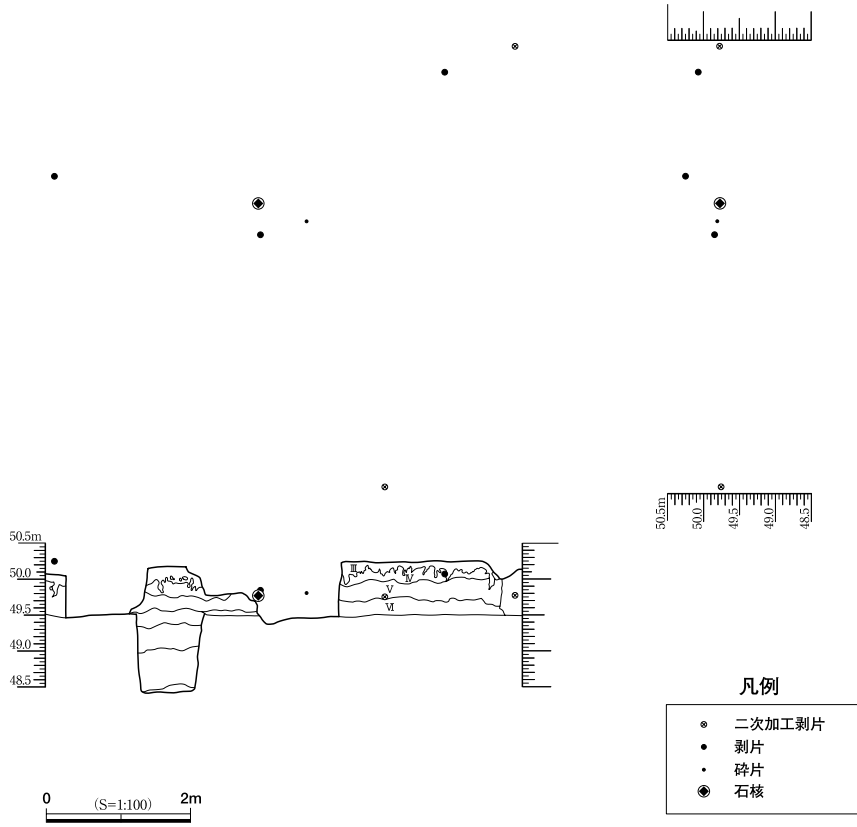


- 凡例
- ▲ 両面加工尖頭器
 - 背部加工尖頭形石器
 - 剥片
 - 碎片
 - ◎ 石核
 - ▣ 敲石

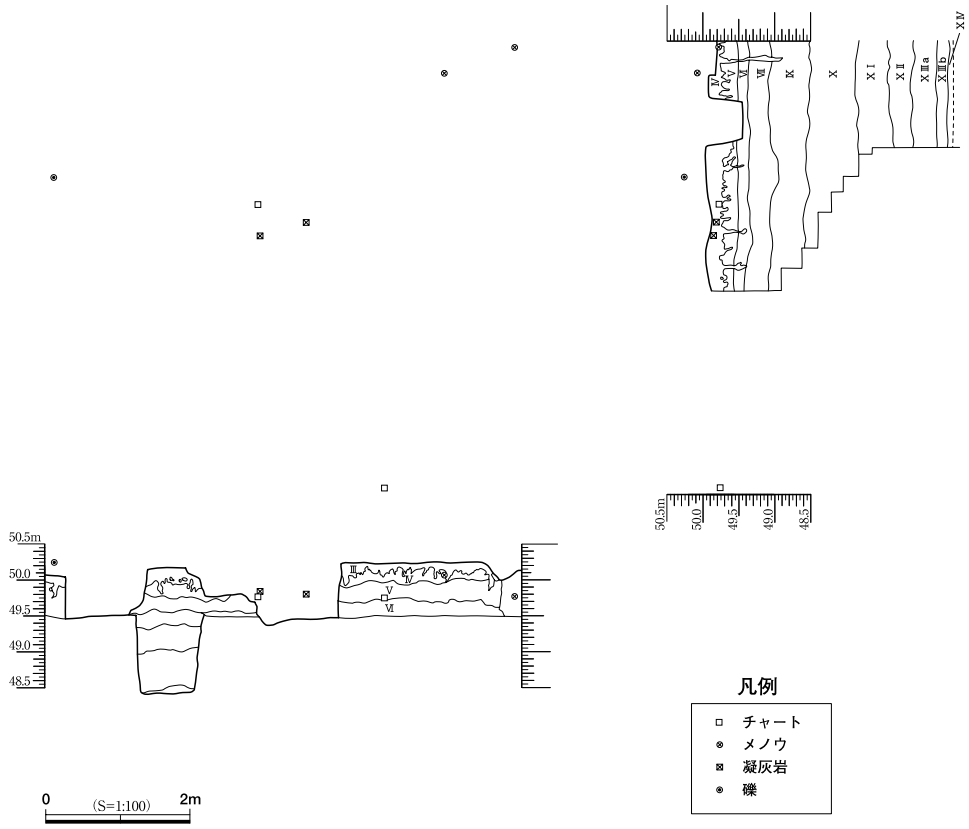
第89図 F区 石器集中2 チャート 器種別分布



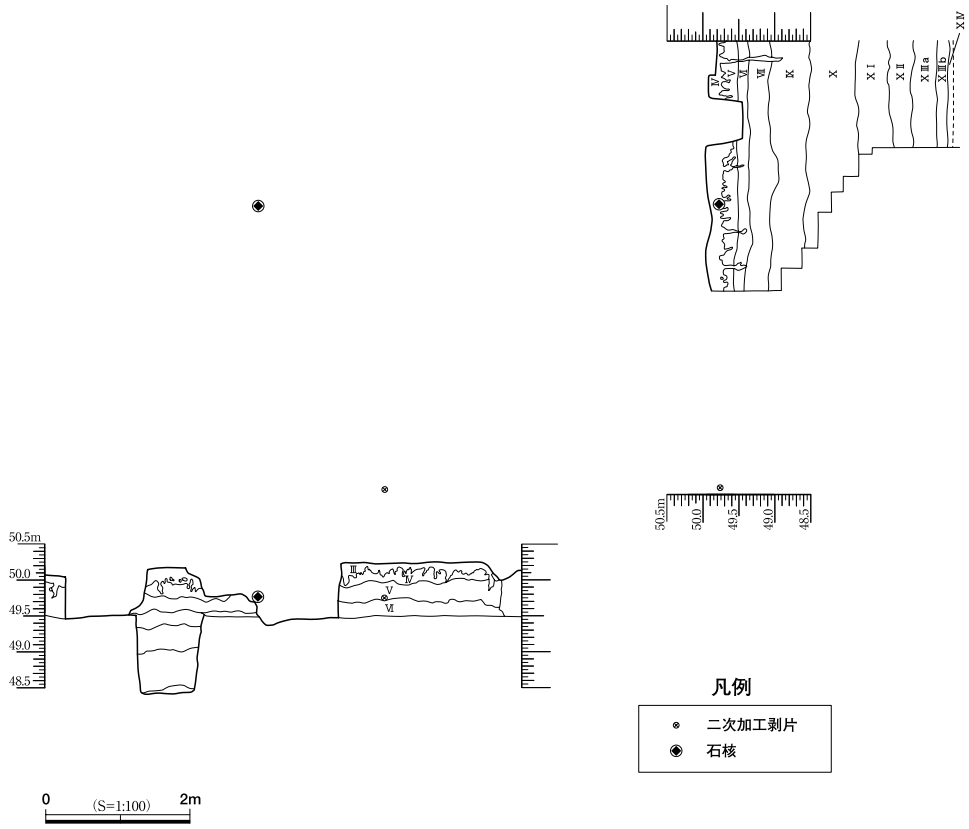
第90図 F区 石器集中2 凝灰岩 器種別分布



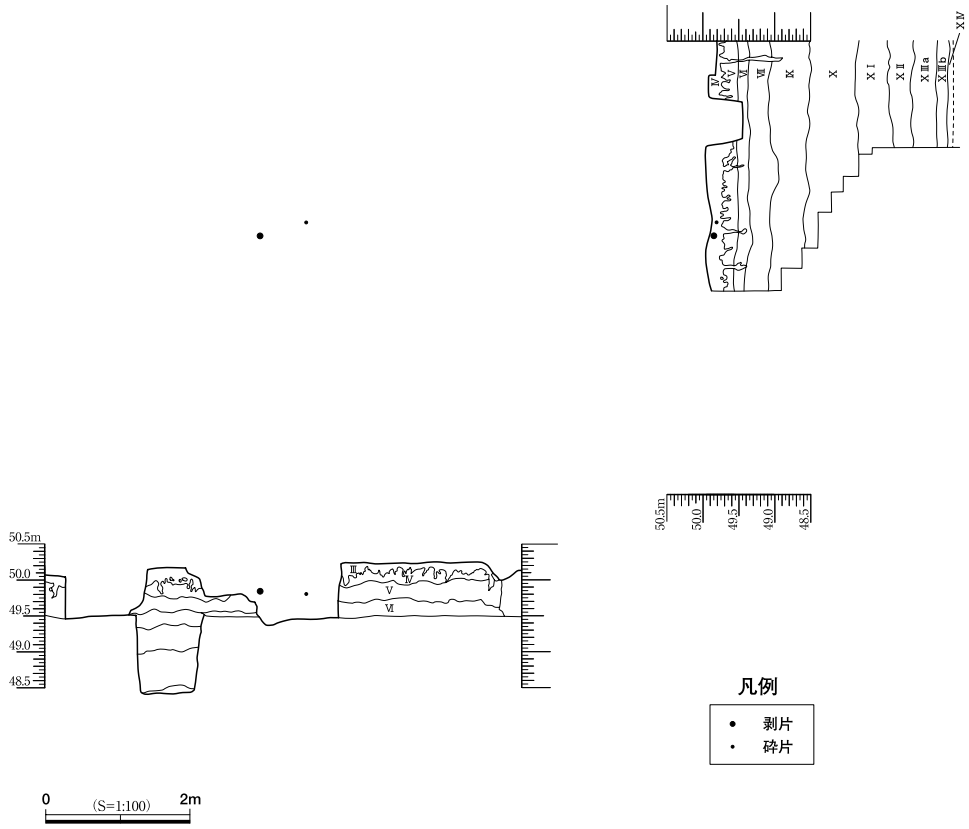
第91図 F区 石器集中3 器種別分布



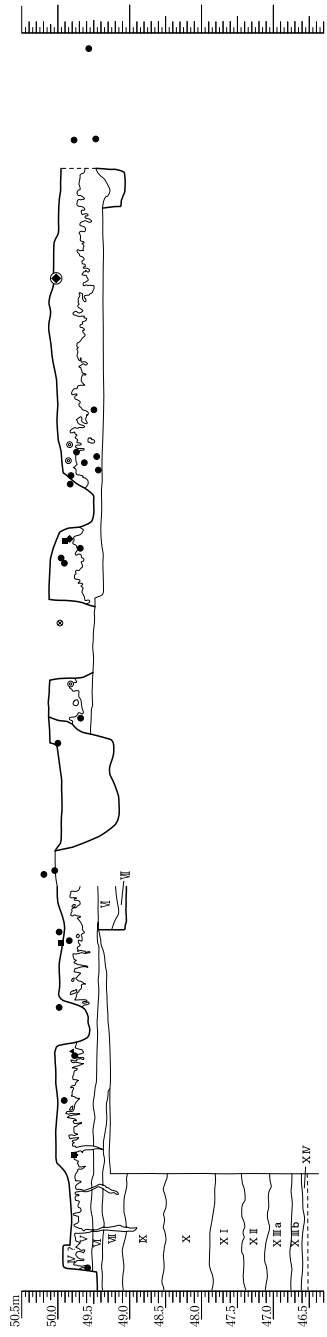
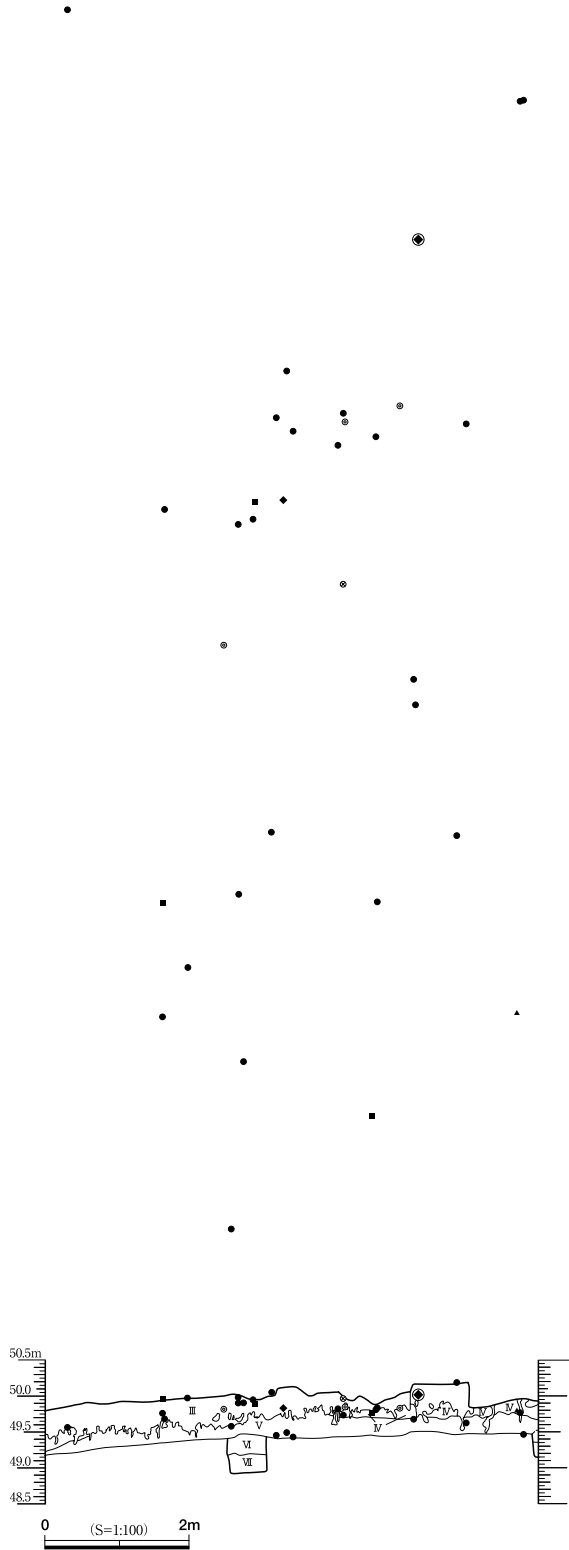
第92図 F区 石器集中3 石材別分布



第93図 F区 石器集中3 チャート 器種別分布



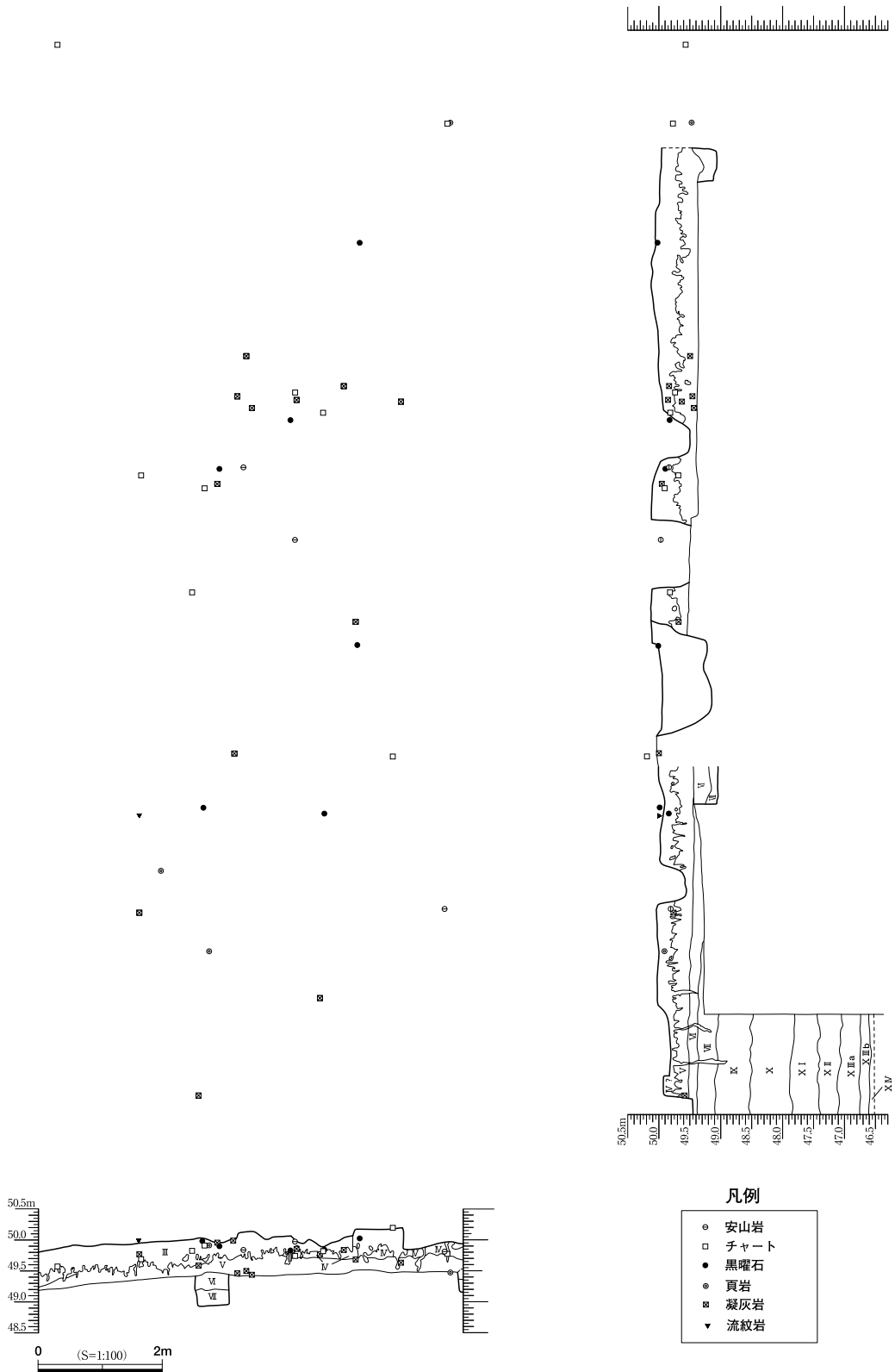
第94図 F区 石器集中3 凝灰岩 器種別分布



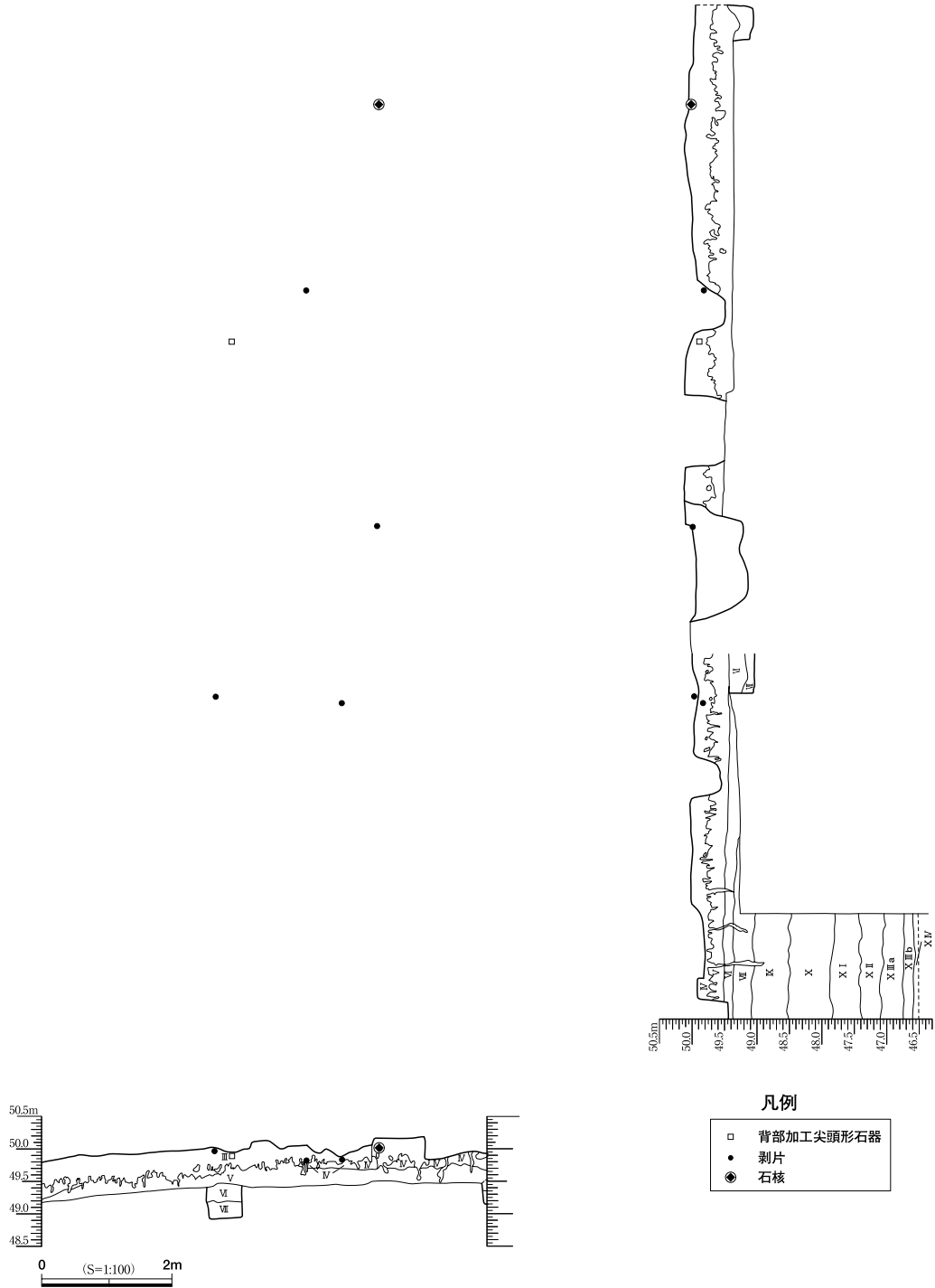
凡例

- ▲ 両面加工尖頭器
- 背部加工尖頭形石器
- ◆ 基部加工剥片
- ◊ 二次加工剥片
- 石刃
- 剥片
- ◎ 石核

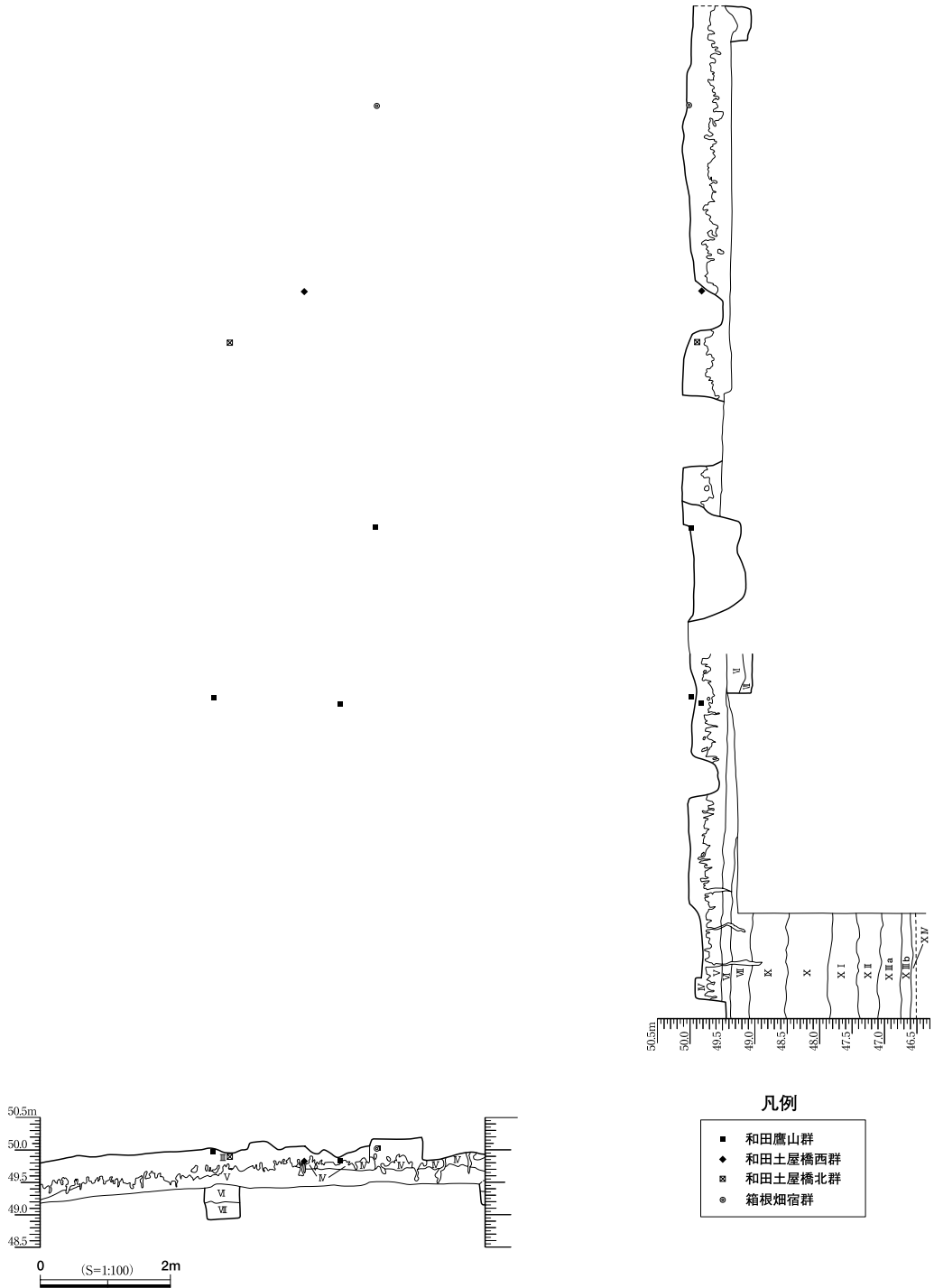
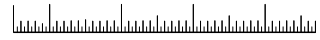
第95図 F区 石器集中3 器種別分布



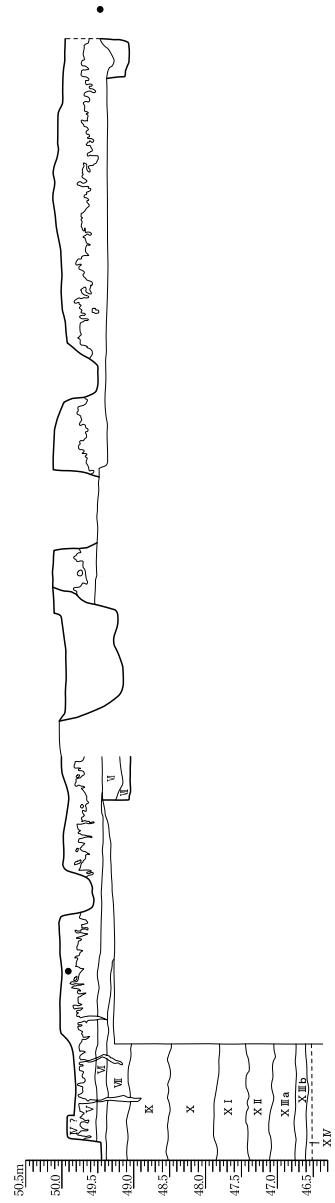
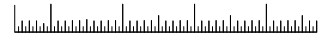
第96図 F区 石器集中4 石材別分布



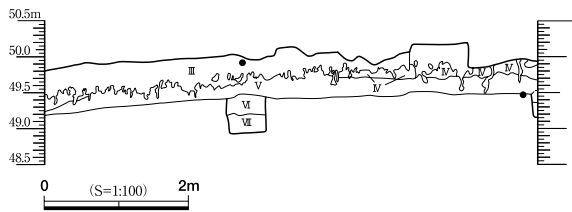
第97図 F区 石器集中4 黒曜石 器種別分布



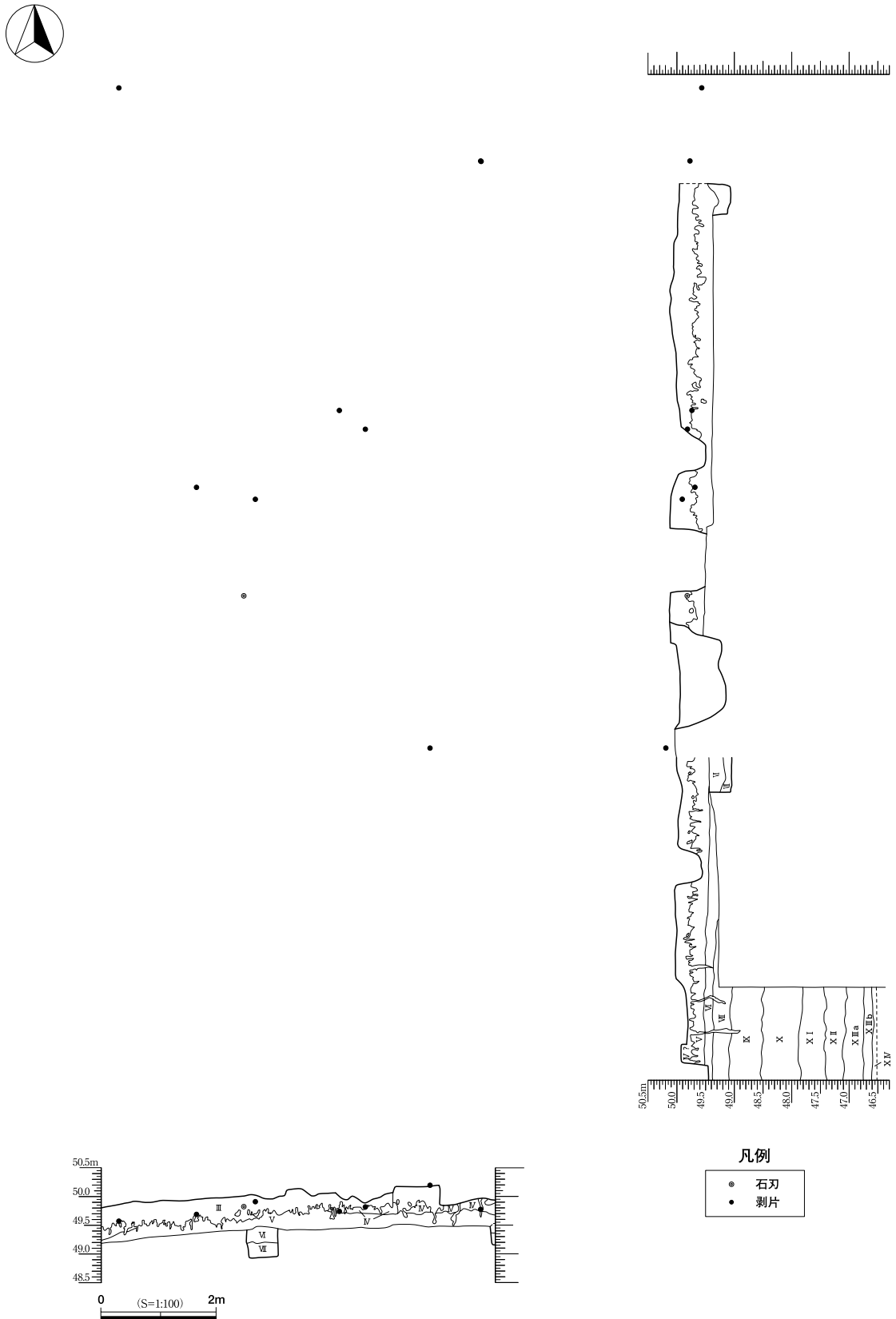
第98図 F区 石器集中4 黒曜石 産地別分布



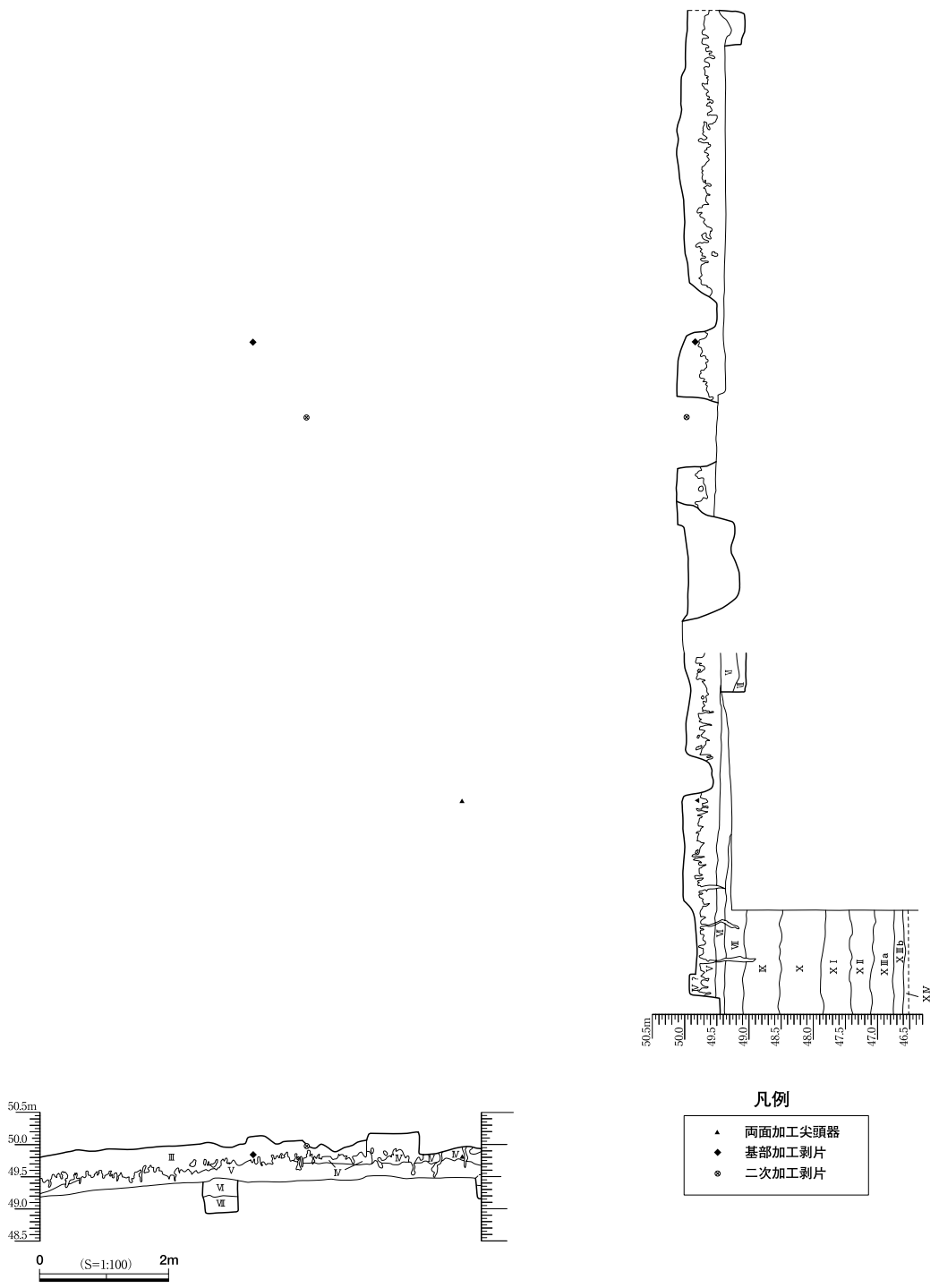
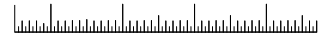
凡例
 • 剥片



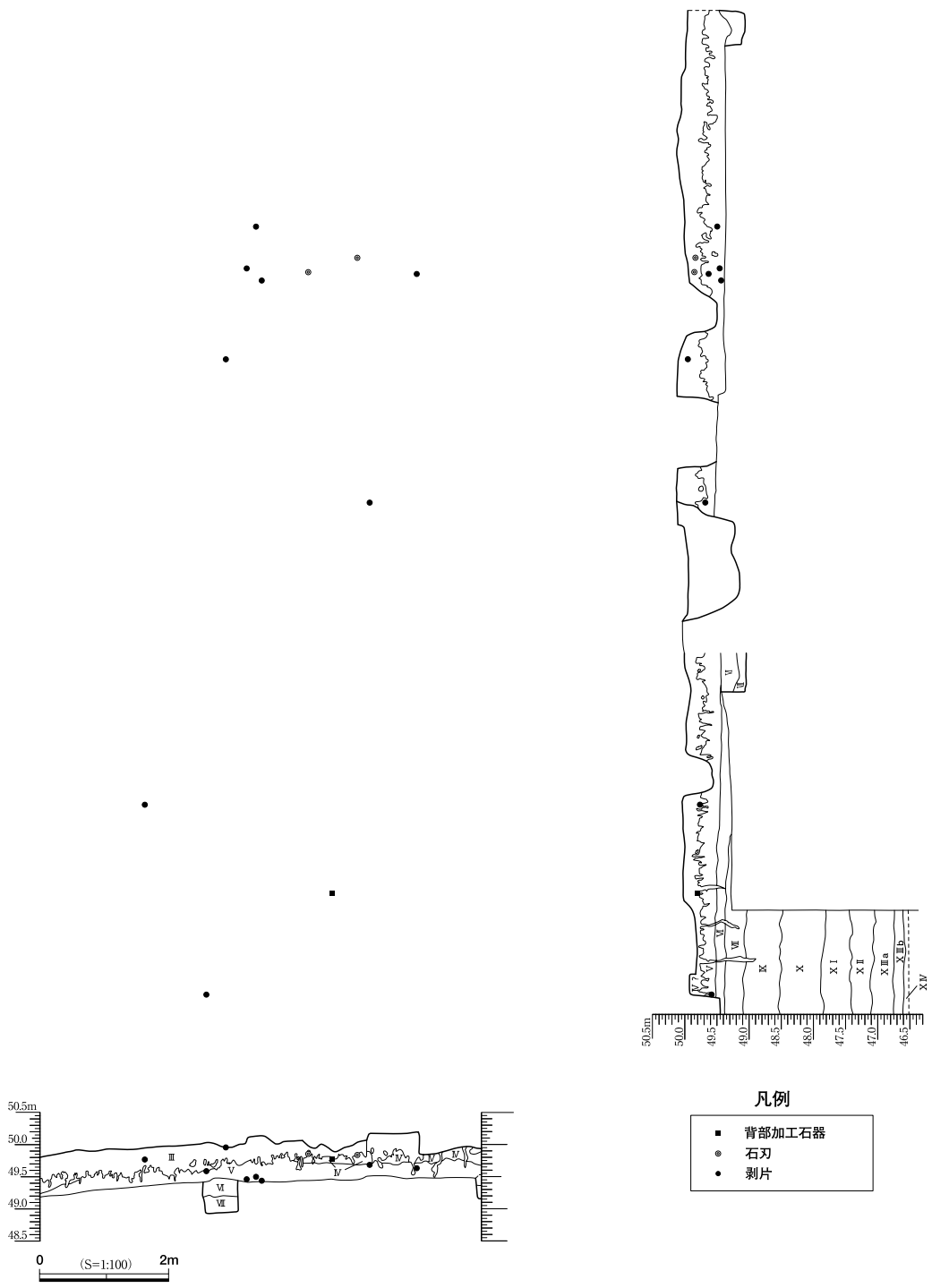
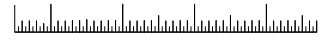
第99図 F区 石器集中4 頁岩 器種別分布



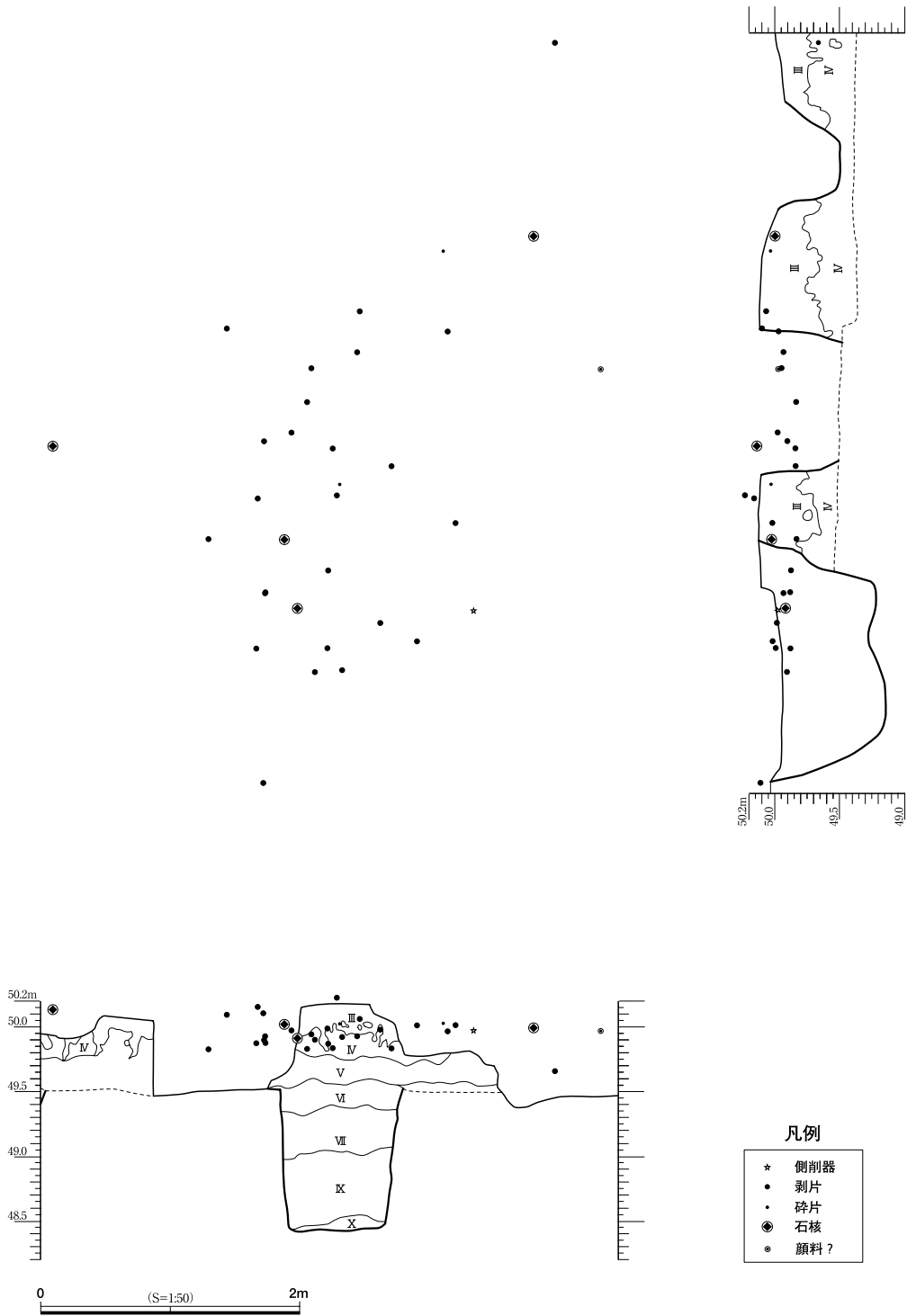
第100図 F区 石器集中4 チャート 器種別分布



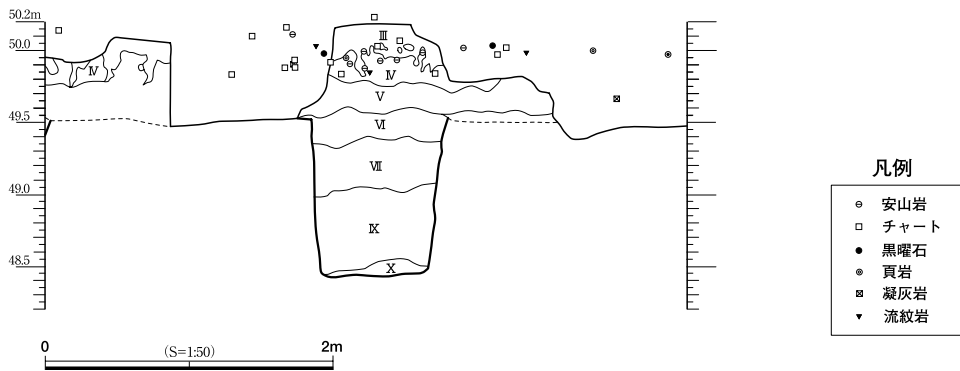
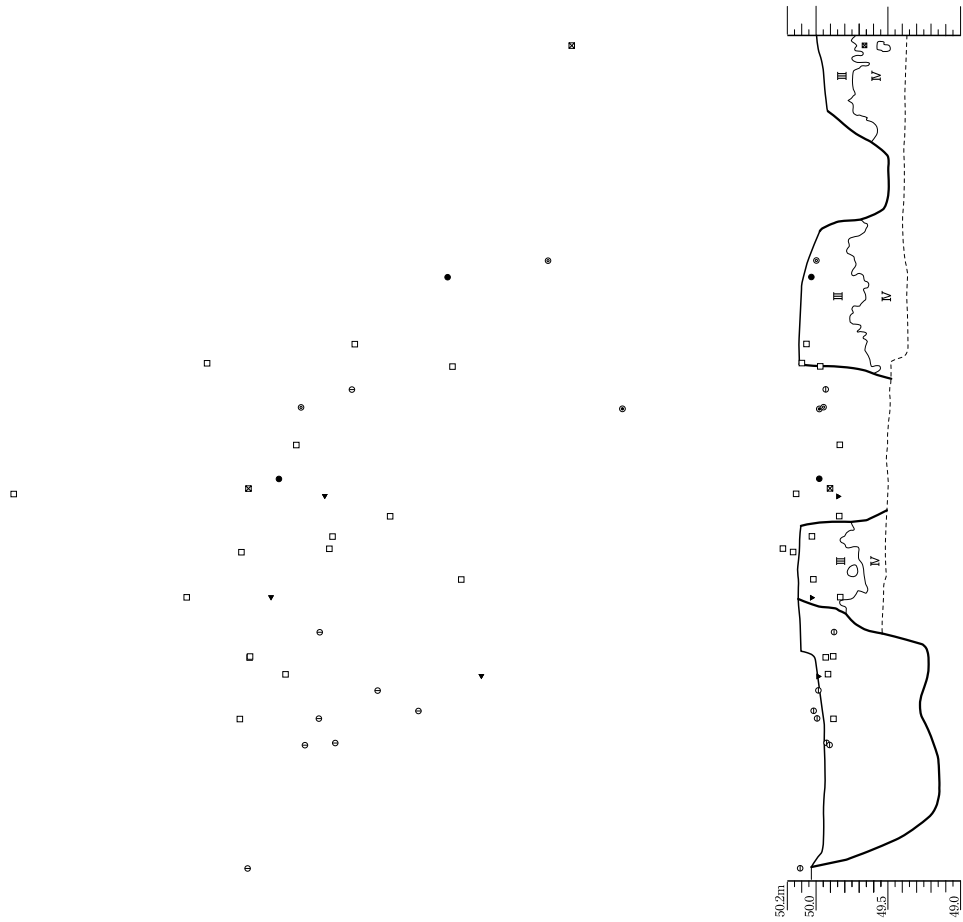
第101図 F区 石器集中4 安山岩 器種別分布



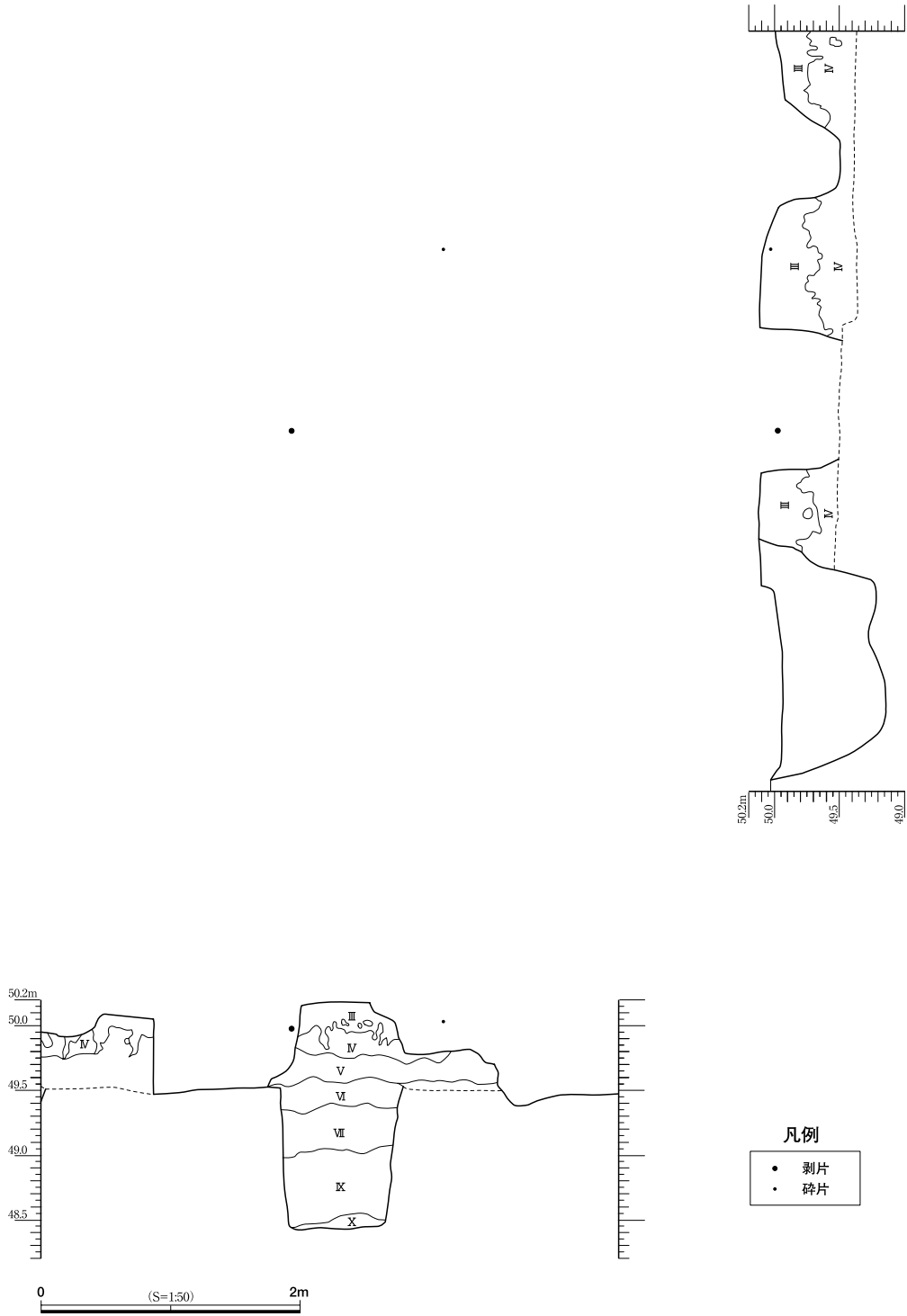
第102図 F区 石器集中4 凝灰岩 器種別分布



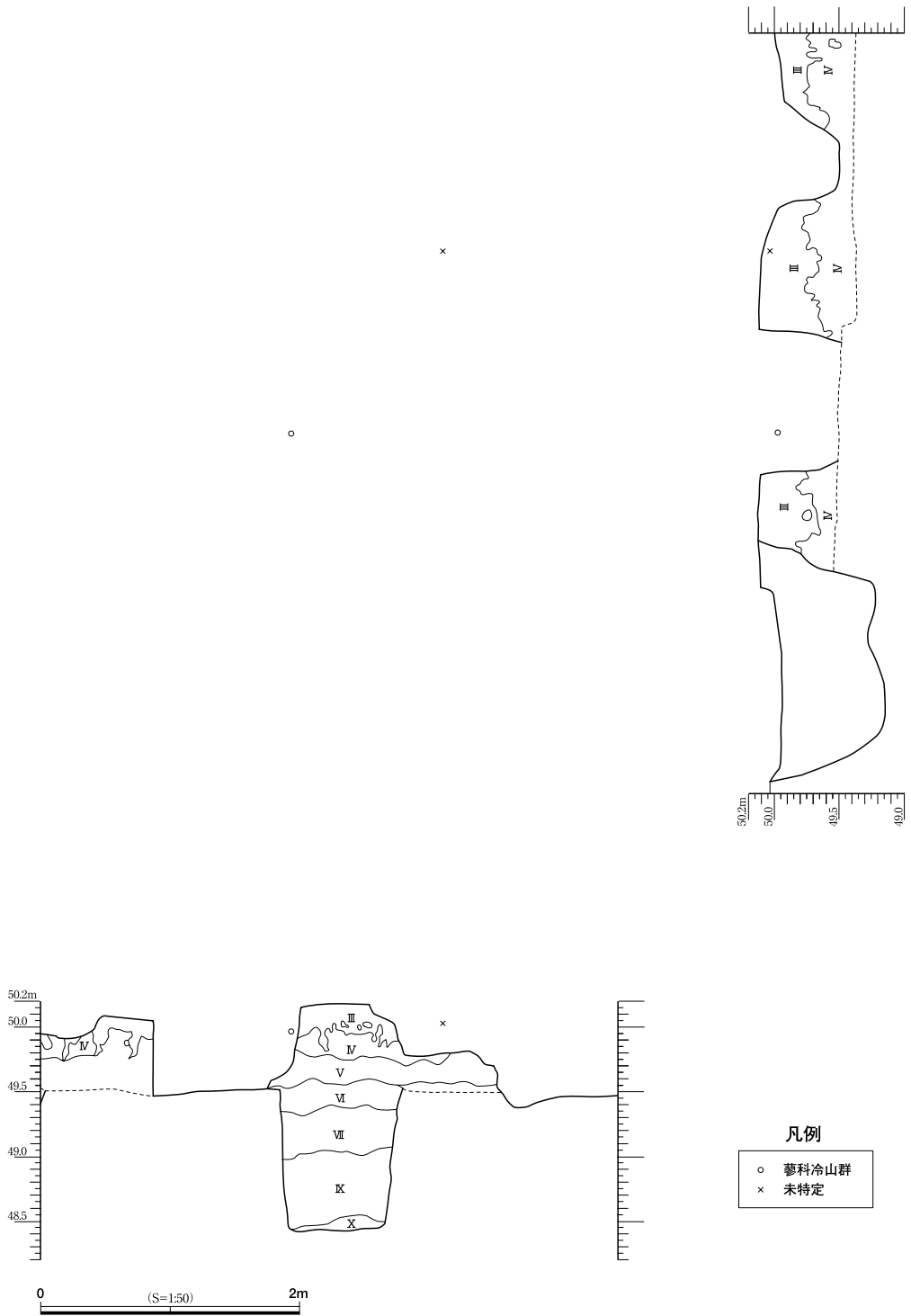
第103圖 F区 石器集中5 器種別分布



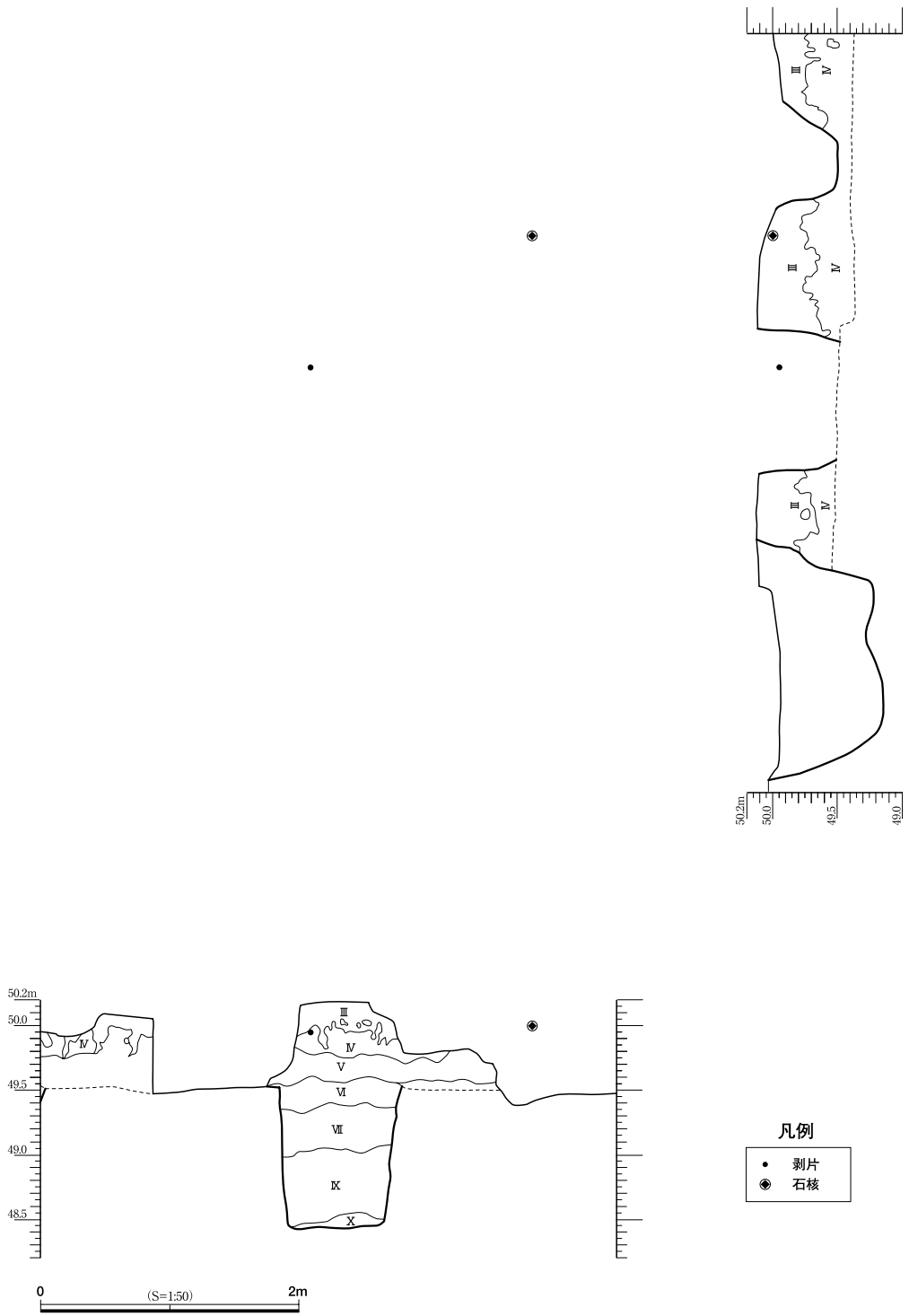
第104図 F区 石器集中5 石材別分布



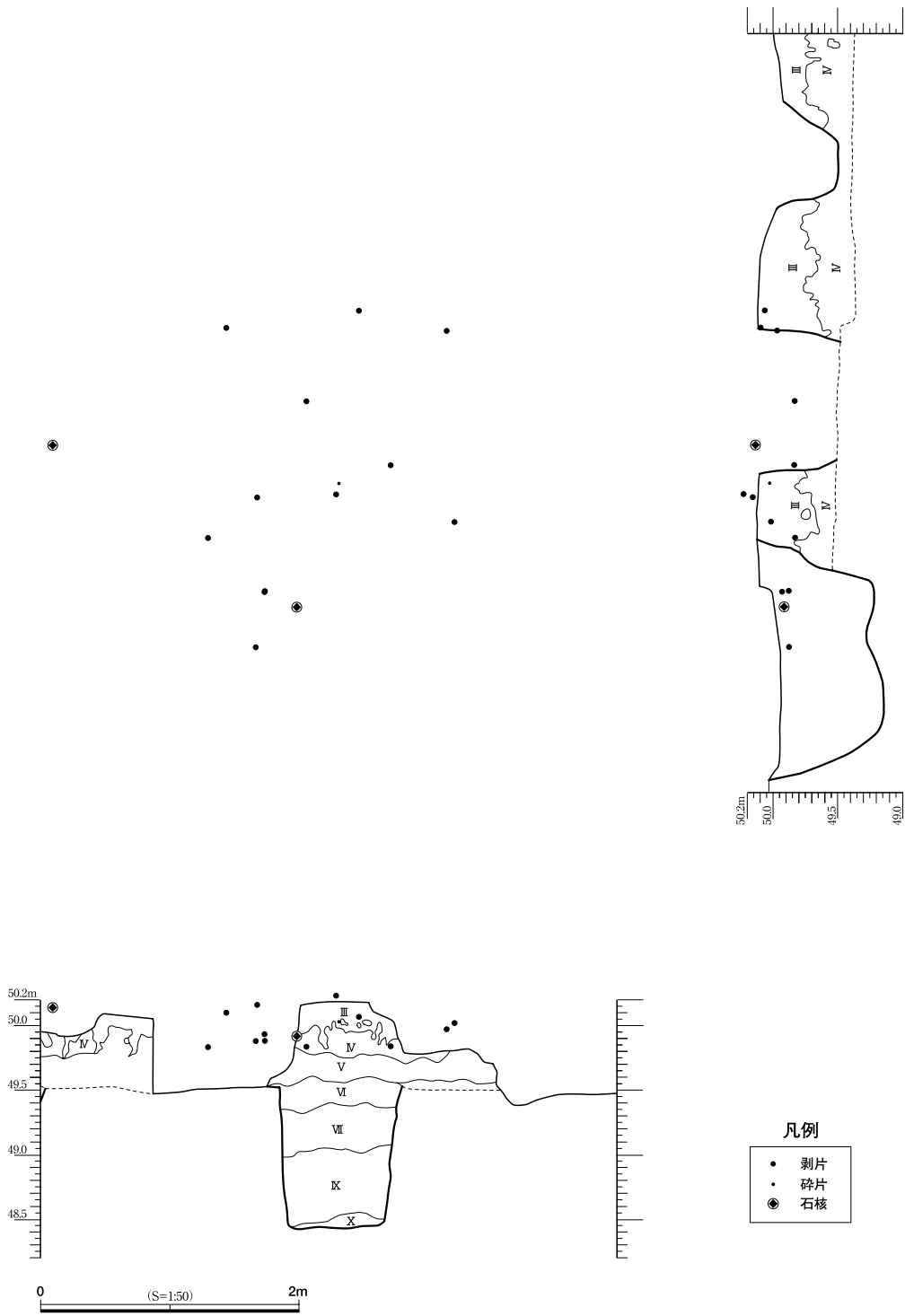
第105図 F区 石器集中5 黒曜石 器種別分布



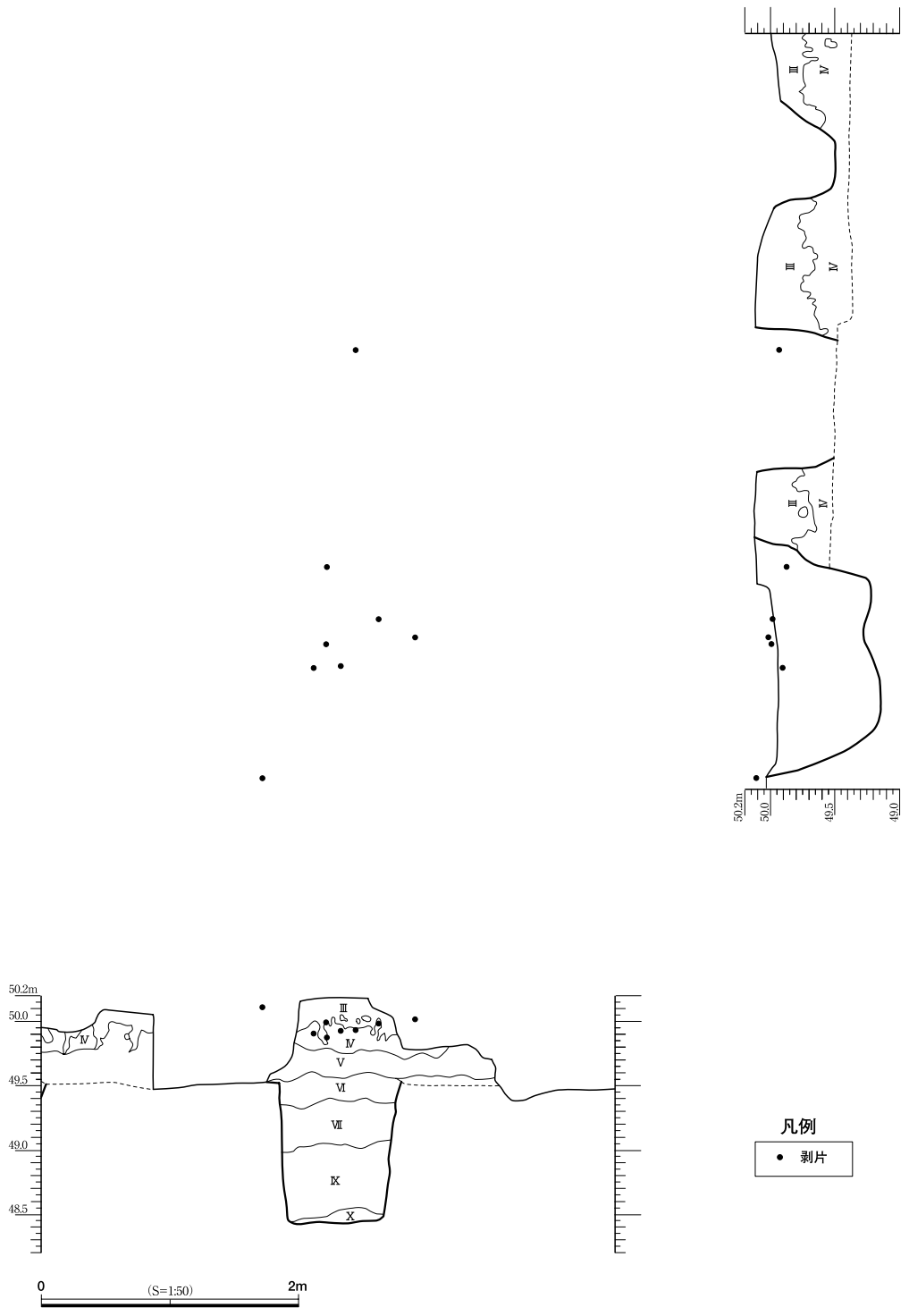
第106図 F区 石器集中5 黒曜石 産地別分布



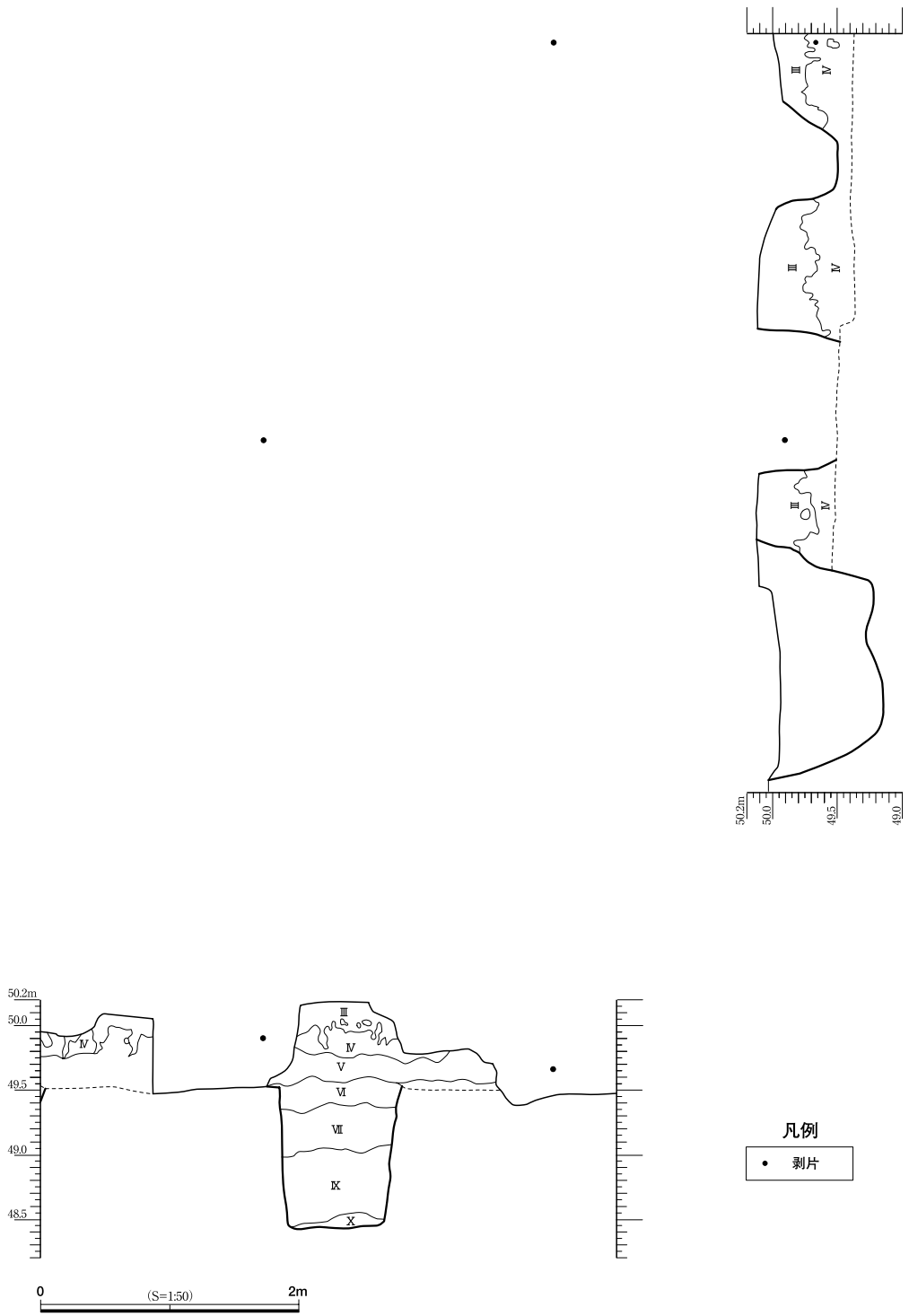
第107图 F区 石器集中5 頁岩 器種別分布



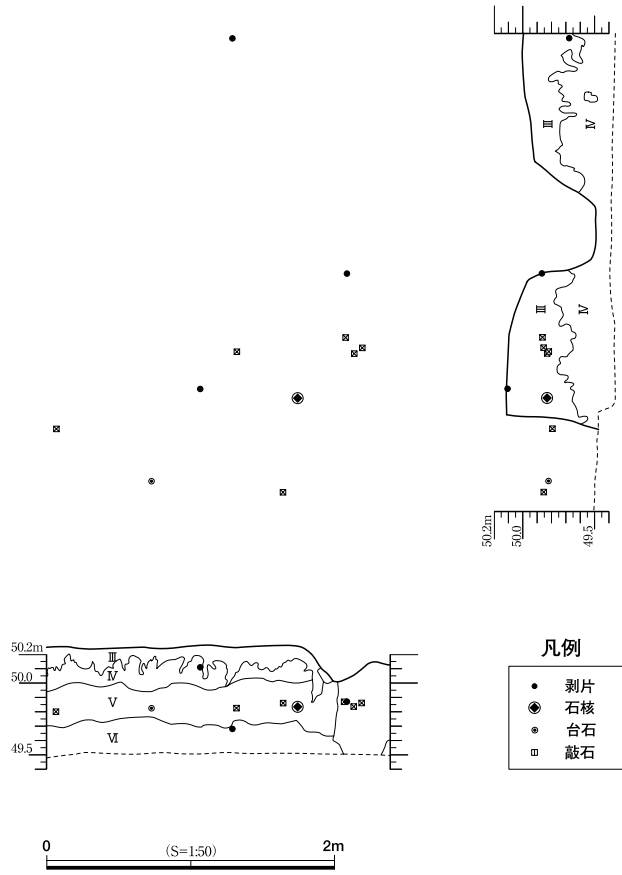
第108図 F区 石器集中5 チャート 器種別分布



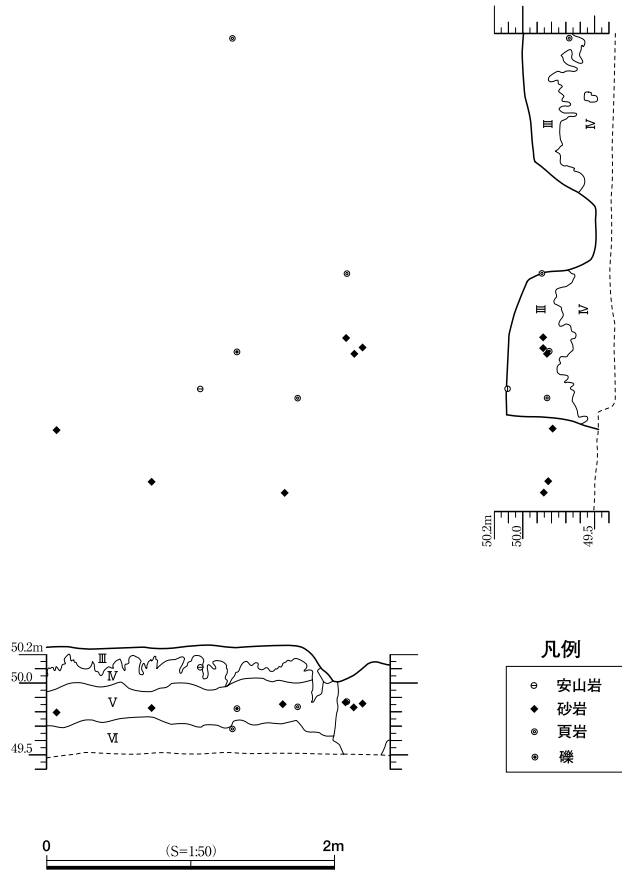
第109図 F区 石器集中5 安山岩 器種別分布



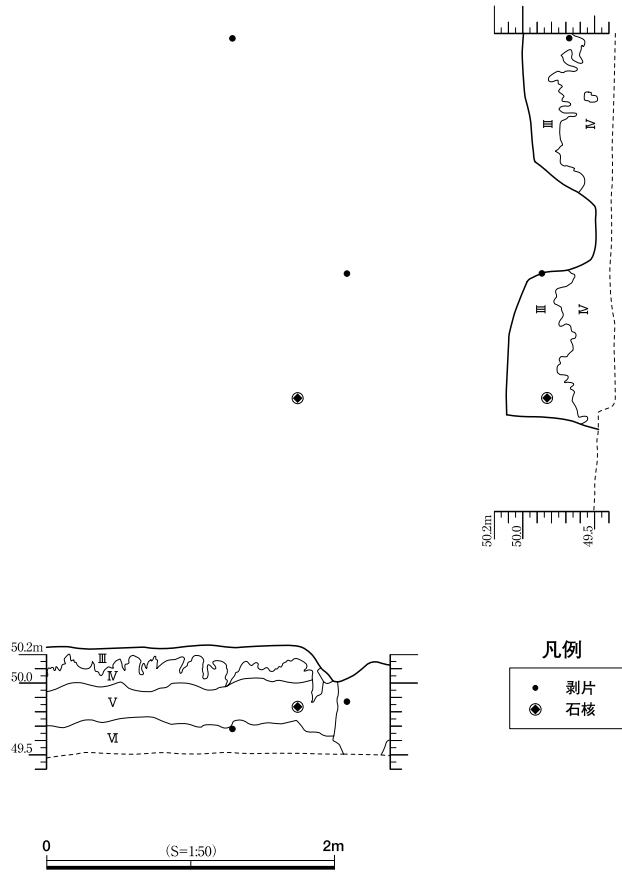
第110図 F区 石器集中5 凝灰岩 器種別分布



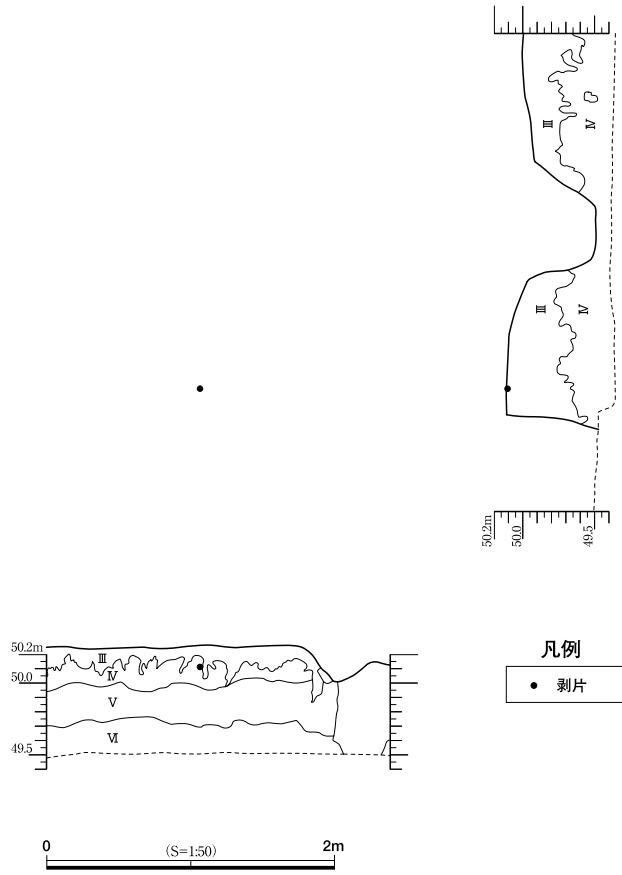
第111图 F区 石器集中6 器種別分布



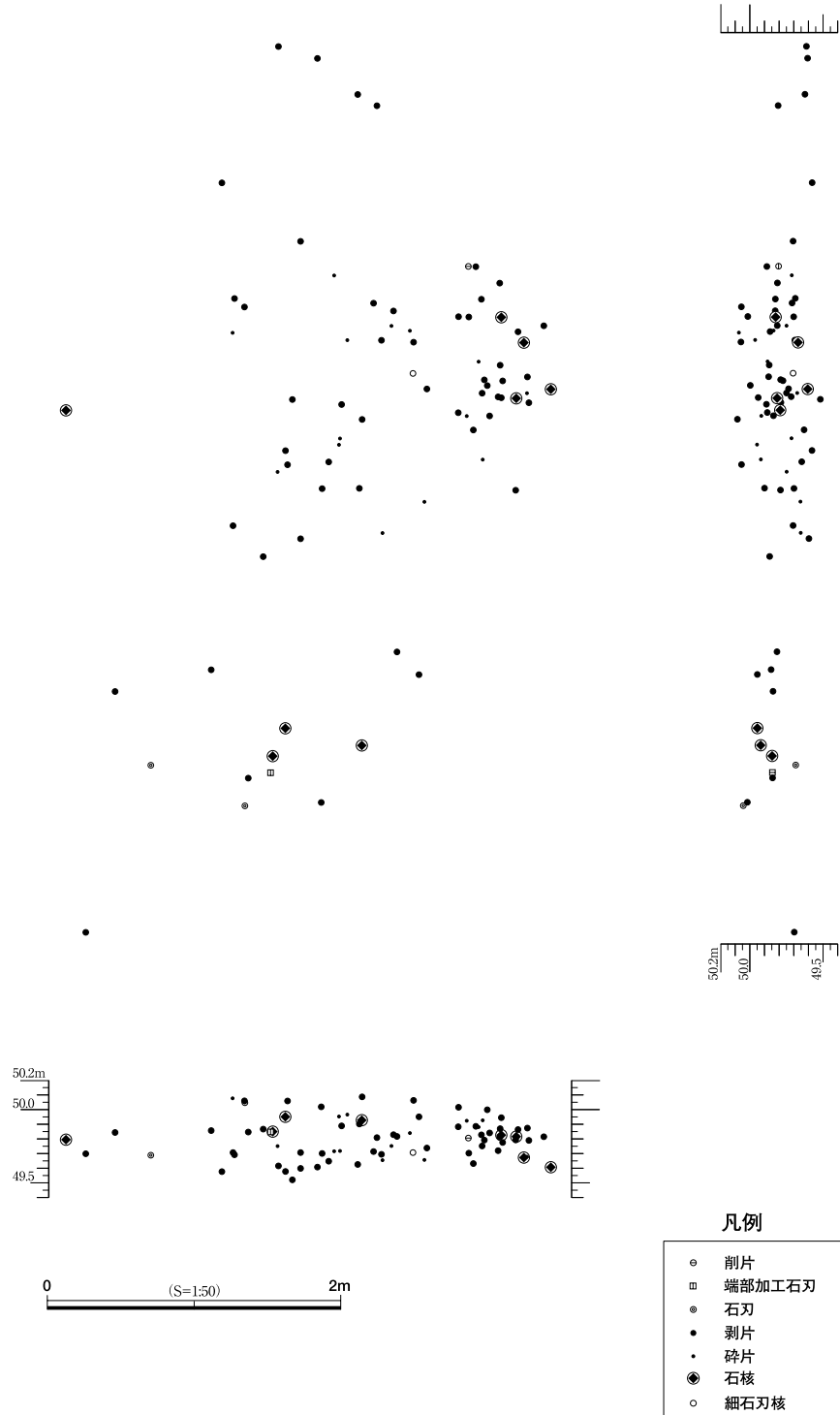
第112図 F区 石器集中6 石材別分布



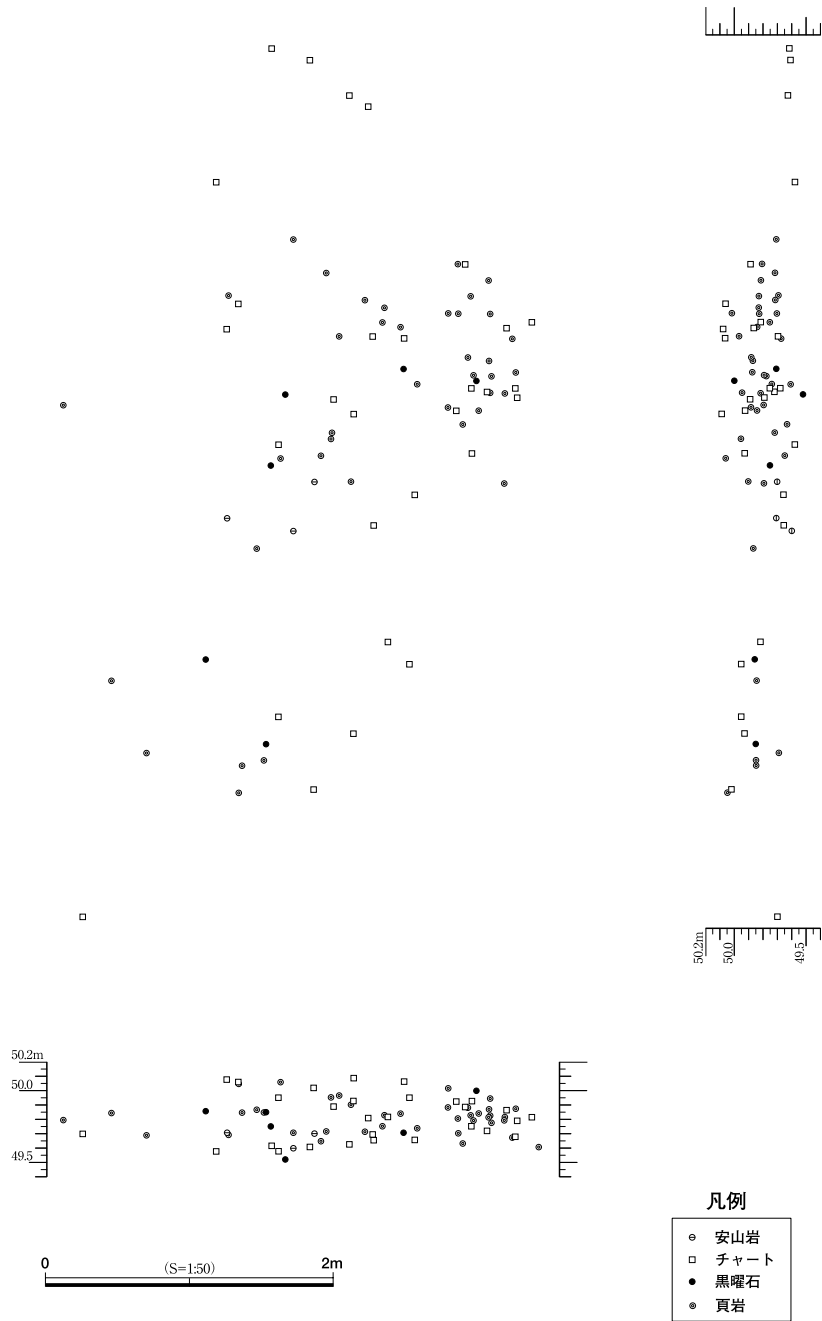
第113図 F区 石器集中6 頁岩 器種別分布



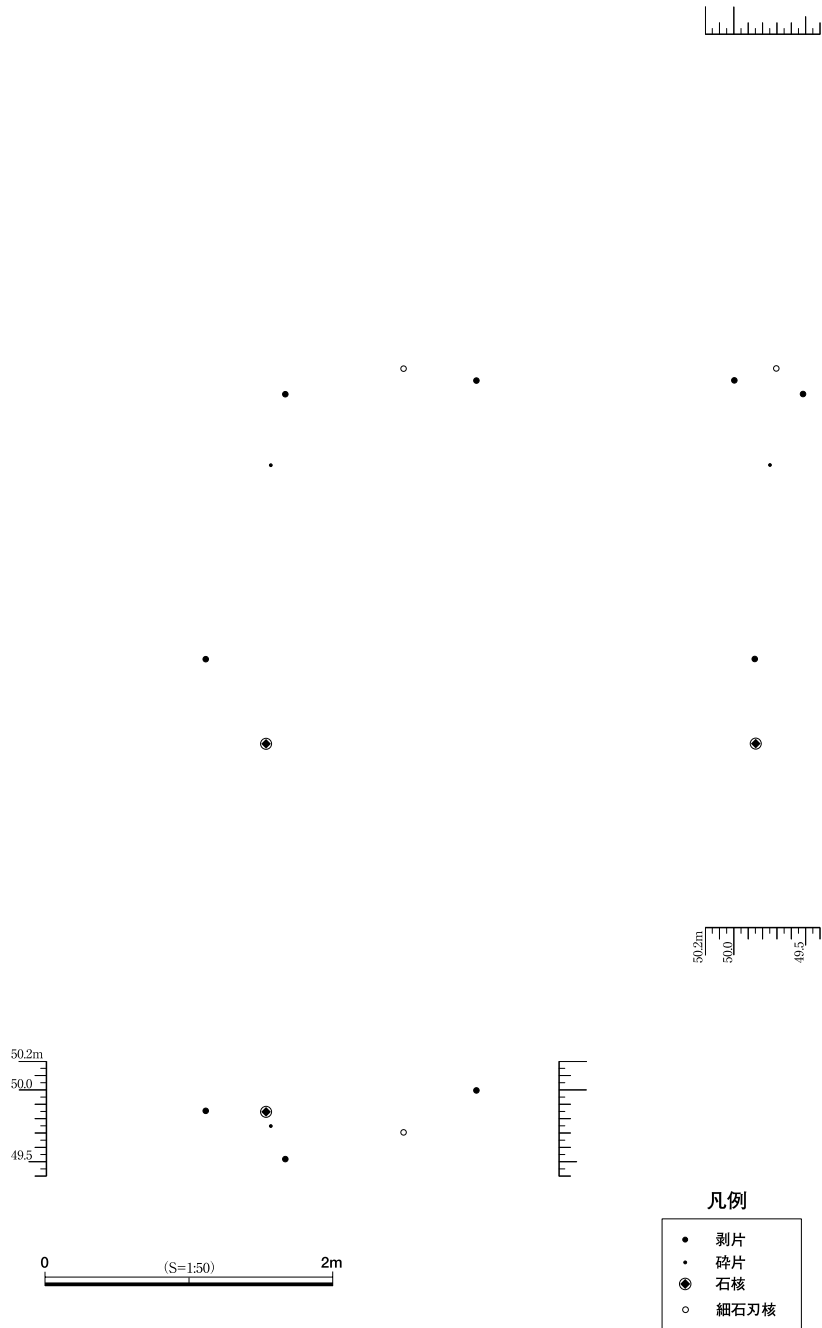
第114図 F区 石器集中6 安山岩 器種別分布



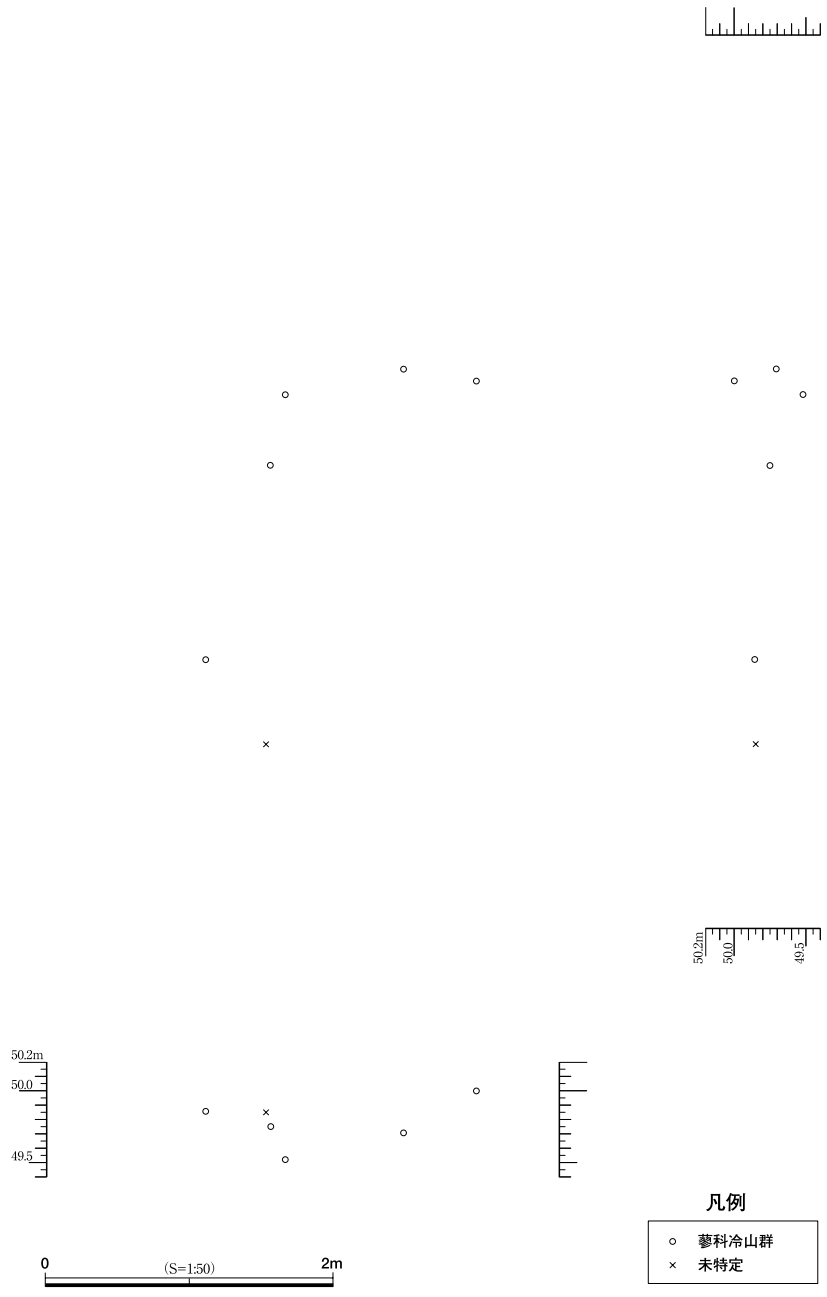
第115図 F区 石器集中7 器種別分布



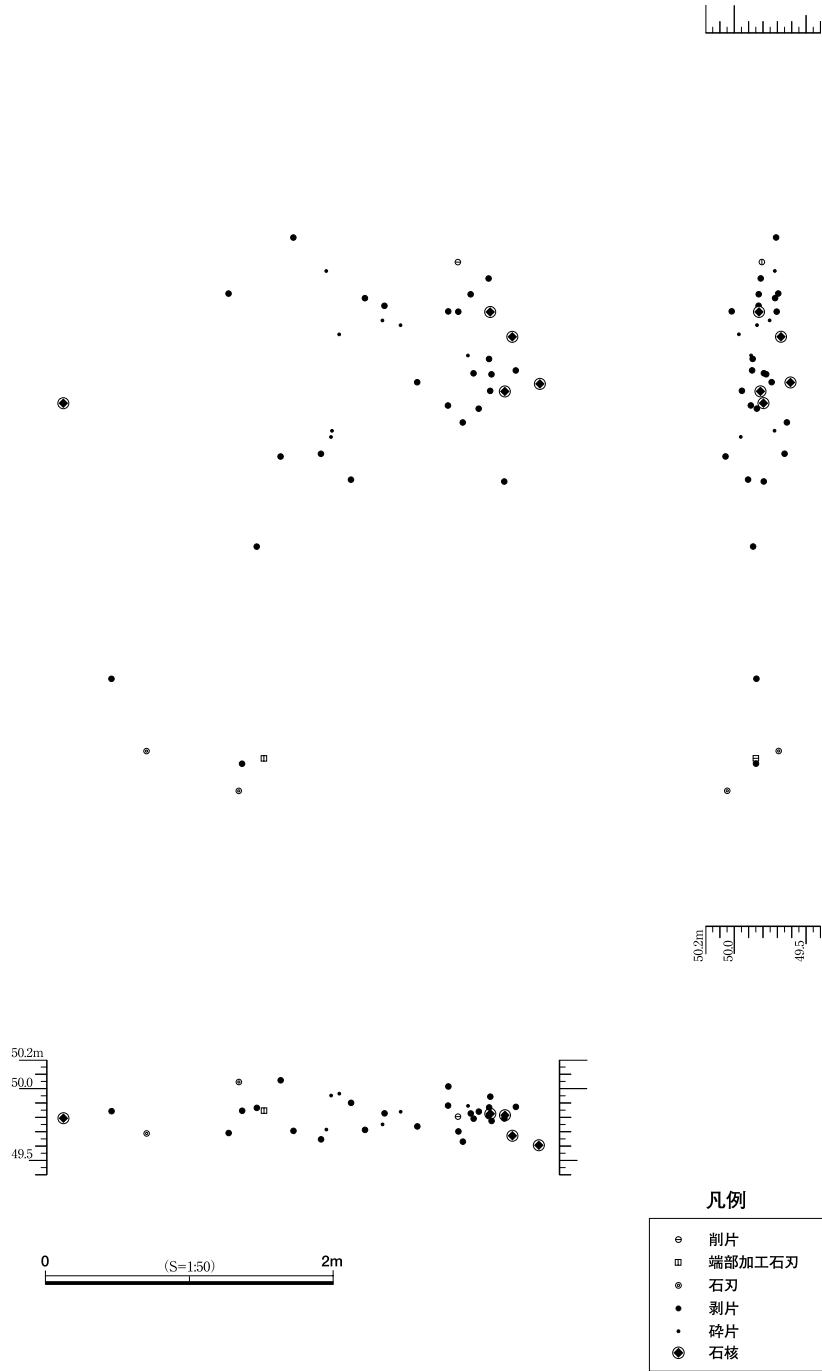
第116図 F区 石器集中7 石材別分布



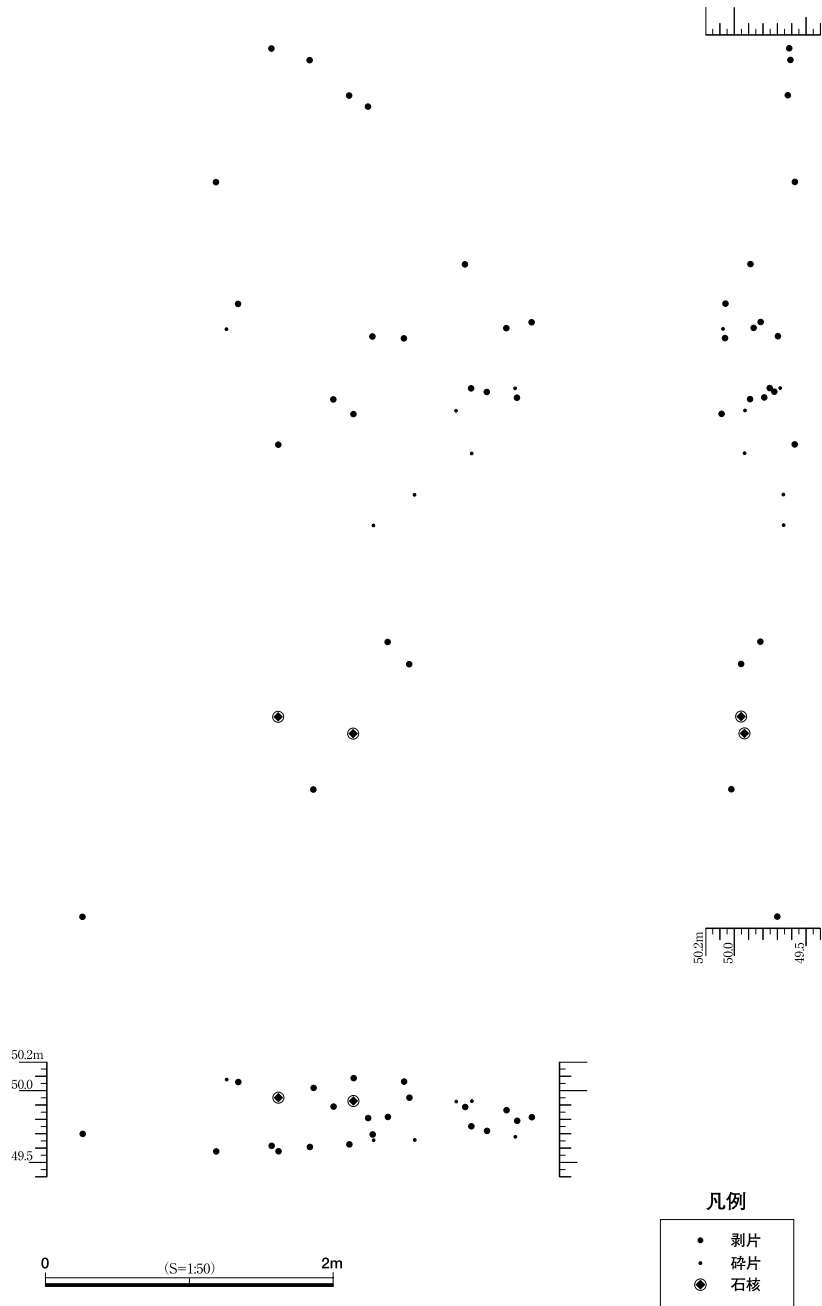
第117図 F区 石器集中7 黒曜石 器種別分布



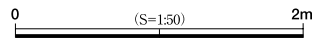
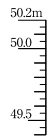
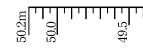
第118図 F区 石器集中7 黒曜石 産地別分布



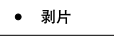
第119図 F区 石器集中7 頁岩 器種別分布



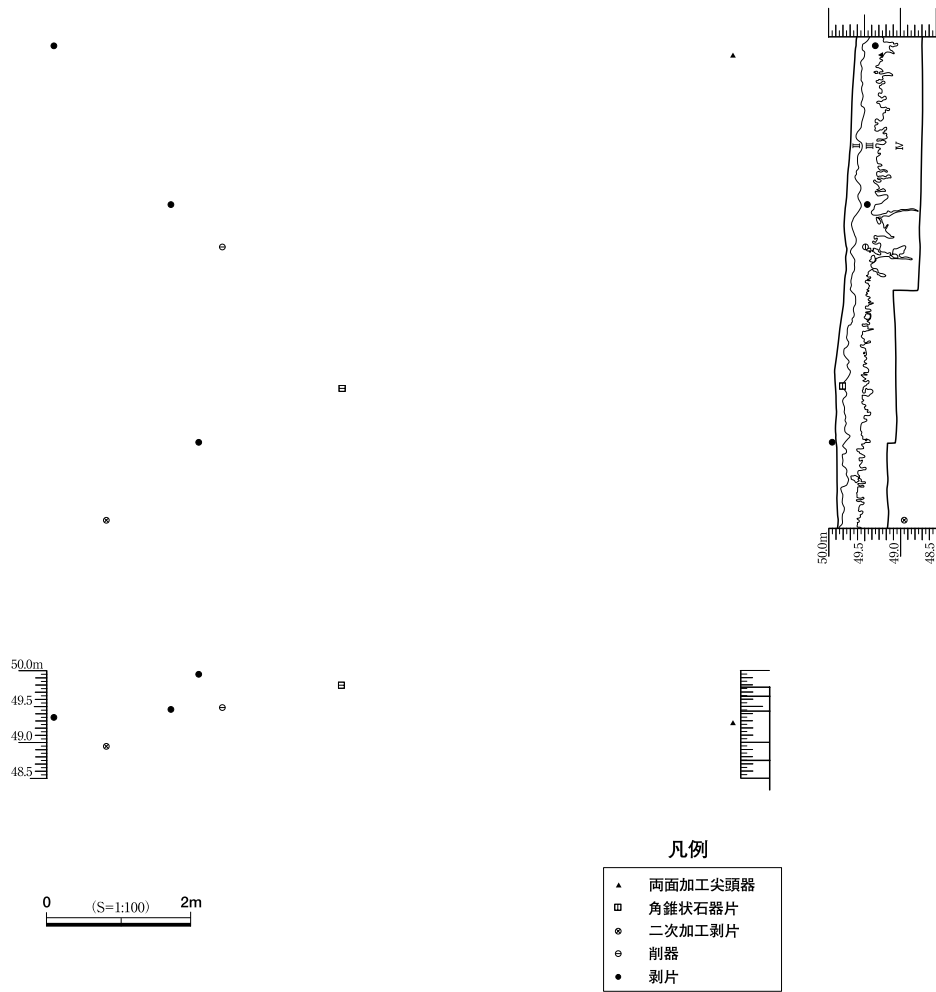
第120図 F区 石器集中7 チャート 器種別分布



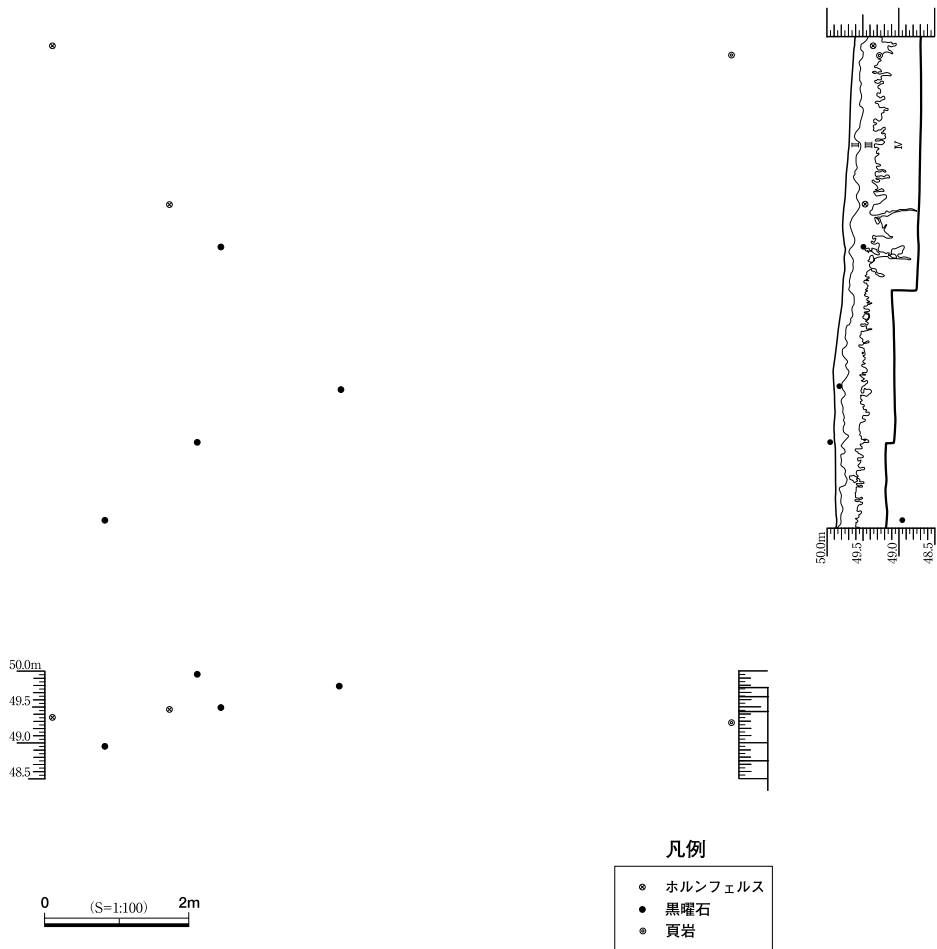
凡例



第121図 F区 石器集中7 安山岩 器種別分布



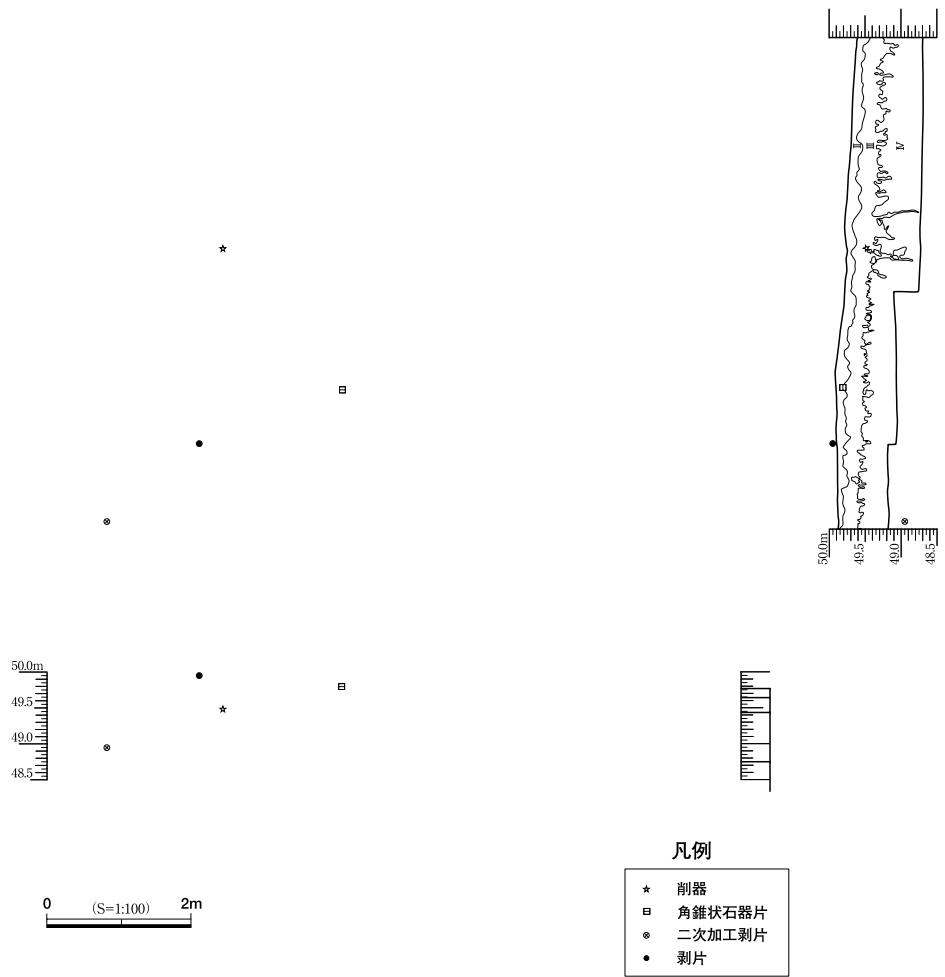
第122図 F区 石器集中8 器種別分布



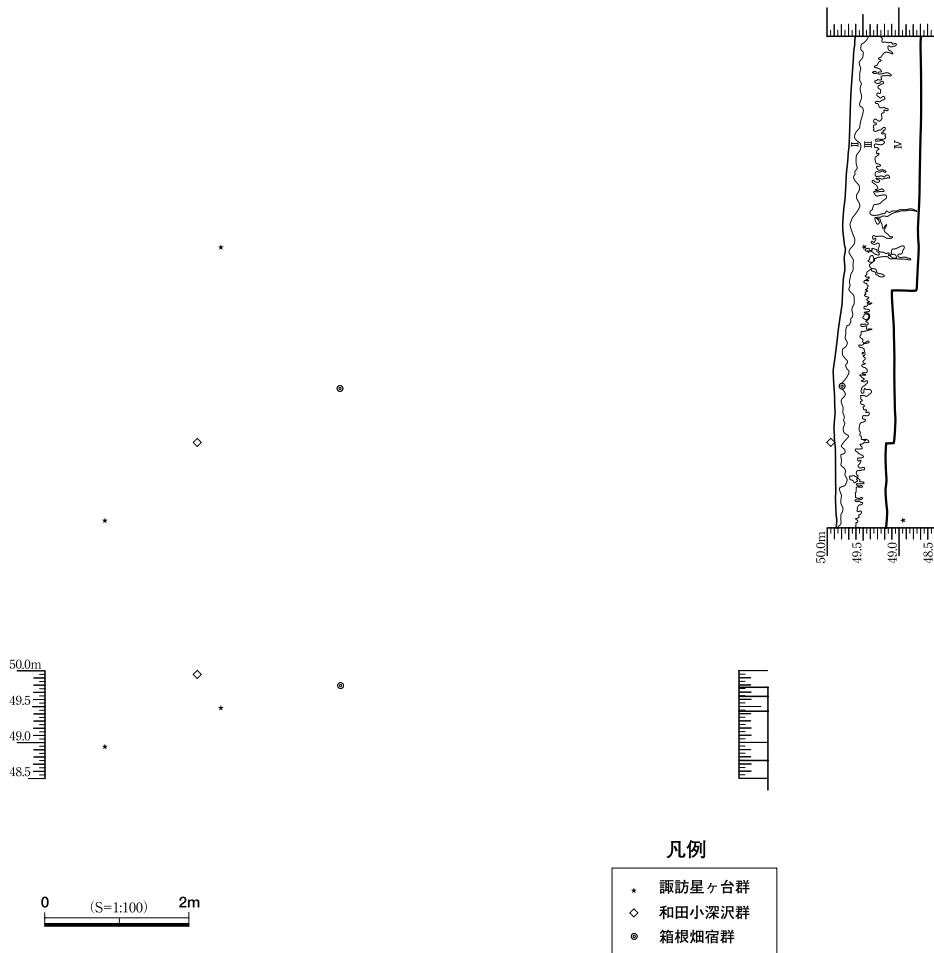
凡例

- ホルンフェルス
- 黒曜石
- 頁岩

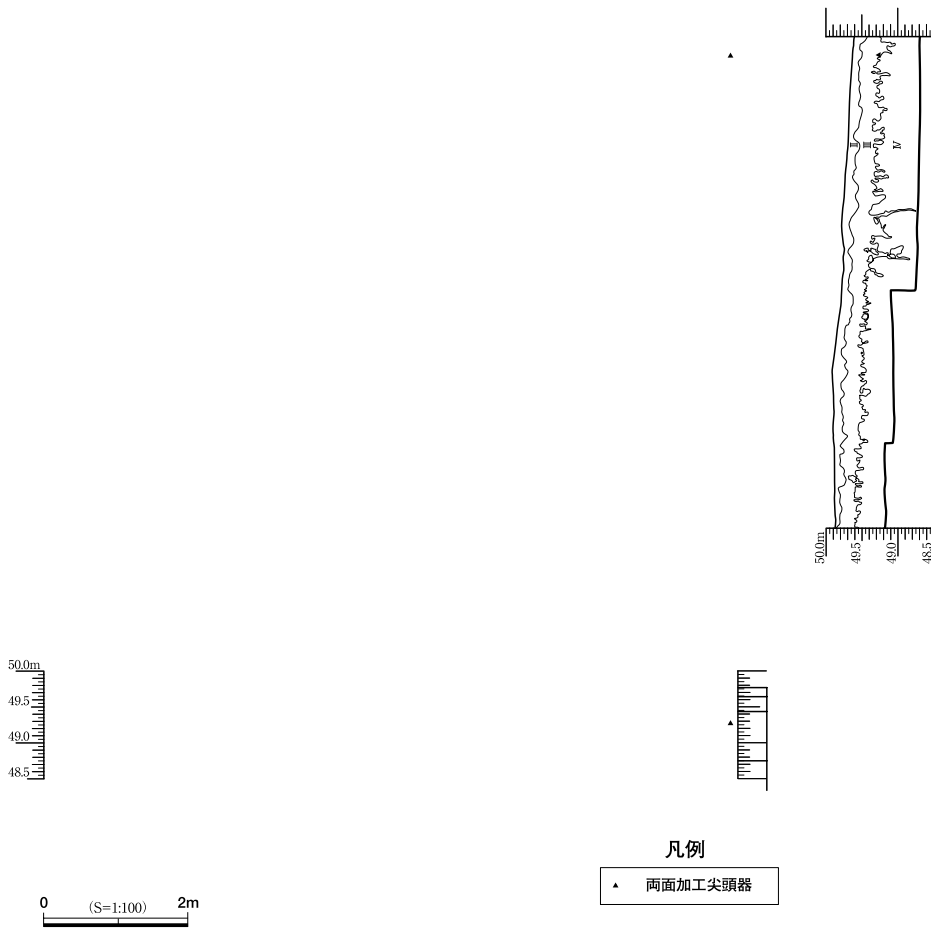
第123図 F区 石器集中8 石材別分布



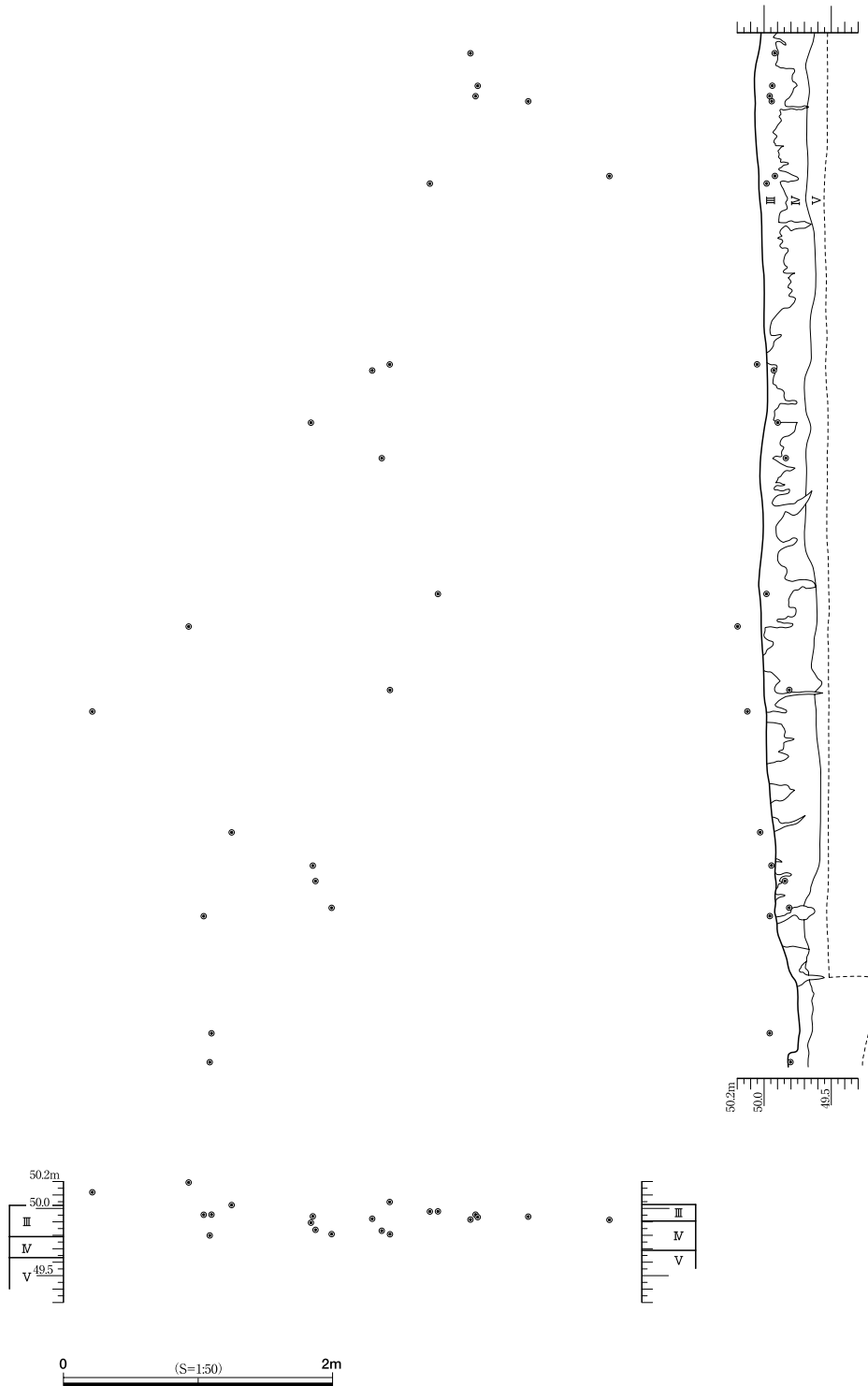
第124図 F区 石器集中8 黒曜石 器種別分布



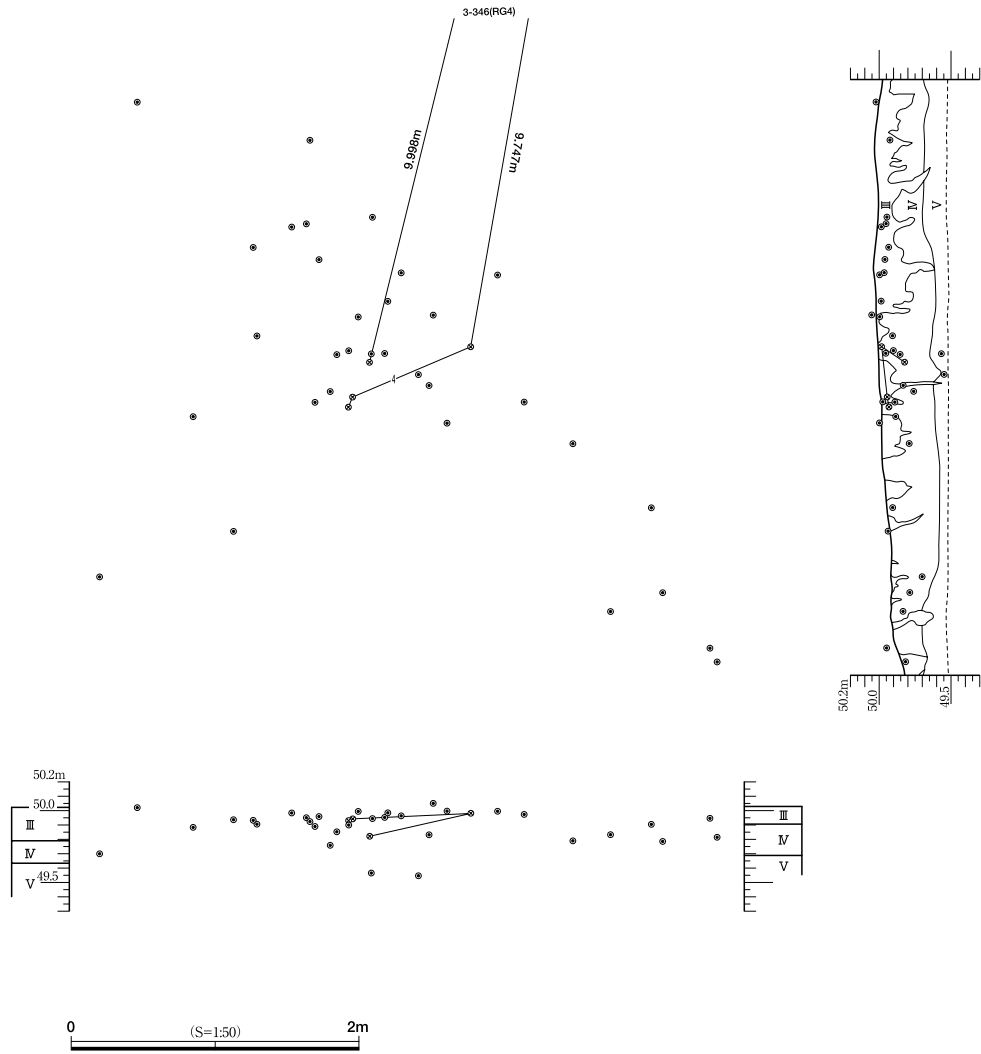
第125図 F区 石器集中8 黒曜石 産地別分布



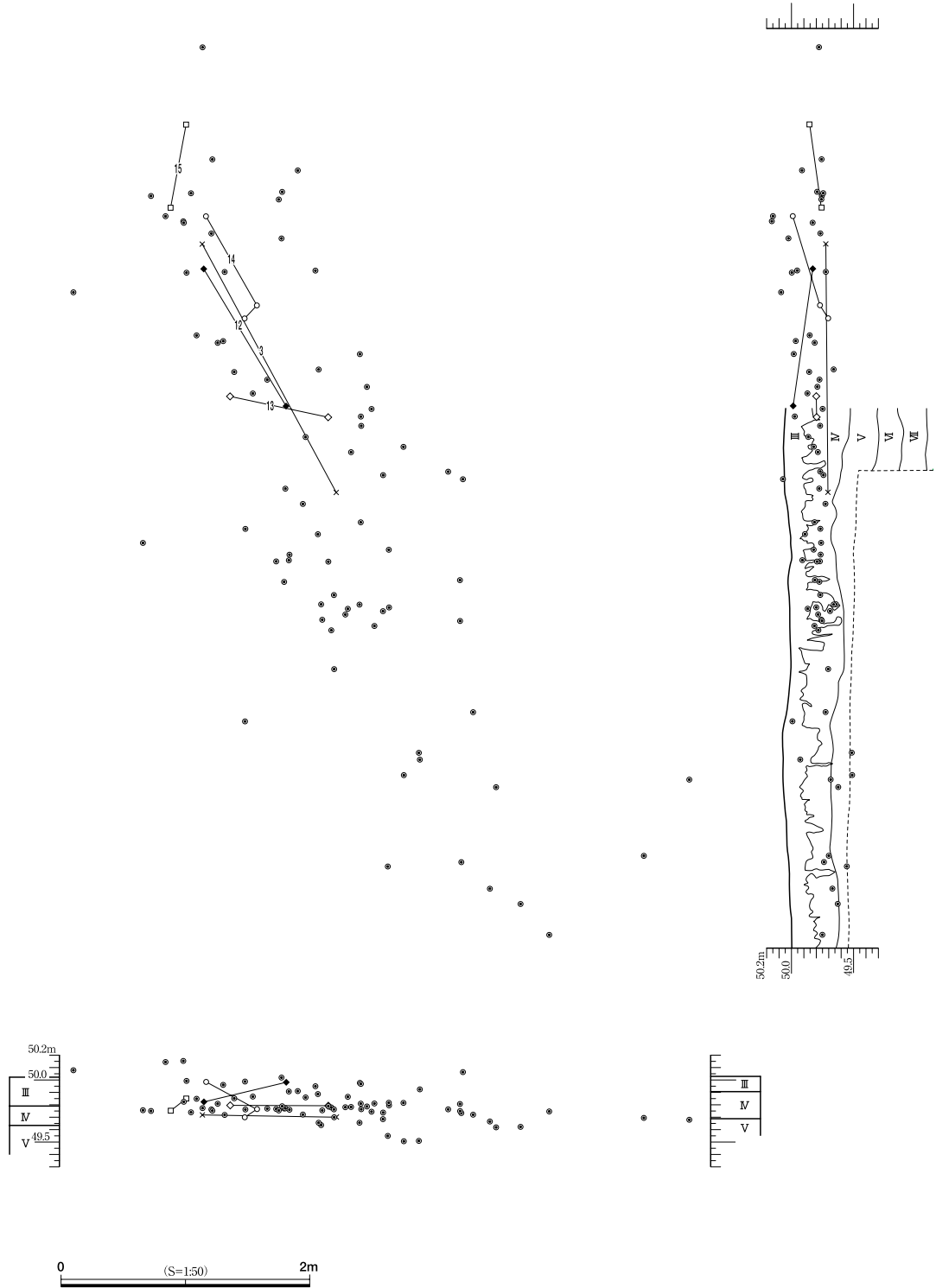
第126図 F区 石器集中8 頁岩 器種別分布



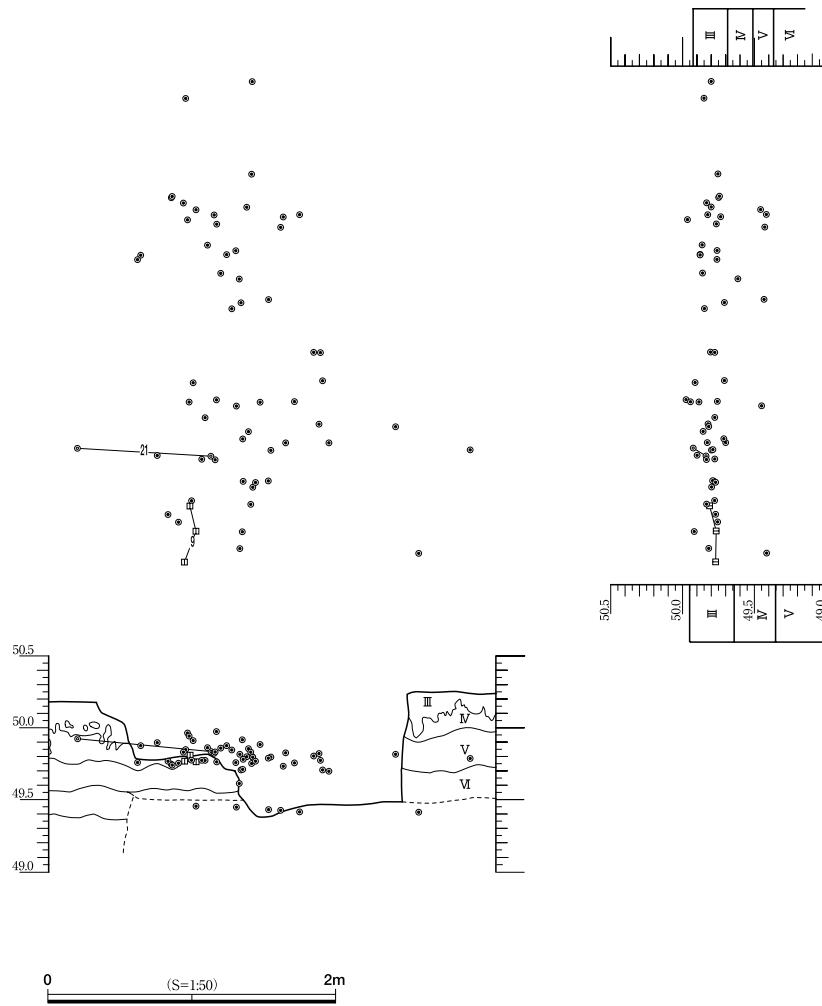
第127図 F区 礫群1分布



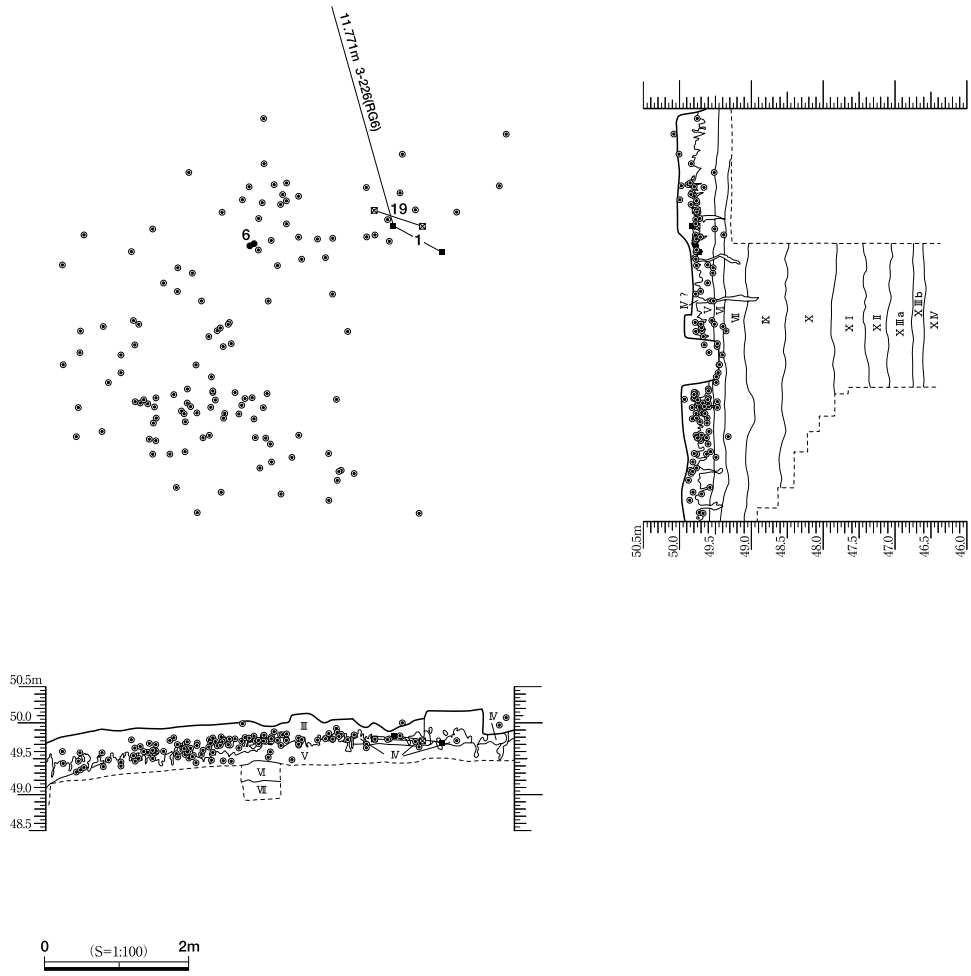
第128図 F区 礫群2分布



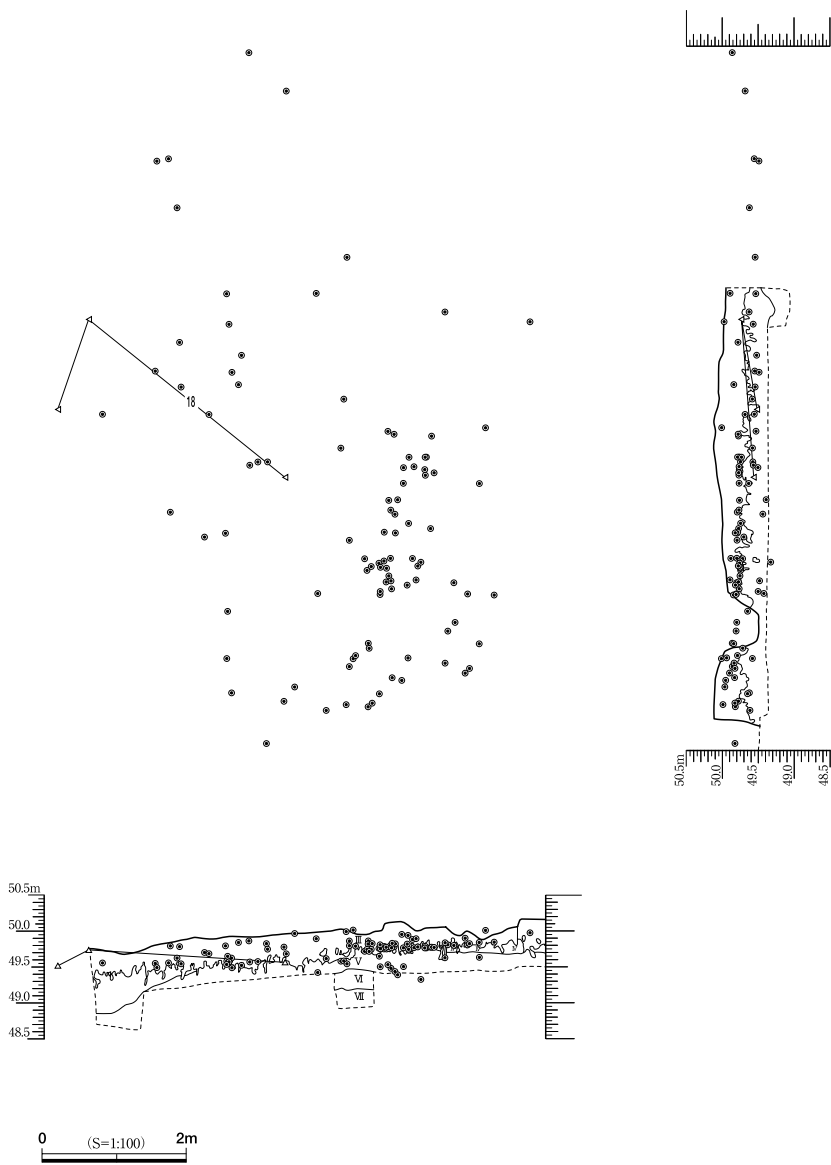
第129図 F区 礫群 3 分布



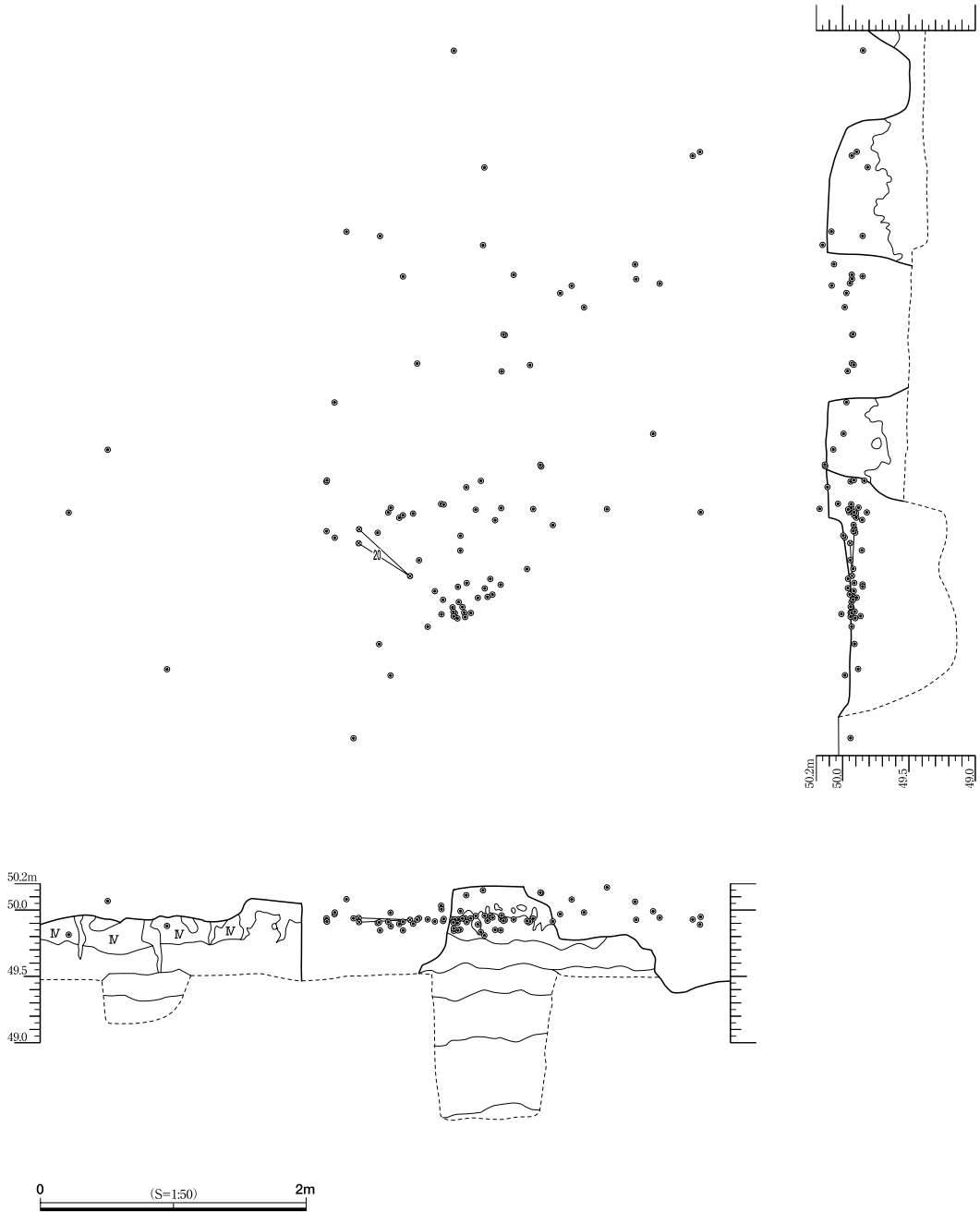
第130図 F区 礫群4分布



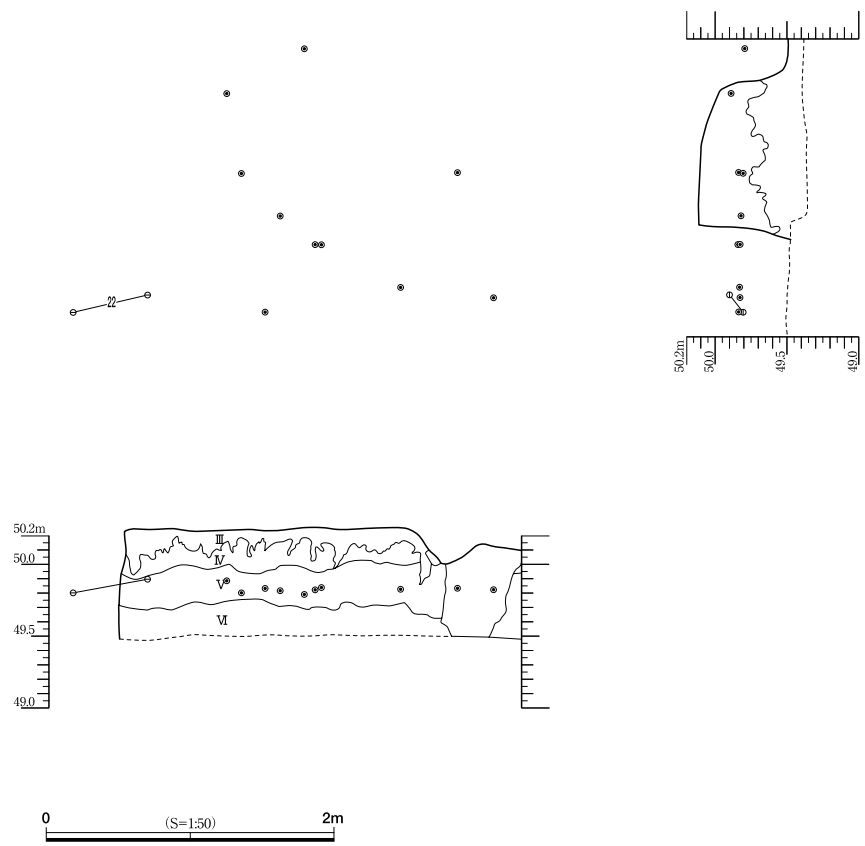
第131図 F区 礫群5分布



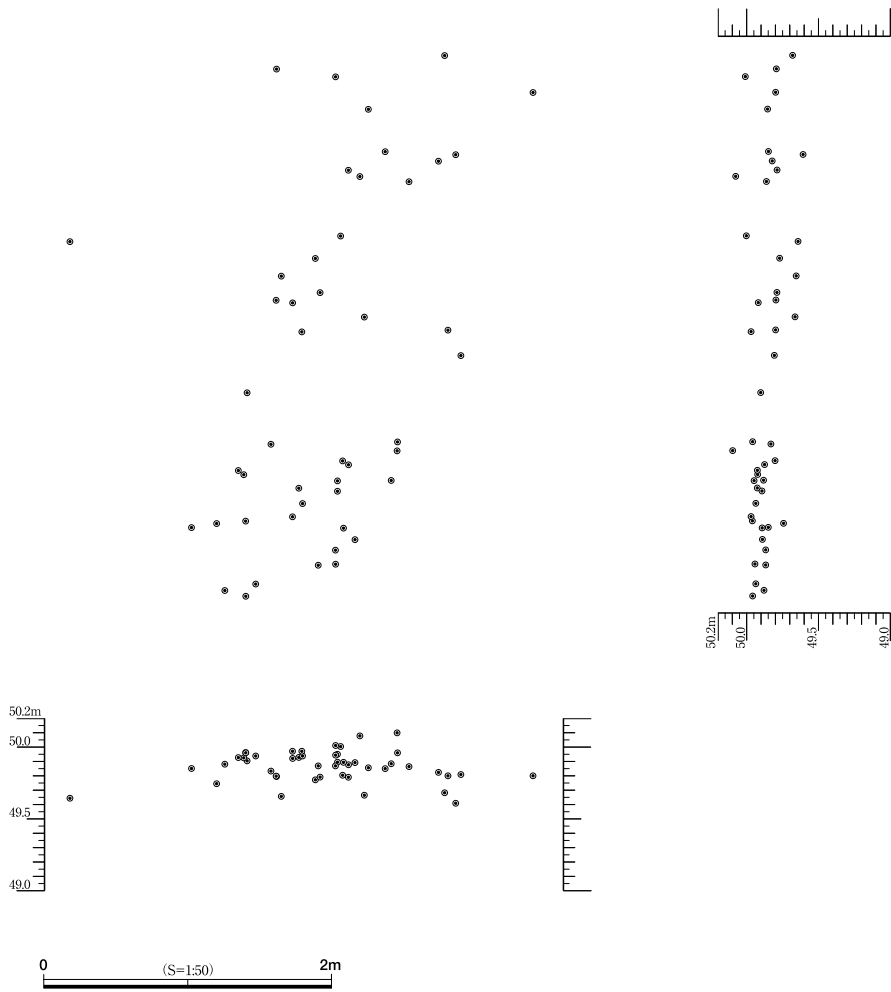
第132図 F区 礫群6分布



第133図 F区 礫群 7 分布



第134図 F区 礫群8分布



第135図 F区 礫群9分布

(3) 出土石器

石 器

136-1は諏訪星ヶ台産黒曜石製の二次加工剥片（基部加工尖頭形剥片石器？）である。石刃製のようにも見えるが、よく見ると細長く取れた横打剥片製である。石器集中 8 に含まれる。

136-2は和田土屋橋北産黒曜石製背部加工石器である。幅広剥片を縦に用い、左側縁を弱い鋸歯状に背部整形し、右側縁の基部を微弱に基部整形して、上半分に屈曲する斜刃を残す。刃部に使用をうかがわせる微細剥離痕が付く。石器集中 4 に含まれる。

136-3は凝灰岩製背部加工石器（台形様石器）である。幅広剥片を横に用い、末端側を背部整形し、打面にも二次的な剥離痕が見られる。石器集中 4 に含まれる。

136-4はチャート製（ch1）台形様石器である。幅広剥片を縦に用い、打面付近を急角度調整する。鋭い縁辺には使用をうかがわせる微細剥離痕が付く。石器集中 2 に含まれる。

136-5は玉髓製（ag2）の二次加工剥片である。幅広剥片を素材とするが、打面側が折れているので明確な器種分類が出来ない。石器集中 3 に含まれる。

136-6はチャート製（その他の個体）の二次加工剥片である。剥片の端部を急角度に調整するが、およそ半分が失われているので明確な器種分類が出来ない。石器集中 3 に含まれる。

136-7は頁岩製（sh2）の端部加工石刃である。接合資料34の一部である。小形石刃の左側縁端部に急角度の二次加工を施す。石器集中 7 に含まれる。

136-8は頁岩（その他の個体）の尖頭器である。裏面に主剥離面が残されており、素材が石刃製であることをうかがわせている。石器集中 8 に含まれる。

136-9はチャート製（ch10；単独個体）の尖頭器である。背面に自然面の残る縦長剥片の周縁に類鱗状の平坦剥離を施す。石器集中 2 に含まれる。

136-10は安山岩製（an2）の尖頭器である。石器集中 4 に含まれる。

136-11は箱根畑宿産黒曜石製の角錐状石器である。基部（？）が折れている。剥片を縦に用い、急角度の剥離によって背面を断面略三角形に整形する。石器集中1に含まれるが、若干低い層準から検出されており他の石器群と共伴するのかどうか判断に苦しむ。

136-12は流紋岩製（rh）の側削器である。小型厚手の剥片末端付近に急角度の刃部を作出する。石器集中 5 に含まれる。

136-13は諏訪星ヶ台産黒曜石製の削器（または端削器）である。背面に大きな自然面の残る小型剥片の末端裏面に二次加工を施して刃部を作出する。石器集中 8 に含まれる。

136-14はやや黄色がかった玉髓製（ag1）の端削器（または端側削器）である。厚手の剥片側部には大振りの、端部にはやや小振りの急角度剥離を施して刃部を作出する。石器集中 1 に含まれる。

136-15は端削器である。打面と背面に大きく自然面のある大型幅広剥片を縦に用い、単部に広く急角度の二次加工を施して刃部を作出する。石器集中 4 に含まれる。

137-1は蓼科冷山産黒曜石製剥片と石核の接合資料である（接合35）。自然面の大きく残る扁平石核138-4の片面に2点の小型剥片（2、3）が接合する。すべて石器集中 7 に含まれる。5（石器集中7）、6（同5）、7（同4）は1と同一個体の可能性がある剥片である。

137-8は神津島恩馳島産黒曜石製剥片である。石器集中には含まれない単独個体である。

137-9は蓼科冷山産黒曜石の石核である。石器集中 1 に含まれる。

137-10は箱根畑宿産黒曜石の石核である。両面を求心剥離する。石器集中 4 に含まれる。

137-11はガラス質黒色安山岩製 (an1) 剥片の接合資料である (接合29)。自然面が大きくついていることから、搬入されたときも相応の大きさがあつたものと推定される。139-1と138-5はその部品である。

138-1はガラス質黒色安山岩製 (an1) 剥片の接合資料である (接合28)。137-11 (接合29) と同一個体の可能性が高い。138-2、3、4はその部品である。

139-2、3、4はいずれもガラス質黒色安山岩製剥片 (an1) である。以上のガラス質黒色安山岩製石器群は幅広剥片の生産に関与している。

139-5は流紋岩 (rh2) の石核である。若干緑がかつた白色に風化している。消費の痕跡は大変少ない。

139-6は凝灰岩製 (tu1) の剥片である。

139-7は凝灰岩製 (tuその他) 稜付石刃である。限定的な小型石刃生産が行われたことを示唆する。

139-8は凝灰岩製 (tu3) 石刃である。軸が斜めになっているので厳密には石刃とはいえないが、単独個体であることをから、おそらく同等の取り扱いを受けているものと推測する。

139-9はチャート製 (ch1) 微細剥離痕剥片である。個体ch1はチャートの中で最も点数が多い。分布図をみると密集する範囲が認められるので、まとまった消費があるのは間違いない。140-1、2、3はch1の消費状況を示唆する石核である。ある程度の大きさがある原石を搬入して、これを適度に分割した後、すべての石核で小型剥片を生産するようである。

140-4はそうしたch1とは異なる個体 (ch8) の石刃である。こちらは単独個体である。

141-1は頁岩製 (sh2) 石刃と端部加工石刃の接合資料である (接合34)。小さな打面から石刃を連続剥離する過程を示す。141-4、136-7、141-2はその部品である。個体sh2は本遺跡の頁岩製石器群のなかで点数が最も多く、よって接合資料も多い。半割原石程度の石材が搬入され、石刃生産のためのまとまった消費を行う。

141-4は頁岩製 (sh2) 石刃と剥片の接合資料である (接合33)。自然面付きの厚手石刃が接合することから、原石消費の早い段階で搬入されることが示唆される。また、それは当初から石刃剥離を想定したものだったろう。

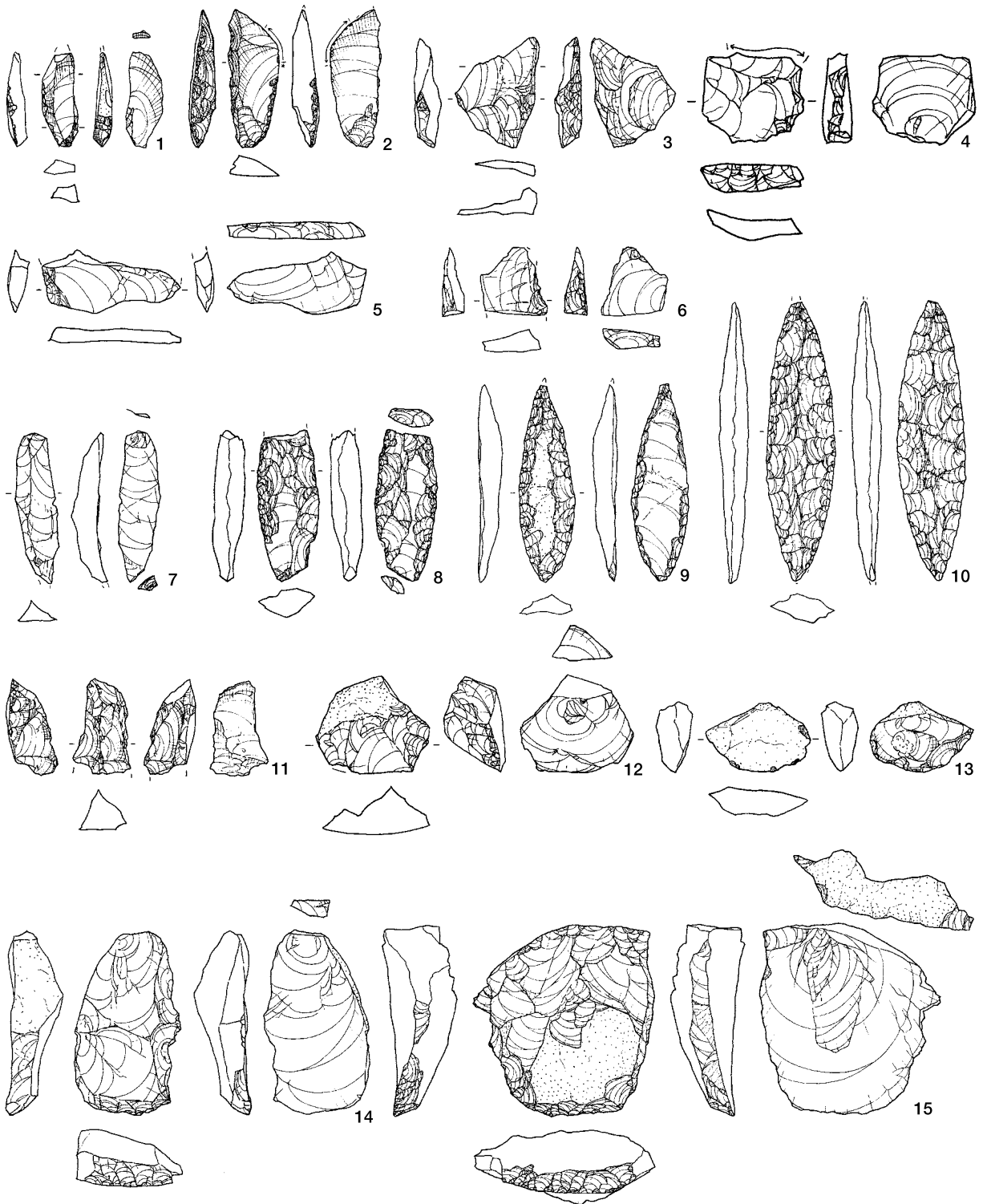
141-7、8、9、10は頁岩製 (sh2) 剥片の接合資料である (接合31)。石核調整過程を示すものだろうか。

142-1、2、3、4は頁岩製 (sh2) 剥片と石核の接合資料である (接合32)。打面再生剥片 (4) と石刃生産過程を示す細長い剥片 (3) を含む。

142-5、6、7、8、9は頁岩製 (sh2) 剥片である。石核の表裏を除去する際の厚手剥片 (8、9)、打面再生剥片 (7) および細長い石核 (6)、小石刃 (5) は、小石刃生産の一連の工程がここで行われたことを示す。

礫 群

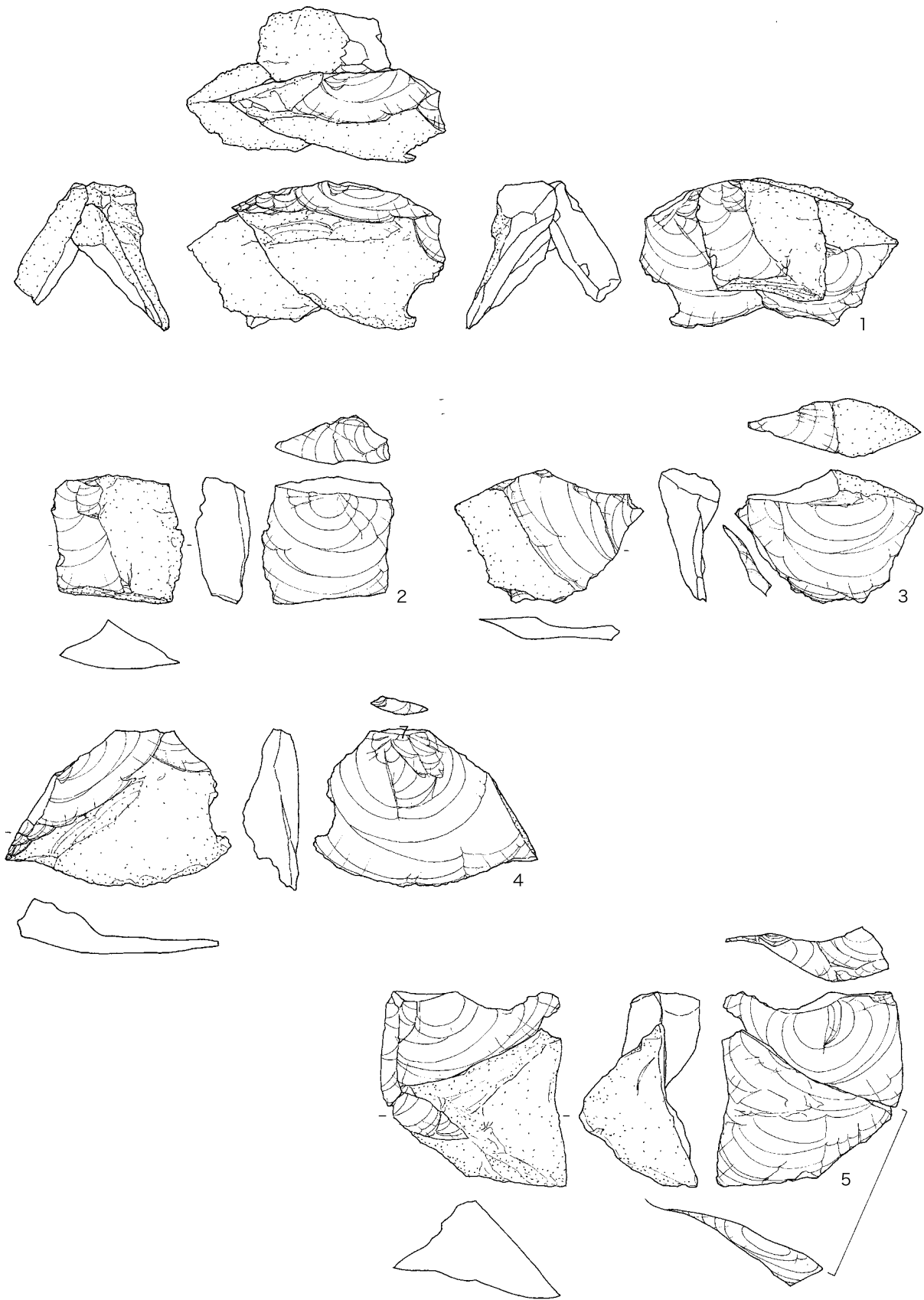
礫が集中する状態を礫群と呼ぶ。F区ではこれが9ヶ所検出された (第127～135図)。15例の接合資料が確認された。礫群間での接合関係は、必ずしもその同時性を示すものではないといわれている。時間を違えて訪問する集団が現地に置き去りにされている礫をよく再利用するとされているからである。したがって、礫群間の接合関係は、このような訪問の頻度や時間を違えて行われる再利用の過程を示す情報としてこと重要な意味をもつはずである。ここでは、しかし、それを検討するに足りるだけの十分な準備がないので、その事実を記載するに留めておく。



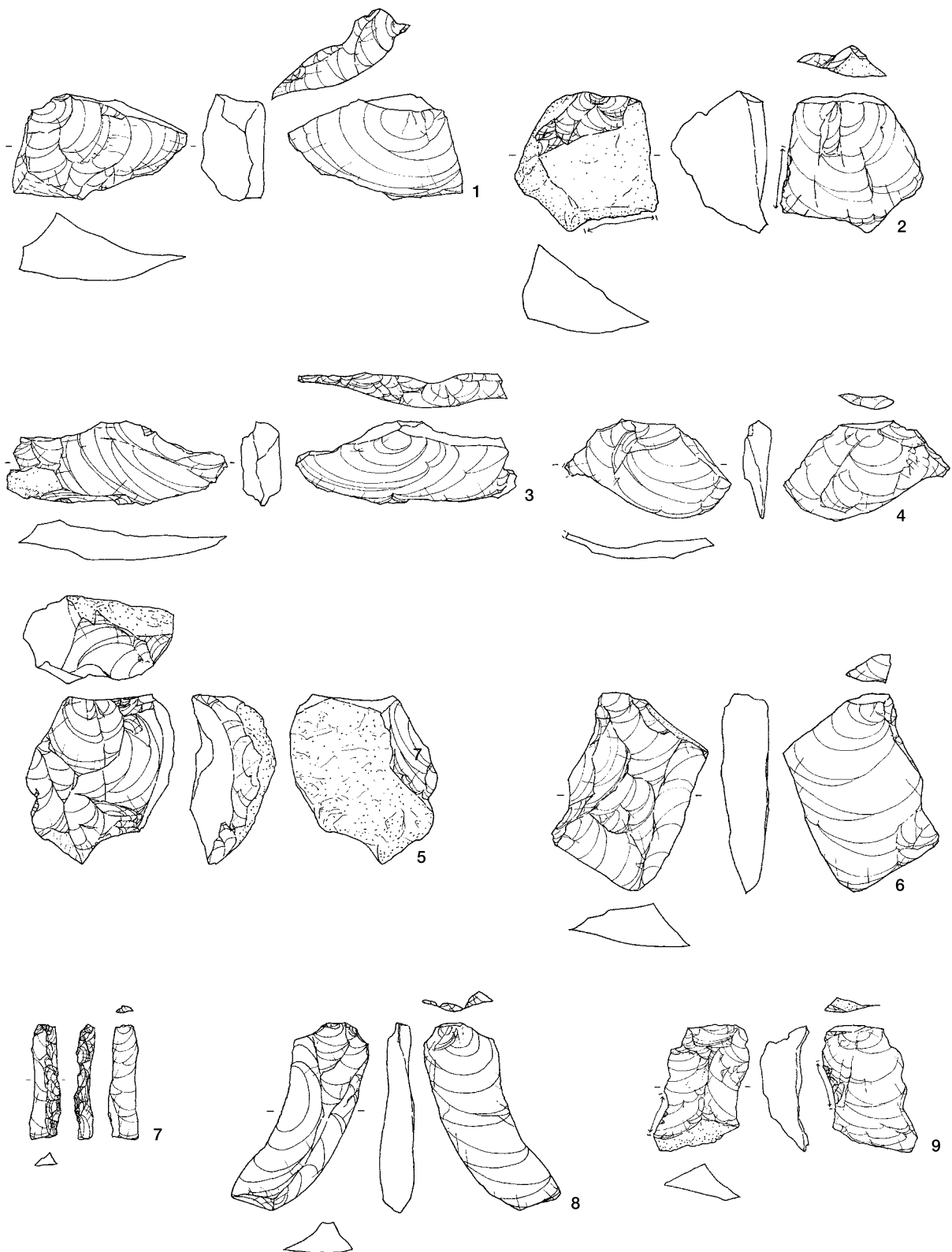
第136図 F区の石器群(1) 主要石器群



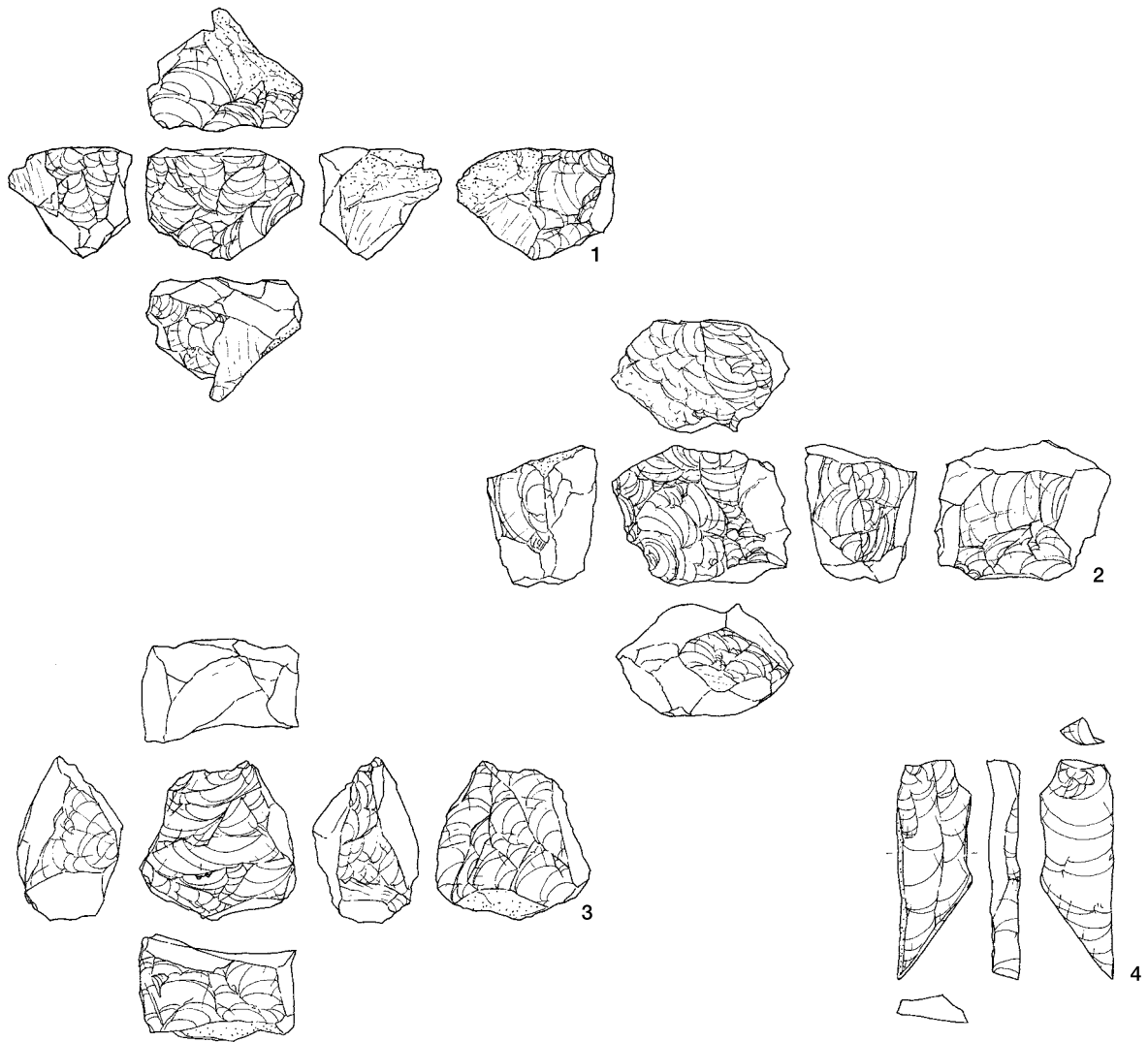
第137図 F区の石器群(2)



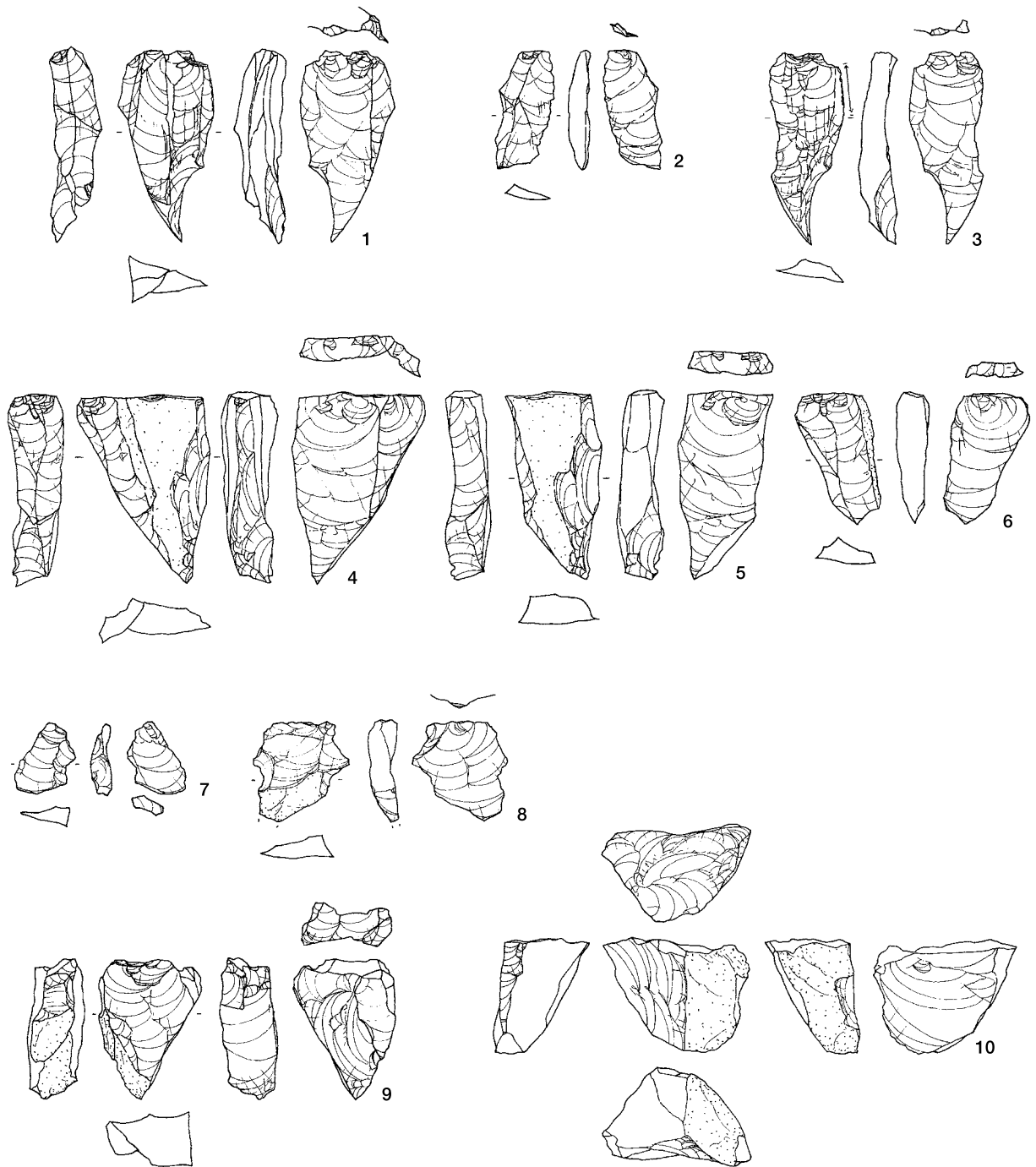
第138図 F区の石器群(3)



第139図 F区の石器群(4)



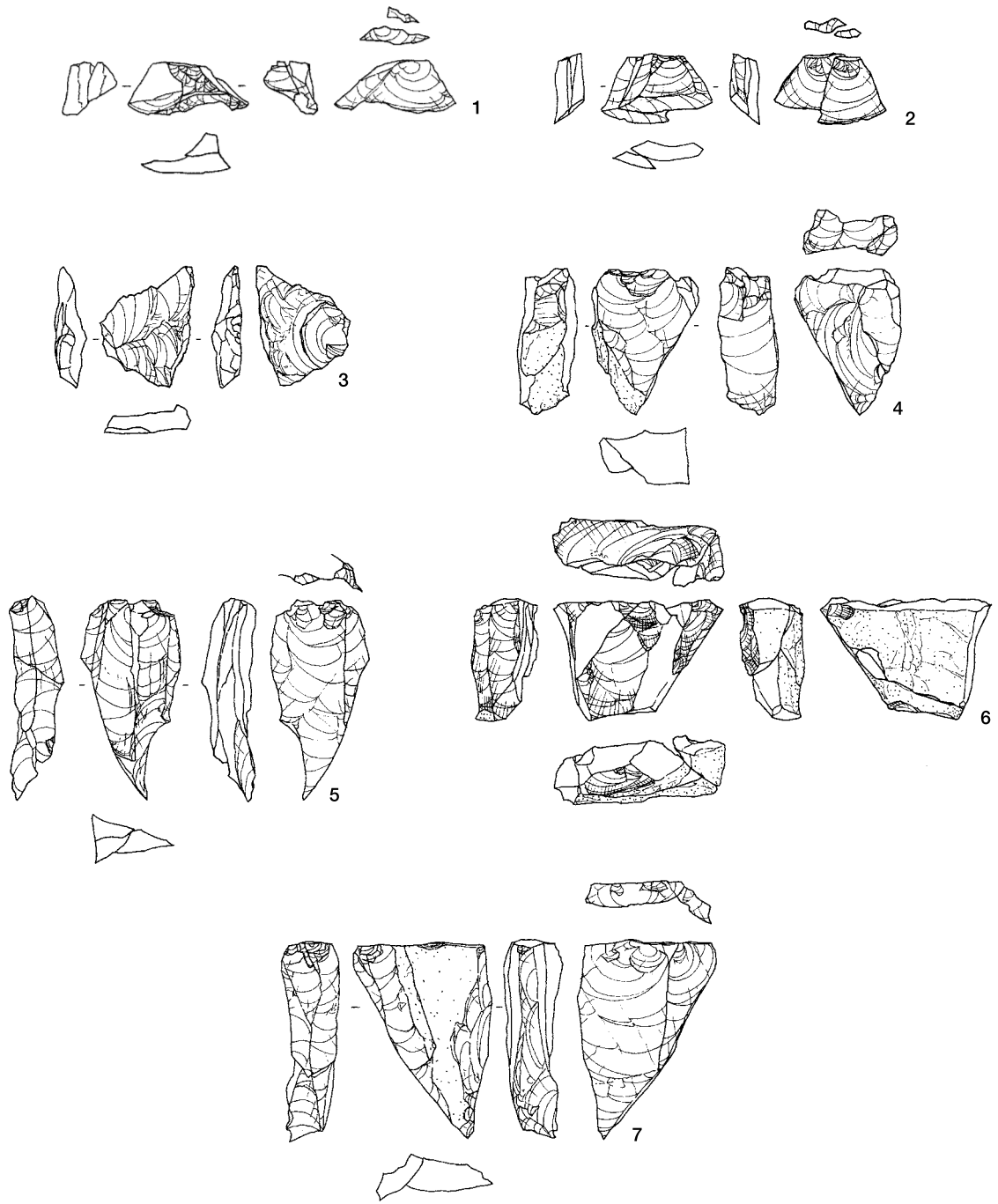
第140図 F区の石器群(5)



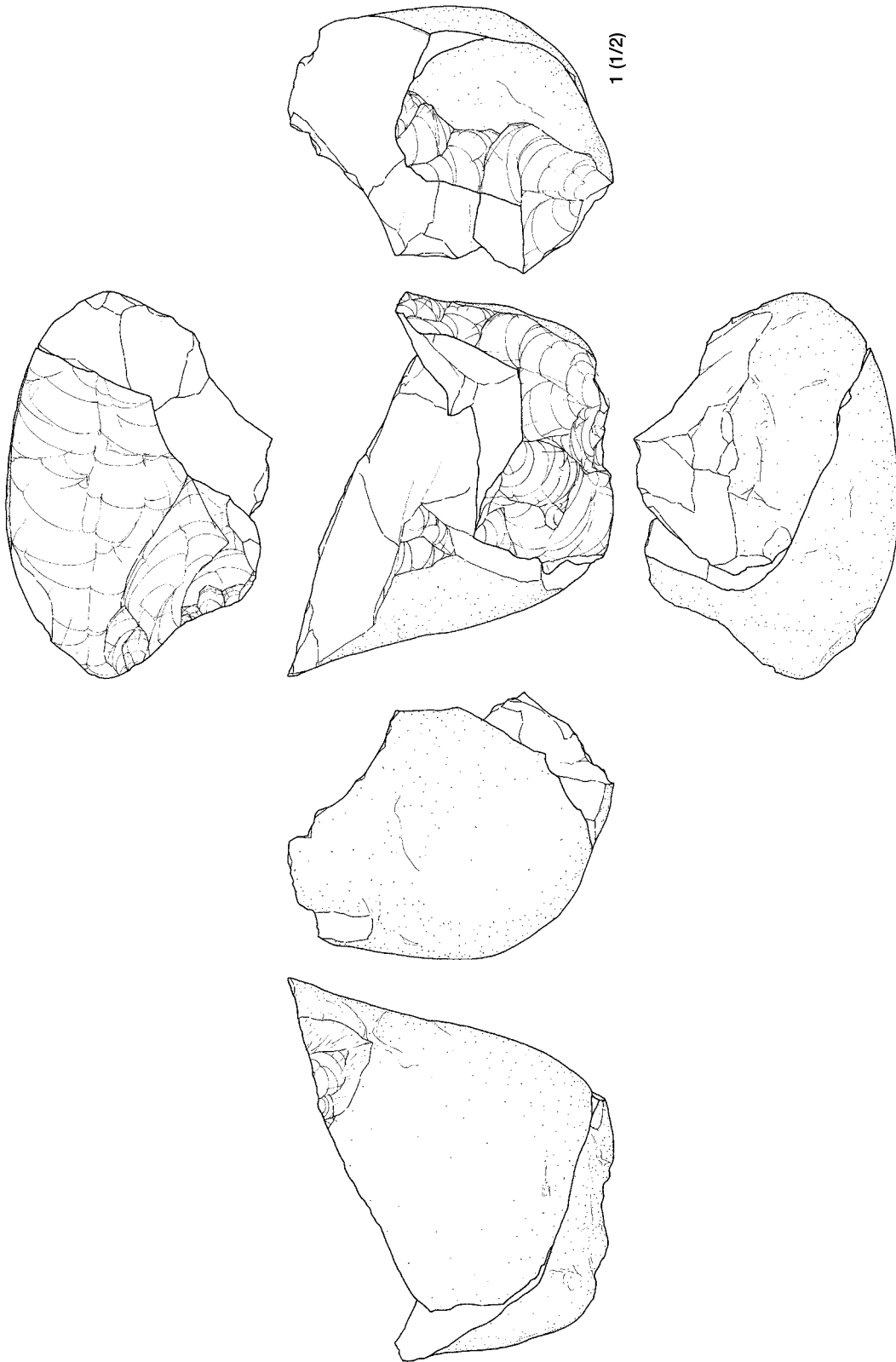
第141図 F区の石器群(6)



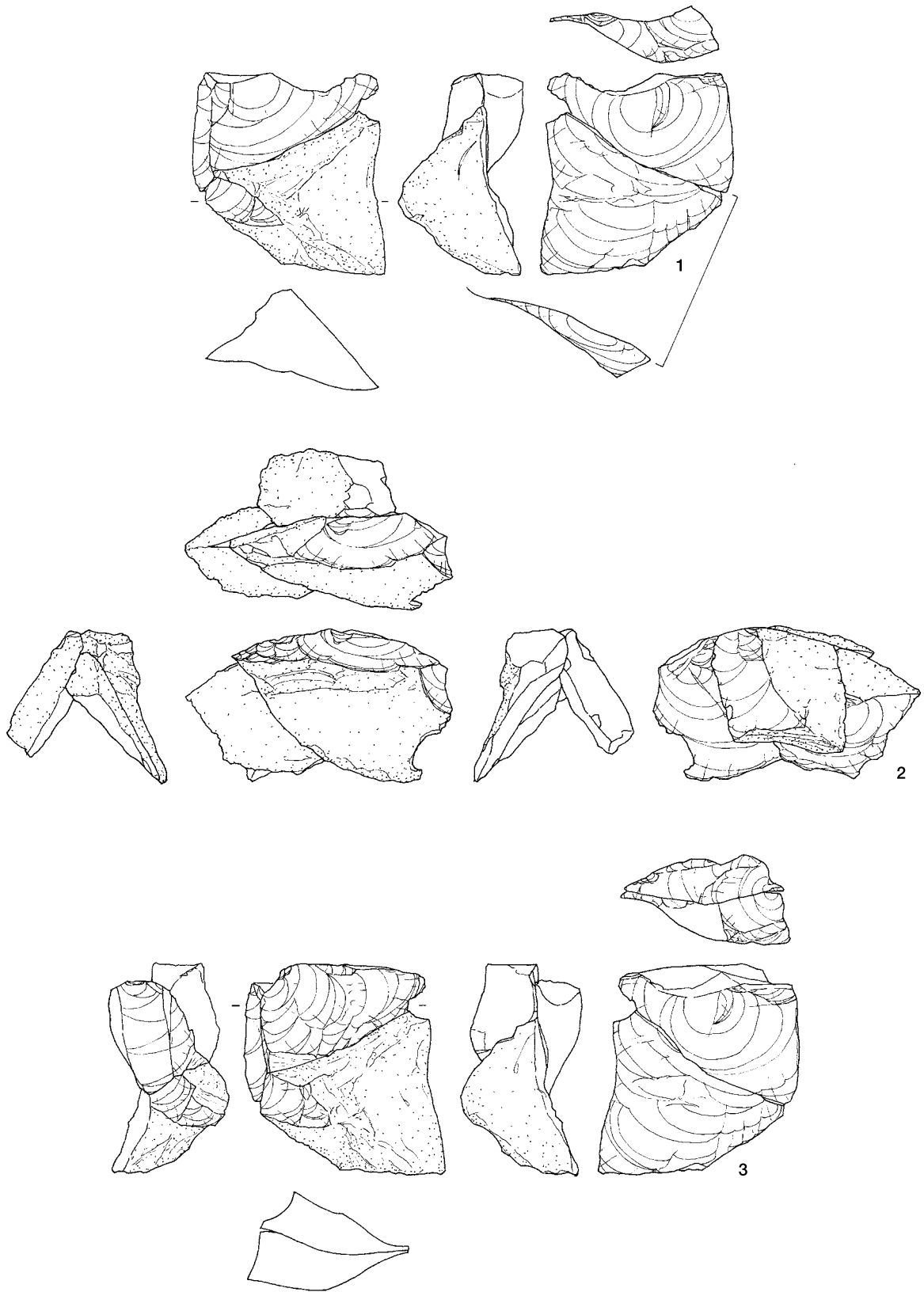
第142図 F区の石器群(7)



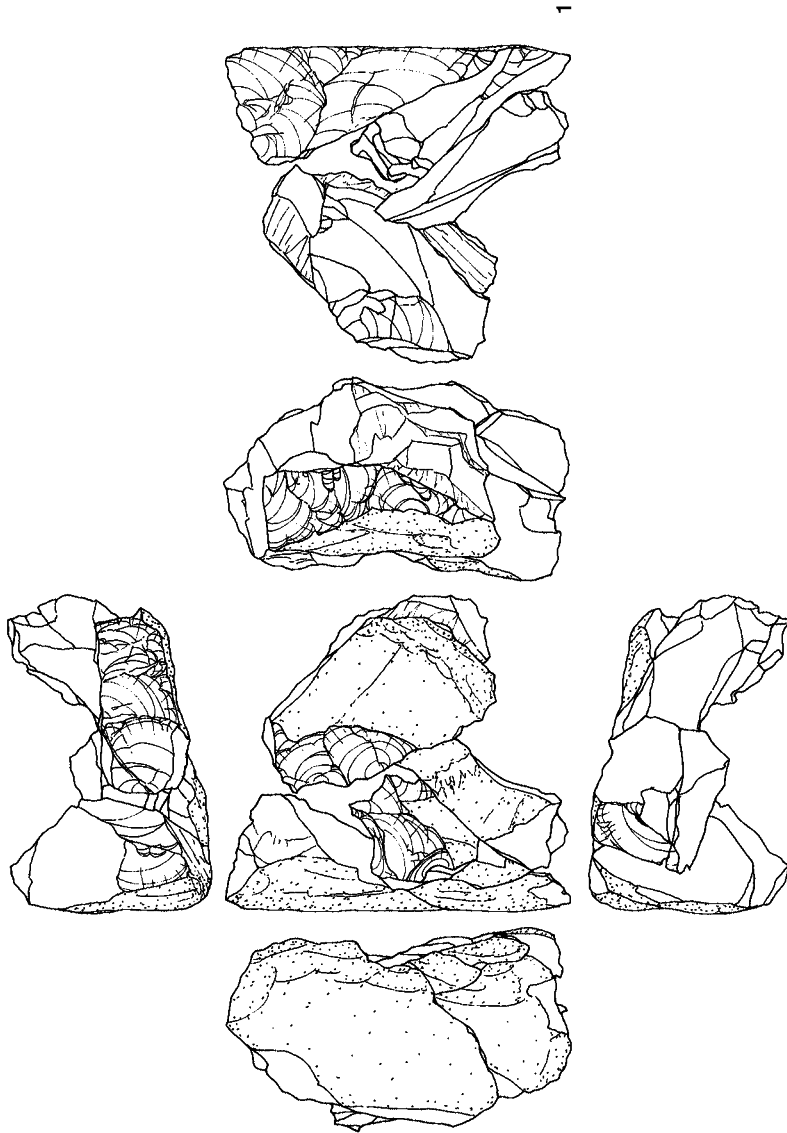
第143図 F区の石器群(8)



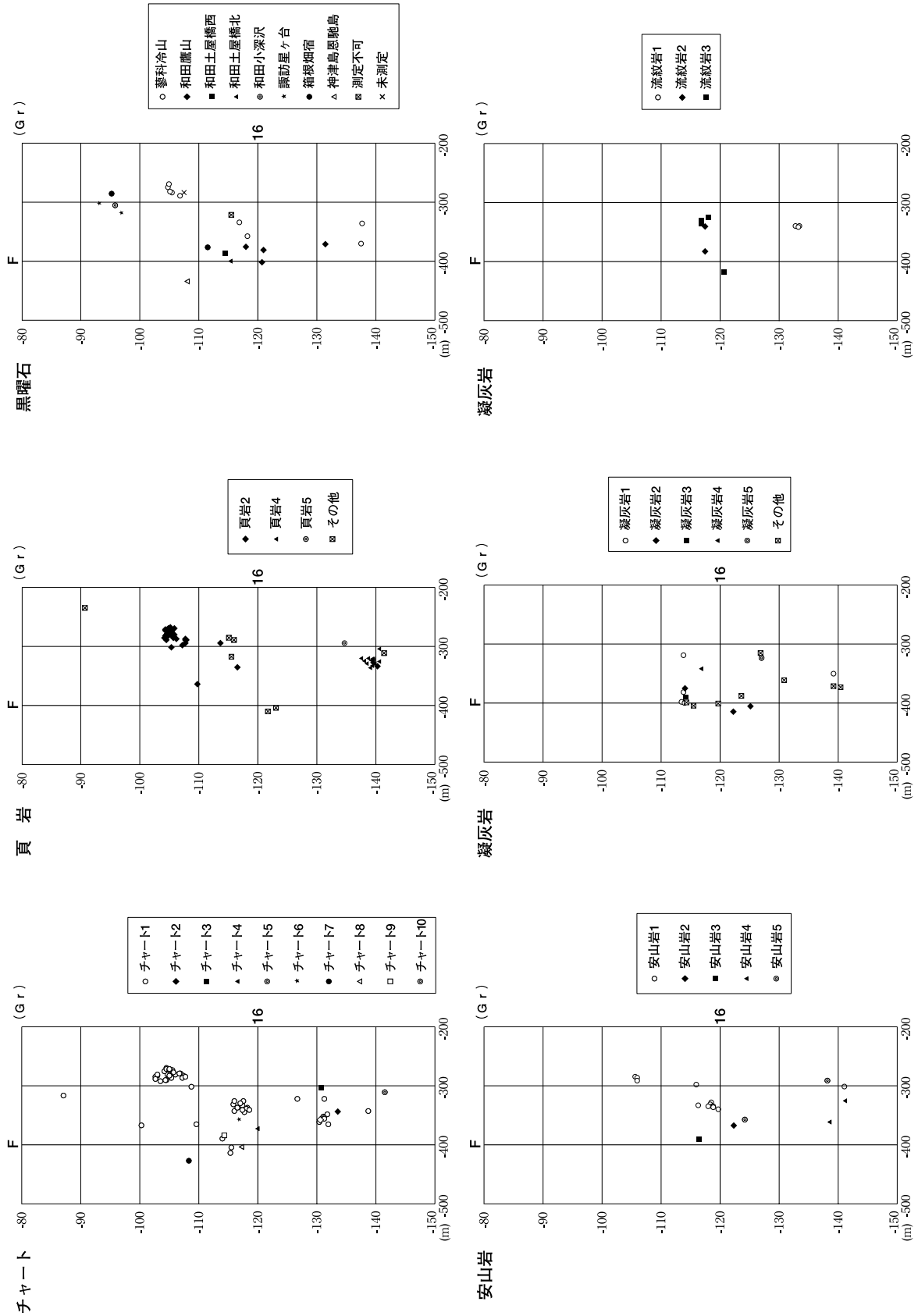
第144図 F区の石器群(9)



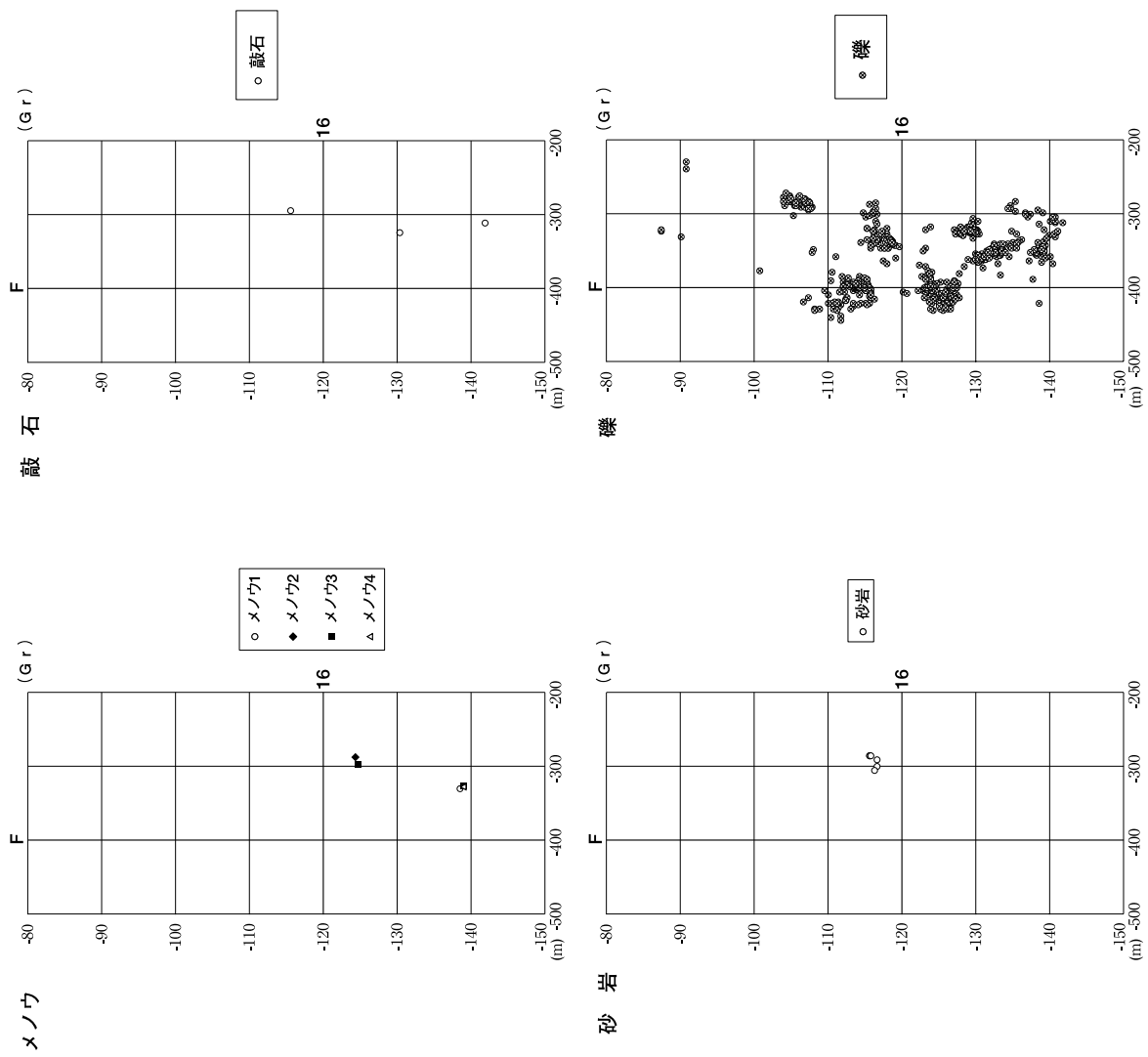
第145図 F区の石器群(10)



第146図 F区の石器群(1)



第147図 F区 平面分布(1)



第148図 F区 平面分布(2)

第2部 考察編

1. 長嶋遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

沼津工業高等専門学校 望月明彦

はじめに

本調査地点では建築予定地毎に分けられた南北方向にひろがるA区～F区の調査区のうち、A区・C区・D区・F区で旧石器時代の遺物が出土している。それぞれの石器群の様相については第2章にまとめているが、本地点が北側の埋没谷および東側の仙川へむかう傾斜地上にあることや、土層断面図の部分的な欠如などによって、出土層準が明確にし得ない面もあった。

そうした中、3次にわたる調査（それぞれM1, M2, M3と呼称する）で発掘された黒曜石598点について蛍光X線分析による産地同定を行った。

黒曜石産地

日本には北海道、長野県の産地をはじめとして管理の数の黒曜石産地が存在する。本研究室では、これらの産地を地域ごとにエリアとして分類し、蛍光X線分析の結果から各エリアをさらに細分して判別群としている。中部日本では高原山エリア、和田エリア、諏訪エリア、蓼科エリア、箱根エリア、天城エリア、神津島エリアの7つのエリアが確認されている。東日本のエリア、判別群の詳細については第3-1表を参照していただきたい。

分析法

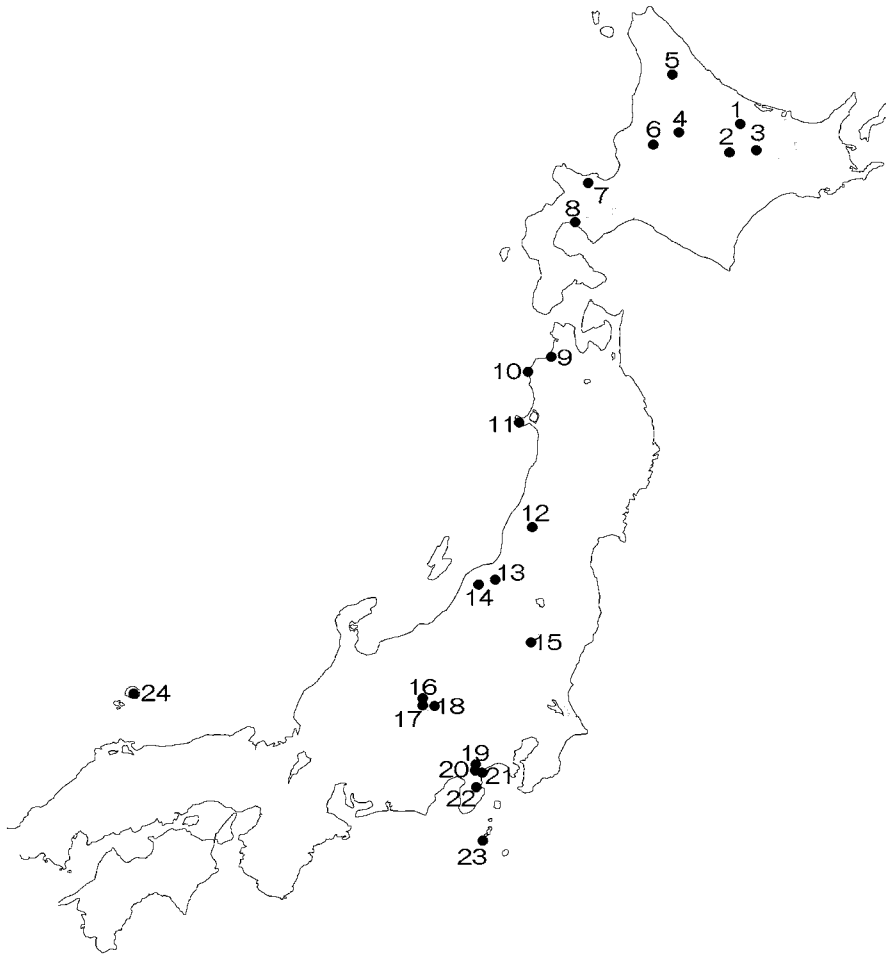
黒曜石の産地推定に用いられている分析法には大きく分けて

- 1) 黒曜石の化学組成の差に基づく方法。
- 2) 黒曜石の生成年代に基づく方法

の二つがある。ここでは、1) について見てみたい。よく用いられる分析法には蛍光X線分析、ICP分析、中性子放射化分析などがある。ICP分析は微量の元素も分析可能であるが、試料を破壊して溶液にする必要があり、貴重な考古学的な試料の分析には適当とはいえない。中性子放射化分析は超微量の元素まで分析することが可能であるが、原子炉を用いることからどこでも分析するというわけには行かない。また、この分析法では試料の見掛けは変わらないが、試料自身が放射能を帯びてしまうために放射性廃棄物となってしまう。ところが、本研究室で用いている蛍光X線分析は微量分析が得意ではないが、試料をまったく損なわずに非破壊で分析できるという利点がある。また、非常に迅速に測定が可能であることから多数の試料の分析にも適している。

産地推定

産地推定では、あらかじめ産地から採取された原石を分析してデータベースを作成している。この



第3-1図 九州以外の主な黒曜石産地

原石のデータベースと遺跡出土の分析データを照合して産地推定を行っている。第1表は、隠岐以東の黒曜石産地である。第1図は産地の分布図である。データベースについては、試料の増加に伴って当初用いていた産地名を変更することになり、第1表には新旧判別群、新旧記号が記載してある。

分析方法は、エネルギー分散蛍光X線分析法 (EDX) である。用いた装置はセイコーインスツルメンツ卓上型蛍光X線分析計SEA-2210Lである。

分析条件は以下のとおりである。

管電圧 50kV 管電流 自動設定
 測定時間 240sec 雰囲気 真空
 照射径 10mm
 検出器 Si(Li)半導体検出器

測定元素は、アルミニウム、ケイ素、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン、鉄、ルビジウム、ストロンチウム、イットリウム、ジルコニウムである。

産地推定法は以下のとおりである。

蛍光X線分析から得られた蛍光X線スペクトル強度を元素記号 (K, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr) で表すとする。判別図法と、判別分析を行うが、二つの方法とも以下の指標を用いる。

Sum = Rb+Sr+Y+Zr とする。

Rb分率 = Rb/Sum Sr分率 = Sr/Sum Zr分率 = Zr/Sum

1. 長嶋遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

都道府県	地図No.	エリア	新判別群	旧判別群	新記号	旧記号	原石採取地(分析数)
北海道	1	白滝	八号沢群 黒曜の沢群		STHG STKY		赤石山山頂(19)、八号沢露頭(31)、八号沢(79)、黒曜の沢(6)、幌加林道(4)
	2	上士幌	三股群		KSMM		十三ノ沢(16)
	3	置戸	安住群		ODAZ		安住(25)、清水ノ沢(9)
	4	旭川	高砂台群 春光台群		AKTS AKSK		高砂台(6)、雨紛台(5)、春光台(5)
	5	名寄	布川群		NYHK		布川(10)
	6	新十津川	須田群		STSD		須田(6)
	7	赤井川	曲川群		AIMK		曲川(25)、土木川(15)
	8	豊浦	豊泉群		TUTI		豊泉(16)
青森	9	木造	出来島群		KDDK		出来島海岸(34)
	10	深浦	八森山群		HUHM		八森山公園(8)、六角沢(8)、岡崎浜(40)
秋田	11	男鹿	金ヶ崎群		OGKS		金ヶ崎温泉(37)、脇本海岸(98)
			脇本群		OGWM		脇本海岸(16)
山形	12	羽黒	月山群		HGGS		月山荘前(30)、朝日町田代沢(18)、櫛引町中沢(18)
			今野川群		HGIN		今野川(9)、大綱川(5)
新潟	13	新津	金津群		NTKT		金津(29)
	14	新発田	板山群		SBIY		板山牧場(40)
栃木	15	高原山	甘湯沢群	高原山1群	THAY	TKH1	甘湯沢(50)、桜沢(20)
			七尋沢群	高原山2群	THNH	TKH2	七尋沢(9)、自然の家(9)
長野	16	和田(WD)	鷹山群	和田峠1群	WDTY	WDT1	鷹山(53)、小深沢(54)、東餅屋(36)、芙蓉ライト(87)、古峠(50)、土屋橋北(83)、土屋橋西(29)、土屋橋南(68)、丁字御領(18)
			小深沢群	和田峠2群	WDKB	WDT2	
			土屋橋北群	和田峠3群	WDTK	WDT3	
			土屋橋西群	和田峠4群	WDTN	WDT4	
			土屋橋南群	和田峠5群	WDTM	WDT5	
			芙蓉ライト群		WDHY		
		和田(WO)	ブドウ沢群	男女倉1群	WOBD	OMG1	ブドウ沢(36)、ブドウ沢右岸(18)、牧ヶ沢上(33)、牧ヶ沢下(36)、高松沢(40)
			牧ヶ沢群	男女倉2群	WOMS	OMG2	
			高松沢群	男女倉3群	WOTM	OMG3	
	17	諏訪	星ヶ台群	霧ヶ峰系	SWHD	KRM	星ヶ塔第1鉦区(36)、星ヶ塔第2鉦区(36)、星ヶ台A(36)、星ヶ台B(11)、水月霊園(36)、水月公園(13)、星ヶ塔のりこし(36)
	18	蓼科	冷山群	蓼科系	TSTY	TTS	冷山(33)、麦草峠(36)、麦草峠東(33)、渋ノ湯(29)、美し森(4)、八ヶ岳7(17)、八ヶ岳9(18)、双子池(34)
			双子山群		TSHG		双子池(26)
播鉢山群				TSSB		播鉢山(31)、亀甲池(8)	
神奈川	20	箱根	芦ノ湯群	芦ノ湯	HNAY	ASY	芦ノ湯(34)
			畑宿群	畑宿	HNHJ	HTJ	畑宿(71)
			黒岩橋群	箱根系A群	HNKI	HKNA	黒岩橋(9)
			鍛冶屋群	鍛冶屋	HNKJ	KJY	鍛冶屋(30)
静岡	21		上多賀群	上多賀	HNKT	KMT	上多賀(18)
			22	天城	柏峠群	柏峠	AGKT
東京	23	神津島	恩馳島群	神津島1群	KZOB	KOZ1	恩馳島(100)、長浜(43)、沢尻湾(8)
			砂糠崎群	神津島2群	KZSN	KOZ2	砂糠崎(40)、長浜(5)
島根	24	隠岐	久見群		OKHM		久見パーライト中(30)、久見採掘現場(18)
			箕浦群		OKMU		箕浦海岸(30)、加茂(19)、岸浜(35)
			岬群		OKMT		岬地区(16)
その他			NK群		NK		中ッ原1G、5G(遺跡試料)、原石産地は未発見

第1表 産地原石判別群(SEIKO SEA-2110L蛍光X線分析装置による)

Mn*100Fe log(Fe/K)

分率はRb+Sr+Y+Zr全体を100%としたとき、それぞれ4元素が何%を占めるかを表している。

判別図法では横軸にRb分率、縦軸にMn/Feと横軸にSr分率、縦軸にlog(Fe/K)をとった二つのグラフを作成する。あらかじめ、原石のプロットを作成しておき、遺跡出土試料のプロットがどの原石と一致するかを視覚的に判別する。第3-2図、第3-3図では遺跡出土試料を◆で表してある。

判別分析はあらかじめ分類されている原石による判別群のどれに遺跡出土試料が最も近いかを計算された距離によって判別する多変量解析法である。判別群に属する確率も算出される。判別分析ではあくまでもすでに分類されている群のどれに近いかを判別する手法であり、試料がどの判別群にも属していないときは信頼できる結果とはならない。そのため、判別分析において算出された判別群と試料との距離が十分近いことを確認する必要がある。

推定結果に影響する主な因子は汚れと風化である。蛍光X線分析は試料の表面を分析する方法であることから、表面の状態により測定結果が大きく影響される。風化している場合には、カリウムの増加が見られ、第3-3図ではプロットが縦軸の下のほうに移動する。風化の場合には試料の表面を削ることにより解決はできるが、試料を破壊することとなるので測定は困難となる。表面が汚れている場合は洗浄を繰り返すことにより解決できる場合が多い。もうひとつの要因として試料の大きさと厚みの問題がある。試料が小さすぎると得られる蛍光X線強度が弱くなり正確な推定が困難となる。また、試料が薄すぎるとX線が試料を透過してしまい、やはり正確な結果が得られない。本遺跡で推定できなかった試料はこの要因によるものが多い。

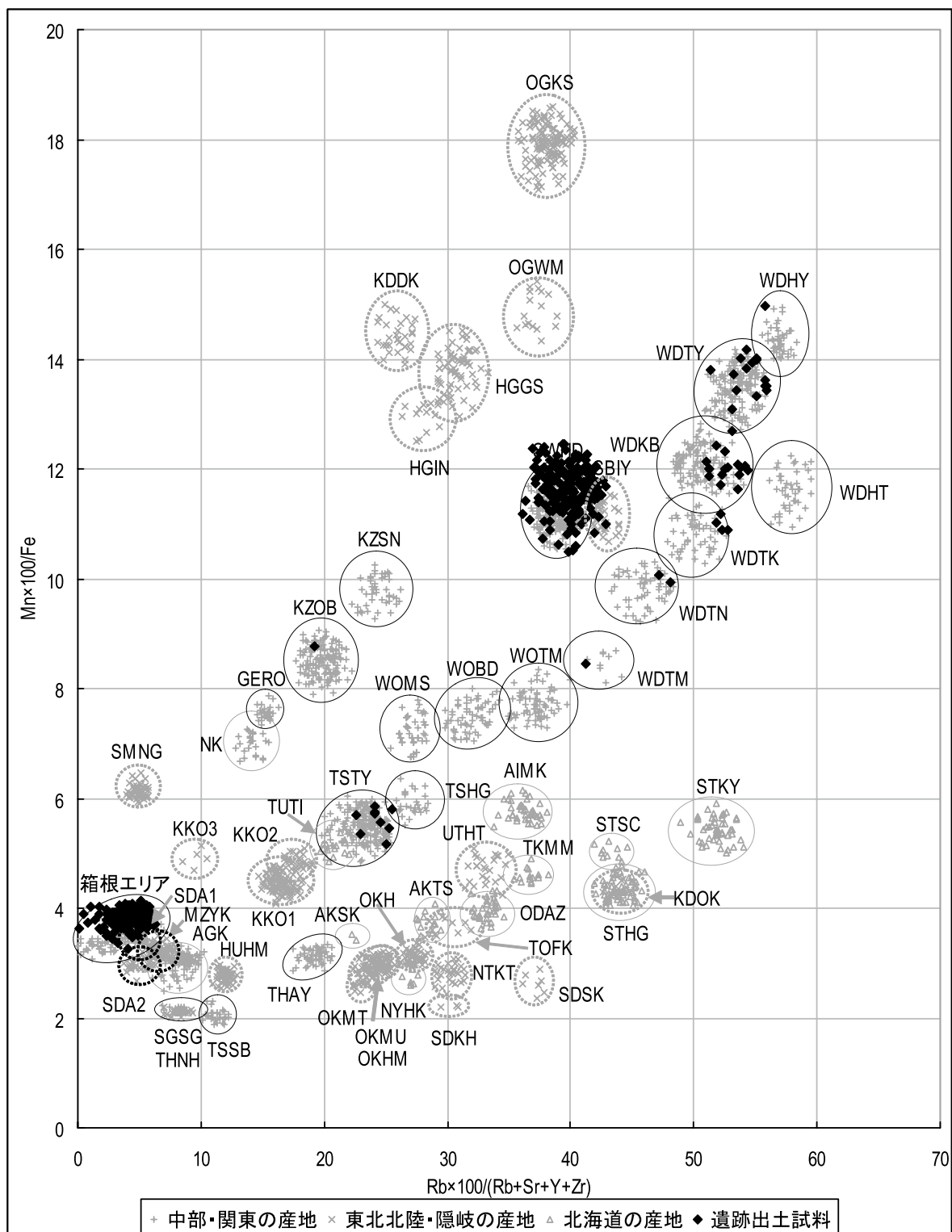
ここで「産地」という用語について触れておきたい。よく原産地という言葉が用いられるが、この言葉はもともとの産地(黒曜石が最初に生成された場所、一次産地、露頭)と近い感じを与える。古代人は黒曜石が採取できればどこでも良かったであろうし、かえって沢などの転石で良質のものが採取できる場所を選んだ可能性もある。したがって、ここでは産地という用語を「古代人が採取可能であった黒曜石の存在するところ」と言う意味で原産地と区別しておきたい。実際、第3-1表に示すとおり、同じ判別群でも複数の場所から採取されたり、同じ場所から複数の判別群が採取されたりしているのである。しかも、産地推定とは言っているけれども、実際には判別群推定であり、特定の場所を推定しているわけではないことも改めて言っておきたい。

産地推定結果

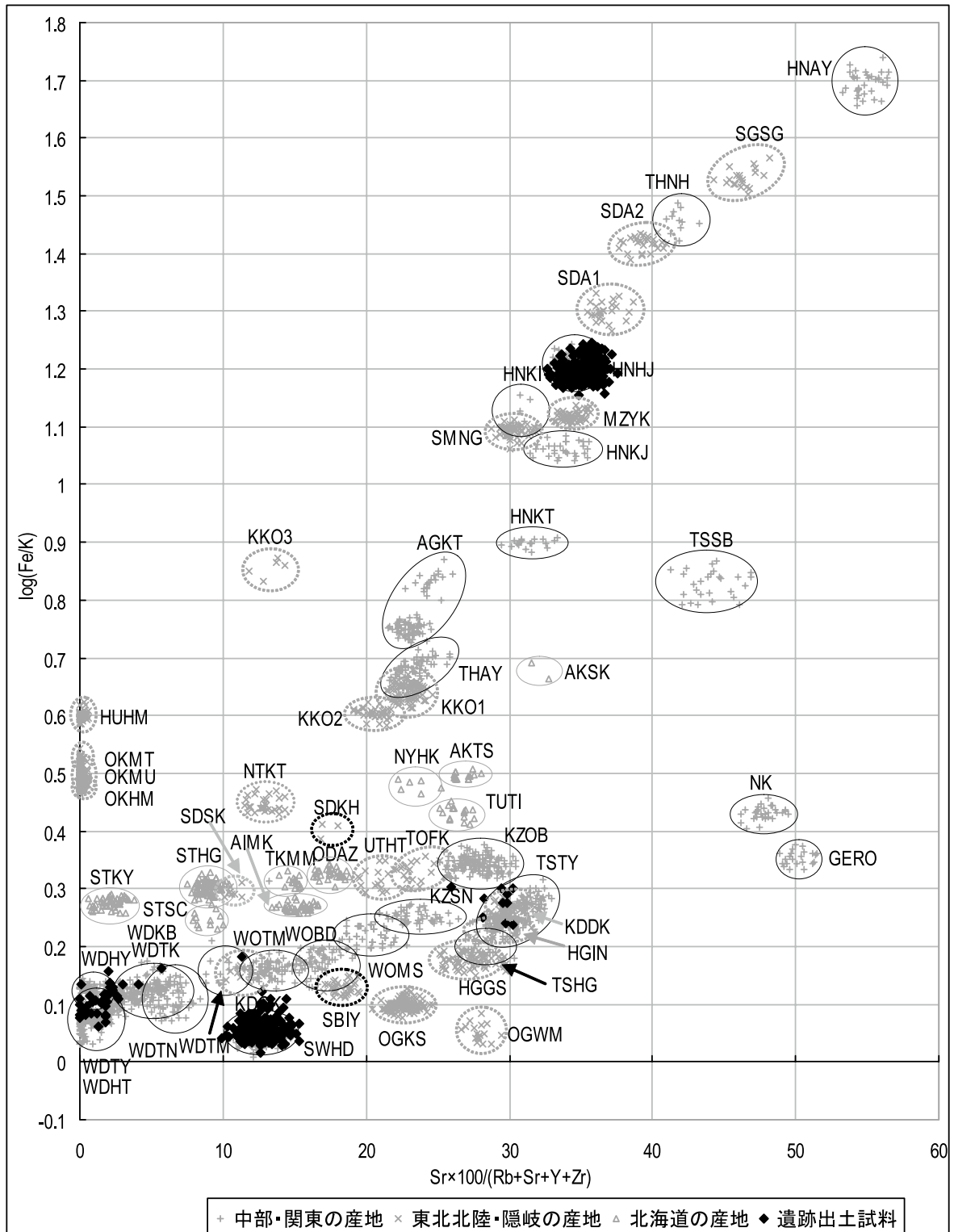
判別図法による産地推定結果は第3-2図と第3-3図に示した。図中の+記号は中部・関東地方の原石、×記号は東北・北陸・隠岐の原石、△記号は北海道の原石のプロットである。本遺跡出土黒曜石は推定が可能であった試料について◆記号で示してある。詳しい結果については第3-2表以下に示すが、これら二つの判別図から諏訪エリア星ヶ台群、箱根エリア畑宿群が多く検出され、さらに和田エリアの各群、蓼科エリア冷山群、神津島エリア恩馳島群が確認された。

個々の試料の産地推定結果については、本報告書付録CD-ROMの表に示す。第3-2表には1-3次発掘ごとに産地別組成を示す。この表には産地推定が可能であった試料について示した。

1. 長嶋遺跡出土黒曜石製石器の産地推定



第 3 - 2 図 長嶋遺跡出土の黒曜石製石器の産地判別図 1



第3-3図 長嶋遺跡出土の黒曜石製石器の産地判別図2

1. 長嶋遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

産地		1次(M1)		2次(M2)		3次(M3)		総計	
判別群名	記号	個数	%	個数	%	個数	%	個数	%
諏訪星ヶ台群	SWHD	185	77.4			2	10	187	40
和田芙蓉ライト群	WDHY	1	0.4					1	0.2
和田鷹山群	WDTY	12	5			4	20	16	3.4
和田小深沢群	WDKB	15	6.3			1	5	16	3.4
和田土屋橋北群	WDTK	3	1.3			1	5	4	0.9
和田土屋橋西群	WDTN	1	0.4			1	5	2	0.4
和田土屋橋南群	WDTM	1	0.4					1	0.2
蓼科冷山群	TSTY	1	0.4	1	0.5	7	35	9	1.9
箱根畑宿群	HNHJ	20	8.4	207	99	3	15	230	49.1
箱根黒岩橋群	HNKI			1	0.5			1	0.2
神津島恩馳島群	KZOB					1	5	1	0.2
総計		239	100	209	100	20	100	468	100

第3-2表 産地組成

第3-2表に見るとおり、発掘ごとに大きく産地組成が変化している。M1では諏訪星ヶ台群(SWHD)が77.4%を占め、主体となっている。和田エリアもかなり検出され、信州の産地以外は箱根畑宿群が8.4%を占めるに過ぎない。M2では信州は蓼科冷山群の1点をのぞき、すべてが箱根エリアの黒曜石である。M3では信州が多くを占めるが、和田エリア、蓼科エリアがともに35%で諏訪エリアの10%より多く検出されている。

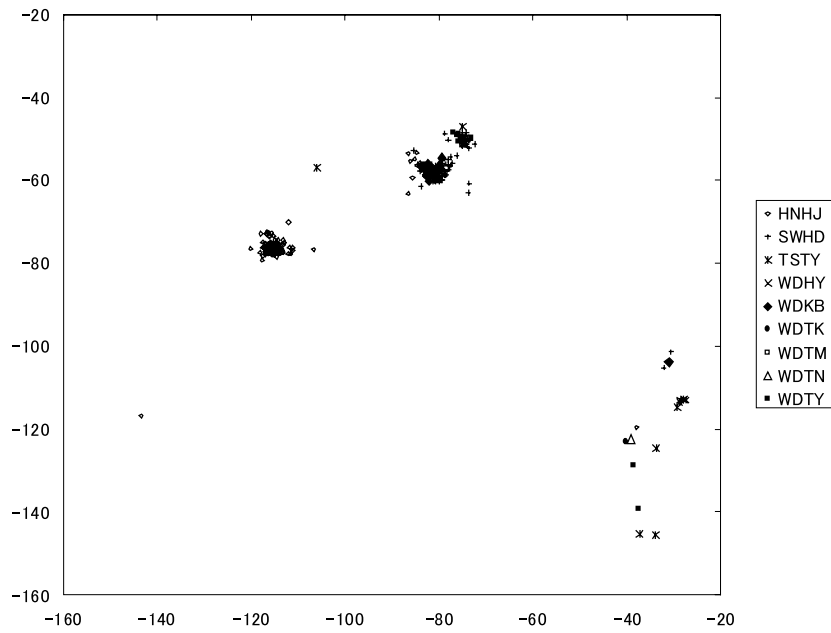
第3-4図には推定可能であった試料中、座標値の存在する試料について、遺跡内における分布をプロットした。分析で唯一検出された神津島恩馳島群は座標値が存在しないため、この図には示されていない。さらに第3-5図ではM1の分布を拡大してある。

M1では大小二つのブロックが存在するが、大きいほうのブロックを見ると、ブロックの左側に箱根畑宿群が比較的散漫に分布する。ブロックの右側には諏訪星ヶ台群が比較的密に分布している。また、和田エリアの黒曜石は中ほどに分布する。これに対し、小さいほうのブロックでは、諏訪星ヶ台群と和田鷹山群のみが重なって分布していることがわかる。

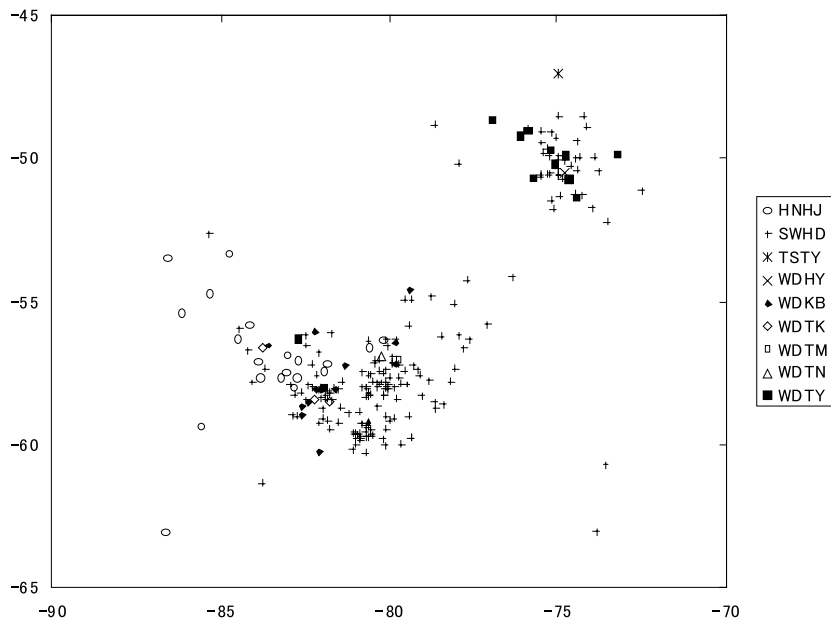
M2においては、箱根畑宿群が単独でひとつの石器ブロックを形成している。M3においては、少数の黒曜石しか出土していないが、蓼科冷山群はほとんどこのブロックだけに検出されている。

以上のように、長嶋遺跡で検出された石器ブロックはそれぞれ違った特徴を持っていることが明らかとなった。

なお、深さ方向の分布図も作成したが、産地によるレベルの差は認められなかった。



第3-4図 1-3次発掘黒曜石試料の産地別分布図



第3-5図 1次発掘黒曜石試料の産地別判別図

1. 長嶋遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

器種	SWHD	HNHJ	WDKB	WDTY	WDTN	WDTM	WDTK	WDHY	TSTY	計
碎片	79	12	5	2			1			99
剥片	63	6	8	3		1	1			82
細石刃	29		1	6			1	1		38
削片	3									3
石刃	8		1		1					10
尖頭器片	1			1						2
二次加工剥片	2	2								4
背部加工尖頭形石刃	2									2
背部加工尖頭形石刃片	1									1
(空白)	1									1
総計	188	20	15	12	1	1	3	1	1	242

第3-4表 M1における器種別産地組成

第3-4表にはM1における器種別産地組成を示した。諏訪星ヶ台群、和田エリアの黒曜石では細石刃などの製品の占める割合が多いのに対し、箱根畑宿群では2次加工のある剥片が2点あるもののほとんどが碎片と剥片である。1点のみの蓼科冷山群は片面加工の尖頭器であった。

M2では碎片(138点)や剥片(63点)が多数を占め、角錐状石器片(3点)と削片、周縁加工尖頭器、石核、背部加工石器、片面加工尖頭器が1点ずつで、すべて箱根畑宿群である。1点のみの蓼科冷山群は細石刃である。

器種	KZOB	SWHD	HNHJ	WDKB	WDTY	WDTN	WDTK	TSTY	総計
碎片					1			1	3
石核			1					1	2
剥片	1			1	3	1		6	12
角錐状石器片			1						1
石核								1	1
削器		1							1
二次加工剥片		1							1
背部加工石器							1		1
背部加工尖頭形剥片			1						1
総計	1	2	3	1	4	1	1	9	22

第3-5表 M3における器種別産地組成

2. 長嶋遺跡におけるローム層層序

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

三鷹市長嶋遺跡（三鷹国際交流会館予定地；以下文中では長嶋遺跡とする）は、武蔵野台地南部を流れる多摩川支流の仙川中流域右岸に広がる武蔵野面上に立地する。現在の地形図（例えば国土地理院発行の1万分の1地形図など）をみると、この付近の仙川の右岸側は人工改変も加わり、谷斜面すなわち台地と谷底低地の境界が不明瞭となっている。今回の調査区は、発掘調査所見により武蔵野ローム層上部とされる層位までのローム層が確認されていることから、谷底低地ではなく台地上に位置することはほぼ確実である。貝塚ほか編（2000）による武蔵野台地の地形区分に従えば、本遺跡の位置する武蔵野面は、約8万年前に形成されたM2面に対比される。

1994年に行われた長嶋遺跡の3次発掘調査では、F区とされた調査区の立川ローム層中より旧石器時代の遺物が出土した。今回の分析調査では、遺物の出土層位について標準層序との対比するため、ローム層を構成する母材の重鉱物組成の層位的な変化と火山ガラスの量比の層位的な変化の状況を指標として、層序対比を行う。

立川ローム層の母材の主体は、富士山を給源とする火山噴出物（テフラ）である。しかし、ローム層自体は富士山のテフラが積み重なってできたというような単純な累積性の土壌ではなく、富士山のテフラとその再堆積物および富士山以外の火山に由来するテフラとその再堆積物、さらにテフラには由来しない碎屑物などが、主に風によって運ばれ、それらが積み重なって形成された、やや複雑な累積性の土壌であると考えられている（例えば鈴木（1995）など）。通常、立川ローム層の中部に多量に含まれる平板状のいわゆるバブル型を呈する火山ガラスは、鹿兒島の始良カルデラを給源とする始良Tn火山灰（AT：町田・新井，1976）に由来するものであることは既知のことであり、これなどは上述した富士山以外の火山に由来するテフラとその再堆積物の典型的な例である。したがってこれらの組成の変化は、ローム層の形成環境の変化を反映している可能性がある。これまで当社では、武蔵野台地の多数の地点において立川ローム層を調査し、武蔵野台地上であればどの地点でもほぼ同様の層位において同様の組成変化を示すという結果を得ている。このことから、重鉱物組成および火山ガラスの量比の層位的な変化は、武蔵野台地という規模程度の広がりにも共通した環境変化を反映している可能性が高いと考え、層序対比の指標としても有効であると考えている。

1. 試料

今回の3次調査では、A～F区までの発掘調査区が設定されている。今回の分析調査では、これらの調査区のうち、南東隅に位置するF区で確認されたローム層断面を対象とする。試料は、F区南北セクション2より採取された（第5図）。

作成された断面の最上部は、多孔質で締まりのないいわゆるソフトローム様を呈するが、発掘調査所見ではその下位に暗色帯とされる層位が認められたことからIV?層とされ、その下位は第1暗色帯

(BB1) に相当するV層に分層された。以下、発掘調査所見により、武蔵野台地のローム層層序に従い、VI層からXIV層までの分層がなされている。それらの中でXIII層については、暗色を呈する上部のXIII a層と黄褐色を呈する下部のXIII b層に細分されている。試料は、断面最上部のIV?層からXIV層上部まで、厚さ5 cmで連続的に試料番号1～68までの68点が採取された。各層の層厚および試料採取層位は、分析結果を呈示した図1に併記の柱状図を参照されたい。

なお、分析試料は、層厚が比較的薄いIV?層からVII層下部までは奇数番号の試料を1点おきに選択し、立川ローム層最下部から武蔵野ローム層最上部とされるXI層までは2点おきに選択、XII層以下については各層につき1点ずつ選択した。また、ATの火山ガラスの検出が予想され、かつその降灰層準が推定されるV層からIX層最上部の試料については、火山ガラス比分析を行う。したがって、選択した試料数は、重鉍物分析のみ行う試料16点、重鉍物分析および火山ガラス比分析を行う試料7点である。選択した試料の試料番号は、分析結果を呈示した表1および図1に示す。

2. 分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉍物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉍物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉍物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

3. 結果

a) 重鉍物組成

全試料においてカンラン石が最も多く、次いで斜方輝石が多い。また、全試料に少量の単斜輝石と少量または微量の不透明鉍物が伴う。次に各層位の特徴を述べる。IV?層からVI層上部までは斜方輝石と単斜輝石の量比が比較的高く、両輝石を合わせた量比はカンラン石とほぼ同程度である。その中で、若干不明瞭ではあるが、V層上部の試料番号5とVI層上部の試料番号9に両輝石の極大が認められる。VI層下部からIX層までの層位では、IX層上部の試料番号21にカンラン石の極大が認められ、IX層中部の試料番号24にはカンラン石の極小が認められる。X層では、最上部の試料番号30と最下部の試料番号39にともにカンラン石の極大が認められる。また、斜方輝石と単斜輝石の両輝石間における量比の差が、他の層位に比べると小さいこともこの層位の重鉍物組成の特徴である。XI層からXIV層までの層位では、分析試料の層位間隔が広いこと、傾向として指摘するに留まるが、XII層にはカンラン石の極小すなわち両輝石の極大があり、XIII b層にはカンラン石の極大が指摘される。

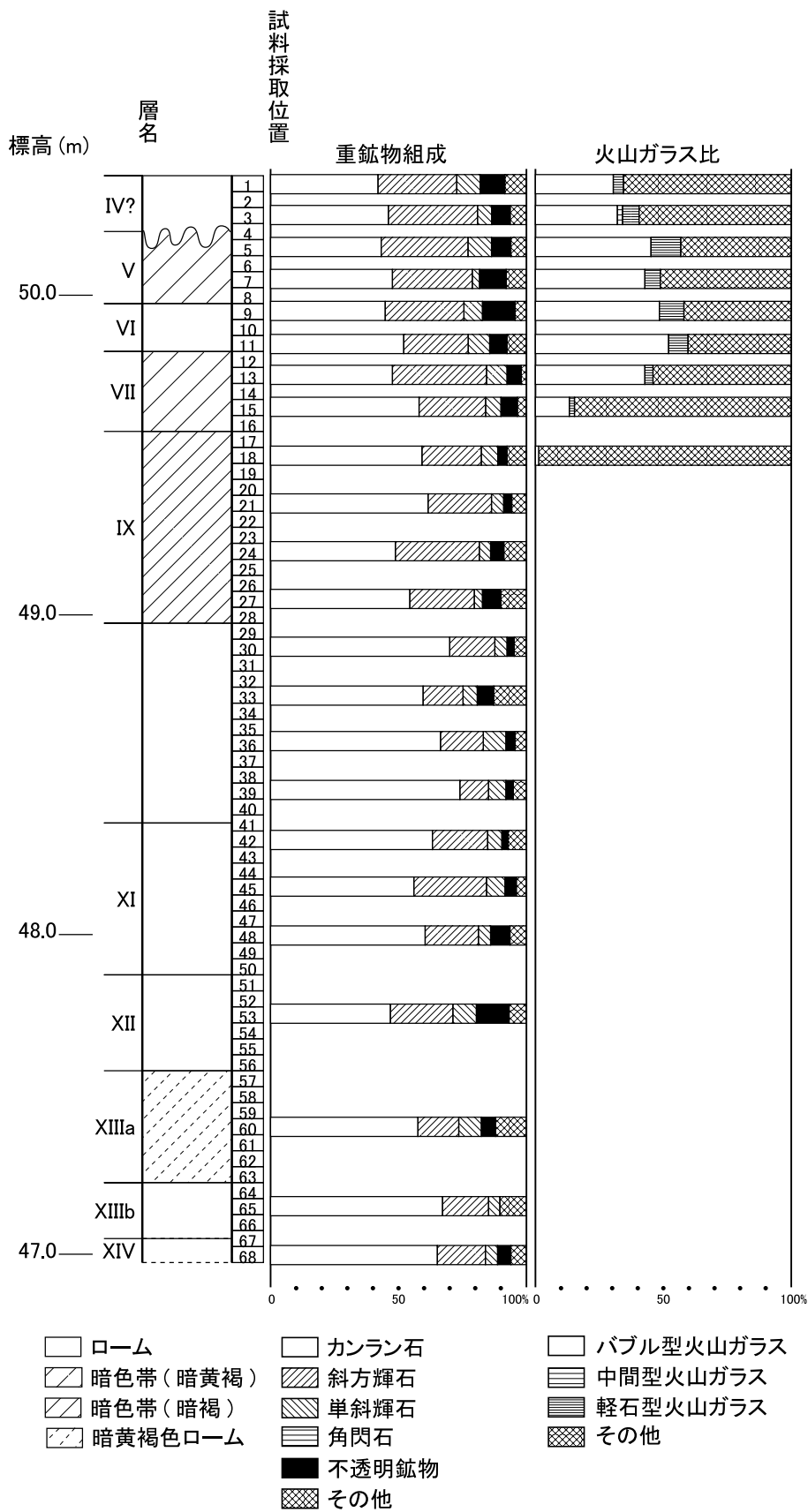


図1. F区南北セクションにおけるローム層の重鉱物組成および火山ガラス比

2. 長嶋遺跡におけるローム層層序

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	105	77	23	0	24	21	250	76	1	10	163	250
3	115	87	14	0	18	16	250	80	5	16	149	250
5	108	85	23	0	19	15	250	113	0	29	108	250
7	119	78	7	0	26	20	250	107	0	15	128	250
9	112	77	18	0	32	11	250	121	0	24	105	250
11	130	63	21	0	17	19	250	130	2	19	99	250
13	119	92	20	0	14	5	250	107	0	8	135	250
15	145	65	15	0	16	9	250	33	0	5	212	250
18	148	58	16	0	9	19	250	3	0	0	247	250
21	154	62	12	0	8	14	250	—	—	—	—	—
24	122	82	11	1	13	21	250	—	—	—	—	—
27	136	63	8	1	18	24	250	—	—	—	—	—
30	175	44	12	0	7	12	250	—	—	—	—	—
33	149	39	14	0	16	32	250	—	—	—	—	—
36	166	42	22	0	9	11	250	—	—	—	—	—
39	185	28	17	0	7	13	250	—	—	—	—	—
42	158	54	14	0	6	18	250	—	—	—	—	—
45	140	71	18	0	11	10	250	—	—	—	—	—
48	151	52	12	0	19	16	250	—	—	—	—	—
53	117	61	23	1	32	16	250	—	—	—	—	—
60	144	40	22	1	14	29	250	—	—	—	—	—
65	168	45	11	1	2	23	250	—	—	—	—	—
68	163	47	12	0	13	15	250	—	—	—	—	—

表1. F区南北セクションのローム層の重鉱物・火山ガラス比分析結果

b) 火山ガラス比

V層からVII層上部の試料番号13にかけてバブル型火山ガラスの濃集層準が認められた。この濃集層準の下限は試料番号15、18の火山ガラス比の状況から、試料番号14付近とされる。

4. 考察

分析結果から、最も有効な対比指標は、VII層上部以上に認められたバブル型火山ガラスの濃集である。この火山ガラスは、産出層位と形態の特徴からATに由来する。本地点におけるATの産状は、ATが降灰後に攪乱と再堆積を繰り返したことを示唆しているが、このように土壤中に特定テフラが混交して産出する場合は、テフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にはほぼ一致すると言われている（早津, 1988）。したがって、本地点におけるATの降灰層準は、試料番号14付近すなわちVII層中部に推定される。これまでの分析例からは、ATの降灰層準は標準層位のVI層とVII層の層界付近（VI層最下部またはVII層最上部）に推定されることが多い。これを基準にすると、本地点のVII層上部は標準層位のVI層最下部に対比され、本地点のVII層中部は標準層位のVII層上部に対比される。

ATの噴出年代については、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか（1987）、村山ほか（1993）、池田ほか（1995）、宮入ほか（2001）など）から、放射性炭素年代では

およそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5～3.2万年前におよぶとされている(町田・新井, 2003)。町田・新井(2003)は、ATの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている。

これまでの分析例により見出された、武蔵野台地の立川ローム層における重鉱物組成による対比指標は、Ⅲ層中部～Ⅲ層下部のカンラン石の極大層準、Ⅴ層直上および直下の輝石の極大層準、Ⅶ層下部のカンラン石の極大層準、Ⅸ層上部～中部のカンラン石の極小層準、Ⅹ層における斜方輝石と単斜輝石の量比の近似およびⅩ層上部と下部のカンラン石の極大層準があげられる。これらのうち、Ⅴ層直上の輝石の極大層準は、小林ほか(1971)における羽鳥の分析例以来多くの分析例で指摘されている。

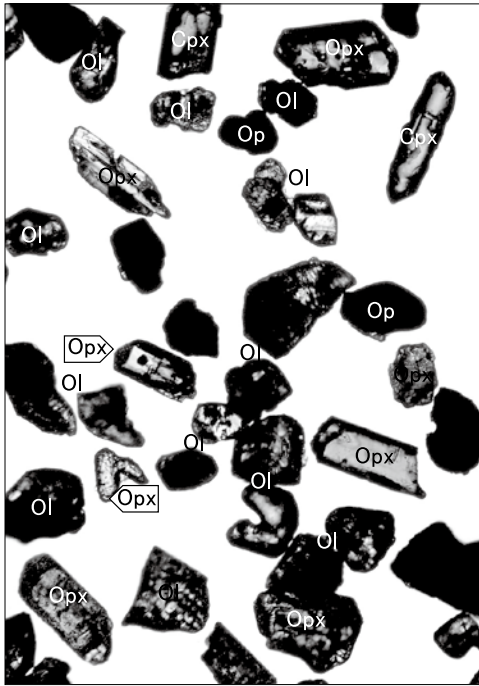
本地点では、上述したATの降灰層準による標準層位との対比を考慮すると、Ⅴ層上部とⅥ層上部の両輝石の極大層準が、標準層位のⅤ層直上および直下の輝石の極大層準にそれぞれ対比される。したがって、本地点のⅤ層は標準層位のⅤ層に対比され、その上位のⅣ?層は標準層位のⅣ層に対比されると考えられる。その上位は近世以降の広範囲にわたる削剥を受けているとの発掘調査所見から、Ⅳ層の一部もしくはⅢ層以浅の層位は本来堆積していたがこれにともない失われたと考えられる。また、削剥後の環境変化などにより削剥を免れたⅣ層が変質し、軟質で下位のⅤ層と波状の層界を呈するようになった可能性がある。

一方、AT降灰層準より下位では、Ⅸ層上部試料番号21のカンラン石の極大層準が標準層位Ⅶ層下部のカンラン石の極大層準に対比され、Ⅸ層中部試料番号24のカンラン石の極小層準が、標準層位Ⅸ層上部～中部のカンラン石の極小層準に対比されると考えられる。また、Ⅹ層上部と下部にそれぞれ認められたカンラン石の極大層準とⅩ層における両輝石の量比により、本地点のⅩ層は標準層位のⅩ層にほぼ対比される。以上のことから、本地点のⅨ層上部は標準層位のⅦ層下部に対比され、Ⅸ層中部および下部が標準層位のⅨ層に対比される。さらに本地点のⅩⅠ層は、層位的に標準層位の武蔵野ローム層最上位であるⅩⅠ層に対比されると考えて良い。

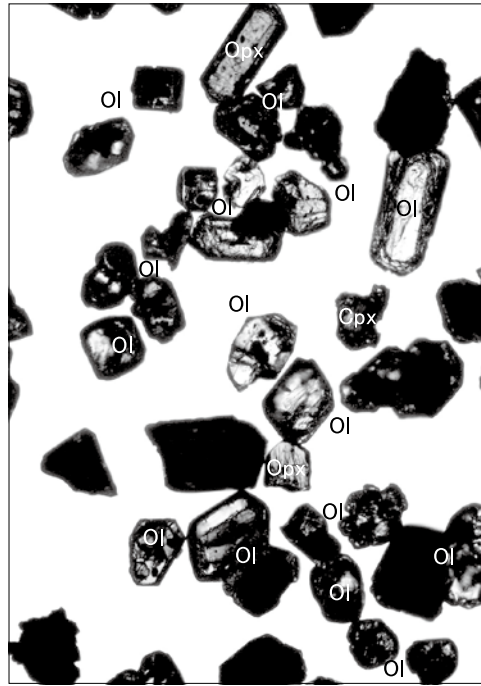
武蔵野台地の武蔵野ローム層については、多くの場合、下部に認められる東京軽石層(Hk-TP)をⅩⅩ層とする分層がなされているが、立川ローム層のような分層の指標となる暗色帯が不明瞭なこともあり、標準層位と呼べるほどの分層は未だ不確定である。しかし、これまでの当社における分析例により、重鉱物組成の層位的な変化は、武蔵野台地内であればほぼ共通した結果が得られることが確かめられた。したがって、本地点におけるⅩⅡ層以下の対比は、標準層位というよりも、比較的多くの地点で付けられている層名との対比ということになる。今回の分析結果では、ⅩⅡ層にカンラン石の極小層準とⅩⅢb層にカンラン石の極大層準がみられた。これまでの分析例においても、武蔵野ローム層上部にはこれらの指標が認められており、それぞれⅩⅡ層およびⅩⅢ層に分層されている場合が多い。すなわち、本地点のⅩⅡ層およびⅩⅢb層は、武蔵野台地の多くの地点でⅩⅡ層およびⅩⅢ層に分層されている層位にそれぞれ対比されると考えられる。なお、武蔵野ローム層の中部(ⅩⅤ～ⅩⅦ層)には、重鉱物組成の指標として角閃石を少量含むことがあげられるが、本地点ではそのような重鉱物組成は確認できなかった。したがって、本地点のⅩⅣ層は、武蔵野ローム層の中部までには至らないことはほぼ確実である。

引用文献

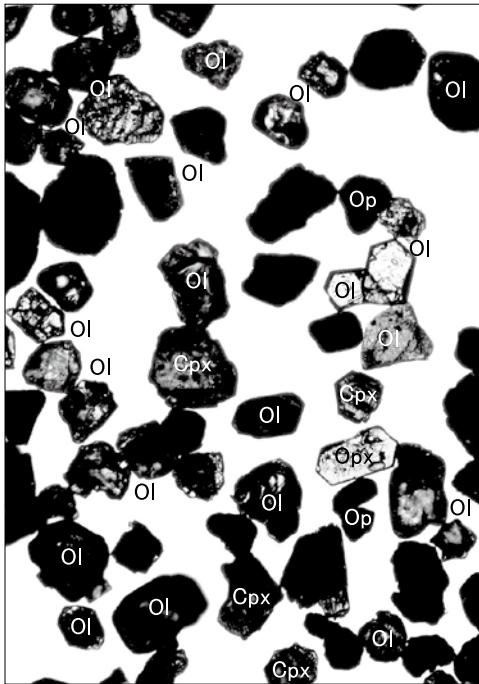
- 早津賢治, 1988, テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー—ATにまつわる議論
に關係して—. 考古学研究, 34, 18-32.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫, 1995, 南九州、始良カルデラ起源の大隅降下
軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代. 第四紀研究, 34, 377-379.
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編, 2000, 日本の地形4 関東・伊豆小笠原.
東京大学出版会, 349p.
- 町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46,
339-347.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗, 1987, 始良Tn火山灰の¹⁴C年代. 第四紀研究, 26,
79-83.
- 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎, 2001, 始良Tn火山灰のC-14年代のクロス
チェック (演旨). 地球惑星科学関連学会合同大会予稿集 (CD-ROM), 2001, Qm-010.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦, 1993, 四国沖ピストンコア試料を
用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C
年代—. 地質学雑誌, 99, 787-798.
- 鈴木毅彦, 1995, いわゆる火山灰土 (ローム) の成因に関する一考察—中部—関東に分布する火山灰
土の層厚分布—. 火山, 40, 167-176.



1.重鉱物(F区南北セクション2;1)



2.重鉱物(F区南北セクション2;39)



3.重鉱物(F区南北セクション2;53)



4.ATの火山ガラス(F区南北セクション2;11)

Ol:カンラン石. Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Op:不透明鉱物.

0.5mm



図2. 重鉱物・火山ガラス

3. 長嶋遺跡の旧石器時代石器群

阿 部 敬

はじめに

旧石器時代の遺構と遺物は、1次調査A区、2次調査C区/D区、3次調査E区/F区の計6地点で検出された。堆積層の薄さや上下の混乱、適切な土層断面図の不足などが影響し、石器群の検出精度は必ずしも良い状態とはいえなかったが、それぞれの帰属時期の推定は、武蔵野台地で従来から知られていた石器群との比較からある程度できた。それぞれの内容については、各節で示したとおりなので繰り返しになるが、検討する前に箇条書きにしておく。

■ 1次調査

A区	層位	石器数	石器集中数	礫群数	主要石器群	推定時期
第I文化層	不明	573点	4	0基	基部/背部加工尖頭形石刃石器	武蔵野IIb期前半
第II文化層	不明	88点	1	0基	尖頭器 細石刃	武蔵野III期からIV期?

■ 2次調査

	層位	石器数	石器集中数	礫群数	主要石器群	推定時期
C区	IV中	266点	1	0基	切出形石器 尖頭器 角錐状石器	武蔵野IIb期前半
D区	V上	17点	1	0基	背部加工尖頭形石刃石器	武蔵野IIa期

■ 3次調査

	層位	石器数	石器集中数	礫群数	主要石器群	推定時期
E区	IV	不明	1	1基	端削器	武蔵野IIa期
F区	IV下-III下	255点	8	8基	背部加工尖頭形石刃石器 尖頭器	武蔵野IIa期からIII期

以上を見てもわかるように、本遺跡で検出された石器群はすべて後期旧石器時代後半期にあたる武蔵野IIa期からIV期までに帰属する。最も多くの点数が確認されたのは武蔵野IIb期の石器群で、情報の不明確なE区を除く1199点のうち839点と大多数(70%)をしめている。次に、時期の古いほうから順に、特徴的な石器群を採り上げて検討する。

1 V層上部からIV層下部の石器群

D区石器群と、E区およびF区の一部石器群が該当する。

D区石器群は、17点とたいへん小規模ながら、V層にまとまって分布していた。石刃の打面側を斜めに切り取って尖頭部を作出し、涙滴形に整形した一側縁加工と二側縁加工の尖頭形石刃石器と石核(石刃核)が組成する。また蓼科冷山群に同定された黒曜石製「細石刃」(小石刃)も組成する。この地点では、黒曜石と凝灰岩製石器の消費が行われているようであるが、石器群が小規模なので全体像は掴みにくい。

なお、F区の石器群はIV層上部からIII層下部を中心として検出されたので、殆どが「砂川期」以降の石器群と推測されるが、箱根畑宿群に同定された角錐状石器が1点検出されたため、一部にV層上部からIV層下部の石器群が混在している可能性がある。

2 IV層中部から上部の石器群

C区IV層中部の石器群とA区第I文化層石器群が該当する。A区の層位は分からなかったが、技術形態学的観点からそう推測した。

(1) C区IV層中部の石器群

1箇所の石器集中で構成される。主要な器種は背部加工石器、角錐状石器片、小型尖頭器で、同じ石器集中に組成される。これら3者はともに箱根畑宿産黒曜石で生産されており、空間的にも区別されているような状況は見いだせなかったので共伴しているものと考えられる。ただし個体は異なる可能性が高い。個体分類の結果からいうと、石器製作作業の痕跡と強く関連するのは背部加工石器と角錐状石器片である。しかし尖頭器と角錐状石器片についても少数の剥片類が伴うため、その製作が部分的に行われたのは間違いない。また、それぞれの素材剥片の形状は一般的剥片を中心としており、相互の生産過程は互いに近いものであったことを示している。なお、石刃生産の痕跡は皆無であるが、凝灰岩製の微細剥離痕の付いた縦長剥片が単体で検出されている。

武蔵野台地で検出されているIV層中部石器群で、角錐状石器に尖頭器が共伴する例としては練馬区丸山東遺跡(窪田ほか1995)が挙げられるが、ほかに明確なものを挙げるのは難しい。角錐状石器の終末がこのあたりの時期にあるからだろう。角錐状石器は、その機能が複数存在する可能性がつとに指摘されてきたが、すくなくとも同じ産地の石材で技術形態的連続性のない複数の型式が作り分けられ、しかも層位的に安定して同時期と推測できる石器集中を形成している場合は、相互に異なる機能があるとみなしておくことができるだろう。角錐状石器の技術形態と石材および各遺跡の出土状況については、亀田直美(1996)が新宿区下戸塚遺跡と海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡の重層事例を参照軸として、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第XIa文化層→同IX文化層/下戸塚遺跡第I文化層/東早淵遺跡第4地点第1文化層→柏ヶ谷長ヲサ遺跡第VIII文化層/下戸塚遺跡第2文化層、という3段階を想定し、その過程を形態とサイズおよび消費石材の多様化としてまとめており、長嶋遺跡C区IV層中部石器群は層位的にみて上記の3段階目に該当する可能性が高く、黒曜石を消費することから、その角錐状石器群の遅い段階の特徴と合致するといえるかもしれない。

この時期にはすでに尖頭器石器群が出現している。V層上部からIV層下部の時期、気候変動に伴う生業領域の縮小化が生じていたことはよく知られている。武蔵野台地では、狭い遊動域内の頻繁な居住地移動により遺跡数が急速に増加し、各遺跡での石器製作は近傍産石材への依存度を高めるようになる。さらに時期が下ると、台地外からの移動に際してその搬入地点が絞込まれていき、決まった場所に特定化されるようになる。また、特定化された搬入地点を基点に出発する石器生産が一般的剥片重視から石刃重視へと転換し、石材消費効率の良い石刃技法が盛んに用いられるようになる。生業領域が一方的に縮小する過程とともに、滞在地点の固定化と主要な石器製作技術の専門化が促進されていくのである(国武2003)。国武貞克によると、以上の過程は次の順で推移したとされる。

- ① 移動領域の縮小 (IV層下部段階)
- ② 石材獲得頻度の低下 (V層・IV層下部最新段階)

③ 剥片生産技術の変化 (砂川期)

尖頭器石器群は、いうまでもなく、原産地付近でのブランクもしくは製品の集中生産と移動先でのその調整ないし製品の遺棄・廃棄に特徴付けられるが、このように現象化する理由は、田村によって Biface Reduction (田村1992b) と命名された尖頭器石器群特有の石材獲得/消費戦略の特徴にある。この戦略の本質は、特定石材の目的的な獲得、特定地点への集中搬入、その地点を基点とする移動・居住形態といった、埋め込み戦略 (田村1992a) を組み入れた兵站戦略の強化にあり、一定領域内の資源配置とそれに準じた生態サイクルに集団の行動計画が良く合致した結果と説明されている。この仮定を前提とする限りにおいて、尖頭器石器群の出現は、特定領域の内部で資源を狙い撃ちに出来る信頼性の行動計画に裏打ちされると同時に、この計画に沿って運用可能な石器生産資源 (石材) と石器技術を必要としたということができる。また、移動中における刃部の損傷を最小限に抑えられることも、そうした信頼性の行動計画に組み込まれた石器技術の一環である。

関東平野を移動する集団にとっての尖頭器石器群とは石器経済上の効率性を高める技術として理解されている。というのも、尖頭器石器群のための石材は常に信州系というわけではなく、伊豆箱根系黒曜石やその他の石材でも製作されている。すなわち、中部高地集団との接触の粗密に直接関連しないところでも尖頭器の製作は行われており、この時期にはすでに関東集団内部に尖頭器石器群が一般化する兆候が顕れていたと考えられる。尖頭器石器群が石器経済上で必要欠くべからざる石器技術として関東の集団に普及するには以後の時期を待つことになるが、少なくともその前段階から中部高地を離れた地域でも生産運用されていたのである。長嶋遺跡C区IV層中部で確認された尖頭器と切出形石器および角錐状石器はこうした背景の下に形成された石器群である。

(2) A区第I文化層の石器群

本文化層の石器群は573点である。その構成石材は黒曜石255点 (44.5%)、頁岩251点 (43.8%)、チャート36点 (6.3%)、ホルンフェルス3点 (0.5%)、凝灰岩2点 (0.3%)、未特定 (4.5%) である。黒曜石と頁岩がほぼ拮抗しながら全体を2分するような内容となった。武蔵野台地における「砂川期」の石器石材は、頁岩やチャートのような比較的近傍にある石材を中心に、黒曜石のような遠隔産石材もよく利用される。この点で第I文化層の石材構成は一般的なものである。近傍産石材は、「黒曜石が第1石材になる遺跡では第2石材となり、黒曜石が第2石材となる遺跡では第1石材になっている」(国武2000) からである。

A区第I文化層の黒曜石については、望月明彦氏に依頼して全点を産地分析していただいた。その結果を地域ごとにまとめてみると、信州系165点 (64.7%)、箱根系20点 (7.8%)、推定/測定不可65点 (25.5%)、未測定5点 (2.0%) となる。推定/測定不可とされた資料の殆どは極小の碎片 (最大長10mm以下) である。持ち運びの可能性を被りにくい碎片は産地組成にあまり影響しないと予想されるため、以上の組成は本石器群における黒曜石産地組成の比率を反映している可能性が高い。すなわち、黒曜石製石器群の産地別組成比率の殆どを占めているのは信州系と推測される。

武蔵野台地における信州系黒曜石は基本的に石刃製石器群に対応し、少ないながら尖頭器石器群にも結びつく。長嶋遺跡と地理的に近い信州系黒曜石の消費遺跡としては野川上流域の日影山遺跡第2文化層 (国武ほか1999) をあげることができる。黒曜石は全841点のうち186点 (22.1%) を占め、全17ブロックのうち10ブロックに組成される。かなりまとまった状況である。仙川や野川流域の「砂川期」において黒曜石が消費される遺跡は多く確認されるものの、しかし、それぞれの組成数は非常に少ないのが一般的である。その殆どは1遺跡あたり10点を超過しておらず、日影山遺跡第II文化層のような

まとまった消費を行う事例は稀な存在である。しかも、その日影山遺跡でさえ、各ブロックの組成頻度は他の遺跡と同様にして少なく、12点を最大としてほしいが数点止まりである。このように、本流域における信州系黒曜石の組成は広く認められる一方で、その個別消費単位は限定的なものであり、日影山遺跡第Ⅱ文化層のような事例も、そうした個別消費単位が同一の地点に累積した状態を表している可能性もある。

ところで、信州系黒曜石の消費に武蔵野台地内での地理的な変異が認められないだろうか。野川・仙川流域より北方にある神田川流域の遺跡をみると、その黒曜石組成数/比率は、吉祥寺南町1丁目遺跡E地点(1451点/39.5%) (山村1996) で比較的まとまった消費遺跡が認められる。さらに北方では、善福寺川中流の済美台遺跡(377点/84.7%) (江坂・重住編1996)、石神井川流域で天祖神社東遺跡第Ⅰ文化層(1421点/51.9%) (黒尾・廣田編1986) や葛原遺跡第Ⅰ文化層(458点/42.3%) (廣田編1987)、武蔵関北遺跡第Ⅱ文化層(513点/65.6%) (川辺編1993) など、台地の北半で組成数自体が多く、しかも高い組成率を示す遺跡が増加する傾向がある。石器集中部の規模も比較的大きい傾向が認められる。石神井川流域では、「黒曜石の構成比率は、もともと比率の高い扇山遺跡の95%から武蔵関遺跡の3%まで、漸移的に変化している」(国武2000) とあるように、たしかに黒曜石の組成比率が多様であるが、全体としての消費量自体が多いと見なければならぬ。

武蔵野台地上の南北に見られるこのような偏差は、中部高地方面から携行してきた黒曜石の漸移的な消費過程を反映するようにも見えるが、必ずしもそうではないらしい。国武によると、信州系黒曜石以外の比較的消費量の少ない「台地外石材」、たとえば北関東方面からの硬質頁岩、相模野台地で多用される細粒凝灰岩、下総台地方面からもたらされる黄玉石などの消費状況をみると、原石搬入と一括消費の痕跡がある遺跡は石神井川流域のあたりに集積する現象が認められる。このような集積状態と周辺地帯での散発的な出土状況には著しい違いがあり、両者の関係は台地外から移動してきた集団の最初の原石搬入地と、そこを基点として展開する剥片・製品の個別搬入地との関係にあるとみなされる。つまり、武蔵野台地へ移動する集団の最初の滞在地がこの石神井川流域にあり、他の場所は、その後移動・居住する個別作業地点だというのである。したがって信州系黒曜石の消費にみられる南北間偏差もまた石神井川流域におけるそうした特異性の一部である可能性がある。国武の議論には、武蔵野台地にもたらされる各種の「台地外石材」の搬入消費動向によって隣接地域からの移動・居住の実態を明らかにできる見通しが示されており、今後ともこの点に注目していく必要がある。

長嶋遺跡の場合は、第Ⅰ文化層の石器集中4箇所(石器集中2～5)のうち、信州系黒曜石(具体的には諏訪星ヶ台群)を第1石材とするものが3箇所であるが、各集中の点数は比較的多く、いずれも10点を超える規模である。石刃の接合資料からも明らかなように、この遺跡の石刃生産が他の遺跡よりも同時にまとまって行われたことを示唆するが、原石が搬入されたような痕跡はなく、消費途中の石刃石核が搬入された可能性が高い。

この遺跡の形成は1度の滞在によるものだろうか。黒曜石をもう少し詳しくみてみると、諏訪星ヶ台産を第1石材とする石器集中2・3・4と、頁岩を第1石材として箱根畑宿産を第2石材とする石器集中5とに分けることができる(石器集中1は第Ⅱ文化層なので除く)。諏訪と箱根では遺跡からの方角が異なるので、それを担った集団の経路地もまた異なっていた可能性が高い。ただし、箱根畑宿産黒曜石の消費量は大変少なく、一般的剥片生産に関連しており、その消費形態は諏訪星ヶ台産と対照的であるため、滞在の機能的相違が示唆される。

次に黒曜石以外の石材、頁岩とチャートを個体分類してみると、石器群の形成過程はすこし複雑さを増す。石器集中5の第1石材である頁岩は少なくとも5個体以上に分類され、sh1、sh4、sh3、

sh5、sh7の順で多い。sh1とsh4は大型の礫面付き剥片を組成するので、原石ないし半割原石の搬入が想定されるが、対してsh3、sh5、sh7は剥片ないし消費途中にある小型石核での搬入である。搬入石器の推定形態によって相対化されるこの2単位の個体群は、「砂川期」における近傍石材の原料補給と時差消費の関係を良くあらわしているが、より重要なのはこの頁岩類のなかに遠隔産石材であるsh3、すなわち房総半島南部に産出する白滝頁岩（国武氏の教示による）が含まれていたことである。本石器群における白滝頁岩の消費過程は、分厚い剥片あるいは石核を搬入して非常に限定的な消費を行い、生産剥片の一部を石核にして小型剥片を剥離するというものである。製品との関連はわからないが、一般的剥片生産に関連するものであろう。

チャートは少なくとも9個体に分類されたが、それぞれの消費量は頁岩に比べて多くなく、単体搬入もしくは非常に限定的な消費が行われたことを示唆している。チャートの産出地は同定しづらいが、奥多摩方面の可能性もある。殆どが一般的剥片生産と関連するが、部分的に石刃生産にも関連している（第45図3）。このように、武蔵野台地において最も一般的といわれる頁岩やチャートであっても、その産出地が相互に大きく異なる可能性があり、よってそれを荷担する集団による多方面からの移動が石器群形成に関わっていることが示唆される。しかし、その同時性を検証することは困難であり、今後の課題となろう。

以上、簡単に黒曜石、頁岩、チャートという3種の石材をみてきたが、A地区第I文化層石器群の内容がかなり輻輳したものであることが明らかとなった。本石器群は信州方面、箱根方面、房総南部方面、および奥多摩方面という諸地域からの石材搬入とその消費によって形成されている。石器集中5はその集中密度から1箇所として数えられたが、石材構成からみると箱根畑宿産黒曜石、チャート、白滝頁岩という、産出地が異なる石材を含むことが明らかである。このような多方面からの石材を重視するならば、石器集中5の形成にもまた複数の形成機会があったとみることができる。各方面からの訪問にもかかわらず同じ地点を繰り返し利用していることは、この場所が生業計画上で特定の滞在地点となっている可能性を示唆するだろう。ただし、それにとまなう石器製作痕跡は、石神井川流域における台地外石材の初期搬入地とは対照的な、各種石材の限定消費が累積したものと考えられる。

3 「砂川期」以降の石器群

F区石器群はIV層上部からIII層下部を中心に検出された。尖頭器石器群と小型幾何形を呈する背部加工石器類を主体とする特徴から、「砂川期」よりもあとの時期、ナイフ形石器群の「終末期」付近に帰属するものと推測される。

検出された石器集中は8箇所、礫群もまた8箇所である。石器集中と礫群は空間的によく重なって分布していることから共伴する可能性が高い。

石器総数は255点で、その石材構成は多い順に以下のようなものである（百分率の小数点以下第2位は四捨五入）。

チャート	69点 (30.1%)
頁岩	67点 (29.8%)
黒曜石	23点 (10.2%)
安山岩	20点 (8.9%)
凝灰岩	20点 (8.9%)

流紋岩	9点 (4.0%)
砂岩	6点 (2.3%)
瑪瑙	5点 (2.2%)
ホルンフェルス	2点 (1.0%)
ほか	4点 (1.8%)

チャートと頁岩が最も多く、それぞれが全体の約3割を占めている。黒曜石はチャートと頁岩の次に多く、産地分析の結果、神津島恩馳島群1点、箱根畑宿群2点、諏訪星ヶ台群3点、和田鷹山群4点、和田小深沢群1点、和田土屋橋北群1点、和田土屋橋西群1点、蓼科冷山群8点、測定不可1点、未測定1点となった。実に多くの原産地からもたらされているが、地域別にまとめてみれば、信州系18点、伊豆箱根系2点、神津島系1点に単純化され、信州系が圧倒しているといえる。ただし、いずれも10点を超えないというそれぞれの消費単位の小ささは動かない。

石器集中を単位とした概観はすでに第V章にも記したので、ここではそれに加えて搬入石材の形態にも目を向けてみたい。もっとも多く消費しているチャートと頁岩は、上述のように、それぞれ全体の約3割ずつをうけてもっている。チャートは11個体もあるが、実はその点数のほとんどを個体ch1が占めており(58点)、逆に他の個体は少数で、その消費が極めて部分的であったかあるいは単体で搬入されたものとみられる。他方の頁岩も10個体(その他に分類されたものはすべて単個体)に分類されるものの、sh2が44点、sh4が15点とある程度まとまるほかはすべて単体で、チャートのそれと同様、その消費が部分的であったかあるいは単体で搬入品されたものと考えられる。

これらチャート1個体と頁岩2個体の搬入-消費形態に注目してみると、だいたい次のような消費過程を把握することが出来る。まずch1は、ほぼ原石搬入し、小型剥片生産をおこなって、小型台形様石器の製作を行い、小型石核を5点も残しながら殆ど消費しつくしてしまっている。sh2は半割原石を搬入し、小型石刃生産をおこなって端部加工石刃石器を製作し、こちらも石核5点を残して消費が終了している(残りの半割原石がどうなったのかはわからないが)。最後のsh4は、小型の剥片と碎片で占められていることから分かるように、おそらく石核調整や限定的な剥片剥離を行っていることを示しており、素材剥片や石核は持ち去られている可能性が高い。

このようにしてみると、チャートと頁岩のうち原石(ないし半割原石)状態で搬入されているのは、それぞれ1個体ずつに過ぎず、ほかは単体搬入もしくは極めて限定的に消費されただけであったことがわかる。まとめて消費された個体はそれぞれ台形様石器と端部加工石刃石器の製作に関与している。

ところがF区石器群を特徴付けている尖頭器の石材を見てみると、チャートと頁岩のうち遺跡内での消費が認められない単独搬入個体である。尖頭器に関連する石器製作のサイクルが一般的剥片製石器群および石刃製石器群と異なるパターンを形成している可能性を示唆している。

同様の傾向は安山岩にも認められる。安山岩は5個体に分類されたが、20点のうち7割にあたる14点が個体an1である。点数は決して多いとはいえないが、実測図にも示されたように、自然面の付着率が高い傾向が見て取れ、原石に近い状態で搬入している可能性が高い。対照的にほかの個体では単体搬入か限定的な消費が行われている。そして、そのなかに、an1とは異なる個体の安山岩製尖頭器が1点組成し、やはり調整剥片は検出されておらず、製品製作の痕跡は認められない。原石に近い状態で搬入された石材では尖頭器が製作されないという点は、チャート及び頁岩に共通する。

このような状態は「終末期」において一般的というわけではないが、最も多く認められるタイプの石材消費傾向ということでは出来る。再び国武の分析によると、残核を含む母岩(個体)が相対的に高

3. 長嶋遺跡の旧石器時代石器群

い比率を占めるタイプの遺跡とそうでない限定的な消費を行っただけの母岩が高い比率を占めるタイプの遺跡を比較すると、だいたい次のような現象が捉えられるという。まず、前者のタイプにおいては、ナイフ形石器類の製作品率が高く且つ搬入品率が低く、また尖頭器を共伴する場合もこの製作品率が高い。このタイプの遺跡は少なく限られている。しかし後者のタイプでは、ナイフ形石器の製作品率が低く且つ搬入品率が高く、また尖頭器を共伴する場合は搬入品率が高くなる。このタイプの遺跡は多数にのぼる。注意したいのはナイフ形石器類の場合は残核を伴う個体が高い比率を占める遺跡からそうでない遺跡まで、その比率に応じてナイフ形石器の製作品組成率が漸移的に移行するのに見えるのたいて、尖頭器の場合は製作品が極端に多くなる少数の遺跡とほぼ搬入品だけで構成される大多数の遺跡とに二極分化するとされている点である。このことは石核を含む個体が多い遺跡とそうでない遺跡の一部とで製品製作が行われ、その他の遺跡はこうした遺跡からの搬出先にあたる遺跡となっており、その関係が相対的に厳格化としているということの意味する。つまり尖頭器は多くの場合、特定の場所で製作される性格が強いということになる。

個体	尖頭器	背部加工石器類	削器類	二次加工剥片	剥片類	石核	礫石器類
ch1		1			52	5	
sh2		1			38	5	
蓼科冷山群					7	1	
rh3		1	1		1	1	
ch2					1	1	
rh2					1	1	
箱根畑宿群			1			1	
諏訪星ヶ台群			1	1	1		
an1				1	13		
sh4					15		
tu1					5		
tu2					3		
rh1					3		
an4					2		
an5					2		
ag3					2		
ho					2		
神津島恩馳島群					1		
和田小深沢群					1		
和田土屋橋西群					1		
和田鷹山群					1		
測定不可					1		
和田土屋橋北群		1					
chその他	1	1	1	1	5	2	
shその他	1			1	4	2	
agその他			1	1	1		
anその他	1			1			
saその他							6
その他					1		3
未測定						1	

ch: チャート
sh: 頁岩
an: 安山岩
ag: 瑪瑙
ho: ホルンフェルス
rh: 流紋岩
tu: 凝灰岩

[-その他]: 単独個体を石材ごとにまとめたもの
その他: 風化が激しく石材が分からないもの
漢字で書かれた個体は黒曜石の産地分析結果

表 F区Ⅳ層上部からⅢ層下部石器群の個体分類と器種構成の概略

こうした類型化分析を範にして長嶋遺跡F区石器群を捉えるために表を用意した。下表は個体分類と主要石器群を形態的に類似する石器ごとに纏め上げたものとの相関関係をあらわしている。石核を伴う個体を上位に配置し、伴わない個体を中位、そして単体で構成される個体を「その他」として石材種ごとに集計したものを下位に配置している（「その他」に該当する石器は1点で1個体であることに注意）。

まず、個体別資料に基づく類型では、剥片剥離に関与しない敲石を除く49個体のうち石核を含むものは12個体、含まないものが26個体、製品だけの個体が11個体である。よって本遺跡は石核を伴わない母岩が大多数を占める（37/49点）タイプといえる。製品だけで構成される個体は11個体とかなり高い比率を占めていることから、搬入品率の高い遺跡であることも伺える。このうち背部加工石器類と尖頭器類は計8点（8個体）である。ツールを製作しているかどうかは具体的な分析方法がよくわからないので同様の検討はしづらいが、同一個体がある程度まとまって消費されていることをその根拠にすることができるならば、背部加工石器類5点のうち2点（ch1とsh2）は製作品である可能性が高く（ほか3点は搬入品）、尖頭器3点は先述の如くすべて搬入品であるといえる。したがって背部加工石器類と尖頭器類については、合計8点のうち6点が搬入品であり、やはり主要石器群の搬入品率の高さが確かめられるのである。このように搬入品率が高い遺跡に組成される尖頭器は両面加工タイプが多いとされており、本石器群の尖頭器の特徴と一致しているようである。

ほぼ全面的に国武の議論に則って石器群内容を観察してみたが、ここで謂えることはそう多くはない。しかし少なくとも尖頭器に関しては他の特定の場所で製作した製品の搬入地点であり、且つ背部加工石器類（ナイフ形石器類）に関しては、少ないながら原石搬入と製品製作が行われた地点であるということは確かめられた。石材ごとに消費パターンが異なる可能性が高いので、広域的な視野のもとでの分析が求められるが、ここでは果たせない。

4 細石刃石器群

A区で細石刃と尖頭器を主体とする石器集中が検出された。石器総数は88点である。細石刃28点、尖頭器6点、微細剥離痕剥片1点、石刃3点、剥片・碎片48点などが組成する。セクション図がなかったので包含層準は不明であるが、第I文化層よりも上位に包含されていたことがわかっているので第II文化層とした。集中部から離れて分布していた一部の細石刃が第I文化層の諏訪星ヶ台産黒曜石性の石刃石器群に編入されてしまった可能性があるが、大勢に影響はない。

石材構成は黒曜石64点、ホルンフェルス11点、安山岩6点、頁岩5点、凝灰岩1点、砂岩1点である。石器群の殆どを占めている黒曜石の産地分析結果は諏訪星ヶ台群40点、和田鷹山群11点、蓼科冷山群1点、和田芙蓉ライト群1点、推定不可1点、測定不可9点、未測定1点だった。黒曜石は諏訪星ヶ台群を中心として、付随しているほかの黒曜石も信州産で構成されており、細石刃石器群の黒曜石産地構成としては南関東に一般的なものである。細石刃核は検出されていないが野岳・休場型を伴った可能性が高い。野岳・休場型細石刃核を伴う細石刃石器群は、千葉県十余三稻荷遺跡で信州系黒曜石の原石搬入から始まる大量生産痕跡が発見されたことにより、特定地点を基点とする移動居住システムに深く関わっている可能性が指摘されているが、まだそうした大量生産遺跡はほかに発見されていないため、その範囲がどの程度なのかはよく分かっていない。

細石刃石器群と共伴する石器群についても明確な情報が得にくいですが、本文化層では尖頭器石器群が組成する。蓼科冷山産黒曜石製と和田鷹山産黒曜石製の小型品がそれぞれ1点と安山岩製3点であ

る。諏訪星ヶ台産黒曜石製細石刃の量産とは対照的に、どの個体も製作の痕跡を示す尖頭器調整剥片を伴っておらず、それぞれが単独個体となっている。

また、石刃が3点検出されている。これらも遺跡での生産痕跡がない単独個体である。二次加工痕はなく、部分的に微細剥離痕が観察されるため、そのまま利用された石器なのかもしれない。

細石刃石器群に関しては、その荷担集団の移動居住システムの解明があまり進んでおらず、よくわからないので突っ込んだ言及は差し控えておきたい。

おわりに

以上が武蔵野台地V層上部からIV層下部、「砂川期」、ナイフ形石器群「終末期」、細石刃石器群を主体とする時期といった、おおよそ4期にわたる石器群の概観である。どの石器群も南関東はもちろん武蔵野台地上においても多量に検出されている石器群であり、その意味ではとりわけ個性的なものではないかもしれない。現在の研究状況は既に特定器種の組み合わせに偏重した段階論から大きく離陸し、国武の議論に代表されるように、産地の異なる複数の石材の消費傾向を広域的に検出し、その消費過程の関係態から移動・居住システムの実態を明らかにする方向へと向かっている。この分析領域において重要視されている方法論のひとつとして、砂川遺跡の遺跡構造研究を嚆矢とする石器群の分析がある。いうまでもなく、そこでは徹底した個体別資料化と搬入・消費形態の同定が必須の分析項目となっており、これを果たすことなしに研究が進展しないかのようにみえる。このことに関して、しばしば遺跡報告書に盛り込まれた情報の不完全さに落胆する声が聞かれるが、しかし現況において本当に必要なことは、どこまでも徹底した情報精査というよりも、精粗まちまちな情報群を同一の条件で平準化するための作業仮説と方法論の選択である。長嶋遺跡の石器群に関してもこのような研究動向に配慮し、個体分類と搬入形態の記載に注意したつもりであるが、いま振り返ると至らない点は多く不備が目立ってしまった。それはすべて筆者の責任によるものである。周辺遺跡との対比が十分に行えなかった点も残念だが、資料が今後の研究に資することを願っている。

謝 辞

筆者の怠慢により整理作業から本稿の執筆まで長い時間がかかり報告書の刊行を遅らせてしまった。この間、忍耐強く且つ真摯に対応してくださった追川吉生氏にまず感謝したい。データ整理については堀内秀樹氏と香取祐一氏のお手を煩わせた。石材の鑑定については国武貞克氏に教示いただき、多くを学んだ。黒曜石に関してはほぼ全点、望月明彦氏に産地分析を行っていただいたため、高い分析精度を確保することが出来た。佐藤宏之先生からは報告書の執筆を勧めていただいた。森先一貴、尾田織好、林和宏、役重みゆき 各氏には資料に関しての助言を賜った。以上の方々に感謝申し上げます。

参考文献

- 安蒜政雄 1985 「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集日本原史』、193-216頁、吉川弘文館。
- 江坂輝彌・重住豊ほか 編 1996 『済美台遺跡』済美台遺跡発掘調査団。
- 亀田直美 1996 「角錐状石器」『石器文化研究』5、189-198頁。
- 川辺賢一 編 1993 『武蔵関北遺跡』武蔵関北遺跡調査会。
- 国武貞克ほか 編 1999 『武蔵国分寺跡北方地区日影山遺跡・東山道武蔵路』西国分寺地区遺跡調査会。
- 国武貞克 1999 「石材消費と石器製作、廃棄による遺跡の類別－行動論的理解に向けた分析法の試み－」『考古学研究』第46巻第3号、35-55頁。
- 国武貞克 2000 「槍先形尖頭器をめぐる行動論－石器製作システムの変換点－」『考古学ジャーナル』No.465、12-16頁。
- 国武貞克 2003 「両面体調整石器群の由来－関東地方V層・IV層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性」『考古学』I、52-77頁。
- 窪田恵一 編 1995 『東京都外かく環状道路練馬地区関連遺跡 第4分冊 丸山東遺跡 旧石器時代編』練馬地区遺跡調査会。
- 黒田和久・廣田吉三郎 編 1986 『天祖神社東遺跡』練馬区遺跡調査会。
- 田村 隆 1992a 「遠い山・黒い石－武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的考察－」『先史考古学論集』第2集、1-46頁。
- 田村 隆 1992b 「石材についての諸問題－特に関東地方の石材採取戦略について－」『考古学ジャーナル』第345号、2-7頁。
- 田村 隆 1994 『大網山田台遺跡群Ⅰ』財団法人山武郡市文化財センター。
- 廣田吉三郎 編 1987 『葛原遺跡B地点』練馬区遺跡調査会。
- 山村貴輝 編 1996 『吉祥寺南町1丁目遺跡E地点』吉祥寺南町1丁目遺跡調査会。

4. 長嶋遺跡三鷹国際交流会館地点出土の石器について —おわりにかえて—

追川 吉生

1.

本遺跡は三鷹市長嶋遺跡内に所在する、東京大学三鷹国際交流会館（新川6丁目22番20号）における発掘調査に関する調査報告書である。

調査面積は7,330m²と広大だが、敷地内に放射状に建設される施設の形状に沿って設定した調査区は、遺跡の面的な拡がり把握することに関してはやや難があった。1章で触れたように、仙川への傾斜地上に位置する本遺跡の立地とそこでの堆積状況は、出土石器群の層位的把握を困難なものとした。考察編2で指摘されているように、調査時にわれわれが立川ロームIX層上部および中・下部と把握した地層が、ローム層を対象とした分析によってそれぞれVII層下部、IX層に対比されるという結果がでたのもこうした本調査地の立地に起因するものだろう。しかしながら、本遺跡で石器が出土する層位はいずれの地点もIV層～V層中で、一部に土層断面図の欠如はあるものの、立川ローム層の標準層位との対比に関しては問題はない。

本調査地点から出土した旧石器時代の石器群に関しては、阿部敬氏の論考（考察編3）において詳細な分析が加えられているが、調査のまとめにあたって今一度、本調査で出土したナイフ形石器と細石器のあり方を振り返ることにしたい（本書では凡例に示した通りに石器群を分類したが、ここではナイフ形石器など従来からの石器の分類の用語を用いる。また対象とするのは出土数のまとまっているA区とF区とする）。

2.

A区第I文化層ではナイフ形石器が10点出土している（第36図1～5、8～12）。1～5に関しては大部分を欠損しているため、8～12についてみていくことにしよう。

8は頁岩製の縦長剥片を素材とし、打面側を下にした縦位に素材を用いている。左側縁と右側縁基部とに調整加工が施される。9は黒曜石製の縦長剥片を素材とし、打面側を下にした縦位に素材を用いている。右側縁先端部と基部側に調整加工が施されている。10は黒曜石製の縦長剥片を素材とし、打面側を下にした縦位に素材を用いている。左側縁に急斜度の調整が施されている。基部側については一部欠損しているが、残されている部分の観察からは、両側に調整加工が施されていたことがうかがえる。また、左側面の調整加工に関しては、先端部の調整加工とは連続していない。11は頁岩製の縦長剥片を素材とし、打面側を下にした縦位に素材を用いている。基部側の整形は打瘤部の厚みを除去するためのものだろう。先端の右側縁部と基部の左側縁部に調整が施されている。12は頁岩製の縦長剥片を素材とし、打面側を上にした縦位に素材を用いている。右側縁先端部から中程にかけて急斜度の調整剥離を施している。

これらのナイフ形石器を素材と調整加工とで分類してみることにしよう。

まず素材であるが、いずれも縦長剥片を用いている。そのうち12のみが打面を上側にして用いられ

ているが、他は打面部を基部に用いている。とはいえ欠損が著しく、分析対象から外したナイフ形石器（1～5）をみれば、4や5のように打面を横に用いた例もある。

調整加工については、その施される部位によって次の3つに類型化できるだろう。

- (1) 先端部と基部とに調整加工が施されるもの。これには9や11が該当する。
- (2) 二側縁に調整加工が施されるもの。
- (3) 一側縁のみに調整加工が施されるもの。

(1)の先端部と基部とに調整加工が施されるものには9や11が該当する。(2)の二側縁に調整加工が施されるものは8と10がある。そして(3)一側縁のみへ調整加工が12である。点数は少数ながら、調整加工のありかたは多様だといえるだろう。

こうした素材と調整加工の特徴からは、本遺跡出土のナイフ形石器の中にも、「縦長剥片を長軸方向に対し縦位置に用い、石器の片側全体と刃部側の基部に調整剥離を加え、その先端部を尖らせ」た、いわゆる茂呂系ナイフ形石器（織笠1992）が含まれていることがわかる。

第1文化層から出土したナイフ形石器5点の石材は黒耀石が2点、頁岩が3点である。第36図にあげたナイフ形石器でみれば、黒耀石7点、頁岩が3点となる（7点の黒耀石のうち、信州産が5点、箱根産が2点）。なおA区の石器群全体の石材の別は黒耀石255点、頁岩251点に対して、チャートが36点だった。

共伴資料としてA区第I文化層に2点（第36図6、7）の槍先形尖頭器が出土している（第7図）。第I文化層では6が石器集中外からの、7が第2石器集中からの出土である。石器集中内から出土した36-7は破損により一側縁のみ残った槍先形尖頭器の破片である。

第II文化層では第55図9がナイフ形石器として捉えられるが、共伴遺物に槍先形尖頭器（第55図10～14）や細石刃（55-1～5）があり、層位に関する情報が不明なため分析の対象外とする。

F区は本調査区の中でもIV層の堆積が薄く、III層下部からの層位関係の把握が困難な地点である（第5図）。第136図にあげた石器のうち、1、2がナイフ形石器、3、4が台形様石器、8～10が槍先形尖頭器である。

ナイフ形石器（1、2）はともに黒耀石の縦長剥片を素材とし、打面側を上にした縦位に素材を用いた二側縁加工のナイフ形石器である。供伴する石器には2点の台形様石器と1点の角錐状石器、そして3点の槍先形尖頭器がある。

3点の槍先形尖頭器のうち、8（頁岩）、9（チャート）は縦長剥片を素材とし、9の一部には自然面が残されている。10（安山岩）は表裏ともに入念な調整加工が施されている。その出土状況であるが、9のみが第2石器集中部からの出土であるほかは、いずれも調査区内で単独で出土している（第72図）。また石器集中部から出土する9についても、すでにV章で触れているように、単独の石材であることから別遺跡からの搬入品であることがうかがえる。

ここでA区とF区のナイフ形石器の長幅比をみてみることにしよう（図1）。対象とした資料数が限られているが、A区、F区どちらも長幅比2：1を基準にそれ以上の比率に集まることがわかる。

今これを、多聞寺前遺のIV層から出土したナイフ形石器と比較してみよう。

多聞寺前遺跡は黒目川上流に立地する遺跡で、比較しようとする立川ロームIV層（上部・中部・下部）のほかに、同VII層、IX層にも文化層が認められている。特にナイフ形石器を組成の中心とするIV中文化層から、槍先形尖頭器を有しながらもナイフ形石器を組成の主体とするIV上文化層の変遷は、ナイフ形石器の終末期の移り変わりを把握する上で重要な遺跡である（戸沢・鶴丸1983）。

そのうちIV上文化層は7,582点の石器が15のブロックを形成しつつ出土している。ナイフ形石器が

54点、槍先形尖頭器が15点である（ナイフ形石器の大部分は3ブロックからの出土）。ナイフ形石器の形態で最も多いのが、先端が細い縦長剥片を素材とするⅠ類とされたもので、前述の茂呂系ナイフ形石器を含む。一方、Ⅳ中文化層は556点の石器が12のブロックを形成しつつ出土している。ナイフ形石器は27点だが、茂呂系ナイフ形石器を主体とする段階とそうでない段階とで更に時期を細分しているのが特徴といえる。いずれも「砂川期」後半の石器群（佐藤1992）である。

この多聞寺前遺跡のあり方を、本遺跡A区・F区のあり方とを比べてみたい。はじめに両調査区ともに少数ではあるが槍先形尖頭器を伴うことから、多聞寺前遺跡Ⅳ上文化層のナイフ形石器の長幅比からみていくことにしよう。

Ⅳ上文化層からは前述のように54点のナイフ形石器が出土した。このうち欠損が著しく計測できない資料を除外した39点のナイフ形石器の長幅関係をグラフ化したのが図2である。

図2でわかるとおり、長幅比が1：1～2：1の範囲に最も多くの資料が集中する。図1で示した本遺跡のナイフ形石器の長幅比の分布図も、ほぼこれと同様の傾向を示している。

次に槍先形尖頭器を伴わない多聞寺前遺跡のⅣ中文化層はどうだろうか。Ⅳ中層から出土したナイフ形石器27点のうち16点をⅡ類が占める。Ⅱ類と分類された形態のナイフ形石器は、前述したいわゆる茂呂系ナイフ形石器にあたる。Ⅳ中文化層ではこの形態を中心に、裏面基部への調整が著しいナイフ形石器（Ⅰ類）をはじめ、直線的な側辺に調整加工を施す、小形の縦長剥片を素材としたナイフ形石器（Ⅲ類）や「先端な先端部と平縁な基部とを有する」ナイフ形石器（Ⅳ類）の組合せが認められている（栗島1984）。この文化層から出土するナイフ形石器の長幅比もほぼ図2と同様の傾向を示している（栗島前掲）。

本調査地では分析対象としたナイフ形石器が少数であることや、層位の位置づけに不明な点が少なくないことから、多聞寺前遺跡Ⅳ層で行われたようなナイフ形石器の諸形態を層位毎のまとまりとして把握していくことは難しい。しかしA区・F区ともに供伴する槍先形尖頭器の大部分が石器集中外からの単独出土という出土状況を鑑みれば、両区にみられる石器群のあり方は多聞寺前Ⅳ中文化層に近いものと位置づけることができるかもしれない。

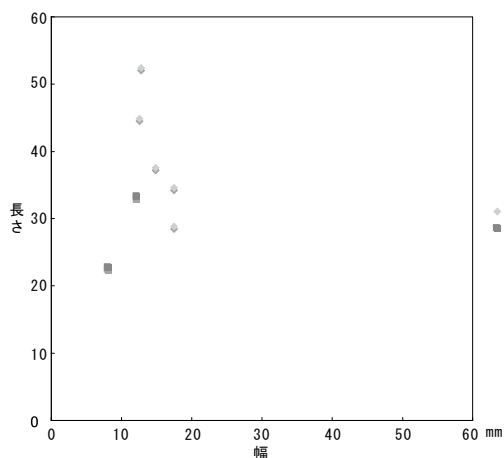


図1 本調査地点ナイフ形石器長幅比

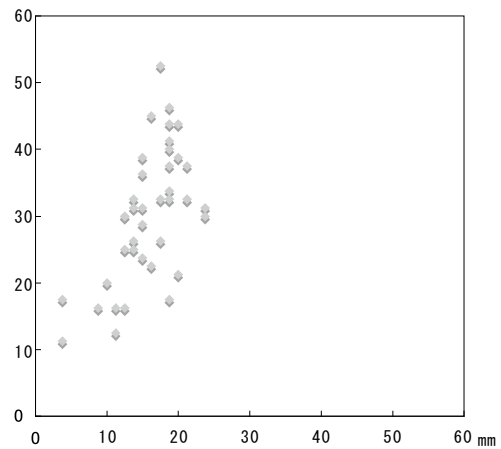


図2 多聞寺前遺跡ナイフ形石器長幅比

3.

最後にA区で出土した細石刃について触れておきたい。

A区からは6点の細石刃が出土した。第I文化層(石器集中4)の1点(第37図1)、第II文化層(石器集中1)の5点(第55図1～5)である。いずれも稜線を2～3本有するものである。その一方、細石核は出土していない。

第I章で述べているとおり、調査地周辺の本来の地形は、仙川沿いの傾斜地ということあり、細石刃と、他の石器群との層位的な関係は明確にすることはできなかった。第I文化層の細石刃は、第II文化層からの混ざれ込みの可能性があるものの、石器集中1(第II文化層)では更に上層にもう1つの文化層が存在した可能性を予想させる。

本遺跡の北側に隣接する長久保遺跡(第3図)は、三鷹市内でも細石刃を特に多く出土する遺跡である(三鷹市教育委員会1992)。ここではSU-1ユニットから出土した101点の遺物のうち、26点を細石刃が占めていた。他の遺物としては剥片・微細剥片が71点、細部加工剥片と使用痕のある剥片がそれぞれ2点出土している。細石核は本遺跡と同様に出土していない。

本調査地と長久保遺跡とは、東八道路を挟んで隣接しているが、中でもA区が長久保遺跡に近い。長久保遺跡の調査では、長久保遺跡と本調査地との間に(「長久保谷」と呼ばれる)埋没谷が存在することが明らかになっている(三鷹市遺跡調査会前掲)。出土する細石刃の多寡はあるにせよ、どちらも細石刃の製作活動の痕跡を伴わない点で類似したあり方といえるだろう。本遺跡では、細石刃と他の石器群との層位的関係について課題が残ることは前述のとおりだが、少なくとも当該時期の段階にあっては、両遺跡が「長久保谷」を囲む一つのまとまりとして把握できる。

本調査地南東側に位置する三鷹高等学校の校庭における発掘調査(中嶋遺跡の範囲内)では、旧石器時代の文化層が三枚確認されている(吉田1966、三鷹市1970)。そのうち最上部の第一面からは、細石刃とともに細石核の出土が報告されている。

本調査地や長久保遺跡では認められなかった細石刃の製作活動が、こちらでは行われていた可能性を示唆していよう。本調査地や長久保遺跡を含めた遺跡のひろがりのなかで、該期の石器群を改めて捉える必要があるだろう。

本調査地では始良Tn火山灰(AT層)を含む立川ロームVI層以下については、いずれの調査区においても石器の出土は認められなかったが、三鷹高校校庭では第三面とした文化面が第二黒色帯中に位置づけられている。

当時の調査でも明確な石器文化の存在はみられなかったというが、仙川流域の周辺遺跡に目を転じてみれば、X層から局部磨製石斧を出土する島屋敷遺跡をはじめとして、AT層下位からも石器が出土する遺跡がある。

前章までで明らかなように、本調査地では出土層位の把握に不確実な点をやや有している。しかしI章でも触れたように、本調査地の発掘調査は三鷹国際交流会館の整備計画に伴いもう一期を残している。

来るべき第4次調査では、本書で述べてきた問題の解決とともに、中嶋遺跡と周辺の遺跡との関係についても明らかにしていきたい。

参考文献

- 安蒜政雄 1985 「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集日本原史』
- 折笠 昭 1996 「列島内対比 V～IV下層の茂呂系ナイフ形石器を基軸に」『石器文化研究』5
- 亀田直美 1996 「角錐状石器」『石器文化研究』5
- 吉祥寺南町1丁目遺跡調査会 1996 『吉祥寺南町1丁目遺跡E地点』
- 国武貞克 1999 「石材消費と石器製作、廃棄による遺跡の類別—行動論的理解に向けた分析法の試み—」『考古学研究』46-3
- 国武貞克 2000 「槍先形尖頭器をめぐる行動論—石器製作システムの変換点—」『考古学ジャーナル』465
- 国武貞克 2003 「両面体調整石器群の由来—関東地方V層・IV層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性」『考古学』I
- 栗島義明 1983 「ブロックの構成と機能—個体別資料からみたブロックのあり方—」『多聞寺前遺跡II』
- 山武郡市文化財センター 1994 『大網山田台遺跡群I』
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』
- 自由学園南遺跡発掘調査団 1983 『自由学園南遺跡』
- 自由学園南遺跡発掘調査団 1991 『自由学園南遺跡』
- 杉並区内遺跡調査団 1996 『済美台遺跡』
- 鈴木次郎 2005 「南関東の茂呂系ナイフ形石器」『地域と文化の考古学』I
- 田村 隆 1992a 「遠い山・黒い石—武蔵野II期石器群の社会生態学的一考察—」『先史考古学論集』2
- 田村 隆 1992b 「石材についての諸問題—特に関東地方の石材採取戦略について—」『考古学ジャーナル』345
- 多聞寺前遺跡調査会 1983 『多聞寺前遺跡II』
- 東京都外かく環状道路練馬地区遺跡調査会 1995 『丸山東遺跡 旧石器時代編』
- 東京都埋蔵文化財センター 1998 『島屋敷遺跡』
- 戸沢充則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4-1
- 西国分寺地区遺跡調査会 1999 『武蔵国分寺跡北方地区日影山遺跡・東山道武蔵路』
- 練馬区遺跡調査会 1986 『天祖神社東遺跡』
- 練馬区遺跡調査会 1987 『葛原遺跡B地点』
- 野口 淳 1995 「武蔵野台地IV下・V上層段階の遺跡群—石器製作の固定配置と連鎖の体系—」『旧石器考古学』51
- 野口 淳 1996 「ナイフ形石器」『石器文化研究』5
- 野口 淳 2004 「石刃技法期の遺跡構造—「砂川期」石器群の遺跡構造と形成過程—」『石刃技法の展開と石材環境』
- 三鷹市遺跡調査会 1992 『長久保遺跡』
- 三鷹市遺跡調査会 1997 『島屋敷遺跡』
- 三鷹市史編さん委員会 1970 「三鷹市史」
- 武蔵関北遺跡調査団 1993 『武蔵関北遺跡』
- 明治大学和泉校地遺跡発掘調査団 1955 『明治大学和泉校地遺跡発掘調査報告書』
- 吉田 格 1966 「V・三鷹市・小金井市・小平市」『北多摩地区における考古学上の調査』

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくみたかこうないのいせき ながしまいせき							
書名	東京大学三鷹構内の遺跡 長嶋遺跡							
副書名	東京大学三鷹国際交流会館建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室報告書							
シリーズ番号	8							
編著者名	阿部 敬 追川吉生（編） 香取祐一 小林照子 堀内秀樹（編）							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 東京大学駒場リサーチキャンパス					
発行年月日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ながしまいせき 長嶋遺跡	とうきょうと 東京都 みたかし 三鷹市 しんかわ ちようめ 新川6丁目 ほんごう 22番20号	13204	24	35° 40' 40"	139° 33' 56"	1次 1992年6 月29日～ 1992年9 月19日	2,100m ²	東京大学三鷹国際交流会館建設に伴う事前調査
						2次 1993年5 月28日～ 1993年11 月8日	3,280m ²	
						3次 1994年5 月13日～ 1994年8 月17日	1,950m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長嶋遺跡	集落	旧石器時代	石器集中部 13		細石刃 槍先形尖頭器 ナイフ形石器 剥片			

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 8

長 嶋 遺 跡

東京大学三鷹国際交流会館建設に伴う発掘調査報告書

2008 年11月11日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4-6-1

印 刷 よしみ工産株式会社
福岡県北九州市戸畑区天神 1 丁目13番 5 号

長嶋遺跡東京大学三鷹国際交流会館建設に伴う発掘調査報告書

付属CD-ROM収録内容

1. 本CD-ROMには長嶋遺跡（東京大学三鷹国際交流会館建設地）での発掘調査に伴う図表データと写真データが収録されている。
2. 写真データはJPEG形式、図表データはxls形式で収録されている。石器観察表など、報告編に掲載されていないものも含まれているので参考にされたい。
3. 遺物写真の番号は、各図版に掲載されている図版番号に対応する。石器観察表の資料番号とは異なるが、観察表中に図版番号も付してあるので、そちらを参照されたい。
4. 黒曜石産地推定結果（研究編1・黒曜石産地推定フォルダ内）のデータシート中にある写真は、同フォルダ内の分析資料写真と対応する。
5. 収録されているファイルのディレクトリー構造は以下の通りである。

